
魔法先生ネギまForce ~ 護る者と支える者 ~

RaiN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギまForce 護る者と支える者

【Nコード】

N5762S

【作者名】

Rain

【あらすじ】

平凡な日常を過ごしていた青年…いつしか自分が何をしたいのかも分からなくなった彼は、気が付くと真つ白な空間にいた。そこにいたのは自分を神と名乗る存在。神は自分のために異世界へいくってくれと言う。

異世界で、生きがいを得た青年が歩む冒険譚。

オリ主転生？モノです。主人公以外には転生者は出さないかもしれませんが。出してもすぐに排除されるかも…気に入らない方はブラウ

ザバックしてください。

ストーリー開始時期は大戦期です。

キャビア伯爵様からアリア出張中

この作品は、原作漫画より、魔法、固有名詞を引用しております。

ブログ（前書き）

処女作で初投稿です。日常も実験が始まったりしていそがしいので更新速度は遅いかもかもしれません。広い心で読んでいただければ嬉しいです。では始めます。

誤字指摘がありましたので、修正しました。

プロローグ

～主人公 side～

「んじゃ、また明日な」

そういつて友人と別れる。

某月某日、俺はその日の講義を終えてアパートに帰ってきた。

「あー、疲れた…今日は特に課題もないし…何しようかな？テレビはつと…特に面白そうなのもやってない、か。やることないなあ。Forceでも読むか…」

俺はここ最近こんな感じで毎日を過ごしている。世界には、民族紛争、災害なんかで困っている人が多くいることを考えると不謹慎かもしれないが、当たり前前の日常が物足りなく感じてしまう。

「俺が本当にしたいことって、何なんだろうな…生きる目的って…」

そんなことを考えながらその日も眠りに就く。このときの俺はこの後あんなことになるなんて、全く予想もしていなかった。

side END

〔神side〕

へえ、こいつはちょうどいいかな…うん彼に行ってもらうことにしようか。

Side END

〔主人公side〕

「ん……あ？こ…こは？」

俺は目が覚めると真っ白な空間にいた。比喻でも何でもなく、ただひたすらに真っ白な世界。見渡す限り何もない上も下も右も左もわからない。自分がどんな状態にいるのかも全くわからない。

「やあ、気が付いたみたいだね？君をここに呼んでから結構待ったのだけど？君、なかなか目が覚めないから少し心配したよ」

と、いきなり声が聞こえた。そこには一人の女性がいた。そうだな…真っ白い服を着たフェイトさんを想像してもらいたい。ぶっちゃけ似合っているといえば、似合っているのだが、若干違和感を感じる。まあ美人だしいいか…

「む？失礼だね、君…白い服を着ているのは君の神様に対する認識がそんな感じだからだよ？まあ、美人とみられたのはうれしいけど

さ」

心を読まれた…て言うか神様ですか、そうですか。まあこんな空間だし、ssとか読んでたから、こんな謎空間にいることもあって大体想像はしてただけ…

「まさか、俺がこんな体験をすることになるとはね…」

「うんうん。理解が早くて助かるよ？さて、本題に入らせてもらうけど。君には私のとある実験を手伝ってもらおうと思っているんだ。」

「実験…ですか？」

「そう、実験。実はね？神様にも階位があつてね？私は現在上級神なんだ。それで、私はさらに位を上げるための試験を受けていて、その最終試験の内容が1つの世界を観察することなのさ。で、テーマは、イレギュラーが入るとその世界はどう変化するのか？というもののね？そこで、君に白羽の矢が立った。君は、日々を過ごすことが退屈だったし、夢もなくしてしまった。私はイレギュラーとしての、こういってはなんだけど、人柱がほしかった。ね？ちょうどいいでしょ？」

「……長々と説明されたが、俗な言い方をすれば異世界転生フラグが立ったってことか…面白そうだ…」

「わかりました。お引き受けいたしましょう」

「うんうん！君ならそう言ってくれればいいよ。」

じゃあ君に言ってもらおう世界とそこで生きていくための力につい

て説明するね？」

どうやら特殊な能力までももらえるらしい。

「まず、君に行ってもらおう世界だけど、“魔法先生ネギま！”っていう漫画と同じ軸の並行世界だね。いわゆる原作に絡んでいってもらうわけだから力がないと生きていけないからね…俗な言い方だけど、死亡フラグ満載だし。」

ネギまか…一応全巻持ってたし好きな漫画ではあるな、特に嫌いなキャラもないし…

「それで？いただける能力というのは何なのでしょう？」

「そう急かさない。まずは、魔力だね。これがなきゃ何もできないし。主人公のネギ少年より少し少ないけどそれでもかなり多い位の量をあげる。次は、君が最近よく読んでた魔法戦記リリカルなのは Force から、主人公のトーマが持つゼロ因子とデバイダー 96 と銀十字の書、あとリリイ・シュトロゼツク。」

って！？魔導殺しですか…魔法相手だとんでもなくチートなんじゃ…しかもゼロ因子適合者ですか俺は…

「まあ、ほぼ無敵にはなると思うけど…君に死なれると困るからね…ちなみにリリイは完成した状態についていさせるから。」

でも原作だと、リリイの役割ってまだよくわかってないんだよね…まあ何とかなるかな？

「そうそう、ゼロ発動は任意のタイミングで ON / OFF 切り替え

可能にしておいたから。」

そうですか、もう何が来ても驚きませんよ…

「うーん、だいたいこんなところかな？んじゃ、さっそくいつてもら——「少し待ってもらえませんか？」どうしたの？」

これを忘れて向こうへいったりしたら、確実に死は免れられない…

「行くのは構いませんが、その前に戦闘に関する修行、特訓をつけてくれませんか？確かに与えられた力は強大ですが、元の俺自身が平凡なんです。どう考えても使いこなせるわけがない。」

そう、いくら大きな力を持っていたとしてもそれを使いこなすための技術、経験と実践に裏打ちされたものがなければただの宝の持ち腐れだ。

「うんうん。そういうとおもってまずは、修行場所へ行ってもらおうと思っていたんだ。じゃあいつてらっしゃい」

すると、目の前に扉が現れた。良かった…テンプレみたいに穴じゃなくて…

「行つてきます」

俺は扉を開けた。

S i d e E N D

神
side

「さて、修行から帰ってきたとき、彼はどうなっているのかな？ 楽しみだ」

S
i
d
e

E
N
D

（作者に文才がないので修行風景はご想像にお任せします。

ちよつとのぞいてみましょうか…

「ぶううううるあああああ!!!!」

「ぎゃあああああああ
あああああつあああ！！」

はいみなかったことにしましょう。

主人公side

長かつた……修行怖い。修行怖い。修行怖い。修行怖い。修行怖い。修行怖い。修行怖い。

修行怖い。修行怖い。修行怖い。修行怖い。修行怖い。修行怖い。修行怖い。

修行怖い。修行怖い。修行怖い。修行怖い。修行怖い。修行怖い。修行怖い。

修行怖い。修行怖い。修行怖い。修行怖い。修行怖い。修行怖い。

まさかあんな……いや思い出しちゃだめだ。忘れるんだ俺！！！！

「やあ、帰ってきたみたいだね？どうだった？修行は？」

神様はそんなことを聞いてくる……いぢめか???

「頼みますから思い出させないでください……」

まあ確かに強くなれたがな……

「一応効果は抜群に認められたみたいだね。よかったよかった。じゃあ改めて今度こそ行ってもらおうよ？準備はいいかい？」

いよいよ、ネギまの世界へ行くのか…楽しみだ。

「あ……1ついいですか？」

「ん？なにかな？」

「俺の家族を幸せにしてあげてくれませんか？俺がいなくなったら悲し…んでくれるといいけど…まあきつと悲しむとおもうので…」

「ん、わかったよ。そのくらいお安いご用さ」

良し！！行くか！！

「じゃあ、行ってらっしゃい。せっかくだしその世界を楽しんできなよ?」

修行場所へ行く時よりも荘厳な雰囲気漂わせる扉が現れる。

「はい!!行つてきます。」

そして俺は異世界へ旅立った。

プロローグ（後書き）

なんだか途中よくわからなくなりました。処女作なので、駄文なのはご了承ください。誤字指摘、アドバイス、感想お待ちしております。

主人公設定（前書き）

主人公設定を投稿します。龍賀様より、名前の案をいただきましたので、採用させていただきます。

主人公設定

名前：トーマ・ミグラシオン（transmigrationからtransをとった。ドイツ語で輪廻の意）

>i22491—2296<

性別：男

容姿：上の中（大体ナギと同等で、髪色は若干くすんだ銀色。目は紅。神が自分の好みにあわせて容姿

を変えた。ぶっちゃけ髪が立ち気味なトーマを想像してください）

武器：ECデバイダー996（トーマが持っているやつ）ちなみに、ネギまの魔法にも対抗できるように 神が改良した。

銀十字の書（まだ原作でもほとんど出ていないので詳細はよくわかっていない）とりあえず武器 管制システムらしい。

リアクター
反応触媒としてリリイ・シュトロゼック（シュトロゼック4

th）

好きなもの：甘いもの、辛いもの、コーヒー、リリイ

嫌いなもの：リリイを傷つける奴

「俺はこっちで生きる意味を見つけたんだ！！誰も邪魔はさせない
……」

ちなみに不老（肉体年齢をある程度自由に変更できる。）
それから、E-Cウイルスによる殺人衝動は、修行によってほぼ克服した。（神によってある程度軽減されている。）しかし、感情が

ある程度高ぶると若干戦闘狂になる。

こんな感じです。名前が決まり次第変更します。
駄文ですが、読んでいただけると嬉しいです。

第一話 赤いのはやっぱりこんなにか…（前書き）

PV1043アクセス ユニークが297人も そしてまだプロロ
ーグなのにお気に入り登録件数が10件も！！ありがとうございま
す！！

それでは第一話です。まだ大戦には参加しません。赤いのと出会う
ところから始まります。いきなり戦闘です。

第一話 赤いのはやっぱりこんなか……

sides

「ん…んう？こっは…どっだ！？」

扉をくぐって、ついに来たネギまの世界だが……いきなりピンチかもしれない。扉をくぐったはずなのに、気が付いたら意識を失っていたらしい……。目で覚めるとどうだろう……。一面見渡す限りの木、木、木、木、木、木、木、木、木、木、木、木、木、木、木、木。はつきり言おう、森の中だった。しかも薄暗いし、ちょっぴり怖い。

「あ……トーマ目が覚めたんだね。よかったあ……トーマなかなか起きないから……」

リリイを心配させてしまったようだ……

「ごめんな?で、一体こは…ん?」

何かポケットの中に違和感を感じたので、探してみると一枚の紙。

これは…手紙か？

やあやあ。この手紙を読んでいるということは、無事着いたみたいだね？今君がいるのは、ウェールズのナギがいるところのすぐ近くの森だよ？適当に進んでれば森から出られるはずだから……ガンバレ！そうそう、君の容姿だけでも勝手に変えさせてもらいました（はあと。大丈夫大丈夫！不細工にはしてないよ？ていうかむしろ恰好よくなっているよ？まあほとんどトーマだから。ちなみに、

ナギにあつたら行動を共にするようにね？じゃ～ねえ。ああ、そうそう。名前はトーマ・ミグラシオンと名乗るように！ちなみに、長く生きてもらわないと意味ないから寿命で死なないようにふろうにしておいたからね」

「あはは…あのひとらしいね？」

ところどころに入っている星とかムカつくけど気にしない。んじやあ行きますかね…ナギはどこにいるのだろうか？

手紙を読み終えた後、俺はとにかく森を抜けることを考えて歩き続けた。結構歩いたらやっと森の外が見えてきた。

「外が見えたよトーマ」

「はあ、やつとか…畜生、まさかあんなところに飛ばされるとは…まあ、過ぎたことは気にしてもしょうがないし…さて、ナギはどこおい！お前！」…ん？」

呼ばれたので、声がする方を見た。すると赤い髪の意志の強そうな眼をした少年が立っていた。あれがナギか…なんというかご都合主義だな…

S i d e o u t

くナギs i d eく

おつす！俺の名はナギ・スプリングフィールドだ！！魔法学校の授業は退屈だからやめて旅に出ることにしたぜ。んで、村を出て歩いてら俺ほどじゃねえがかなりでけえ魔力を感じた。気になって行ってみると俺より何歳か年上っぽい男と少女が出てきた！こいつ、強いな。よし！

「おい！お前！」

S i d e o u t

くトーマs i d eく

いきなりナギに遭遇した。まあナギと一緒に行くように手紙に書いてあったしちようどいかな。

「何か用か？」

とりあえず聞いてみる。

「お前強いな！！俺と戦え！！」

いやね？漫画読んでなんとなく想像はしてたけどまさかここまで戦^{バト}ルジャンキ

闘狂だとは思わなかった。まあ仲間になるんだし実力を確かめてみるのもいいか…

「いいぞ。勝敗の条件はどちらかの戦闘不能かギブアップでいいか？」

「トーマ…危ないよ」

おっと、リリイを心配させてしまったようだ。

「大丈夫だよ、リリイ。俺は負けない。だから安心して待っていてくれ」

「…うん。でも危なくなったら私も一緒にね？」

「まあリリイが出るようなことにはならないと思うけど。わかった。」

「おい！いつまで待たせんだよ！？」

ナギが待ちくたびれてしまったようだ。んじゃいつちよやりますかね。

「ECデバイダー」

「Start Up」

デバイダーから機械的な音声が発せられ銃と剣が一つになったような武器が手に現れ、服が変わる。武器の名前はデバイダー996。これで準備は整った。

「うお！？どつから出したんだそれ？服も変わってるし。まあいいや。面白れえ！！行くぜ！！」

ナギが飛び込んでくる。

「まずは小手調べだぜ！！風の精霊101柱、集い来たりて敵を貫け！！魔法の射手、連弾・雷の101矢！！」

ナギが放った初級呪文、魔法の射手がとんでくる。飛んでもねえ数だな…どう考えても小手調べに撃ってくる数じゃないだろう？俺は少し下がって撃ち返す。

「数が多いな…が、数だけあってもねえ！！」

「Silver Barrett」

ドオオオオオオオオオオオオオオ！！

「うあ！？」

こちらの威力のほうが高かったのだろう。逆にナギのほうにダメージが入ったようで、うめき声をあげている。

「ちいっ！んだよ、そりゃあ…？これは出し惜しみしてる場合じゃねえな。行くぜ俺の本気だ！！」

ヘカトンタキス・カイ キーリアキス・アストラブサトー
「百重千重と 重なりて 走れよ稲妻！！千の雷！！」

おいおい！！こんなところでそんな大魔法を撃つなよ！「きゃあ！

！」つてやべえ！リリイに当たる！！こっとなったら。

「魔力結合を分断する！！ディバイド！！」

「Divide」

S i d e o u t

くナギSide

小手調べにうつた魔法の射手だがあいつは撃ち消すどころかそれ以上撃つてきやがった。こいつあ強え…なら！！見せてやるぜ！！俺の本氣つてやつをなあ！！

「千の雷！！」

ドオオオオオオオオオオオオオオオ！！

「うえ…ちいとやりすぎたか？」

やべえな…煙で何も見えねえ…消し飛ばしたりとかしてねえよな？
そんなことを考えていたら声がした。

「ディバイド・ゼロ」

「Divide Zero」

その声が聞こえた瞬間俺の目の前は真っ白になった。

S i d e o u t

くリリイ s i d e

あの赤髪の子が凄く大きな魔法を放った。放たれた魔法が私のほうにむかってくる。

「きゃあっ!!」

思わず目をつぶる。助けてトーマー!

「デイバイド!!」

トーマの声が聞こえた。恐る恐る目を開けるとトーマが目の前にいた。

「トーマー!!」

「おう、大丈夫か? ちょっと待ってる。すぐ終わらせるから。」

そんなトーマの言葉を聞いて私はうなづく。

「デイバイド・ゼロ」

「D i v i d e Z e r o」

トーマが砲撃を放つ。土煙がはれると、あの赤毛の子が倒れていた。

S i d e o u t

トーマside

危なかった…ディバイドが間に合わなかったらどうなっていたことやら…

戦闘はとりあえず終わり、いまナギを寝かせてリリイが介抱してくれている。正直疲れた…あんなバカでかい魔法の魔力結合を分断したうえ、ディバイドゼロまで撃ったから、当然ではある。

「どうだリリイ？そいつの様子は？」

「うん。脈も安定してるし、よく眠ってるよ？」

「そうか。ならよかった」

「まったくもう、心配したんだよ？」

「ごめんな」

「いいよ、もう。あつ、あの子が起きたみたい。」

そんな話をしていたらナギが目を覚ましたようだ。

S i d e o u t

くナギs i d eく

「うあ…あああ…ふあああああ」

あれ？オレはいつの間になむってたんだ？確か、学校やめて旅に出たところで強そうな男にあつて闘い吹っかけて…

「よう。起きたみたいだな。気分はどうだ？」

声がした方を見たらあの男がいた。そうか、俺は負けたのか…

「あまり良くはねえな。」

「負けて悔しいか？」

「当たり前だろ！！負けて悔しくない奴なんかいねえ！！」

くそつ、いつか絶対え勝つ！！

「そういえば名前聞いてなかったな。俺はトーマ、トーマ・ミグレシオンだ。こっちはリリイ」

「初めまして。リリイ・シュトロゼックです。」

「そうか。俺はナギ！！ナギ・スプリングフィールドだ！」

ん？そうだな、こんな強い奴ほうっておくのは惜しいな。

「おい、トーマ、リリイ。あんたら俺の仲間にならないか？トーマは凄い強いし、一緒にいればいつでも戦えるだろ？俺は絶対にトーマに勝ってやるからな！！」

「そうか、いいぞ。お前のことは気に入ったし、まあ挑戦は気が向いたら受けてやるよ。じゃあ改めてよろしくな、ナギ」

「よろしくね」

「おう！ー！」

これから楽しくなりそうだぜ！！

「まあ一緒に旅するのはいいんだが、まずどこに行くんだ？」

おう、そついやそうだったな。うーん…おっ？

「そついや、日本の麻帆良学園でところでやってる学園祭で武道会があるらしい。それに参加してみようぜ！！」

強い奴と戦えるかもしれないしな。

「そうか、まあ俺は出場は遠慮するが、学園祭の方には興味がある。よし日本に行ってみよう」

「私も楽しみだな。学園祭か…どんなかんじなんだろうね？トーマ？」

よし！…！そうときまれば早速出発だ！…！

「ねえ？ナギ、トーマ。日本に行くのはいいけど、ぜひぜひ準備してこよう」
「もりなの？」

「」「あ」「」

S i d e o u t

第一話 赤いのはやっぱりこんなか…（後書き）

次話は武道会です。あの変態とむっつり剣士がたぶん出ます。

戦闘シーンで難しいですね…なんか凄い変な感じになっちゃったし

短い…！

リリイをだすタイミングがつかめない…

誤字脱字指摘、アドバイス、感想お待ちしております。

第二話 やっぱりこいつらもイメージ通り（前書き）

共に旅をすることを決めた俺たちは、麻帆良へとたどり着く。

そこで出会ったのは自らの背中と未来を預け共に闘うことになるかけがえのない仲間。素晴らしい友人たちと出会えたことを今は喜ぼう。来るべき戦争に向けて俺は決意を新たに前に進む。魔法先生ネギまForce 始まります。

第二話 やっぱりこいつらもイメージ通り

リリイ side

こんにちは、リリイです。赤毛の少年ナギが仲間になりました。そして今、私たちは日本の麻帆良学園という所に来ています。現在、麻帆良では学園祭というお祭りをやっているようで、凄いにぎやかです。こんなに人がたくさんいるのを見るのは初めてです。トーマたちとはぐれないようにしなきゃ。

「うおー！！すげえな、こりゃ！ん？あれは！おいトーマ、リリイ！！ロボットだぜロボット！あれは……」

「ナギ、あまりはしゃぎすぎて転ぶなよ？ついでにはぐれるなよ。リリイ、大丈夫か？人ごみで逸れないように手をつないでおくか？」

ナギも楽しそう、トーマはすこし心配しすぎな気がしますが、でもここは甘えておきます。

「うん。ありがとう」

「おう」

私たちの麻帆良初日はこんな感じで始まりました。

Side out

トーマ side

麻帆良についたときは本当に驚いた。今まで見たこともないくらい
の人の数だった。俺は生まれは田舎だったし、都会に出ることもほ
とんどなかったからな。あの後、俺たちは露店でいろんなものを食
べたり、遊んだりしながら見て回った。現在、武道会場にきている。
なかなか強そうな奴らをちらほら見かける。ん？あの黒髪のバカ長
い刀―野太刀といったか？―を持った青年は…

「こんにちは。あなたも武道会に参加するのですか？」

「ん？ああ、俺は修行の旅に出ていてね、手始めにこの武道会に参
加しようと思ったんだ。君も参加するのかい？」

「いえ、俺は自身は参加しませんが、仲間が参加しますよ。ああ、
申し遅れました。俺は、トーマ・ミグラシオンと言います。」

「俺は、詠春。青山詠春だ。よろしく。」

やっぱり詠春だったようだ。原作でみたとおり、かなり堅物そうだ。

「よろしくお願いします。」

さてさて、ナギはどうなるかな？詠春にも頑張っしてほしいけどね。

S i d e o u t

くナギsideく

ナギだ。俺は今、武道会場に来ている。トーマはついた後リリィと一緒にどこか行っちゃった。みた感じあんま強そうじゃなえな。中にはできるやつもいるが。そいつらと戦うことを考えるとワクワクするぜ！！

「あなたも、武道会に参加するのですか？」

フードをかぶったかなり怪しげな奴に声をかけられた。その下から見える顔は優男だが…こいつ強い！

「おう！！自分の腕試しがしたくてな、今旅をしてるんだ！で、この大会のことを噂で聞いて手始めに出てみることにした。」

「ふふふ、そうですか。その歳で相当腕に自信があるようですね。本戦で当たるのを楽しみにしていますよ。ああ、自己紹介がまだでしたね。私はアルビレオ・イマと申します。アルと呼んでください。」

「おう！！俺はナギ・スプリングフィールドだ！ナギでいいぜ」

「では、また後ほど」

「おう、じゃーな」

アルか…楽しくなりそうだぜ！！！！

Side out

（詠春side）

大会が始まるのを待っていると、少しくすんだ銀色の髪に赤い眼という珍しい容姿をした少年に声をかけられた。おそらく俺よりも強いだろう。トーマと名乗った少年は武道会には参加しないようだが、あの年であれほどの覇気を持つとは…俺も負けてられんな。

『ただいまより、麻帆良武道会予選を開始いたします。出場者は指定の場所に集合してください。繰り返しです。……』

む？ようやく開始か。今の俺の力を試させてもらっぞ。

S i d e o u t

トーマside

アナウンスが終わり、最初のAブロックの予選が始まった。その中に詠春のすがたを見つけた。どうやらナギとは別ブロックになったらしい。さて、詠春の力を見せてもらおうか。

・ ・ ・ ・

なんというか…そうだな、原作ではほとんど目立たなかったが、詠春は強かった。瞬動を駆使しつつ野太刀で敵を薙ぎ払っていた。早すぎるだろう終わるのが……

そして、B、C、Dブロックも予選を終えた。当然のごとくナギは圧勝だった。ん？あの怪しいフードはもしかして、アルか？まさか、詠春だけでなく、アルもいるとはな。本戦が待ち遠しい。

「リリイは誰が優勝すると思う？」

「うーん？どうだろう…さっきの詠春って言う人も強そうだったし…でも、ナギは勝ってほしいな。」

「そうだな、あいつはかなり強い。おそらく決勝までは残るだろう」
まあ原作通りならあいつは間違いなく優勝するだろうな…さあ、みせてもらおうか。

・ ・ ・ ・ ・

その後、一回戦、二回戦と順調に勝ち進んでいき、現在準決勝。一組はナギと、おそらくは中国拳法の達人―何気に気を使いこなしている―と思いき30歳くらいの男性。まさかこいつ、古菲の師父だったんじゃないかな？お？始まるみたいだ。

Side out

ナギside

本戦の最初のほうはあまり強くなかった。んで、現在準決勝で闘っているわけだが…

「おらぁ！！ちいっ！くそっ！この野郎！！」

さつきからいくら攻撃しても妙な動きで受け流される。中国拳法つてやつか？やりにくいったらねえぜ。

「力だけでは俺は倒せんぞ？どうした、もう終わりか？」

うっせーな！分かってんだよそんなことは…ん？受け流されるならその流れにあえて乗っちまえば…よし、一か八か！！

「おらぁ！！」

「ふん！！」

良いまだ！！

「喰らえええええ！！！！」

受け流された方向に自分から突っ込み、その力を使って後ろに回り込む。振り向いたところを思いっきり顎めがけて魔力を込めた拳を振り上げる。

「ぐぁあっ！！」

「はぁ、はぁ、はぁ…どうだ！？」

「リリイ、たびたび悪いが、あの二人どっちが勝つと思う？」

「たぶんあのアルビレオっていう人が勝つとおもっ。」

「リリイもそう思うか。今回は詠春は分が悪い。まあ、結果は見るまで分からないからな…さて、どうなるかな？」

Side out

〈アルビレオside〉

私は今、黒髪の剣士と対峙しています。確か…青山詠春と言いましたか？いやはや、なかなかの気迫ですね。

「お互いいい勝負をしよう。」

「そうですね、闘うからには本気でいきます。」

『Ready Fight!!!』

開始の合図がかかりました。その瞬間、彼は先手必勝とばかりに斬りかかってきました。

「ふっ！！はっ！せい！やつ！はあ！！」

彼の放つ剣戟は速い。私は彼の攻撃の合間を縫って重力魔法を込めて掌底を放ちます。彼はそれを瞬動でかわし、再び斬りかかってきます。…この勝負やや長引きそうですね…

S i d e o u t

〔詠春 s i d e 〕

このアルビレオという男…動きが読めない…やりづらい相手だ。しかし、俺も負けるわけにはいかない。斬りこんで一氣に決める!!

・
・
・

しかし、そううまくはいかないらしい。ひらひらとかわされてしまう。くそ…

いったいどのくらい闘っていたのだろうか？その時一瞬しびれを切らしてしまった。其の隙に奴は黒い球体を放ってきた。

「くっ!! 範囲が広い、よけきれない!ぐあああああ!!」

黒い球体に当たった瞬間俺は押しつぶされ、夕風も手放してしまう。あわてておきあがろうとするが、首に手刀をあてられた。…ふう、ここまでか……

「参った」

「いい勝負でした」

『勝者！！アルビレオ・イマ！』

はあ、負けてしまったか…だが、諦めん！！いつか、必ず…

くトーマsideく

やはりアルが勝ったか…次は決勝戦だな。さて、ナギはあのアル相手にどう戦うのだろうな…隣にいるリリイの心なしかワクワクしているように見える。

『これより！！麻帆良武道会決勝戦を開始いたします！！両者前へ
！！！！』

おっと、はじまるようだな…

Side out

くナギsideく

ようやく決勝戦だ！！目の前に立っている謎フードだが、全く隙がみつからねえ。

「ふふふ。ナギ、やはりあなたが来ましたか」

「はっ！！おれはだれにも負けねえよ！！」（トーマには負けたがな）

」

「ふふふ。問答をしても仕方ありませんそろそろ始めましょうか。」

そこにアナウンスが入る。

『片や、弱冠10才の少年ナギ・スプリングフィールド選手!! 対するは、ロープのフードですっぽりと姿を覆い隠した正体不明の謎の男、アルビレオ・イマ選手!! いったいどんな勝負を見せてくれるのか!?! それでは決勝戦!!』

いよいよ始まるか!!

『Ready Fight!!!!!!』

Side out

Other side

『Ready Fight!!!!!!』

その掛け声とともにナギはアルビレオに殴りかかる。拳からは紫電がほとばしっている。どうやら大量の魔力を拳に込めているようだ。

それに対し、アルビレオは重力魔法を放ちながらナギを近づけさせない。

一進一退の攻防が続く。

アアアン!!!!!!!!!!!!!!

ナギの放った千の雷とアルの重力魔法がぶつかり合い、とてつもない衝撃が会場を襲う。池の水が蒸発したのか辺りには白い煙がもうもうとたちこめる。

どのくらいたったのだろうか……辺りはしーんと静まり返っている。するとようやく煙がはれてきた。そこで立っていたのは？

ナギだった。

Side out

トーマside

おいおい、これはまた派手にやるねえ…隣を見るとリリイが涙目でうずくまっていた。

「お…おい？どうした？リリイ…大丈夫か？どこか痛いのか？」

俺は心配になってリリイに声をかける。すると…

「とーまあ…ぐすっ…かみなり…ひくっ…かみなりがあ…」

リリイが上目遣い＋涙目で俺を見上げてくる…（不覚にも可愛いと思ってしまったのは秘密だ）

なるほど。初めてナギと戦った時、千の雷があたりそうになったところがリリイにとって心的外傷トラウマになってしまったようだ。まあ無理もないか…あんなバカ魔力であんだ大威力の広域殲滅魔法をくらいそうになったんだし…

「あー、大丈夫だよ、リリイ。俺がそばにいてあげるから。な？」

そう言っただけ俺はリリイを優しく抱きしめる。

「ふえ？／／／あ…ありがと。トーマ／／／」

リリイは顔を赤くして、笑顔で答えてくれた。うん。やっぱりリリイには笑顔が一番だな。

おお？煙がはれてきたな…さてどっちが勝ったのだろうか…

そして完全に煙がはれたところで立っていたのは……………ナギだった。

「ぜえ、ぜえ、ぜえ…よっしゃあ…勝ったあああああああああああああああああああ……！」

うるせえ…

「ふふふ。まさかその歳でそのような大呪文を使えるとは思いませんでしたよ…膨大な魔力量にものを言わせただけのものでしたが…いや、とてつもない威力ですね…完敗です。」

『勝者！！！！ナギ・スプリングフィールド選手！！！！！！！！！！』

そして、麻帆良武道会は幕を閉じた。

トーマside

武道会も終わったし、麻帆良祭も十分楽しんだ。そろそろ旅に出るか…ナギも優勝したのがうれしいのか、いつも以上にはしゃいでいた。リリイも満足したのか、ニコニコしながら鼻歌などを歌っている。

「っ」

可愛い…げふんげふん！！楽しそうなりリイとナギと歩いていると声をかけられた。

「こんにちは。先程は素晴らしい勝負でした。」

「やあ、俺も驚いたよ。まさか俺が敗れた相手に10歳の少年が勝つてしまうのだから。俺も腕には自信があつたんだが…まだまだ修行が足りないな」

「はっ！当然だろ！！俺様は無敵のナギ様だからな！！」

「トーマに負けたのに？」

リリイがささず突っ込みを入れる。

「うぐっ…次戦ったら俺が勝つ！！絶対勝つ！！」

「はいはい」

「なんだその返事は！！（ぎゃあ、ぎゃあ）」

ナギがなんかわめいているが無視だ無視。気のせいだ。

「お二人は何の御用ですか？ただ声をかけただけということはないのでしょうか？」

「ああ、そうでした。あなたたちは旅をしているのですよね？私たちもそのたびにどうしようかと思ひまして。」

「ああ、君たちは強いからな。一緒に旅をすればより強い者と戦えそうだし、お互いを高めあうこともできる。一石二鳥だ」

「なるほど…俺は構いませんが、ナギはどうだ？」

まあ、答えはわかり切っているが一応聞いてみる。

「おう！！いいぜ！！あんたらと一緒に旅するのは楽しそうだ！！！」

ほらな？んじゃ一応念のために…

「リリイはどうだ？」

「私も別にいいよ？友達が多いほうが楽しいよ」

リリイらしいな…じゃあ決まりだな。

「それでは、よろしくお願いします」

「ええ、よろしくお願いします」

「よろしく」

「よろしく頼むぜ!!」

「よろしくお願いします」

「では改めて自己紹介をしましょうか。私はアルビレオ・イマと申します。アルとお呼びください。後、敬語は結構ですよ」

「俺は、青山詠春だ。詠春と呼んでくれ。俺も敬語じゃなくていい」

「そうか？じゃあ、お言葉に甘えて。俺は、トーマ・ミグラシオンだ」

「俺はナギ・スプリングフィールドだ!!ナギでいいぜ!!」

「私は、リリイ・シュトロゼックです。リリイってよんでください」

こうして、アルと詠春が仲間になった。紅き翼も主力がそろってきたな。ん、ここらが潮時かな…少し提案してみようか。

「みんなちよつといいか？」

「どうかしましたか？」

俺の言葉にアルが返答する。

「ああ、これからのことなんだが、△ンドゥス・マギクス“魔法世界”に行ってみないか？」

「魔法世界ですか？それは何故…ああ、なるほど、戦争ですね？」

アルは納得したようだ。詠春も納得といった感じで頷いている。リイも、この世界にくる前にある程度の知識は与えられていたようで、ナギだけが???を浮かべている。

「いいかなギ、俺たちの旅の目的は強い奴と戦うことと、強くなることだ。そして今、魔法世界では戦争が起こっている。それに傭兵の様な形で参加すれば、強い奴と出会うこともあるかもしれない。わかったか鳥頭」

「誰が鳥頭だ！？なるほどな！！んじゃ早速行こうぜ魔法世界へ！！」

そう言って飛び出そうとするナギの襟をつかんで止める。

「ぐえっ」

ナギが奇声を上げたが気にしない。

「阿呆か…そんなだから鳥頭なんて言われるんだ。魔法世界に行くにはゲートを使わなきゃいけないんだ。お前ゲートの場所なんて知ってんのか？それに魔法世界の戦争に参加するんだ…チーム名を決

めなきゃならんだろう…」

「うぐ…ゲートってのはどこにあるんだ？」

「お前の故郷、イギリスはウェールズにあるよ。とりあえず使うゲートはそこでいいとして、次はチーム名だ。さてどうしようか…」

「おう！！それなら俺様がリーダーだからな！！格好いいのを考えてやるぜ！」

そして考え始め「できた！！」速いよ…

「アラ・ルブラ 紅き翼” ってのはどうだ？」

自分本位で考えた名前なのが見え見えだが、原作通りだし、俺自身悪くないと思っている。

「ふふふ。悪くありませんね」

「いいんじゃないか？」

「かつこいいと思うよ？」

「よし決まりだな。俺たちはこれから“紅き翼”と名乗る」

「んじゃ行くぜ！！“魔法世界”へ！！」

「「「おう！！（はい）」」」」

こうして俺たち“アラ・ルブラ 紅き翼”は始動した。

俺はこれから、人を殺すことになる…だが立ち止まってはいられない。俺は、前に進み続ける。リリィは必ず守って見せる。

S
i
d
e

o
u
t

第二話 やっぱりこいつらもイメージ通り（後書き）

まえがきが意味わかんないですねごめんなさい。

ついにアルと詠春が仲間になりました。次回はシヨタじじいかな？
どんな出会い方になるのかこうご期待！！いよいよ魔法世界に入ります。

誤字脱字指摘、アドバイス、感想お待ちしております。読んでいただいた方に最大限の感謝を…

第三話 トーマ全力全壊…そして（前書き）

ナギ「まさか、もうこんなに早くウェールズに帰ってくるとは思わなかったぜ」

トーマ「仕方がないだろう、俺はここしかゲートの場所は知らないんだから」

アル「まあ、今さらですよ。そろそろゲートが開く時間です。準備はよろしいですか？」

詠春「俺は問題ないが」

トーマ「俺も大丈夫だ。リリイはどうだ？」

リリイ「だいじょうぶだよ、トーマ」

ナギ「んじゃ、行くぜ！！待ってるよ、魔法世界！！」

そして、道は開かれた…

第三話 トーマ全力全壊…そして

「ナギside」

ようー！ナギだ。俺たちは今魔法世界に来ている。戦争に参加して、腕試しをするためだ。アルの提案で、連合勢力に加わることになった。そこで、今はメガロメセンブリアに向かっている途中だ。

「なあ、メガロにはまだつかねーのか？」

もうすでに何時間も歩いている。敵も出てこねーし…暇すぎる…！

「いえ、そろそろ着くはずですよ。連合勢力に参加するためには、まず元老院にお目通りをしなければなりませんからね、その際ナギは静かにしていて下さい」

「どういう意味だ、それは…！？」

「お前に礼儀を求めるのは無理だって話だ。だったら静かにしていてもらった方が楽でいい。変にあちらさんの機嫌を損ねるようなまねは、控えたいからな」

聞き捨てならねエが、反論もできねー…

「わあったよ。おとなしくしていればいいんだろ？」

そんな話をしていると、でかい街が見えてきた…！すげー…！
！よっしゃ…！いくぜ…！

S i d e o u t

トーマside

メガロに到着した後、元老院に赴き、連合側で参加する旨を伝えた。俺たちの魔力量が高いし、詠春の気の量もなかなかだ…まあその中でもナギのは群を抜いているからな…あつという間に採用が決定した。

んで、俺たちは戦争の最前線に押し出されたため、大量の敵兵が目の前にいらっしやる。ここは、今まで碌に力を見せてない俺が出るべきかな…そんなことを考えていたら、アルから声をかけられた。

「凄い敵の数ですね。ところで、今まであなたの力を見る機会がなかったので、どの程度戦えるのか、私たちは知らないのですが…」

「ああ、俺もそう思っていたところだ。俺だけがみんなの力を知っているのは不公平だと思つてさ…まずは俺が出るよ。まあ。あの程度ならすぐ終わる」

まあ、広域殲滅をするには、第二形態にならなきゃいけないのがきつい。まあ四の五の言つてられないか…

「1つ言っておくことがある。これから俺が闘っているときに、俺と戦いたいとか、好戦的な感情を向けたり、警戒を抱かないでほしい。一応リリイに制御してもらつが、万が一ってこともある」

「リリイに制御してもらつてどういうことだ？」

やっぱり気になるか…

「まあその辺りは見ていればわかるよ」

「リリイよろしく頼むな？」

「ゼロは本当に危なくなつたときだけだよ？」

「わかつてる」

んじゃ、行きますかね…

「まずは、E・Cディバイダー」

「Start Up」

俺のコールの後、腕輪から声が発せられ、俺は防護服を纏う。そして、そばには銀十字の書が浮いている。いきなり、服が変わったことにリリイと、一度見たことがあるナギ以外は驚いているようだ。

「んじゃ、リリイ、行くぞ！！」

「うん」

「リアクト！！」

「React」

第二形態へ移行し、ディバイダーが、より機械的な形状へと変わる。その瞬間、俺は五感の全てを失い、敵意だけがわかるようになった。

「んじゃ、行ってくる」

俺は敵の中心めがけて飛び立った。

• • • •

俺は今、おそらく敵のど真ん中、その上空にいるはずだ。よし、広域殲滅、数で押し切る！！

すると、銀十字の書から大量にページが出現し、俺の周囲を回り始める。そして、音声が流れる。

「敵性存在の危険度上昇、排除を開始します」

“Silver Stars”
“Hundred million

ディバイダーに環状魔法陣が現れ、俺の周りに待機したページにむかって、魔力の筋がのびる。俺は、ディバイダーを振り下ろす。その瞬間。待機したページから数え切れないほどの魔力弾が放たれ、敵軍へと降り注ぐ。

[illegible]

幾千、幾万の弾丸が地表へと降り注ぎ、次々と帝国兵を薙ぎ払っていく。

おそらく今は、土煙が立ち上り、敵の様子がわからなくなっている

だろう。それでもまだ魔力弾の音は鳴り響く。

む？前方に超大型の敵性反応…

「前方の大型敵勢力を排除します」

ディバイダーから声が発せられる。俺の腕は自動的に前方へ向けられ…

俺を中心に環状魔法陣が数個展開され、1つの砲身のようになる。

「Silver Hummer」

高威力の砲撃が放たれ…

「大型敵性存在の消滅を確認」

そろそろかな…

俺はリアクトを解除する。

そして、最初に眼に映ったのは、堕ちていく戦艦と…

死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、
死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、
死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、
死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、
死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、
死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、
死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、
死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、
死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、
死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、	死体、

軍勢のど真ん中その上空へとすげー速さで飛んで行った。あの状態になった後、あいつからは何も感じなくなった…威圧感っていうのか…とんでもねえプレッシャーは感じたが、それ以外は何も感じなかった。まるで、死にじまつてるみてえに…

その後は圧倒的だった。あいつの近くに浮かんでた本から大量にページが飛び出したかと思ったら、あり得ないくらいの魔力弾を放ちやがった！！数もそうだが、一発ごとの威力もけた違いだ…俺の千の雷なんか目じゃねえくらいの、超広域殲滅の魔法だ…土煙でなんにも見えなかったが、トーマが砲撃魔法を撃ったのが見えた。土煙がはれると、あんなに大量にいた敵は見る影もなかった。

「おいおい！？すげえなあいつ…」

「予想外ですよ…まさか、彼があれほどの力を有していようとは…トーマが敵でなくてよかった、と…喜ぶべきなのでしょうか？」

「そ…そうだな、あんなものを食らったらひとたまりもない…」

アルも詠春もトーマの容赦ない攻撃に驚いているようだ。

「…戻ってきたら説明してもらっぞ！！（いますよ）、トーマ」「」

Side out

トーマside

戦闘（というか、一方的な殲滅。虐殺？）も終了し、ナギ達のところへ戻ってきた。戻ったとたん、現在質問攻めにあっている。

「さて、トーマ。先程のことについて説明していただきましょうか？」

「そうだなー！！なんだよあれは！！」

「説明してもらおう」

はあ…仕方がないか……

「俺のこの力についてはリリイのほう詳しいからな彼女に補足してもらいながらのほうがいい。リリイは今寝てるし、少し休憩して、リリイが起きたらその時にな」

「…分かった（りました）」「…」

とりあえず、湯を沸かしてコーヒーを入れて現在は一服中だ。リリイは久々のリアクトで疲れたのかぐっすりと眠っている。俺は眠っているリリイのサラサラした髪を優しくなでる。

「ん…すーすー…」

リリイが少しくすぐったそうに身じろぐが、また穏やかな寝息を立て始める。

「…」「……………」

なぜか三人が俺をじーーーーーーーーーーーーーーーーと穴があくほどみてくる…なんだ？

「「「別に？」「」」

なんなんだよ！！？

しばらくして、漸くリリイが目を覚ました。

「ん…ふぁ…あふ」

「おはよう、リリイ」

「うん」

まだ、少し眠たいのか、眼をこすっている。

「眼球が傷つくからあまり目をこするなよ？」

「ふぁい」

やれやれ…

「起きたばかりで済まないんだが、俺の力について説明しなきゃならん。補足を頼む」

「うん、わかった」

「では、トーマ。話してください」

「了解。まず、俺の武器はこれだ」

と、袖をまくって銀色の腕輪を見せる。

「腕輪…か？それが武器なのか？」

その疑問はもつともだ。

「ああ、こいつがあの銃剣に変化するんだ。こんなふうにな…」

そういつて俺はディバイダーを展開してみせる。一度見たからか、今回はそこまで驚いてはいない。

「不思議な武器だな…」

「話をもどそうか。こいつはECディバイダーといって、別名“魔導殺し”と呼ばれる兵器だ」

「“魔導殺し”？」

「そう、魔力エネルギーの結合を分断することで、魔法によって発生する運動エネルギーすらもほぼ完全に消滅させることができる」

「なんだそりゃ！？そんな魔法つかいじゃ勝てねえじゃねえか！」

「それが魔導殺しと呼ばれる所以さ。そして、この兵器を使う者は、EC（エクリプス）に感染している。EC因子保有者は高熱をはじ

キャリアー

めとする発病症状を経てEC因子適合者になる。^{ドライバー}そして、ここから重要な話なんだが、EC感染者はそれぞれ特有の病化と呼ばれる肉体変異を起こす。共通するのは刃物や魔力を通さなくすることとまあ個人によって差はあるが、再生能力だ。そして、一番厄介なのは、EC感染者は強烈な殺戮衝動に襲われる。人を殺さなきゃいけないんだ…」

「ツツ!!じゃあ、トーマは…」

「いや、俺は最初は本当にやばかったが、当時の俺じゃ、歯が立たないなんてレベルじゃない奴のところ5年は放り込まれてな…あのときは…ぶつぶつ」

「トーマ、戻ってきてください」

「す…すまない。それで、俺は訓練したり、ある人(?)に軽減してもらったりしてほぼ乗り越えた。よっぽどのことがない限りは大丈夫さ」

「そうか。仲間には殺されるなんてたまったものじゃないからな」

「…あはは。ちなみに俺の病化は中でも特殊で、“ゼロ”と呼ばれる。ゼロ因子はEC感染者の全てが持つているものなんだが、普通は発現することはない。だがまれに、このゼロ因子を起動できるものがある。それが俺で、ゼロ因子適合者^{ドライバー}と呼ばれる。ゼロ因子適合者は通常のEC感染者をはるかに上回る肉体強化と、俺もよくわかっていないんだが、生体魔導融合とよばれる物による物理エネルギー生成能力を持つらしい。そして、ゼロの発動中は、五感の全てを失い、自分に敵対する存在をディバイダー、あるいはリアクターに頼って自動で排除するようになる。ちなみにその時に使われる

のが銀十字の書だが、これは、あくまで武器管制システムだからな、俺と、ディバイダー、そして、銀十字の書を制御する存在が必要なんだ」

「それが私だよ」

「リリイがいなけりや俺はゼロ発動中、敵、味方関係なしに排除行動をとってしまう。俺とリリイはある意味一心同体なんだ。まあリリイが大切なのはそんな事とは関係ないんだけどな」

「ありがとう、トーマ？」

「ふふふ。のろけですか？」

「ちげーよ!!」

まったく…「なあ？」ん？今まで黙っていた詠春が聞いてきた。

「どうした？」

「ああ。1つ聞きたいんだが、戦闘前にリリイが言っていた、‘ゼロ口は本当に危なくなったら’とはどういう意味だ？」

ああそのことか…するとリリイが話し始める

「そのことだけど、リアクト中にゼロ因子適合者が使える奥義？みたいなものなの。正式には【Divide Zero “Eclipse”】^{ディバイド}といって、超広範囲での分断をおこすの。これは魔力エネルギーどころか、生命エネルギーまで分断してしまう上に、仲間
にまで被害が及びかねない両刃の剣。本当に危なくなったらってい

「うのは、そういう意味だよ」

「それは… なんていうか…」

「もはや生体兵器ですねあなたは」

「何を言っている？ E C 因子適合者は生体兵器だぞ？」

まったくなにを当たり前のことを…（うんうん）リリイも頷いてい
る。

「
「
「
..
なっ
「
「
「

h?

「何いいいいいいいいいいいいいいいいいい
 いい（です）てえええええええええええええええ
 えええええ）ツツ！！？？」

「ひうっ！」「びくうっ（！）」「うっ！」「うっ！」「うっ！」「うっ！」

それから、三人にいろいろ説明しながら時間を過ごした。

その後、俺たちはいくつもの戦場に駆り出された。ナギはそのたび
サウザンドマスターに“千の呪文の男を名乗っていた。俺自身には、“無に帰す者”な
 んて二つ名が付いた。そして、また指令が下った。今回の場所はオ
 ステイアだった。聖地奪還だったか？とにかくヘラス帝国がオステ
 イアへ進行しているらしい。そういや、アスナと初めて会う場所か

……

そして、俺たちが到着したときには、すでに王都への攻撃が始まっていた。

「くつ。遅かったか！ちっ、気にいらねえぜ！」

ナギが心底いやそうに言う。確かにな…

―精霊砲全弾消失！―

―消失！？王都の防壁ではないのか！？まさか……………！―

―広域魔力減衰現象を確認！減衰速度加速中……………間違いありません！！黄昏の姫御子です！！―

帝国兵の声が響く…

「黄昏の姫御子……………何だってそんなもん！？」

「歴史と伝統だけが売りの小国に他に売り手はないでしょう」

「だが、王族だろ！？まだ小さな子供だって聞け」

「冷静になれ、ナギ…うるさいぞ」

そこに詠春が突っ込みを入れる。

「俺はいつでも冷静だっつーの！！」

どこがだ…

「だがまあ、気にいらないのは俺も同じだ」

「戦争ですからね…向こうの真の目的もおそらく…それに少女の年齢も私同様、みた目通りとは…」

「くそっ（ちっ）」

俺とナギは舌打ちする。本当に気にいらねえ…

アスナがいるであろう場所が見えてきた。

っ！！鬼神兵が！！

―防御結界―

そこにいるおっさんが何か言っている。

そして…

ドンッ！！

ザンッ！！

ナギが魔力を込めた拳で殴り、俺が別の奴をディバイダーで切り裂く

ドドオオオン

腹をえぐられ、切り裂かれた鬼神兵が地に倒れる。

「そんなガキまで担ぎ出すこたねえ…」

「後は俺に任せておけ」

ナギの言葉に続いて言う

「お…お前は！？紅き翼…千の呪文の…そして…」

「そう！！ナギ・スプリングフィールド！！またの名をサウザンド
マスター！！」

「自分で言ったよこいつ…」

「フフフ、ノリノリですね」

「はあ…」

「くすくす」

そんなことをやっているとき、精霊砲が飛んできた…これ以上はあの子に負担をかけるわけにはいかんか…俺は精霊砲の射線上に立って

「デИБァイド」

目の前に巨大な魔法陣を展開し、魔力の結合を分断、精霊砲が霧散する。

アスナがこっちをじっと見ていた。???

そして、詠春とアルが構える。ナギはアンチョコを見ながら、

「えーと……百重千重と重なりて走れよ稲妻——行くぜ！オラア！！」

キーリプル・アストラペー

「千の雷!!!」

ズグア！！！！！！！！！！！！！！

詠春は飛んでいる小さいのを切り落とし、アルは重力魔法で一氣に殲滅していく。

「リリイは、あの子のほうにいてくれ」

「うん」

たたたた

「んじゃやるか……」

「ディバイド・ゼロ！！！！！」

【Divide Zero】

直射砲が放たれ、前方の敵をかき消しながら進んでいく……

おっさんがなんか驚いてい。おおとか言ってる……今さらか……

「安心しな。俺たちが全て終わらせてやる」

「なっ……しかし！！敵の数を見たのか？！？お前たちに何が！？」

「俺を誰だと思つてやがるジジイ——俺は…最強の魔法使いだ。魔法学校中退だな」

「な…」

開いた口がふさがらなくなってるな…にしても、

「何が最強の魔法使いだ？俺に負けたくせに」

「それに、アンチヨコ見ながら呪文となえているあなたが言っても、今一つ説得力がありませんね」

詠春も嘆息してる

「あーあーるせーよ（だからちゅうたいだつつつてんだろ・・・）」

「それに…あなた個人の力がいかに強力であろうと、世界を変えることなど到底…」

「るせーつつてんだろアル、俺は俺のやりたいようにやってるだけだ、バーカ」

「よう、嬢ちゃん。名前は？」

「ナ・・・マエ？・・・・・・？」

「アスナ…アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア」

たどたどしくはあるが、しっかりとナギに答える。

「なげーなおい。でも、アスナか…いい名前だ」

すると、アスナは俺の方を見ている…どうしたんだ？

「アナタハ…ナニ？」

ツ！？力が似通っているからか？

「俺か？俺は、トーマ、トーマ・ミグラシオン。そうだな、俺を一言で表すなら…兵器だ。そして…」

世界を殺す猛毒だ

ナギが声をかける…

「よし、待つてなアスナ。…行くぞ！！アル！詠春！トーマ！敵は雑魚ばかりだ！！行動不能で十分だぜ！！」

「はいはい」

「やれやれ、雑魚と言っても数はシャレにならんぞ」

「まったく…俺の力は不殺が難しいんだっての。じゃあ、リリィはアスナと一緒に待つてくれ」

「うん」

そして、俺たちは敵を一掃していった。

Side out

〈アスナside〉

ナギ…アタマヲナデラレタトキ…ナゼカワカラナイケド…アタタカ
カッタ…カラッポナハズノワタシデモ…ナギハアタタカカッタ…リ
リイモ

モウヒトリノ…トーマ…トーマハドコカワタシトオナジカンジガシ
タ…トーマはジブンヲヘイキダツイッタ…セカイヲコロスモウドク
ツテドウィウイミナンダロウ…イツカマタアエルカナ…?

ナギ…トーマ…リリイ…

Side out

〈トーマside〉

オスティアでの戦いのあと、しばらくは俺たち紅き翼が前線に出な
きやいけないような大きな争いは起こらなかった。戦の最中は気が
張り詰めて疲れるが、何も起きないなら、何も起きないで暇でしよ
うがない…・とりあえず街を見て回っている。戦争中でも平和な
所であるものと少し感動している。すると、後ろから声をかけ
られた。そこにいたのは…

独特な雰囲気漂わせるナギよりも年下に見える少年だった。

「お主らが紅き翼かの？」

「わしはゼクトという。少し話があるのじゃが……」

さて……どうなることやら……

S i d e o u t

第三話 トーマ全力全壊…そして（後書き）

R「今回は少し長めです。ゼクトほとんど出せなかった！！よく考えたらゼクトと出会う前にアスナ似合ってたじゃん！？ということ
で急遽路線変更…大変だった…しかも駄文…

トーマの二つ名募集します！！「無に帰すもの」のルビとかでもか
まいません！！お願いします！！」

ト「お前は…もっとよく考えてから予定を言え…この阿呆が」

R「御免なさい！！」

リ「めっ！！だよ」

R「…はい」

ト「なごんでんじゃねえ！！…ドンッ！ドンッ！」

R「ぐはあっつ！！！！」

で…では、アドバイス、ご感想、誤字脱字指摘ありましたらよろ
しくお願いします。かくっ」

第四話 うん…漫画だと目立たなかったが、結構インパクト強いあの口調…

前話においてトーマが第二形態になりましたが、あくまで私の想像で、リリイと完璧にリアクトしたらおそらくこんな感じになるんじゃないかなっていうものです。真相がはっきりし次第変更いたします。気に入らない方もいるかとは思いますがどうかご容赦のほどよろしくお願いいたします。

では、第四話始まります。

第四話 うん…漫画だと目立たなかったが、結構インパクト強いあの口調…

トーマside

「お主らが紅き翼かの？ワシはゼクトという。少し話があるのじゃが…」

ついに出てきたか、ゼクト…原作でも詳細不明の謎の魔法使い…

「一体どういった御用向きでしょうか？」

アルが代表して応答する。余計なことをしないように詠春がナギを抑えている。

「いやの？最近噂で聞くようになった紅き翼とは、どういったものなのか気になったのじゃ」

「それで？」

「ふむ、なかなか面白い者がそろっているようじゃの。ワシも紅き翼に入れてもらえんかの？ワシはこう見えて、お主らの何倍もの人生を歩んでおる。何かと役に立てるじゃろつて…そのアンチヨコつかいを鍛えてやろつ。ワシが師事すればお主は今より強くなれるじゃろつ」

「マジか！？俺はいいぜ！！強くなれるつてのにそいつを見逃すのは惜しい」

「まあ、そうだな…サウザンド・マスターなんて名乗ってる癖にア

ンチヨコ見ながらとか…今は、魔力量にものを言わせてるからいいが、これから戦争は激化するだろうからな、いまのままバカス力撃ちまくってたら、身が持たん…ここらで魔力コントロールを覚えさせておくのもいいだろう」

「ふむ一理ありますね…」

詠春もうんうんとうなずいている。リリイは苦笑しているが…

「では、決まりじゃの…これからよろしく頼むぞい」

「俺はリーダーの千の呪文の男、ナギ・スプリングフィールドだ！
！よろしくな、ゼクト」

「ワシのことは師匠と呼ばぬか、阿呆」

「わ、わかった、お師匠」

「うむ」

「フッフ、私は、アルビレオ・イマと申します。気軽にアルとお呼びください」

「俺は、青山詠春だ。よろしく頼む」

「次は俺か。俺はトーマ・ミグラシオンだ。いつの間にやら、「無ロ・ルラーに帰す者」とか、「悪夢魅せし虚無ナイトメア・ザ・ゼロ」って厨二っぽいのか、まんま「魔導殺し」とか、「無情なる王」、あとはふざけたので、「何こいつ魔法消えるんですけど！？」なんて呼ばれてる。まあ、よろしく頼む」

「ほう、主があのに「無に帰すもの」か、よろしく頼むぞい」

「わたしは、リリィ・シュトロゼックだよ。よろしくね」

「うむ」

自己紹介も終了し、俺たちは仲間になった。

くゼクトsideく

ワシは、噂を頼りに紅き翼とやらがいるという町に来た。すると、相当な力を持った者たちの集団がおった。おそらくこれが、紅き翼じゃろう。

そして、ワシはナギを鍛えるという名目で紅き翼に入った。長く生きて最近は暇を持て余しておったからの…これからおもしろくなりそうじゃ。

Side out

く????sideく

ざわざわ…わいわい……………

ヘラス帝国边境の町、戦時中だというのに平和なもんだな…。

「ターゲットは、この4人の男と一人の少女、それに…この少年だ」

「フン…なんだ、ガキじゃねえか」

「子供と思って油断していると、痛い目を見るぞ？オステイア回復作戦の失敗の主因はこいつらだ。すでに精鋭で組織された討伐隊も送ったが、悉く返り討ちだよ…君が望むなら部下も付けよう。傭兵賞金稼ぎになっちまうが…「いらねーよ」？」

「一人で十分だぜ、任せときな」

さーて、紅き翼…どこまでやれるのかな？

Side out

トーマside

俺たちは、ゼクトが仲間になった後、より戦果をあげていった。ゼクトの力は本物だったようで、以前より楽になった。俺もナギと一緒に修行をつけてもらっている。エクリプスのせいなのかは分からないが、俺には普通の魔法は使えなかった。そのため、俺が教えてもらったのは、魔力コントロールだけだ。後は軽く模擬戦とかだな…ナギは相変わらずアンチヨコを見ながら呪文を唱えているが、撃てる魔法の回数も、威力も段違いになってきた…俺はゼクトを先生と呼ばせてもらっている。

話は変わるが、今俺たちは辺境にいる。連合の中には、俺たちのことを疎ましく思う奴も少なくないようで、飛ばされたっていうわけだ…そのくせ、危なくなると頼ってくるんだからわざわざ遠征しなきゃならないこっちの身にもなってほしい…まあ、そんなことは置いといてだな、

俺たちは詠春が作ったすき焼きに舌鼓を打っている。ぐつぐつ煮た
ったすき焼き…凄いうまそうだ。

「んっふっふ、こいつが旧世界は、日本の鍋料理ってやつかあ」

「すき焼きな」

「じゃ、早速肉を〜」

「あっ！！ナギ！おまつ…何肉を先に入れてるんだよ！！？」

このバカ！！勝手なことを！！ゼクトはゼクトでトカゲ肉でもうま
いのか？とかのんきなこと言ってるじゃねえ！！

「いいじゃねえか、うまいもんから先だよ。ほらほら」

「バツバカ！？！火の通る時間差というものがあつてだな！！まず
は野菜を入れて…あーちよっ！？」

「百歩譲って肉をしらたきの近くに入れるんじゃねえ！！硬くなる
だろうが！！」

そんな口論の合間にもナギはどんどん肉を入れていく…この野郎

「フフ…詠春、トーマ、知っていますよ？日本では貴方たちのよう
な者を…『鍋將軍』と呼び習わすそうですね？」

「ナベ・シヨーグン！？」

「つ…強そうじゃな」

「いや、鍋奉行だから」

「わかったよ詠春、トーマ。俺の負けだ…今日からお前が鍋將軍だ…」

「すべて任す、好きにするがよい」

「聞いちゃいねえ…まあいい、食うか」

「おお何じゃこのソースうまいぞ?」

「ホントだうめえ!!?」

「これこそが日本の誇る醤油だよ」

「それに大根おろしですね」

「これがしょうゆか!!スゲエうめえ!!」

「お前は日本に行ったときに寿司くっただろう」

鳥頭め…

「リリイ、食べたいもの言えよ?俺がとってやるよ」

「ありがとう、トーマじゃあ、あの白いの食べたい」

「ん、しらたきだな?良し任せろ」

リリイにとってあげながら、自分のも食べる。ニコニコしながら食べているリリイ…やっぱり可愛いな…とそこで、ナギが話し始める

「姫子ちゃんにも食わしてやりたいくらいの旨さだな」

「姫子ちゃ…ああ、オスティアの姫御子のことじゃな？」

「まあ…戦が終われば彼女を自由にする機会もつかめるやも…です」

「その戦だが…やはり、どうにも不自然に思えてならん」

「何が？」

「何もかもだよ…お前が言いだしたんだろうが鳥頭。あと、肉ばかり食うな」

ん？殺気？

俺はリリイを横抱き（いわゆるお姫様だっこ）にして飛び退る。その間飛んでくる具をリリイが箸で取っている…ずいぶんたくましくなったな…

そこに声が響き渡る。

「食事中失礼……！！俺は放浪の傭兵剣士ジャック・ラカン！いつちよやろうぜ……！」

アホ2号出た…筋肉凄いなおい…

「何じゃ？あのバカは…（んぐんぐ）」

「帝国のつて訳じゃなさそーだな（もぐもぐ）」

そこっ！！食べながらしゃべるな！！とか言っている場合じゃないな…

「えいしゅ…むお！？」

うわー鍋を頭から…熱くないのか？

「フ…フフフフ…フツ…食べ物を粗末にする者は…」

切れてるなこりゃ…

「どーしたー来ねーのかぁー！？来ねーならこっちから…いつ」

「斬る」

「おほ？」

おーおー詠春の攻撃を防いでるよ…筋肉はだてじゃないのか？まあ、いーや

「長引きそうだし、俺は寝る。リリィ、終わったら起こしてくれ」

「うん、お休みトーマ」

「ふああああ」

んじゃ寝ますかね……………

「…マ」

「ト……………き」

ん？

「トーマ、起きて」

終わったのか？

「ん…ふああ…終わったのか？」

「うん」

「そうか…て、おいおい」

辺りの景色は一変していた。森に囲まれていたはずだったのに、今ではその影すら見られない…環境破壊にもほどがあるぞ。出発するみたいだな…

なんか、微妙に仲良くなってるなあ…二人…つかナギ…並び立つ者がいるだけでとか言ってるけど、何度も言うがお前俺に負けただろうが…

こんなッ大規模バトルを幾度か経て、ラカンが仲間になった。それから、しばらくして俺たち同様この戦争に疑問を抱き始めた連合の

捜査官、ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグと、彼が拾ってきたタカミチ・T・高畑と、クルト・ゲーデルが紅き翼に入った。

そして、現在「グレートブリッジ奪還作戦」のために前線に呼びだされている。

「ほお、あれがグレートブリッジが…なんていうか安直な名前だな…そのまんまじゃないか…」

「そろそろ作戦決行の時刻です。大丈夫かとは思いますが、一応気を引き締めてください」

「まあ、あのバカ二人には意味のない話じゃがな」

まあ、ゼクトがそういうのも無理はない…

「おい！！ジャック！どっちがおおく敵を落とせるか勝負だ！！」

「いいぜ、ナギ！俺様にかかればあの程度なんてことはねえ」

バカ二人はこんな会話をしている…はあ…
そして、作戦が開始された。

リリイとリアクトして、制御を任せ、俺はシルバースターズやシルバーハンマー、戦艦相手にディバイドゼロを撃ったりした。ナギはいつものように千の雷を雨あられと撃ちまくっている、アルと詠春、ゼクトは、俺たちが撃ち漏らしたこまごました敵を次々と倒している。

戦績としては結局俺が一番多く落とした。

「おい！！トーマ！何でてめえが一番多く落としてんだよ！！？納得いかねえ！！」

そんなことをナギと、ラカンがわめいているが気にしない。

作戦は無事終了し、連合は、帝都方面へと進行していった。

ナギがふと、話し始める。

「俺の故郷がある旧世界じゃ、超強力な科学爆弾が開発れてて、もうこんな大戦は起こらねえそうだし戦を始めたが最後みんなまとめて滅んじゃうからだってよ…だが、こっちのこの戦はいつ終わる？帝都へラスまで攻め滅ぼすってか？やる気になりやこの世界にだって、旧世界の科学爆弾以上の大魔法はある！！こんなこと続けてどうなる？意味ねえぜ！！まるで…」

その言葉をアルが引き継ぐ

「―まるで、誰かがこの世界を滅ぼそうとしているかのようだし―ですか？」

ラカンは興味なさそうにあほずらしている。ぽへんて…

「―ある意味その通りかもしれないぞ？「ガトウ？」」

「俺と、タカミチ少年探偵団の成果が出たぜ」

やっとか…ついにこの戦争の核心に近づいたのか…

「やはり奴らは帝国・連合、双方の中枢まで入り込んでいる。――
秘密結社 コスモエンテレケイア 完全なる世界だ」

.....

それからしばらく経って、ガトウに呼びだされた。

「何だよ、ガトウ？わざわざ本国首都まで呼びだしてさ」

「あつてほしい人がいる、協力者だ」

来るか？ナギの嫁…

「協力者？」

「そうだ」

そこに誰かの声が入る。

「マクギル元老院議員！」

「いや、わしちゃう。主賓はあちらのお方だ」

「ウエスペルタティア王国…アリカ王女」

「.....」

ナギは見とれているのか、終始無言だった。ラカンはややニヤして

いるが…確かに美人だな。

「ワハハハハハ！…うまいことやりがってこんガキヤ！」

「ああ！？何の話だ！？」

「とぼけるんじゃないよ！お姫様とイチャイチャキヤイキヤいおしやべりしてただろーがッ！」

「してねっつの！！何がイチャイチャだ、バカ！！」

「なーに行つてんだ俺なんか『気安く話しかけるな下衆が』だぜくくく？…いやありやイイ女だぜ？一本芯の通つたな」

「頭大丈夫かジャック？マゾかアンタ？俺あんなおつかねえ女見たコトねえぞ？」

「グハハハハハ！…そーゆートコはまだまだカワイイがきなんだよなてめーはよ」

「んっだ、そりゃ！？意味わかんねえ触んなっつーの！！勝負すっかてめー！！」

「「仲いいな」」

詠春と俺の言葉が被る…アルなんかため息ついてるぞ？リリイはニコニコしてるけどな…よく考えてみるとリリイってなんでも楽しそ
うだよな…アリカ姫とも仲良さげに話してたしな…

「しかしよ？ウェスペルティアの王女ってことはアレか？り例の姫子ちゃんの姉君ってことかよ？」

「いや…姫子ちゃんのこととは…なんか話しにくいみたいだった」

「へえ…？」

「アリカ姫…か」

アスナ…か、元気かな…？

Side out

くナギsideく

姫さんと会ったあと、俺たちは完全なる世界の調査に乗り出した。拠点や関連組織を潰す「実働班」と、裏方で調査をするまんま「調査班」に分かれた。トーマに関しては全員そろって

「…………お前は両方やれ」「…………」

とかいわれて、落ち込んでリリイに慰められていたがな。俺は時々姫さんの相手をしていた。そのたびになぜか殴られたが…なぜだ…

Side out

トーマSide

調査を一端切り上げて戻ってきた。そこでラカンとはち合わせたの
で一緒に向かっている。中に入ると、ガトウが何かを見ながら頭を
抱えていた。

「まさか…こんな…」

どうしたのだろうか？

「よう、ガトウ。どうしたよ？そんな深刻な顔して」

「ああ、ラカン、トーマ。いや、ついに奴らの真相に迫るファイル
を手に入れたんだが…これがどうも信じがたい内容でな…いや、情
報のソースは確かなんだが…うゝむ、信じていいんだか悪いんだか
…しかしこれが確かなら奴らの行動も…」

「んだ？ガトウハッキリしねえな…もっとわかりやすく言えや」

「いや、言ってもあんたにや興味ない話だよ多分。——それより、
こっちの方が深刻だ。この男にも 完全なる世界 との関連の疑い
が出てきた…大物だよ」

「こいつは…！」

「いまの執政官^{コンスル}じゃねーか！！このメガロメセンブリアのナンバー
2まで奴らの手先なのか！？」

「確証はない…外でしゃべるなよ？」

すると、遠くの方で爆発音が聞こえた。ってあつちは今ナギとアリ

カ姫がいる方じゃないか!?

「何だ!?!」

ラカンが叫ぶ。

ナギ…アリカ姫…無事でいてくれよ?

Side out

くナギside

「くそっ!!こんな街中でかい魔法使いやがって!!死人出てねえだろうな?」

姫さんと街を歩いていたらいきなり攻撃を受けた。

「やはり今は・・・」

「ああ、奴らの刺客だろ?あんたと俺、どっちを狙ったのかはしらねえがな」

たくっ、飛んでもねえことしやがるぜ…

「けど、ようやく尻尾出したな…逃がさねえぞ!!追尾魔法かけてやったしな…」

よし!姫さんはみんなのところに帰ってる!!俺は奴らの本拠地を潰し…ぐえっ」

「…私も行こう」

いきなり袖をひっぱられた…

「ああ？」

「ここに私を一人残しておく方が危険だと分からねのか？愚か者が…それに私の魔法は役に立つぞ？忘れたか鳥頭」

「……………」

まったく……

「ハッ…いいぜ姫さん、ついてきな!!」

今度こそ潰してやるぜ!!

Side out

トーマside

あの爆発の後、ナギ達の帰りを待ちながらリリイを愛でて、ディバイダーのことについていろいろ確認とかをしていた。

で、現在帰ってきたナギが、詠春に説教を食らっている。詠春も少し落つけよ…

「詠春さ……………ん!!」

そんなことをしているとタカミチが入ってきた。

「あの怖い冷血お姫様が今廊下で僕に向かってニッコリ……僕ビツクリしちゃって……あ、
なんかナギさんにお礼を伝えて、だそうです。確かに笑いましたよねっ！」

「うむ、おどろいたのじゃ……」

はははっ！！詠春が面白い顔になってる。ナギもなっ？とかいつてないで一応は反省しろ…ナギが懷から何かを取り出す。

「それに、ちゃんと証拠も見つけてきたぜ？」

「な…それは」

ナギにしちゃ上出来つてところだな…にしても、あのお姫様の笑顔か…一度見てみたかつ「いだぁッ！！な…にするんだリリイ…」いきなりリリイにつねられた…

「む…変なこと考えてたでしょ」

「エスパーか??？」

「大丈夫だよ、俺が一番大切なのはリリイだから」

「うん？」

といい雰囲気になってるところに

「フフフ」ニヤニヤ

みんながこつちを見ていやーな笑みを浮かべていた…タカミチなんかは顔を赤くしてるが…

「なんだよ？」

リリイは俺に抱きついて「？」って感じになってる。

「……別にな？」

なんなんだよ！！！！？

そして、アリカ姫は金魚みたいな船に乗って出発した。

ガトウがマクギル元老院議員に連絡して、執政官のことについて話していた。明日、法務官をよんで、弾劾手続きをとることになったようだ。そして、ガトウは、ナギと念のためにジャックをつれてマクギル元老院議員に会いに行った。

そして今、俺たちは姫様達の救出に向かっている。原作通り、マクギル氏は殺され、紅き翼はお尋ねものになったらしい。で、夜の迷宮とかいう場所にとらわれているらしい。
ノクティス・ラビリス・トウス

「くそっ！！姫さんを早く助けねえと！！」

「落ちつけナギ…ここは俺に任せろ姫さんがいるところは大体分かっている。そこまでの道をこじ開ける」

そう言っただけ俺はディバイダーを構える。

「シルバーハンマー!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

【Silver Hammer】

「よしっ、貫通した!!」

するとナギは真っ先に飛び込んでいく。まったく…

あけた穴からナギの後を追って俺たちも中へ入る。

「よお、助けに来たぜ…姫さん」

「遅いぞ、我が騎士」

ひとまずの救出は完了した。

「お主は誰じゃ？」

奥の方にいたちゃんまい少女が俺に話しかけてきた。

「俺は、トーマ・ミグラシオンだ」

「主がああ「無に帰す者」か!!?! いやじゃー、消されとうない!!」

俺はいったいどんなイメージを持たれているんだ…はあ、面倒なことにならないか…いいが…とりあえずは誤解を解くとしますかね？

Side out

第四話 うん…漫画だと目立たなかったが、結構インパクト強いあの口調…

第四話どうだったでしょうか？大戦も大詰めを迎えました。私に文才がないため、詳細がよくわかっていない大戦期をそこまで長く続けることができません。ごめんなさい。おそらく次話にて大戦は終了します。

では、こんな駄文でも読んでいただいた方に最上級の感謝を…誤字脱字、アドバイス、ご感想をよろしく願いいたします。

それと、今度はリリイの二つ名を募集します。あんまり出てきませんが、常にトーマと一緒にいるので、なにかあった方がいいだろうという作者の勝手です。どうかよろしく願いいたします！！

第五話 元老院・・・お前らは絶対に許さない（前書き）

大戦編最終話です。多分

これが終わった後いくつかの日常編を経て原作に突入します。

今回は一つの句切れめということで長めです。

かなり、グダグダですが、読んでいただけると嬉しいです。

では、第五話始まります！！

第五話 元老院・・・お前らは絶対に許さない

トーマside

テオドラ姫の誤解をなんとか解くことができた…いや、あながち誤解とも言い切れないところがあつたのは認めるが…

まあそんなことはおいといて、俺たちは紅き翼の隠れ家に来ている。

「何だ　これが噂の『紅き翼』の秘密基地か！

どんな所かと思えば　掘立小屋ではないか！」

いやいや、隠れ家がそんな派手だったらすぐ見つかってしまうだろうに…

「俺ら逃亡者に何期待してんだ、このジャリはよ」

「ラカン、逃亡者である以前の問題だぞ？　隠れ家がそんな目立っていてどうする？」

「何だ貴様ら、無礼であろう！」

「へっへん生憎、ヘラスの皇族にや貸しはあっても借りはないんでね」

「いやいや、貸しのあるなし以前に最低限の礼儀はわきまえようよ…すまないな、テオドラ姫。この筋肉ダルマにはあとで言うておくから」

「むう、主がそういつのなら…ところでさつきからおぬしの隣にいる少女は誰じゃ？」

「リリイ・シュトロゼックだよ？よろしくね」

「うむ！よろしくじゃ！それと、妾のことはテオでよいぞ」

「そうかい？じゃあ改めてよろしく、テオ」

「うむ！-！」

「で？そこの無礼な筋肉は何者じゃ！？」

なんだかんだで仲いいこの二人…テオはジャックの方に乗って髪の毛引つ張ってるし…ジャックはジャックで何気に楽しんでるし…はあ

「テオたのしそうだね」

「そうだな、お尋ね者だっていつのを忘れちまうよ…あれを見る」と

もう少し…もう少しでこの戦いも終わる。俺は、守ってみせる。

Side out

くナギside

「あのやけに元気な少女が」

「ええ ヘラス帝国第三皇女ですね」

「さーて、姫さん

助けてやったはいいけど、こっかは大変だぜ
連合にも帝国にも あんたの国にも味方はいねえ」

「恐れながら事実です王女殿下殿下のオスティアも似たような状況
で

最新の調査では、オスティアの上層部が最も『黒い』 という可能性
さえ上がっています」

「やはりそうか」

冷静な顔をしてっけど、内心はつらいんだろうな…

「我が騎士よ」

「だあら その『我が騎士』って何だよ、姫さん！
クラスでいったら俺は魔法使いだぜ？」

ハズかしーな

「もう連合の兵ではないのじゃろ
ならば主は、最早私のものじゃ」

「な…」

なんつー理屈だおい…

「連合には帝国

そして我がオスティア、世界全てが我らの敵という訳じゃないじゃが　主と主の『紅き翼』は無敵なのじゃろ？」

「世界全てが敵——良いではないか
こちらの兵はたった9人
だが最強の9人じゃ」

「ならば我等が世界を救おう
我が騎士ナギよ、我が盾となり剣となれ」

「へ」

「やれやれ
相変わらずおつかねえ姫さんだぜ」

「いいぜ、俺の杖と翼、あんたに預けよう」

俺が、俺たちがあんたの味方^{ツバサ}になってやるよ…

Side out

トーマside

そのあともやっぱり引き続き頭脳労働担当と、肉体労働担当に分かれて行動を再開。その際、また俺は

「『『『『『おまえはどっちも出来るだろ』『』『』『』」

とかいわれて、休めない日々を送ることに…エクリプスの身体能力の高さに物を言わせてなんとか乗り切ったよ！！最終決戦前に過労死とかシヤレにならん…ジャックいわく映画なら3部作、単行本なら14巻はいくであろう死闘のち、いや、死の部分がそのまんなまですよ？生きること自体が死闘だったよ？リリイに癒されながら何とか乗り越えた。

おつと忘れていた…少し前になってリリイにもようやく二つ名がついたんだよ。

フラグメント・オブ・ゼロ

確か：「紅翼の天使」とか、「虚無の片翼」とか「虚無の恋人」とかだったかな？そういえば、「王の側近」とかあったな…王って…俺そんな器じゃないぞ？まあ、ずっと俺と一緒にいるからだろう…まあなんていうか、ぽわぽわしてるからな…リリイは…

言い忘れていたことがもう一つ、俺たちのファンクラブもできた。ジャックのは昔からあったらしいがな。人数としてはリリイがだんとつだ。俺とナギはほぼ同等だ…リリイは渡さんぞ？

で、まあそんなことがあって今俺たちは墓守り人の宮殿を見据えているわけだ。ちなみにゼクトはずいぶんとさっぱりしたな…若干威厳がなく（ひゅんっ）…！？何かが鼻先をかすめる。

「なにか変なことを考えておらんか？」

だからなんでわかるんだよ！？ふう…

「不気味なくらい静かだな…やつら…」

「なめてんだろ？悪の組織なんてそんなもんだ」

「ジャック、そう短絡的に考えるべきじゃない…日本には嵐の前の静けさって言葉もある。こういう時に油断していると痛い目見るぞ？俺は今回、本気で行く…下手すると“ゼロ”を撃つことになるかもしれない…」

「トーマ、ゼロってなんだ？」

ああ、そういえばジャックには説明してなかったな…

「じゃあ、リリイ説明頼んだ」

「わかった。えーとね……っていうことなんだよ」

「なるほどな…まあ、そんなことにならねえようにしねーとな」

「ああ、あれはある意味最終手段だ、使わないに越したことはない」

それに、ゼロを使うと下手すると魔法世界が消えかねない…魔法によつてできているこの世界…その魔法を分断するゼロ…正直俺でもゼロエクリプスについては把握しきれていない…使うような事態にならなければいいんだが…

と、そこに声がかかる。

「ナギ殿！帝国・連合・アリアドネー混成部隊、準備完了しました
！！」

「おう。あんたらが外の自動人形を抑えてくれてりゃ、俺たちが本丸に突入できる。頼んだぜ？」

「ハッ！それで、あの…ナギ殿」

「ん？」

「ササ、サインをお願いできないでしょうか？」

「おお？ああ、いいぜ、そんなくらい」

「そそ、尊敬していました／＼」

セラスよ、以外に余裕あるなおまえ…ジャックもウハハハとか笑ってる場合じゃない…まあ、おかげで若干強張ってたリリイの表情も和らいだからいけどな…

と、そこにガトウから通信が入る。

『連合の正規軍の説得は間に合わん。帝国のタカミチ君と皇女も同じだろう…決戦を遅らせることはできないか？』

ちっ、元老院の老害どもは、完全なる世界とつながってるから…己の保身に走っているのだろう…役に立たんくせに欲ばかり深くて困るんだ…あいつらは。

「無理ですね。私たちがやるしかないでしょう」

「既にタイムリミットだ」

「ええ、彼らはもうはじめています…『世界を無に帰す儀式』を。世界の力ギ、『黄昏の姫御子』は彼等の手にあるのです」

「ああ！」

アスナ：俺が必ず助けてやる。そして俺はリリィとリアクトし、96を第二形態にする。

「よし…野郎ども、行くぜえ！！」

その声とともに俺たちは一斉に飛び立つ。

「やあ、『千の呪文の男』また会ったね。僕たちもこの半年で君に随分分数を減らされてしまったよ。このあたりでケリにしよう」

そして俺たちは各々の敵に向かう。俺はアルとともにデユナミスの相手をする。

「アル、召喚魔は俺に任せろ…エクリプスの前には魔法生命体は無意味だ」

「わかりました。しかし、一応気を付けてください。それと、私にあてないでくださいね？」

「…善処しよう」

そして俺はデユナミスが大量に出してくる召喚魔を片っ端から倒していく。

【敵性存在の脅威、数ともに増大、拡散攻撃にて排除します】

【Silver Stars “thousand”】

【Divide】

【Divide Zero】

【Silver Burret】

俺は細かいやつは拡散で、でかいやつは直射砲を用いて倒していく。その中には、原作で新オスティアのパーティーをおそっていたあの召喚魔もいた。

【敵性存在のおよそ99%排除完了】

そして、残っていたおそらくデユナミスだと思われる脅威も消えた。アルが倒したのだろう。俺は一時的にゼロを解除する。

「倒したか？じゃあ、行くぞ」

「ええ」

そして俺たちは中枢へと進む。その途中で、ジャックや詠春、ゼクトと合流する。最奥部へとつくと、ナギがアーウェルンクスの首をつかんでいた。

「見事…理不尽なまでの強さだ…」

元の肌が白いからわからないが、白か透明か…血のようなものを大量に流しながらアーウェルンクスが言う。

「ハア、ハア…黄昏の姫御子は…どこだ？消える前に吐け」

「フ…フフフ…まさか君は、いまだに僕がすべての黒幕だと思っているのかい？」

「なん…だと？」

まずい！！俺はとつさに短距離瞬間移動をして、ナギを突き飛ばす。

「うおっ！？トーマ！！」

「『トーマあ！！』」

その瞬間光線がアーウェルンクスを貫通し、俺をかすめる。分断したが、それでも間に合わなかったようで、片腕が持って行かれた。

そして、ゆらあと影が視界に移る。

「誰だ！？」

ジャックが声を上げる。

「いかんッ！！最強防衛！！」
クラティステー・アイギス

ゼクトが何重にも防御魔法陣を展開する。

「ぬうッ！！！！」

ディバイド
「分断！！！」

ジャックは気合で、俺はなんとかバカでかい砲撃を防ごうとするが、しかし

攻撃が止んだ時、皆地に倒れ伏していた。

「ぐっ・・・バカな！？」

「まさか・・・アレは」

ライフメイカー
—— 造物主、始まりの魔法使い ——

すると、造物主は転移していった。おそらく世界の終りと始まりの魔法を発動させる気なのだろう。

「待てコラ、テメエ！！！」

「任せなジャック・・・」

ナギが立ち上がる。本当に人間か？こいつ・・・

「い・・・いけません！！ナギ、その体では！！」

「アル、お前の残りの魔力全部で俺の傷を治せ」

「し、しかし！！そんな無茶な治癒ではッ」

「30分持てば十分だ」

「ですがッ!？」

「ふふ、よかるう。ワシも行くぞナギ。ワシが一番傷も浅い」

ゼクトも立ち上がる。

「お師匠・・・」

「ゼクト! たった二人では無理です!!」

「ここで奴を止めなければ世界が無に帰すのじゃ・・・無理でも行くしか無かるう」

そろそろかな? 俺も無駄に演出家だねえ

「なら、二人だけじゃなきゃいいんだろう?」

そう言つて俺が前に出る。

「トーマ! ? 貴方は腕がッ・・・! ? 治っている! ?」

「ゼロドライバーの再生力をなめるなよ? 腕がなくなった程度だったらずくに完治する」

ナギは見た目満身創痍だ・・・ジャックが止めに入る。

「ナギ待て! 奴はマズイ! 奴は別物だ! 死ぬぞッ! ? ここは体勢を立て直してだな・・・」

ナギはそれに反論する。

「バーカ。んなことしてたら間にあわねえよ……らしくねーぜジヤック」

ナギ……やつばおまえはすごいよ

「俺は無敵の千の呪文の男だぜ？俺は勝つ！！任せとけ！！！」
サウザンドマスター

んじゃあ行くか……俺とナギ、ゼクトは造物主のほうへと進む。
俺は再びエクリプスを発動しないようにゼロの状態になり、造物主を補足する。

「最深部、一番上、危険度高の存在と、危険度低の存在を一つずつ確認した。おそらく、造物主ともう一つはアスナだ」

「んじゃ、とばすぜ！！」

俺たちは速度を上げる。そして、俺には見えないが、ナギとゼクトは視界に造物主をとらえているだろう。

その瞬間、造物主が黒い魔法を連続してはなってくる。

【敵性存在の脅威急上昇】

【Silver Stars “Hundred Billion”】

俺はいつも以上に大量に魔力団を放つ。一発一発の威力が半端じゃ

俺はディバイド・ゼロを放ち、造物主を完全に消しさる。

やっと終わった・・・

しかし・・・

「む？おかしい、『世界の終りと始まりの魔法』が止まっておらん！！」

くそ・・・すでに発動していたのか・・・どうする・・・ん？まてよ？一か八か・・・あれなら！！

「ナギ、先生・・・お前らは脱出してくれ」

「何いつてんだよ！トーマ！？」

「策は・・・あるのじゃな？」

「ああ、かけではあるが、おそろくうまくいく・・・」

あれをリリィに制御してもらえばおそろくはいけるはず・・・

「くっそッ！！トーマ、リリィ！！絶対に生きて帰ってこいよ！！」

「ナギ・・・そろそろまずい、早く脱出するのじゃ」

ナギとゼクトはいったか・・・んじゃあ、いつちよやりますかね。

「リリィ・・・俺一人じゃうまくいかない。君の助けが必要だ・・・すこし大変だが手伝ってくれ」

【うん、わたしはトーマを助けるよ。いつだって、どんなときだって】

俺は意識を集中させる。

【範囲指定／墓守り人の宮殿最奥部／『世界の終わりと始まりの魔法』／『黄昏の姫御子』及び構造物を除外】

よし、いまだ！！

【Divide Zero “Eclipse”】

Side out

ナギside

あの後、外からは大規模反転術式が展開されていたんだが、いきなり全てがきえちまった・・・世界の終わりと始まりの魔法もすべて・・・そして、トーマは帰ってこなかった。俺たちは英雄と称えられ、勲章の授与式が行われた。

そのあと、俺たちはその祝いのパーティーをした。飲んだり食ったり、戦争がおわったことを本当に実感した。けどよ・・・

「バカ野郎・・・帰ってくるって、絶対に帰ってくるって約束したじゃねえか・・・トーマ・・・リリィ・・・」

そういえば姫さんもどこか様子がおかしかったな・・・姫さんは、

完全なる世界の傀儡になっちまって多先代の父王をクーデターみたいな感じで倒したから今は女王になっている。

そして、ただ時間だけが過ぎて行った・・・

S i d e o u t

＼アリカside＼

妾はいま、ナギの言葉を、温かさをおもいだしておる。ナギ・・・

「陛下!!」

ガトウとクルトが跪いておる。

「時間です・・・間もなく崩壊の第一段階が」

もう・・・そんな時間か

「進行状況は？」

「アスナ姫封印の直後から全艦艇全力であたっておりますが、現在37%・・・陛下のお考え通り式典と称しこの離宮に全市民を誘導しております。情報統制により、混乱は今のところありませんが・・・崩落が始まればその限りでは・・・全市民の救出は困難を極めるかと・・・!!」

くっ!!こんな時になぜ妾は無力なのじゃ!!?」

「・・・・・・・・分かった」

「妾も直接指揮に当たる！！！！」

報告通り、現在オステイアは崩壊を開始した。しかしッ！民は一人たりとも見捨てはせぬ！！崩落が始まった後、市民の混乱は抑えきれなくなってきたおる・・・

「もつとも効率的に民を救えるよう船を回せ！！ただし！捨ておいてよい命はない！！一人も救い漏らすな！これは厳命じゃ！！」

「貧民島の避難作業が難航しています・・・このままでは！！」

くっ！！

「原因はなんじゃ！！？」

「街の構造が複雑なうえ、不法移民が多く・・・全住民の把握が」

「わかった・・・ここは任せる！！」

「陛下ッどこへ！？」

「貧民島の住人は妾みずから直接赴き、島ごと不時着させる！！妾の魔法なら魔力がない中でも無効化されぬ！！」

「いけません女王陛下!!」

ええい!止めるでない!!妾は民を見殺しにするわけにはいかんのだ
じゃ!!

「ゴルアアー……ッ!!こんのバカ姫!!やい、アリカてめえ!
!どういこうしたこれは!!」

「ナギ……」

お主は……

「見ての通りじゃ……世界を救う代償に自らの国を滅ぼした。案
ずるな妾もいずれ、遠からぬうちに地獄へ落ちる」

「……ッなんで話さなかったこの唐変木!!」

「話しても無駄であろう、戦うしか能のないお主に何ができる」

「くそッ……いまからそつちに」

「来なくてもよい!!こちらにそなたの力はいらない!!」

そなたを死なせるわけにはいかぬのじゃ……そして、ナギとの口
論は続く……

そんなときじゃった……ここにいるはずのないあ奴の声が聞こえ
た……

『なら・・・俺の力を貸そう』

Side out

トーマside

「なら・・・俺の力を貸そう」

『トーマ!!!?』

「済まない・・・帰るのが遅くなった・・・事情があつてな・・・あと、もうひとつ謝らなきゃならないことがある・・・」

そう、俺はやっちゃならない大きなミスをひとつおかした・・・

『謝らなきゃならないこととはなんじゃ』

「この崩落は、大規模反転術式が原因じゃない・・・これは、俺のせいだ・・・」

『『『』なっ!!!?』』

『・・・どういうことじゃ?』

「ああ・・・俺は造物主がしかけた魔法を消すため・・・そして、もう一つの目的のために、エクリプスゼロを放った・・・魔法は確かに消滅した・・・しかし、予想以上に込められていた魔力が多すぎた上に異質だった・・・そのため、エクリプスが変に作用して、周囲の魔力を減衰させ始めた。エクリプスの効果はすでに切れた・・・

・もう魔力が減ることはないが・・・オスティアを浮かべさせるほどの魔力はすでない・・・ゆつくりと崩壊は進む。本当にすまない！！」

「トーマをせめないであげて！！私がちゃんと制御しきれなかったのも原因なの・・・魔法がとまって油断しちゃったから・・・」

「・・・今、そなたを責めたところで結果は変わらぬ・・・ならば妾はそなたらに罰を与える！！」

「「なんなりと・・・」」

「全ての民を救え・・・それが妾がそなたに課す罰じゃ・・・」

・・・ッ！！本当にこの人は・・・優しすぎる

「「^{イエス}仰せのままに、^{ユアマジェステイ}女王陛下」」

俺はリリイとリアクトし、崩落を続けるオスティアへと全速力で向かった。

原作とは違い、崩落の速度も遅かったうえ、俺が落石などを破壊していったため、死者は0人に抑えることができた。2ヶ月後、俺とアリカ陛下は、オスティアの件で、メガロメセンブリアに赴いている。

「ですから！このように話が民の窮乏を訴えているのです！！彼らの多くは難民となり、貧苦に喘いでいます！！彼らの犠牲あつてこそ現在の平和！！せめてもの援助を！！」

「フフ・・・おっしゃることはよく判りますが・・・国を滅ぼし彼らを現在の状況に追い込んだのはその少年ではありませんかな？さらに言わせていただければ・・・彼等はもはや貴方の民ではありません」

く・・・こいつらどこまで腐っているんだ！！俺の罪は認める・・・罰せられても仕方がない・・・だが、アリカ様は！！

「恐れながらアリカ陛下」

アリカ様と俺をメガロの兵が取り囲む

「陛下と、トーマ・ミグラシオン、あなた方を拘束させていただきました」

「・・・何故じゃ」

「父王殺し、及び「完全なる世界」との関与の疑い・・・また、オスティア周辺の状況報告について、虚偽改竄の疑いが持ちあがっています」

周りの議員が騒ぎたてである・・・この老害どもが！！重要な場面で何もしなかったやつらが・・・こんなときばかり！！

「フフフ・・・浅はかなことをされましたな、陛下。我らの情報機関の力を甘く見られたようだ」

「主らどこまで・・・恥を知れ」

こいつらは今何といった？浅はか？誰が？アリカ様が？ナギの大事な人が？浅はか？この戦争で一番傷つき、身を粉にして戦つた人が？傷つけるのか？こいつらは、親友の大切な人を？傷つける？そんなことはさせない．．．させない．．．させない．．．やらせるものか．．．

「させるものかあああああああああああああああ
ああああツッ！！！！！」

【Divide Zero “Eclipse”】

その瞬間俺の意識は闇に落ちた。

目を覚ますと俺は暗い……ここは？牢屋か？……に閉じ込められたいた。

「起きたか？」

「アリカ様!？」

い
つ
た
い
・
・
・
何
が
・
・
・

「覚えておらぬのか？・・・はあ・・・そなたは暴走したのじゃ。」

エクリプスゼロじゃったか？それを発動させ、議員の9割強が死亡、兵の半数が重体じゃ。妾は王家の魔力のおかげか・・・または別のものが原因か・・・なんとか命はたすかったようじゃ」

そうだ・・・思い出した・・・俺は、アリカ様を侮辱されたのが許せなくて・・・傷つける・・・そんなことばかり頭に浮かんで・・・

「はあ、俺もまだまだって・・・事なのかな？」

これから俺はどうなるのだろうか・・・

S i d e o u t

くナギs i d eく

「アリカとトーマが捕まった！？なんだよそりゃあ！？」

ふざけんな！！あの二人がどれだけ頑張ったと思ってやがる！！？

「アリカ様は、父王殺しとその他こまごまとした罪で、そして、トーマは・・・元老院議員の大半を抹殺したようです」

な・・・

「何かの間違いだろ？トーマがそんなことするはずがねえ！！」

トーマが捕まったと聞いてからリリィはずっと泣き続けている・・・

「それともう一つ、トーマから手紙が届きました。もし自分に何かあったときのためにと、あらかじめ我々のてにわたるようになっています。では、読みますよ?」

そして、アルは手紙を読み始めた。そこには驚くべきことが書かれていた・・・

「な・・・? 姫子ちゃんはオリンポス山の隠れ家にいるだとい? あいついつの間に! ? しかも、あの後帰ってこれなかったのはエクリプスゼロの反動と、姫子ちゃんを救出したからって・・・あいつ・・・」

「おい、それがわかったんならこんなところにいるべきではないだろう。ナギ、アスナ姫のところへ行くぞ?」

「そうじゃの・・・あ奴の気づかいを無駄にするわけにはいかぬから」

詠春、お師匠・・・

それから、俺たちはその手紙通りにオリンポス山の隠れ家に行った。すると、

「ナギ・・・」

姫子ちゃんがいた・・・

「無事だったか! ?」

「うん・・・トーマが・・・助けてくれた」

よかった・・・とくに異常はなさそうだ。すると、姫子ちゃんはある見回し始めた。

「ねえ・・・トーマは？」

「「「「「ツ！!?」「」「」「」

「落ち着いて聞いてくれ？トーマは捕まった」

「元老院議員の罠にはめられたのです」

「アリカ陛下もとらえられておる」

「姉さまが・・・?」

姫子ちゃんはぱつとみではわからないが、若干表情がこわばった。とにかく今はこんなところにいても仕方がねえ・・・今は、俺にできることをやるしかない・・・

俺たちは姫子ちゃんを連れてオリンポス山をたった。

それから俺たちは偉大なる魔法使い・立派な魔法使いとして、戦争の被害にあった人たちを助けて回った。

「う・・・」

「もう大丈夫だ・・・すぐ治療してやる」

「ア・・・アリガトウ・・・立派な魔法使いナギ・・・」
マギステル・マギ

立派な魔法使いか・・・俺は・・・

「ナギ！詠春さん！」

タカミチから声がかかる。なんだ？

「どうしたんだタカミチ君？」

「クルトから連絡が！アリカ様と、トーマさんの事です！」

「アリカ様とトーマの処刑が10日後に行われる！？それは本当か、クルト君！？」

「ハ、ハイ・・・」

「おそらくアリカ様は、自らの選択を今も悔い、失意の底に沈んでいるのだと思います。トーマさんも・・・トーマさんも意味なく人を殺すような人じゃありません！！あの人は、自分の大切なもの、そして、その人が大切なものを傷つけられたりするのを嫌う人です・・・あの人はきっとアリカ様の事でそんな行動を起こしたに違いありません」

「なんで、あいつがアリカの事でそんな事をするんだ？」

「トーマさんは言っていました。ナギは親友だと、初めて心から友

と呼ばたかけがえのない人だと・・・」

そうか・・・ありがとうな・・・トーマ。だが、おれはお前に何もしてやれない・・・

「そして、アリカ様は『妾が多くの憎しみを引き受けて処刑されることで、世にある不幸を少しでも減らせるのなら本望じゃ・・・このまま捨ておいてくれクルト・・・』と、そうおっしゃっていました。

「アリカ・・・様・・・」

「なるほど・・・あのバカ姫らしいセリフだな」

「なるほどってナギ!? 助けに行かない気ですか!？」

「あいつはこう言った・・・女一人を救っている暇があったら、一人でも多くのいわれなき不幸に苦しむ、無辜の民を救え、世界を救えってな」

「あの方も、トーマさんも、いわれなき罪への悔恨の念にすりつぶされ、希望を見失っておられるのです!! あなたが行かねば誰が彼女たちの名誉を守るのです!! 好きな女の一人も、親友すら救えず、何が英雄ですか!! 彼女たちを救い、奴らを告発し、真実を明らかにせねば・・・ッ!! ナギッ!!」

分かっているさ、でも今はその時じゃない・・・「治癒^{クイラ}」

「見損ないましたよ、ナギッ!! あなたの今の力と名声があれば、もっと大きく世界にかかわれるはずですよ!! それをなぜ、こんな地

味な活動をつづけるんです！？それで世界の何が変わえられるというんですか！？」

いくら英雄でも、俺一人が騒ぎたてたところで、変わることはないんだよ・・・

「だけど、クルト・・・今日もまた一人の命を救えたよ」

10日後、

重戦争犯罪人 アリカ・アナルキア・エンテオフユシア及びトーマ・ミグラシオン

処刑執行日当日

俺たちはいま、処刑に合わせて二人を救出するため、ケルベラス渓谷に来ている。おれは、谷の底で、魔獣にみつからないように待機している。俺の隣にはリリイも一緒にいる。

そろそろだな…

あれか！？良し！！ナイスキャッチだ俺。リリイも俺たちとは違う魔力を使ってトーマを受け止めていた。

あっちはうまくやってるかな？

Side out

くアルsideく

アリカ様とトーマが谷へと飛びおりました。では、そろそろ「よぉーしこんなモンだろ」ラカン・・・

「録れたか？ちゃんと録れたか？……？よぉーし御苦労ッ」おーい、おっさん、これ生中継とかじゃねえよな？生中継だとさすがにマズいんだが、さすがにねえよな？」

「無礼者！何者だ？貴様名を・・・」

ラカンが議員の頭をつかむ。握りつぶしちゃっても構いませんよ？

「おっさん」

「ぬぐっ」

「録画はここで終わりだ。で、今からここでおこることはすべて「なかったこと」になる。わかるか？」

フッフ・・・いよいよ出番ですね。

「き、貴様・・・」

ラカンが筋肉で着ていたよろいを吹き飛ばす。実際にできるんですねあんなこと・・・

「せ、千の刃の・・・ジジャ・・・ジャック・ラカン！？」

周りから動揺した声が上がる。じゃあ出ますか・・・

「青山・・・詠春ッ！！」

「アルビレオ・イマ!!」

「ガ・・・ガトウ!!」

「ぜ・・・ゼクトだと!!」

アラ・ルブラ
紅き翼・・・馬鹿なツ!?では、谷底の女王と、無常なる王は・・・

では、くたばってくださいね?フッフ・・・

S i d e o u t

トーマside

ん?なにか温かくて、やわらかいものに包まれているような・・・
ってリリイ?

「あれ?俺は、死んだはずじゃなかったのか?」

「生きてるよ?生きてるんだよ?トーマあ」

リリイが泣いている。泣かないでくれよ、俺はお前の笑った顔を見たいんだよ・・・

近くをみると、ナギがアリカ姫を抱えていた。

「おい!!トーマ!!再開の感傷に浸るのは後にしやがれ!!魔獣

に食われてもいいんなら止めはしないがな！」

「すまない。ではとにかく今はこの場を脱することを考えよう」

「じゃぁリリイ、久々のリアクト、頼めるか？」

「うん」

リリイが満面の笑みで答えてくれる。

【React】

【敵性存在を周囲に多数確認 急接近中 近接戦闘機能稼働開始】

アサルトシフト

俺は向かってくる魔獣を切り倒しながら進んでいく。ナギが通る道を切り開く。

そして、ようやく抜けた。「あんたの事が好きだからに決まってるじゃねーか！」おお、すげえこのタイミングでナギが告白したよ・
・これも一種のつり橋効果ってやつか？まあいいや、あの二人はそっとしておいてあげよう。俺はその場をゆっくりと離れる。地面に降り立つと、リアクトを解除する。遠くではあるたちが魔法を大量に放っているのが見える。確か俺がエクリプスでおおかたかたずけてしまったから、原作より少ないはずだよな？ゼクトもいるし、オーバーキルじゃないのか？まあいいや。いったん置いておこう。それよりも、

そして、俺はリリイと向き合う。

「ごめんな・・・心配・・・かけたよな？」

「うん・・・心配・・・したよ？ いっぱい、いっぱい心配した・・・
トーマがつらい目にあってるって思うと・・・夜も眠れなくて・・・
ずっと、ずっと苦しくて・・・ひつく・・・よかった・・・よかった
たよあ・・・えぐ・・・トーマが無事で、本当によかった！！」

リリイが俺に飛びついてくる。俺はリリイを受け止め、やさしく抱きしめる。

「ごめん・・・ごめんな、リリイ。俺はもうお前をおいてどこにも行かない・・・約束する。ずっとお前のそばにいる。隣で一緒に生きる。お前のすぐ隣で、守り続ける。だから、リリイも、俺の隣にいてくれないか？ 俺の傍に、ずっと・・・」

「うん・・・うん！！」

荒野の向こうから上る日が少しいつもよりも暖かった。

ていうか・・・まだ攻撃終わらないのか・・・

ナギとアリカ様もいい雰囲気になってるし・・・

まあいいか・・・今はこの手の中のぬくもりを感じていよう・・・

S
i
d
e

o
u
t

第五話 元老院・・・お前らは絶対に許さない（後書き）

やっと第一章が終わりました！次は京都に行きます。

しばらく少し短めの話をつくかあげていこうと思います。

長い書くのつてすごく大変・・・ゼクト生かしちゃいました。てへww

では、トーマとリリーの二つ名を考えてくださった方々に感謝を！！

まだまだ続きます。これからも魔法先生ネギまForce（仮）をよろしく願います！！そろそろ（仮）どうにかしないとな

では、誤字・脱字指摘。感想アドバイス、お待ちしております！！

誤字を確認したので、少々修正と、なんか不自然と思ったところに追加しました。

第六話 平和そして旅立ち（前書き）

京都にやってきた紅き翼一行

そんな彼らのほのぼの？とした日常

今回は短いです。

では、第六話始まります。

第六話 平和そして旅立ち

トーマside

ナギたちに救出され、オーバーキルもいいことといった攻撃をメガロ兵や議員に放っていたアルたちと合流した後、俺たち紅き翼は旧世界は日本の京都へやってきた。詠春は婚約者に正式に結婚のあいさつをするらしい。木乃葉さんというらしいが、大和撫子という言葉がぴったりの黒髪の超美人さんだった。ラカンなんかは詠春を見ながらにやにやしていた。

で、今はリリイとなぜか一緒に行くと言ってきたアスナと京都の街を散策している。前世の修学旅行で一回行っただきりだったから、ほとんど覚えていなかったが、清水をはじめとする寺社仏閣を見て回ったり、喫茶店であんみつを食べたり、祇園へ行ったりと逆に新鮮な感じでした。アスナも表情からはあまり分らないが、楽しんでいたように見える。俺が捕まっている間、紅き翼と一緒にいたからか？少し、感情の機微が見て取れる。

それから、俺たちは詠春と待ち合わせをして、関西呪術教会の総本山へとやってきた。元老院議員のほとんどが死んだ等という話を世間に流せるわけがなく、俺の処刑自体は秘密裏に運ばれていたらしい。まあ、そのおかげで俺は周りから何を言われるでもなく普通に外を歩いているわけなのだが・・・まあ、みんなと一緒に笑っていられるだけで良しとしよう。

総本山に到着すると、待ち構えていた巫女さんたちに（すごい人数だった）歓迎された。中には俺のファンクラブに入っている人もいたようで、サインをねだられた。全部書き終えたら手が痛くなった。

リリイはなんか、マスコットの扱いを受けて抱き締められたり、なでられたりしていた。リリイ人気ここに極まる。

夜になって、戦争終結の祝いと、詠春の結婚祝いをかねて宴会をしている。

「よし！ジャック、どっちが多く飲めるか勝負だ！！」

「はっ！！てめーにや負けねえよ、ナギ！」

「ナギよ、私をほおって何をやってるのじゃ？」

このとき、アリカ様の後ろに般若が見えたのは俺だけじゃないはずだ。タカミチ君なんて顔が真っ青だ。

「大丈夫か、タカミチ君？」

少し心配になったので、一応は声をかけてみる。

「は・・・はいい！だ、ただ大丈夫です！！！」

「ガトーーーウ！！！！ちよっとこっち来い！！師匠だろ？弟子のメンタルケアくらいしろ！！」

俺は、騒ぎから少し外れたところで、日本酒を飲んでいたガトウを呼ぶ。なんていうか、渋い・・・ハマりすぎて逆に怖い。タカミチ君もいずれこんな感じになるのか？そっくりだしなあ。の二人は・・・

「どうした？トーマ」

「いやね？ナギの事でご立腹なアリカ様をみて、顔を青くしてたんでな・・・何かあったのか？」

「む・・・いや・・・まあ、そのお、なんだ・・・色々あったんだ」

なんだろう？ガトウのこの反応は・・・すごく気になる。しかし、触らぬ神にたたりなしだ、触れないでいたほうがいいかもしれんな

「えいしゅ・・・ブフォツ！！」

詠春は完全に酔いつぶれていた・・・なんかもう、すごいことになってる・・・上半身裸だし・・・奇怪な動きをしている。それでもまだ飲むかお前は・・・

まあ、結婚も決まってうれしいんだろ・・・好きにさせてやるか・・・

俺はリリイとアスナの傍に行く。

「どうだ？楽しんでるか？」

「うん♪こんなに楽しいのははじめて♪」

「うん（もぐもぐ・・・）」

リリイはゆっくりとアスナは黙々と料理を食べていた。

「それはよかった・・・」

俺は、アスナを膝の上に乗せる。

すると、リリイは俺の肩にもたれかかってきた。すごくいい香りが

した。

前世じゃ、何もない平和な日々が退屈でしようがなかったが・・・戦争を経験した今なら分かる・・・平和がどんなに尊いものなのか・・・

そんな感傷に浸っていると・・・ナギに呼ばれる。

「おい！！トーマ！！そんな隅っこにいないでこっち来て呑めよ！！てめえだけ素面とか神が許しても俺たちが許さねえ！！」

なんだそりゃ！？まあいいか・・・

「分かった！今行くよ・・・どうせならお前らが呑んだ分飲んだ後に、勝負しよう！まあ、俺は負けんがな！」

ふふふ、エクリプスの効果はこんなときにも役に立つんだ・・・なめるなよ？

そんな風に、夜も更けていった。

S i d e o u t

くナギsideく

うあああああ・・・あたまいてー

さすがに飲み過ぎたらしい・・・これが二日酔いってやつか？

最後にトーマと飲み比べやってたところまではおぼえてんだが、その先がどうもあいまいだ・・・うゝん？どうなったつけ？だめだ思いません・・・

「ん・・・んう・・・」

そんなことを考えてたら声が聞こえた。何かと思って隣を見ると、アリカがいた・・・

あれ？なんで？しかもアリカ・・・裸なんだが・・・？もしかして・・・やっちゃった？うおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！

「ナギ様、朝食の用意ができ・・・」

巫女さんがはいつてきて目が合う・・・

「失礼しました」

何事もなかったかのように出て行った・・・俺は、どうすりゃいいんだ？

トーマside

朝、巫女さんが朝食ができたと呼びに来たので、リリィとアスナを起こして一緒に向かった。

食卓につくと、妙な雰囲気漂っていた。ナギは頬に真っ赤な紅葉

が付いているし、アリカ様は顔を真っ赤にしている。アルはフフフなんていつもより妖しい笑みを浮かべているし、ゼクト、ガトウに至っては我関せずってかんじでお茶を飲んでいた。詠春はまあ、木乃葉さんといちゃいちゃしてるが・・・

・・・いったい何が？

「アル・・・どういう状況だこれは・・・まあ、なんとなく想像はつくが・・・」

「おそらく、あなたのご想像どおりでしょう。フフフ・・・」

まあ、ナギが酔った勢いでアリカ様と・・・ってことなんだろう。で、朝起きた時に、アリカ様にビンタを食らったと・・・昨晚あれだけ飲んでたしな・・・

そんなこんなで、何事もなく？朝食を済ませ、俺とリリイ、アスナは甘味処の食べ歩きをして回った。ナギと詠春はそれぞれデート、ゼクトは寺社仏閣を片っ端から回るらしい。アルは、よくわからん・・・気がついた時にはすでにいなかったからな・・・ある意味あいつが一番謎なのかもしれん。

夜になった時、急に協会ないがあわただしくなった。気になって行ってみると、紅き翼メンバーがそろっていた。

「おい、いったい何が？」

「トーマ、いいとこに来たな！！いま誰が行くか決めてたところだ」

「いや、そんなことを言われても、さっぱり事態が呑み込めないんだが？」

そこに詠春の説明が入る。

「ああ、総本山内の湖に封印されていた、飛騨の大鬼神「リヨウメンスクナ」の封印が解けたらしい。協会の呪術師は再封印に専念しなきゃならないらしいんだが、どうもそのままでは封印ができないということで、まず俺たちが攻撃して力を弱めることになったんだ」

「飛騨の大鬼神がなんで京都に封印されているのかは気になるところだが・・・まあいいだろう、面倒だし、アスナをそろそろ寝かしつけなきゃならんから俺はパスだ」

その言葉を聞いて、ナギとジャックが騒ぎ始める。どうやらガトウとゼクトとアルは参加する気はないみたいだが・・・

「ああもう時間がないんだ！！早くしてくれ！！」

詠春があわてている。仕方がないな・・・助け船を出してやるか・・・

「だったら、どっちがとどめを指すかを決めればいいだろう。そうすればどっちも戦えるし、まあじゃんけんしろじゃんけん・・・」

「その手があったか！！」

鳥頭と筋肉ダルマめ・・・ラカンはこと戦いになるとあほになるからな・・・普段は結構頭回るのに・・・

結局、とどめをさすのはナギになった。

俺はアスナを寝かしつけて、スクナの所へ向かう。
俺が到着したところにはすでにスクナは満身創痍だった・・・
そして、ナギがとどめを刺そうとして呪文を唱える。

「百重 千重と重なりて 走れよ稲妻!!」

「千の雷!!!」

巨大な雷が落ちると、スクナは地に伏せる。
すかさず詠春が呪術師たちに声をかける。

「いまだ!!」

そして、スクナは再び封印された。
ふう、やっと終わったか・・・寝よ寝よ・・・

次の日、そろそろ旅に出ることにした。アスナと一緒に来たがった
が、俺は下手すると元老院に命を狙われかねない・・・だからアス
ナの事はナギたちに任せた。記念にと、写真を撮ることになった。
まずは、ナギ・俺・リリイ・アル・詠春・ゼクト・ラカン・ガトウ
で撮った。そのあと、全員で写った写真を一枚とって、コピーを俺
とリリイで一枚ずつ受け取った。

「んじゃ、俺たちはそろそろ行くよ」

「じゃあ、またね」

アスナはさみしそうだ。いまだ無表情ではあるが、少しずつ感情が芽生えてきているようだ。そんなアスナに俺は声をかける。

「アスナ、生きていればまたいつか会える。また、会いに来る。そうだな・・・こいつを渡しておこうか」

そう言つて俺はあるものを出す。

「これは？」

「まあ、一種のお守りだよ小指につけておいてくれ」

俺が出したものは指輪・・・

「それはお前が危なくなつた時、必ずお前を助けてくれる。そんなときが来ないことを祈るが・・・まあ、万が一だ」

そろそろだな・・・

「んじゃ、ナギ、詠春、アル、ジャック、ゼクト、ラカン、ガトウ、タカミチ君、クルト・・・そして、アリカ様、アスナ・・・お前らと会えてよかった。紅き翼は解散するけど、俺たちはこれからもずっと仲間だ・・・それを、忘れないでくれ」

そして俺は歩き出す。みんなそれぞれ送別の言葉を言ってくれる。

「またいつか会おう!-!」

「リリイ、どこに行きたいところはあるか？」

「トーマがいくところに私は付いて行くよ？」

はは・・・リリイらしいな。

さて、まずはどこに行こうかな？

S
i
d
e

o
u
t

第六話 平和そして旅立ち（後書き）

どうだったでしょうか？

さてさて、再び旅に出たトーマとリリィ・・・

今後の彼らの活躍にこうご期待？

では、これからも頑張っていきたいとおもいますので、応援よろしくお願いします！！

誤字指摘、アドバイス、感想をお待ちしております。

第七話 怪我の功名 明日菜の決意 (前書き)

ぶっちゃけタイトルが関係するのって一部だけです。

それでは、第七話、始まります。

第七話 怪我の功名 明日菜の決意

トーマside

京都でナギたちと別れた後、俺はとりあえずいろんな国を見て回った。中には本当に平和で、人々が活気付いている街もあったし、内戦で貧困にあえいでいる街もあった。とりあえず、「治癒^{クイラ}」とは別のミッド式の治癒魔法で紛争で傷ついた人たちを助けて回った。リイが・・・おかげで、「癒しの天使」っていうままでマイナーだった二つ名が有名になった。

そんな日々を数年続けていると、ある日アルから招集がかかったので、わかれた場所京都の関西呪術協会の総本山にやってきた。

「久しぶりだな、みんな・・・」

「ひさしぶり」

「久しぶりだな！トーマ！！」

「お久しぶりです、トーマ」

「久しぶりじゃの」

「久しぶりだな、トーマ」

以下略

「久しぶりだな、アスナ。元気にしてたか？」

アスナは数年たったというのに容姿は全く変わっていなかった。やはり、不老の呪いでもかかっていたのだろう・・・アリカ様は、ナギの故郷に残っているらしい。

「うん。トーマも元気？」

「ああ。また会えてうれしいよ」

「うん」

「それと、大きくなったな、タカミチ君」

「ええ、おかげ様で。というかトーマさんは全然変わりませんね？
リリイさんも」

「それはそうだ・・・俺は不老だし、リリイに至っては人間じゃないしな」

まあ、この後の反応は想像に任せる。とりあえず、皆驚いていたとだけ言うておく。

「所で、再び紅き翼を結成するんだ・・・なにかあったのか？」

「ええ、ガトウと、クルト君の情報で、完全なる世界の残党が不穏な動きをしていると・・・」

「なに！？まったく、親玉をつぶしたというのに、しづとい奴らだな」

「うんうん」

まあ、原作でもそうだったし、予想はしていた。すっかり忘れてはいたが……

「じゃあ残党をつぶして回るといことでもいいのか？」

「ええ。では、そろそろ出発しましょう」

「「「「「「おう（はい）（うん）」「」「」「」」

さて、行こうか……

それから、俺たちはいろんな国を回って完全なる世界の残党をつぶしていった。その途中、ガトウとも合流した。そして、あくる日の朝の事だが、俺、アスナ、タカミチ、ガトウは早く起きて棧橋へと来ていた。

タカミチ君はいまだに咸卦法が使えないらしく、ガトウに教えてもらっていた。アスナは俺の隣に座ってぼうっとしている。

「いいか？左手に魔力！右手に気……」ポツ

ガトウが咸卦法の手本を見せる。

「左手に魔力……右手に……うわっ」バチッ

気と魔力のバランスが合わないのか、反発している。

「ダメだ、ダメだ・・・いいかタカミチ、自分を無にしる。そんな調子じゃあと5年はかかるぞ」

「ハ、ハイ・・・」

「・・・・・・・・」

アスナはその様子が少し気になったのかちらつと見ていた。

そこに、起きてきたナギ、詠春、アル、リリィ、ゼクトがやってきた。

「よぉ、姫様は今日も元気か？」

「あつナギさん、皆さん、おはようございます!!」

タカミチ君が立ち上がって挨拶をする。ガトウは飯にすつかといつて立ち上がる。だったらタバコ吸うなよ・・・

「バーカ、タカミチ、ナギさんはやめろつつってんだろ・・・ナギでいーっての。何やってたんだ？」

「あついえ、ガトウさんに少し修行を・・・」

すると、隣でアスナが

「左手に魔力・・・右手に気・・・」ボツ

・・・タカミチ君、ドンマイ・・・アスナが咸卦法を成功させる。

「おおっ!？」

タカミチ君は何も言えなくなってしまった。

「ハッハッハ、抜かれたなタカミチ君」

「スゲースゲー、さすがお姫様」

いや、お姫様は関係ないだろう・・・ナギ

「これなら将来、良い魔法使いの従者になれますね」

「ハハハ、嬢ちゃん、おじさんのパートナーになるかい？」

ガトウ・・・それはどうかと思うぞ? いや、娘みたいに可愛がっているのは知ってるけど・・・

フルフル・・・アスナが首を振って指をさす・・・ん? 俺?

「・・・・・・・・・トーマでいい」

あれ? ナギじゃないのか?

「げ・・・・・・・・」

「うえ?」

「アスナがいいなら俺は構わないが・・・」

「トーマは何気に全方位にもてるな・・・」

「そうか？そんな物好きが多くいるとは思えないが・・・」

「やっぱおっさんはダメかーッ」

「アスナちゃんタバコ嫌いなんですよ師匠」

そのあと、朝食をとって、自由行動をすることになった。すると、アスナが

「海を見たい・・・」

というので、早朝と同じ所に来て、俺の膝の上に座って目を閉じている。

すると、タカミチ君がやってきた。

「あつ、トーマさん・・・ちょっとアスナちゃんに聞きたいことがあるんですけど・・・アスナちゃん、ちょっといいかな？」

「アスナ・・・タカミチ君が用があるらしい」

「・・・ん？何・・・？タカミチ」

「あゴメン、寝てたのかな？」

「うっん、目を閉じてただけ・・・用って何？」

「ああ、咸卦法のコツを覚えてくれないかなと思ってさ」

「・・・・・・・・」

「簡単だよ。自分を無にするの」

「けど、それがなかなか難しくてさー」

「難しくなんかない・・・右手・・・左手・・・ハイ」ボツ

アスナはあつという間に咸卦法を成功させる。

「おおっ!？」

「スゴいなあ、アスナちゃん！なんでそんな鮮やかに・・・」
や、

確かにすごいな・・・

「・・・・・・・・？何でって・・・無になるなんて簡単・・・だって・・・
私には元々何一つないもの・・・」

「アスナ・・・確かに君はいままで何も得るものがない、むしろ失
うばかりの日々を送ってきた。でも、今は俺たちがいるだろう？俺
の守りたいものの中には君も入っているんだ・・・だからもう、何
もないなんて言うなよ」

「そうだよ、今の君には、ナギさんや、^{マスター}師匠や、僕もいるだろう？」

「・・・だけど、あなたの師匠の煙草は嫌い」

「ハハハ・・・それは勘弁してやってくれ」

「あ、そうだ・・・ナギさんやアスナちゃんはすぐに咸卦法成功させてましたけど、トーマさんはどうなんですか？」

「俺か？そうだな・・・やってみるか」

そう言つて俺も集中し始める。

「左手に魔力・・・右手に気・・・合成」ポツ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

タカミチ君が落ち込んでしまった。

「タカミチ君、あまり気に病む必要はない。俺の場合、デイバイダ―を扱う上で、力のコントロールはかなり重要なんだ・・・一歩間違えば、仲間すら傷つけてしまいかねないからな・・・」

「そう、ですか・・・」

「そうだ、もう一度咸卦法をやつて見せてくれないか？」

「わ、分かりました」

俺はタカミチ君の咸卦法をじつと見つめる。

「左手に魔力・・・右手に気・・・」バチッ

ふむ・・・なるほど・・・

「タカミチ君、今を見る限り、込める魔力よりも気の量が多い。」

まずは、二つを均一にすることを考えてみるといい。俺が見ていてあげるからもう一度」

「はっはいっ。左手に魔力・・・右手に気・・・」

「そこで合成の前にストップだ。少し、気の量が多い・・・ああこんどは下げ過ぎだ・・・そう、そのくらい。しばらくその状態を維持してみる・・・量を体に覚えさせるんだ」

そして、大体10分くらいそのままでいさせた。

「よし、そろそろいいだろう。じゃあ次は合成させるわけだが、そのあたりに関してはアドバイスができない。後は君の努力次第だ・・・試しにそのまま合成させてみる」

「はい！」ボウ・・・バチィ

「ん？少し成功したみたいだな・・・頑張れよ」

「はい！ありがとうございます」

「タカミチ君・・・君は器用なほうじゃない・・・だから、一つの事を極限まで極めてみる。そうすれば、ガトウを超えられるはずだ」

「はい！..」

そして、タカミチ君は去っていった。

「ん・・・今日は陽気がいいからな・・・眠くなってきた」

「ん、じゃあ寝よ・・・」

「そうだな・・・じゃあ・・・お休み・・・」

「うん・・・」

そして俺の意識は沈んでいった。

そのあとは、引き続き完全なる世界の残党を片っ端から片付けていった。

そして、情報の入っていた全ての拠点をつぶした。

「とりあえず、ここで最後だな・・・」

「ああ・・・疲れたぜ・・・」

さすがにみんな疲れたようだ。

「お疲れ様でした。しかし、これで本当に紅き翼も解散ですか・・・」

「そうだな・・・でも、二度と会えないわけじゃない」

「そうじゃの・・・ワシは魔法世界でのんびりと隠居するとしようかの」

「俺はいったん故郷に帰るぜ」

「俺は呪術協会に行つて色々やることがある」

「俺は、もう少しタカミチ君と調査を続けるさ」

「俺はまた、紛争地域とかを回つて支援をしようか」

「じゃあ、これで、紅き翼は解散だ!!」

そして、また各々別の道を歩き始めた。アスナはガトウに預けた。

そのあとも、皆とは、時折連絡を取り合っていた。詠春の結婚式に参加したり、娘の木乃香ちゃんが生れたときにも見に行った。ゼクトは魔法世界でのんびり暮らしていた。ラカンは・・・よくわからない。

――数年後――

ナギが公式発表で死亡したという話を聞いた。あいつがそう簡単に死ぬはずがないから、どこかで生きてはいるだろうが・・・二番目のアーウェルクスと相打ちになってどこかにアリカ様と一緒に封印でもされているのかもしれない。

――さらに数年後――

完全なる世界の残党が見つかった、という連絡がガトウから入ったため、俺は急いで向かっている。ガトウとタカミチ君が先行しているらしいが、アスナを守りながら戦うのは二人だけではさすがに厳

しいだろう。

「無事でいてくれよ!!」

俺が到着すると、数人の魔法使いが、魔族と交戦していた。ッ!!
一人の女性の後ろから魔族がせまっていた。

「させるか!!!」

俺は、魔力弾を放ち、魔族を還す。

「大丈夫か!？」

「あ、あなたは!!?」

「俺はトーマ・ミグラシオン。まあ「無に帰す者」なんて呼ばれている。遅れて済まない・・・状況は?」

「御覧の通り、現在、魔族と交戦中です。幸いまだ死者は出ていませんが、かなり不利です。数が多すぎます。ここから数百メートルほど離れたところで、ガトウ氏が奮戦しておりますが、防戦を強いられています。このままでは・・・」

そうか、ここでガトウが・・・

「了解した。魔力弾の一斉掃射であらかたかたずける。リリィ!」

「うん」

「くうッ！！ハア、ハア、ハア・・・こりゃマズイな・・・ゴフッ」

「師匠！！」

「ガトウさん！！」

「ガトウ！！タカミチ君！！アスナ！！」

最大速度で飛行していると、3人を見つけた。

ガトウは腹部を負傷している・・・あの出血量はまずいぞ。

「「トーマ（さん）！！」」

「済まない、遅くなった・・・」

「悪魔・・・俺の仲間を傷つけた罪は重いぞ？」

「アアッ！？テメエミタイニヒヨロイノニナニガデキルッテンダ？」

「少なくとも、貴様を葬るくらいはできる」

「ヤレルモンナラヤッテミナア！！」

悪魔は一直線に俺めがけて突っ込んでくる。スピードはあるが・・・それだけだ！！

「ディバイドゼロ・・・」

「グアアアアアアアアア・・・！！！」

悪魔は断末魔の叫び声をあげながら消滅した。あっけない・・・

「ぐ・・・う」

「ガトウ！！」

そんな、のんびりしてる場合じゃない！！・・・ッ！出血がひどい・・・これ以上敵がないのが幸いだが・・・傷は深いが・・・治せないほどじゃないか

「リリイ、治癒魔法を！！」

「うん」

「聖なる風・・・傷つきし者を癒せ——」

ガトウの顔色が少し良くなる。出血も止まったようだ・・・危なかった・・・俺の到着があと少し遅れていたら、助からなかったかもしれない・・・

「よかった・・・よかったよ・・・ガトーさん・・・ぐすっ」

！！・・・まさかあのアスナが涙を流すとはな・・・これをきつかけにもつと感情が芽生えてくれればいいのだが・・・

「トーマ・・・」

アスナが涙を拭きながら俺に声をかける。

「どうした？」

「私・・・強くなりたい・・・守られてるだけはもういや・・・私のせいで傷つく人をもう見たくないから・・・だから！！こんどは、私が誰かを守れるように！！」

もう、言っても聞かないか、これは・・・

「分かった。これからは俺がアスナの面倒を見よう・・・今まで誰かを鍛えたことなんてないから、どこまで俺にやれるかは分からないが・・・やれるだけはやってみよう。どんなに厳しくても、アスナなら乗り越えられるだろう」

「やる！！やって見せる！！」

「ああ、その意気だ」

「その意気だよ、アスナ」

そして、アスナの修行を見ることになった。ガトウは、傷は癒えたが、もうそこまでの肉体労働はできないらしく、クルトに頼まれて調査などをするらしい。

1、2年くらいたったところには、アスナもかなり強くなった。咸卦法を元から使えていたことが大きなアドバンテージになったのだろう。アスナは仮契約しようと言ってきたが、アスナがもう少し大き

くなつたらと、ひとまずは保留。もう、俺に教えられることはない
ので、アスナを学校に行かせることにした。そこで、タカミチを頼
って麻帆良学園に来ている。

ーコン、コンー

「誰じゃ？入れ」

「はじめまして、私はトーマ・ミグラシオンと申します。このたび
は、学園長殿にお願いがあつて参りました」

「ふおっ！あの「無に帰す者」殿かの？して、何の用じやろうか？」

「はい、この子・・・アスナというのですが、学校に通わせてあげ
たいのす」

「ふおっふおっふお、なるほどの、構わんぞい」

「ありがとうございます。名前は、神楽坂明日菜、後見人は私でお
願います」

「了解した。では、少々お待ちくだされ」

そう言つて学園長はどこかに電話をかける。少しすると、タカミチ
と思しき男性が入ってきた。

「失礼します。って、トーマさん！！お久しぶりです。アスナちゃ
んも」

「ああ、久しぶりだな、というか・・・お前今何歳だ？どう考えて

も実年齢より老けて見えるんだが？」

「ああ、そのことですか・・・実は今、ある人のところで修業を付けてもらっているんですが、その場所が魔法球の中で、使える時間はほとんどその中にいるので・・・」

「なるほどな・・・ああ、そんなことより、アスナを学校に通わせるんだが、俺は少し行くところがある。リリィは先に向かわせているが、アスナの面倒をみてやてないんだ。というわけで、アスナをよろしく頼む」

「そういうことでしたら、任せてください」

「ふおっふおっふお、話はまとまったかの？では、さっそく編入と制服の手配をしなければの」

「そのあたりもタカミチがたのむ」

「・・・分かりました」

それから、いろいろ準備をして、そろそろ出発する。

「じゃあ、アスナ・・・元気でやれよ。こんどお土産でも持って会いにくるよ」

「うん・・・行つてらっしゃい」

「ああ、行つてきます」

そうして俺は出発した。ウェールズに向けて・・・

S
i
d
e

o
u
t

第七話 怪我の功名 明日菜の決意（後書き）

今回もグダグダ・・・ガトウを生かし、アスナの記憶を封印しました。

ハッピーエンドが大好きなので・・・

でも、ガトウはこの先ほとんどでてこないから変わんないんですけどね～

今回も読んでいただきありがとうございます。

では、誤字脱字指摘、アドバイス、感想お待ちしています。

第八話 ネギ↓NEGIE アルファベットにすると強そうに見えるのはなんだけ

2万PV突破です！！読んでいただいている読者の方々に最大限の感謝を！！

今回は、遂にネギ君が登場します！！

さて、どうなるのかな？かなり無理やりな所もありますが、気にしないで頂けると嬉しいです。

では、第8話始まります。

第八話 ネギ↓NEGI アルファベットにすると強そうに見えるのはなんだから

トーマside

日本を出発して凡そ半日漸くイギリスに到着した。

飛行機の中だと全くやる事がなくて、正直退屈だった。リリィはずっと気持ちよさそうに寝息を立てていたが・・・あの寝顔は、俺の中で永久保存だ。

「さて、ここからウェールズまでか・・・まだ少し時間がかかるな・・・人気のないところで転移魔法でもつかうか・・・」

「そうだね。まずはまちからでしょう？」

とりあえず、町から出ることにした。ちなみに、今の会話の間は認識阻害をかけていたので、周りの人にはおそらく世間話にしか聞こえていないだろう。

——さらに数時間後——

漸くウェールズの、ナギと初めて出会った場所へ来た。

俺がウェールズまでやってきたのは、ナギとアリカ様の息子であるネギくんに出会ったため、そして、元老院の生き残りがまったくだらないことを画策していると、ガトウやクルトから知らせが入ったためである。

これが、世界の修正力という奴なのか・・・
かつての老害どもは、エクリプスゼロによってほとんど死んでいるはずだから、悪魔による襲撃事件はないと踏んでいたんだが・・・

ひとまず、メルディアナ魔法学校へ行つて、ネカネの里帰りにどうこうする手はずになっている。ちなみに、メルディアナ魔法学校には何度か訪れたことがあり、その際にネカネとも知り合った。その際には、少し魔力運用について教えた。

先に学園長に挨拶をした後、しばらく校内をうろついていた。すると、俺のファンクラブに入っているという人に、サインをねだられたりしたため、手首が痛い。そんなことをしていると、漸くネカネが来た。

「久しぶりだな、ネカネ」

「はい！トーマさんもお元気そうだなによりです」

「久しぶり、ネカネ」

「リリイさんもお久しぶりです」

「挨拶はこのくらいにして、そろそろ行こうか？荷物持つよ」

「あ、ありがとうございます」

そして俺とリリイは、ネカネの案内でネギくんの居る所へ出発した。バスを降りて、少し歩くと、ネカネがふと呟いた。

「あれは・・・？」

山の向こうに黒い大群が見えた。
ツー！まさか・・・

「ネカネ、リリイ！！急ぐぞ！！何かすごく嫌な予感がする・・・」

「うん」

「はい！！」

まさか、ガトウたちから言われてからこんなに早く・・・元老院め・
・

俺たちが村に着くと、村は炎に包まれていた。ちいッ、遅かったか！！

村の人は皆、石になっていた。未来を知っていたところで、生かさないんじゃない意味がない・・・

俺はどうして、肝心なところで役に立たない・・・今は悔んでいても仕方がない。いま俺にできることは、無事な人の確認と、救出だ！！

すると、俺が目を見離したときにネカネが走って行ってしまふ。

「おい！！ネカネ！！どこへ行く！？今一人になるのは危険だ！」

「ネカネ！！」

リリイも声を張り上げるが、ネカネは止まらない。くそっ！！

「リリイ、行くぞ!!」

「うん」

俺はネカネの後を追った。
すぐにネカネには追い付いた。

「どうした、ネカネ？」

「ネギを探しているんです!!」

そうか、ネカネにとって、ネギ君は弟のような存在だからな・・・
取り乱すのも無理はないか・・・
しかし、この状況では・・・

と、その時、一筋の閃光が伸びる。

この懐かしい魔力は・・・ナギか!!

「ネカネ!おそらくあつちにネギ君はいる!!急ぐぞ!」

「はい!!」

俺たちは走るスピードを上げた。

先ほど閃光が走った場所へ向かっていると、赤毛のナギにそっくりな髪型をした小さな少年が視界に入る。しかも、悪魔―それも爵位級とみられる―と相対していた。すると、悪魔の口から光が発せられる。石化魔法か!!

「させん!!ディバイド!!」

ネギ君とその悪魔の間に魔法陣が展開され、放たれた光線が霧散する。

「大丈夫か？少年？」

「あ……え……」

いきなりの事に頭がうまく回っていないようだ。
と、そんなことよりも――

「とりあえず、今はお帰りいただくか……」

そういうと同時に、俺はディバイダーの大型ナイフで悪魔を一閃する。すると、異形の者は霞のように消えていった。紅き翼のバグキヤラどもとはば毎日戦闘してたんだ……この程度の的には負けん。

すると、後ろから声がかかる。

「よう、トーマ……久しぶりだな」

「ああ、6年ぶりくらいかと、再会を喜ぶたいが、お前には時間がないんじゃないか？その体も……」

「やっぱ、トーマにや分かつちまうか……んじゃ、用事を済ませるか」

そういうと、ナギは後ろにいた自分と同じ赤毛の少年の前に立つ。

「そうか……お前が……ネギか……大きくなったな。お、そ

うだ・・・お前にこの杖をやるう。俺の形見だ・・・」

「お、父さん？・・・うわ」

ネギ君の小さな体には重すぎたのか、よろめいている。

「ハハハ、重すぎたか？・・・悪いな・・・お前には何一つしてやれなくて・・・こんなこと言えた義理じゃねえが・・・元気に育て・・・幸せにな！それと、トーマ・・・済まないが、こいつの面倒を見てやつちやくねえか？他のやつには頼めないんだ」

「ああ、分かった。あの子が、道を踏み外さないように・・・自分の足で歩いていけるように・・・俺がちゃんと面倒見てやる・・・まあ、あの子はお前と違って利口そうだ。その分ある意味では大変かもしれない・・・だが、いつか必ず、帰ってこい。アリカ様も一緒に・・・俺たちは、ずっと親友だ」

「ああ、ありがとう。じゃあ、またな・・・トーマ」

「ああ、また・・・ナギ」

「ネギ！！元気だな！！」

そういうと、ナギは雪の降る空へ消えていった。

「お父さああああああああん！！」

ネギ君はずっと泣き続けている。そんなネギ君を、ネカネがやさしく抱きしめる。

「少年・・・いや、ネギ・・・強くなりたいか？大切な人を守れる力がほしいか？」

そう問いかけると、ネギ君はしつかりとした意志を持った目でこちらを見据える。やはりナギの息子だな・・・

「はい！！力がほしいです！！お父さんみたいに、みんなをたすけられるように！！」

「そうか・・・だが、全ての人を救う道は、いつか自分の身すら滅ぼしかねない。ナギですらそんなことはできない。人は、自分にとって一番守りたい人ができたとき、強くなれるものだ。君にとって一番大切な人を、見つけられるといいな・・・」

「お父さんでも、できないの？ヒーローなのに？」

「ネギ君には少し難しいと思うが、誰かを救うということは、また、誰かを救わないというのと同じ意味なんだよ。ナギは、あの戦争の中、守りたい人ができた後、それまでとは比べ物にならないくらい強くなった。君には力がある。しかし、力はただ力ではない。君なら、その意味も、いつかわかるようになるさ」

ネギ君は、納得がいったような、そうでないような、微妙な顔をしていた。・・・まだ早かったかな？

「おっと、自己紹介がまだだったね・・・俺はトーマ。よろしく。こっちはリリイ。俺の一番大切な人だ」

「よ・・・よろしくね？ネギ君／＼／」

リリイが顔を真っ赤にしている。本当の事言っただけなんだが・・・

「はい！よろしくおねがいます！」

「いい返事だ」

そのあとネギ君は疲れたのか、緊張が切れて、ホッとしたのか、眠ってしまった。俺は、石化した村人たちを魔法学院に転送したり、村の消火をしたりと、あわただしく動き回った。スタン老は、俺がいたせいなのか分からないが、俺が到着する前に石化されてしまったいた。

そして、その後ネギ君がメルディアナに入っただ後も、ネギ君に、一般常識や、ちよつとした体術、それと、魔力運用の指導をした。魔力のコントロールはうまくなっただが、なぜかくしゃみで武装解除だけは治らなかった・・・不思議だ・・・ギャグ補正なるものなのだろうか？まあ、原作よりはましだろう・・・

そして、今日はネギ君の魔法学校卒業式だ。

「卒業証書授与―この七年間よくがんばってきた。だが、これからの修行が本番だ。気を抜くでないぞ？・・・ネギ・スプリングフィールド君！」

「ハイ！」

そのあと順調に卒業式は進んでいった。

そして、今はアーニヤ（ネギと一緒に少し教えていた。ちなみに、俺のファンクラブに入っていたらしく、サインをねだられた。ちなみにリリイのものにも入っていたらしい）とネカネ、俺、リリイと

一緒に歩いている。

すると、アーニヤが、

「ネギ、なんて書いてあった？私はロンドンで占い師よ」

「修行の地はどこだったの？」

「今浮かび上がるところ」

俺たちはみんなでネギの卒業証書を覗き込む。

「お・・・」

「どう？」

「えーと・・・」

そこに浮かび上がったのは――A T E A C H E R I N J A P A
N――

「日本で――先生をすること」

「「ええー――――――――つ！？」」

ネギとアーニヤとネカネが叫び声を上げるや否や走り出す。
俺たち2人は、そのあとを追う。

「こ、校長、「先生」ってどういうことですか！？」

「ほう……先生」か……」

いや、冷静すぎだろう校長……。妖しすぎる。まあ、そうでなければメガロだろうからまだましではある。

「何かのマチガイではないのですか？10歳で先生など無理です！」

「そうよ！ネギったら、トーマさんに色々教えてもらってたけどそれでもまだボケだし！」

そう、魔法に関する呑み込みは異様に早いのに、一般常識は半分程度しか覚えられなかったのだ……

「しかし、卒業証書にそう書いてあるのなら、決まったことじゃ。立派な魔法使いになるには、修行をがんばるしかないのう」

「ああっ」

「あ、お姉ちゃん！」

ネカネが倒れる。それをアーニヤとネギがあわてて支える。

「ふむ……。安心せいー修業先の学園長はワシの友人じゃからの。まあ、頑張りなさい」

あの学園長はいたずら好きで有名だがな……。大抵の事は学園長がといえは納得されてしまうくらいにはな……

「ハイ！わかりました！」

「そうだ・・・俺も君の補佐として付いていくことになっているからな、何か困ったことがあれば頼ってくれ。あんまり頼り過ぎてもダメだぞ?」

「はい」

「トーマさんがいるなら少しは安心ね」

「トーマさん!!!こいつの手綱をしっかりと握っててね!目を離すと何をしてくるか!」

「分かってるよ」

そして、俺とネギ、リリイは、日本、麻帆良学園に向けて旅立った。さて、アスナ、元気にしてるかな?あつたら怒られそうだ・・・

S i d e o u t

第八話 ネギ↓NEGIE アルファベットにすると強そうに見えるのはなんでだ

今回は遂に原作に入ります。

アスナが記憶を失ってないし、タカミチを好きじゃないから大変です。

頑張っていきたいと思いますので、これからも応援お願いいたします！！

では、誤字脱字指摘、感想、アドバイスを心よりお待ちしております！！

第九話 胃が持つかな・・・b y トー マ そして再会（前書き）

ようやく原作突入です！！

うまくかけたかは分かりませんが・・・楽しんでいただければ幸いです。

では！！第九話始まります。

第九話 胃が持つかな・・・byトーマ そして再会

トーマside

日本について早速だが・・・ネギ君がいなくなった。

トイレに行くところからすこし待っていてくれと言ったはずなのに、帰ってきたときにはいなかった。リリイは、飲み物を買に行っていたらしい・・・

なぜだ・・・？

まあ、おそらく一人で勝手に麻帆良へ向かったのだろう・・・あれ程人の言うことはちゃんと聞けと、教えたのになあ・・・麻帆良であつたら・・・ふふふ・・・

Side out

ネギside

ブルッ！！

な・・・なんか今背筋がゾクツつと・・・き・・・気のせいだよね？

僕は日本について、トーマさんと、リリイさんがどこかへ行ってしまったので、先に麻帆良へ出発した。

電車の中は大変だった。あんなにいっぱい人がいるなんて・・・

電車から降りるとすごい光景が広がっていた。

たくさんの人が全力で走っていたんだ。

日本の学校ってこんな感じなんだあ・・・

「ちこく―」

ふと声が聞こえたので、時計をしてみる。

「わ、いけない。僕も遅刻する時間だ。初日から遅刻したらまずいぞ！」

トーマさんに修業を付けてもらっていたので、足の速さには少し自身があるけど・・・時間を考えると、普通に走ってたら間に合わないかも・・・

「急ぐぞー!!」

僕は風で体を少し強化して走り出した。

くアスナsideく

「やばい、やばい!!今日は早く出なきゃいけなかったのに!!」

学園長先生から新任の先生の迎えを頼まれてたのに!まあ、多分ナギの息子だと思う。今年卒業だって、トーマから手紙が来てたし。

「それにしてもアスナ、足速いな。うちこれやのに」

「まあ、昔からトーマに鍛えてもらってたし」

「トーマさんてあの・・・いつも言ってる、アスナの好きな人やろ?」

「ぶふう!!あ・・・ち・・・違っわよ!!」

ト・・・トーマは・・・ああ、もう!!

とそんな事をしていると、急に風が吹いた。
隣を見ると・・・ナギそっくりの赤毛の少年が並走していた。

「あのー・・・あなた、失恋の相が出てますよ?」

「え?・・・な・・・し・・・しっ・・・って・・・な・・・な
んだと!?こんガキヤー!!」

いきなりとんでもなく失礼なことを言われた。
し・・・失恋て・・・うう・・・

「うわああああ!?!」

「い、いえ・・・あの、好きな人とかって話が出ていたので・・・
かなりどぎつい相が・・・」

「あんたねえ!!この・・・」

「ほらほら、アスナ・・・とりあえずその辺にしておけ」

そこに、あの人の声が聞こえた。私が一番・・・

「久しぶりだな・・・アスナ。大きくなったな・・・明るくなった
みたいだし・・・何より、美人になった。木乃香ちゃんも、大きく、
綺麗になったね・・・君の母君にそっくりだ」

びっびびび美人って!!そんなこと、いきなり!!?!

「あれ？うち、お会いしたことありましたっけ？」

「うん？ああ、君はまだ赤ん坊だったからね。覚えていなくても仕方がないさ」

「へえ」

「トーマさん！！」

いきなり、ネギがトーマを呼ぶ。そういえば知り合いつていうか、いろいろ教えてたつていつてたっけ？

「さて、ネギ君？君はいつたい何をしていたんだ？しかも、勝手にいなくなるし・・・」

トーマの後ろに般若の影が見える・・・

ネギとかいうナギの子供も何かを感じ取っているようで、少しおびえ気味だ。

リリイはなぜかにここにこしてるけど・・・

「いついえ！！あの・・・トーマさんたちがいなくなっちゃったので・・・あと、占いの結果を教えたら・・・いきなり怒られて」

「俺はトイレに行くと言っておいたろう・・・で？なんていったんだ？」

「どぎつい、失恋の相がでていると・・・ひい！！」

トーマが切れてる・・・ここは、触らぬ神にたたりなしね・・・

「ネギ君・・・俺が君に今まで教えてきた事は無駄だったようだね・・・そういうのは、大きなお世話っていうんだよ。まったく・・・こういうことがないように今までみつちりと教育してきたというのに・・・君は半分も理解していなかったようだしな」

「うう……すみません」

「謝る相手が違うだろう!!それとも何か?また∞耐久したいか?」

「ひい！！それだけ勘弁してください！！！！！！！！」

い・・・・いつたいどんなのよ？ ∞耐久つて・・・

「あ、あの……」

「何よ？」

「すみませんでした」

う・・・ナギと同じ顔でそんな素直に謝られると・・・すっごい違和感

「い……いいわ別に。でも、もうこんなことしないようにね？」

「はっはい!!」

10歳の子供らしい笑顔を浮かべて返事をするネギ……

「よろしい。では、ネギ君・・・これから毎日教師としての仕事が終わったら、俺のところに来るように。今まで以上にみっちり、一般常識をたたきこんであげよう・・・」

フフフとかトーマが怖い笑いを上げる・・・こっちまで寒気が

「って、先生？君が先生なん？」

「そうだよ。このかくん。彼が新任の先生だ。お久しぶりでーす。ネギ君！ー」

「ほええー」

そりや驚くわよね・・・数えて10歳、つまり、まだ9歳なわけだし。労働基準法完全無視だけど・・・まあ、麻帆良だし・・・あの学園長先生だし・・・って、今の声は・・・

「ひさしぶり、タカミチ！！」

タカミチが上から手を振ってる。

「おはようございまーす」

「久しぶりだな、タカミチ。それと、おはよう」

「麻帆裸学園へようこそ、「ネギ先生」」

「ごほん！では、あらためまして、このたび麻帆良学園で英語の教師をすることになりました。ネギ・スプリングフィールドです」

ナギとは似ても似つかない礼儀正しさ・・・（失礼なのか、礼儀正しいのかはつきりしなさいよ・・・）姉さまにも似てないわね・・・

「彼は頭がいいんだ。安心したまえ。それと、今日から僕に代わって2-Aの担任になってくれるそうだよ。僕は出張が多いからね」

いや、頭がいい人がいい教師とは限らないわよ？タカミチ・・・それに、担任は無理じゃない？

「私は、明日菜。神楽坂明日菜よ」

「うちは、近衛木乃香いうんよ。このかってよんでな？」

「自己紹介もすんだみたいだし、そろそろ・・・」

トーマが声をかけた瞬間

「ハ・・・ハ・・・ハクション！！！！！！」

ぶわっ！！！！そんな擬音が聞こえた気がする。そして、私の服がはじけ飛ぶ・・・なんでくしゃみで武装解除するのよ！！！！？？

「ねえぎいくうん・・・？一般常識といっしょにみつつつつちりと、鍛えてあげるから・・・覚悟しておくように・・・」

黒トーマ再臨・・・

Side out

トーマside

一応ネギ君に説教をした後、俺たちは学園長室にやってきた。相変わらずおかしい頭をしている。分断できないかな・・・

「（ブルツ）な・・・何やら寒気がしたんじゃが・・・」

変に勘が鋭いな・・・

「ごほん・・・よく来たの、ネギ・スプリングフィールド君。修行のために日本で先生とは、大変な課題をもうたのう」

「は、はい。よろしくおねがいします」

本来ならば子供に教師が務まるはずはないが・・・まあ、メガロに送られるよりはまだましだろう。再編された元老院も、生き残った議員の息のかかったやつらで構成されたらしいしな・・・まあ、クルトはうまく潜り込んで、色々と画策しているようだが・・・

「まずは、教育実習とゆーことになるかのう」

「はあ」

「今日から3月までじゃ」

正直果てしなく不安だが、俺の胃が持てばいいが・・・

「ところで、ネギ君には彼女はおるのか？どーじゃな？うちの孫娘このかなぞ」

「ややわーじいちゃん」ガスッ

ざまあ・・・最近俺のキャラが壊れてきている気がする・・・

「ネギ君・・・この修行はおそらく大変じゃぞ？だめだったら故郷くにに帰らねばならん。二度チャンスはないが・・・その覚悟はあるのじゃな？」

ふん・・・無理にでも通す癖になにを言っているのやら・・・まあ、大丈夫なように俺がある程度教育してきたんだ・・・ダメなら・・・フッフ

「は、はい！やります！やらせてください！」

「・・・うむ、わかった。では、今日から早速やつれもらおうかの？指導教員のしずな先生を紹介しよう」しずな君

「はい」

その声とともに、一人の女性が入ってくる。・・・大きいな（ゲシッ）・・・ッッ！！痛いよ・・・リリィ・・・ネギ君は胸に突っ込んでるし・・・わざとやってないだろうな？

「あら、ごめんなさい」

「わ・・・」

「——分からないことがあつたら彼女に聞くといい」

「よろしくね」

「あ、ハイ・・・」

いつまで埋まっている気だ君は・・・

「そうそう、もうひとつ」

こんどはいったい何をするつもりだ？この狸爺は・・・

「このか、アスナちゃん、しばらくネギ君をお前たちの部屋に泊めてもらえんかの・・・まだ住むとこ決まったらんのじゃよ」

「いやです。私はガキンチョが大嫌いなんです・・・」

「まーまーアスナ、この子かわえーよー」

いや・・・そんな理由・・・まあ、俺のところはリリィと二人でいっぱいだしな・・・

「仲良くしなさい」

「えー」

はあ、仕方がない・・・

「アスナ、つらくなったら俺のところへ来い。このかちゃんもよかつたら・・・」

「そうじゃ、そうじゃ・・・お主が麻帆良にいる間に使っておった部屋なんじゃが、何年も使っておらんかったし、契約切れておるぞ？」

「な・・・」

しまった・・・ネギ君の面倒に忙しくてそっちの事をすっかり忘れていた！！

「そこでじゃが・・・リリイ君に中等部女子寮の管理人を頼みたいんじゃないよ・・・幸い二人くらいは入れるスペースがあるのでな・・・どうじゃ？」

くついやな笑みを浮かべて人の足元見やがって・・・

「いや、さすがにまずいでしょう！！女子寮ですよ？俺男ですよ？問題が・・・」

「トーマならいいんじゃない？それに、そこだったら私も・・・会いに行きやすいし・・・」

「そやねー。トーマさん、イケメンさんやし・・・うちの学校の子なら逆に喜ぶんとちゃう？」

くつ・・・いやしかし、さすがに女子寮は・・・

「いいよ。管理人さんやるよ？」

「リ・・・リリイ！？」

はあ、もう逃げ場はないか・・・

「ふおっふおっふお、それでは決まりじゃの。ではよろしく頼むぞ

い？それと、トーマ殿には、学園広域指導員と、2 - Aの副担任もお願いしたいのじゃが・・・」

こ・・・この爺！！？なんかアスナがきらきらした目でじーと見てくる。い・・・いったい何だ？ああ、ちなみに教員免許は問題ない。大戦が終わってから色々あったとはいえ、20年もあったんだ・・・麻帆良大を卒業してすっかり取った。戸籍はなぜかあった・・・おそらくあの女神さまがなんとかしてくれたんだろう・・・

「はあ、了解しました。さすがに何も仕事をしないわけにもいきませんし・・・『夜の警備のほうも別料金でやりますか？』」

「ふおっふお、よろしく頼むぞい。『ふむ・・・では・・・・・・・・・・・・円はどうじゃ？』」

「はい『それだけいただければ問題ありません。それに、夜の警備をしている魔法生徒に知り合いがいるのでね』」

はあ、これから大変になりそうだ・・・

現在、教室に向かっている。ちなみにアスナとこのかちゃんは先に教室へ向かった。

あ、ネギのバカ・・・なんで魔法障壁切ってないんだ・・・はあ・・・

『ネギ』

「うひゃい!!?」

「どうかしましたか?ネギ先生」

しずな先生が訝しんでいる。胃が痛い。まあ、ネギ君相手に念話を使ったのは初めてだから仕方がな言っちゃ仕方がないが・・・

『な、なんですか?トーマさん!?』

『魔法障壁・・・日常じゃ必要ないだろ・・・きつておけ阿呆』

『あ・・・』

あ・・・じゃないだろうまったく・・・どうしてあれほど一般常識を教え込んだのに覚えてないんだ!!

はあ、これからどうなる事やら・・・

S i d e o u t

第九話 胃が持つかな・・・byトーマ そして再会（後書き）

ええと、龍賀様、メガネ様、なお様感想ありがとうございます。

次回・・・ようやく彼女の登場です！！

トーマが入って行ったあとの話とか考えて少し2828してますww
読んでくださった方々に最大限の感謝を。そして、次回もお楽しみに！！

誤字脱字指摘、感想、アドバイスをお待ちしております。

第十話 正義の魔法使いね・・・下らん（前書き）

今回は色々と端折りました。理由はある程度察していただけるかと思えます。

では、第十話、始まります。

第十話 正義の魔法使いね・・・下らん

（ネギside）

ボクはいま、2-Aの教室の入り口に立っている。

少し仲をのぞいてみると、たくさんの人たちがそれぞれ色々なことをやっていた。

これが・・・ボクがこれから教えることになる人たちか・・・

「そうだ、クラス名簿！」

ボクはクラス名簿を見える。

「げっ・・・い、いっぱい・・・タカミチからの書き込みがある」

「早くみんなの顔と名前、覚えられるといいわね」

「あうつ・・・」

「ネギ君・・・お前は頭だけはいいいんだ・・・そのくらいはできるだろう」

あ、頭だけって・・・反論したら何されるかわからないから、黙っておこう。

うう・・・こんなたくさんの年上の女の人たちに教えるのか・・・？
本当にボク、こんな異国の地で先生なんてできるんだろうか・・・
お姉ちゃん、アーニヤ・・・ボク、大丈夫かな？そこで、お姉ちゃんとアーニヤの声援を思い出す。

・・・よしっ！

コンコン

これから始まるんだ！

S i d e o u t

トーマside

ネギ君はようやく決心を決めたようで、教室のドアに手をかけ、ゆつくりと開く。

そして、中に入り・・・上から落ちてきた黒板消しをあわててよける。

「うわぁ！！うわわわわあわわ・・・！！つつ！！あぶう！！」

おお、さすが∞耐久弾幕回避（10×2[^]x）を繰り返しただけの事はある。ネギ君は次々にトラップを回避していく。まさかこんなところで役に立つとはな・・・ネギ君・・・その程度のトラップであわてるとは情けない・・・

—— おおおおおお・・・ ——

まあ、新任の教師がトラップを回避したんだ、さすがに驚くか・・・

「えっ・・・」「あ・・・あれ？」

うん？

「えーーーーー！？子供！？」

「君、大丈夫！？」

「ごめんでつきり新任の先生かと思って！」

うるさい・・・いくら子供だったとはいえ、少し騒ぎ過ぎだ・・・

「いいえ、その子があなた達の新しい先生よ。さ、自己紹介してもらおうかしら」

しずな先生がパンパンと手をたたきながら言う。

「ネギ君」

「は、はい・・・ええと、あ・・・あの・・・ボク・・・ボク・・・」

大丈夫か？ネギ君・・・

「今日からこの学校でまほ・・・英語を教えることになりました。ネギ・スプリングフィールドです。3学期の間だけですけど、よろしく願います」

おい・・・なんで英語と魔法を言い間違えるんだ・・・一文字もあってないだろう！？緊張しすぎだ・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

嵐の前の静けさか？耳栓耳栓と・・・

「キヤアアアアアアアアアアアアアアッ！！かわいい〜」
「？」

「何歳なの〜〜〜！？」

「えう！？その、10歳で・・・」

「どっから来たの！？何人！？」 e t c . e t c .

質問が飛び交う・・・俺の胃は・・・ナデナデ・・・腹をさすっていると、リリイが頭をなでってくれる。ありがとうリリイ・・・

「みんな！！ちょっと静かに！！」

アスナが声を上げる。すると、教室が静まり返った。さすが元お姫様・・・

すると、ネギ君が口を開く。

「あっ！そうでした！え、えっとみなさん・・・い、一度席に着いてください！！」

その声にしぶしぶ席に着く女生徒たち・・・

「実はもう一人、新任の先生がいます！」

「ええ！？そんな情報私にも入ってないよ！？」

そりゃそうだ・・・今日決まったんだから・・・

「では、トーマ先生、リリイさん！！入ってください！！」

声もかかったことだし、行きますか・・・

「じゃあ、行くぞリリイ」

リリィはうんうんと頷く。

ガラガラ・
・
・

「みなさんはじめまして。私はトーマ・ミグラシオンといいます。今日から君たちの副担任をすることになりました。よろしく願います」

「私はリリィ・シュトロゼックだよ。女子寮の寮監をすることになったから、よろしくね」

まあ、無難だが、自己紹介はこんな感じでいいだろう。

一人の女生徒がこちらを凝視している、ああ、エヴァンジェリンか・
・・何か考えているようだか・・まあ放っておいても問題はない
だろう。

[illegible]

ん？急に教室が静かに・・・

「
か
・
・
・
」

か？

「かっ こいいいいい——っつ
（かわいいい——）「……！」

耳があッ！なんて声だ・・・リリイもくらくらしている。
生徒たちが立ち上がるうとしているのを見て止める

「ああ、少し待て・・・質問は後だ。ネギ先生、最初はあなたの授業ですが・・・おそらくこのままでは授業どころではないでしょう。どうです？生徒との親睦を深めるために、質問コーナーにしてみても・・・」

「そうですね・・・では、そうしましょう」

よし、決まりだな・・・あとあとこまごま質問されるよりも、まとめてやってしまったほうが楽でいい・・・

「はいはい！！それならこの、麻帆良パラッチこと、朝倉和美にお任せあれ！！」

「ああ、よろしく頼む」

「えーと、じゃあ、ネギ先生はさっき聞いたし、トーマ先生よろしく！！えーと、まず名前と年齢、身長・体重・血液型それと出身地」

「名前はさつきも言ったが、トーマ・ミグラシオン。年齢は23、身長はたぶん170後半くらい、体重は測ってないから知らん。血液型Aで、出身はドイツだ」

どう見ても日本人の顔じゃないから・・・

不老で年を取らないから・・・見た目の年齢を言っておくほうがいい。

「じゃあ、趣味と、特技は？」

「趣味は読書と、鍛練。それと音楽鑑賞だな・・・結構アニソンとかが好きだ」

「ふむふむ・・・」

「ちなみに俺はあくまで副担任なので、ネギ先生の補佐をする・・・授業をやることはないが・・・分からないことがあれば、気軽に質問してくれて構わない」

「りょうかい。じゃあ、次はそっちの女の子」

「うん。名前は、リリィ・シュトロゼック。年齢はトーマと一緒に身長も体重も測ったことないから・・・血液型はOだよ。趣味は歌を歌うことかな？トーマの好きな歌とかをよく歌ってる。あと、トーマと一緒にいるのが好き」

「ほう？なるほどねえ・・・じゃあ、トーマ先生、このクラスで気になる子はいる？」

「そうだな・・・アスナと、それから・・・龍宮かな？」

「」「」「おおおー」「」」「」」「」」

名前を呼ばれた子たちは、顔を赤くしている。いやいや・・・

「それは、どうして？」

「アスナに関しては、まあ、親代わりだからな・・・今までは色々
と用事があってあまり、面倒を見てやれなかったから、これからは
な」

そう言つてアスナに目くばせする。すると、アスナは笑顔を返して
くれる。本当に明るくなつたな・・・この子は・・・

「あと、龍宮に関しては、昔、旅をしていたころにあつたことがあ
つてな・・・数か月ほど、一緒に旅をしていたんだ」

『マナ、今夜、警備の事で招集がかかるはずだ・・・その時に久し
ぶりに話をしよう』

『ふふ・・・久しぶりだね。わかつたよ、トーマさん』

キーン、コーン、カーン、コーン

「ネギ先生、終了のあいさつを」

「はい。では、今回はこれで終了します。まだ質問があれば、休み
時間にでも来てください。次回からは、授業を始めます」

生徒たちは皆、はいと一様に返事をする。

俺はそのあとは、職員室へ向かい、他の先生方に挨拶をして回つた。
中には魔法先生もいたようで、サインをねだられたりしたが、場所
が場所なので、断つた。

その後も、俺が活動する範囲を把握するために、リリイと一緒に色
々な所を回つた。すると、宮崎が大量の本を抱えて歩いていて、し

かもそのまま階段を降りようとしている。

「おいおい、あぶないなって!？」

案の定宮崎は階段から足を踏み外した。

「おい!？」

さすがにここからじゃ間に合わん!!

俺が下を覗き込むと、アスナがネギをひつつかんで林の中へ入っていく。リリイもあとからやってきた。

おそらく、魔法を使ったことで、秘匿意識があるかどうかを確かめるためだろう。

はあ、まあ・・・宮崎を助けたことはいいことだから、今回は俺からは何も言つつもりはないが・・・とりあえず、様子でも見に行くか・・・

「おい、アス・・・ナ・・・？」

あ、忘れてた。ここでアスナはネギに服を消し飛ばされるんだっただ・・・リリイは俺の目を両手でふさいでいる。

そこにタカミチもやってくる。

「おい、二人とも何やってるんだ?・・・ん？」

アスナは俺の顔を見て、涙目になってる。

「ひう・・・いやああああああ!!!!!!」

その場にアスナの悲鳴が響き渡った。

今、2 - Aの教室に向かっている。その間も、アスナはネギに問い詰められている。時折、こんな往来で言うべきじゃない単語も飛び交っている。

はあ、このままじゃちが明かないな・・・

『アスナ・・・今夜俺の部屋に來い。一つだけ、お願いを聞いてやる』

『ほ、ホント！？約束だからね！？破ったら承知しないわよ！？』

『分かってるよ』

そうして歩いていると、ようやく2 - Aの教室にたどりついた。

———ようこそ？ネギ先生！！トーマ先生！！リリイさん！！———

「あ、忘れてた！！あんたたちの歓迎会やるんだった！！」

「歓迎会か・・・ありがとうな」

「ありがとう」

その後も、リリイとの関係とか、まあ色々と聞かれた。

そして、現在、麻帆良学園中等部女子寮の寮監室・・・アスナが来ている。

「さて、アスナ・・・お願いなんだが、なにがい「バクティオー仮契約して！！」はい？」

「だから仮契約よ！昔仮契約してって言ったら、大きくなったらって言ってたじゃない」

「本気よ。だって、私はずっと・・・トーマが・・・」

「はぁ・・・分かった。どっちが従者になる？」

「トーマが主でいいわよ。私は主人って柄じゃないし・・・そもそも魔法使いじゃないし」

そんなことを言ったら俺も厳密には魔法使いじゃないんだけどな・・・

「分かった・・・じゃあ、魔法陣を引くぞ？リリィ頼んだ」

「うん」

俺とアスナを仮契約魔法陣の光が包む。なんというか・・・不思議な感じだな・・・暖かい・・・

ちゅっ

俺とアスナの唇が重なる・・・やわらかい・・・

そして、輝きが増す。そして1枚のカードが出てくる。絵柄は麻帆良の制服を着たアスナが、黒っぽいやや機械的なリボルバーのついた大剣を持っていた。ツツ!!?これは・・・ディバイダーか!?

「あれ?これってトーマが持ってたのと、少し似てない?」

「ああ・・・おそろくだが・・・これは、ディバイダーだと思う・・・使ってみなければわからないが・・・どんな副作用があるかはわからん・・・むやみに使うのは控えたほうがいいかもしれん。能力はお墨付きではあるが・・・ともかく、一度試してみよう。リリイ、ダイオラ魔法球をもってきてくれ」

「ダイ・・・って!!別荘!?!どこで手に入れたの!?!」

ああ、そのことが・・・

「ラカンに大金を払って頼んでもらったんだよ」

「ああ、ラカンならそういう伝手もありそうだし・・・納得」

「まあ、ともかく中に入るぞ」

「うん」

そっいつて、俺たちは中に入った。

「さて、アスナ―まずはアーティファクトを出してくれ」

「うん。アデアット来たれ!!」

その声とともに、アスナの手に大剣が現れる。形は原作でもあった
エンス・エクソルキザンス
あの、ハマノツルギだ。

「あれ？カードの絵柄と少し違うない？」

「ああ、おそらくだが・・・カードに書かれていたのはリアクト状態のものだ。リアクトの仕方だが、体のどこかを少し切ってくれ」

「ええ！？わ・・・分かったわよ・・・」

やっぱり体に傷をつけるのは少し抵抗があるようだ。

「えい!!リアクト!!」

すると、ドレスと鎧を一緒にしたようなデザインのバリアジャケットの防護服を着て、リボルバーのついたより機械的なデザインの黒っぽい大剣をもった状態になった。剣の柄には、引き金も付いている。

「どうだ？アスナ・・・何かおかしいところはないか？」

「うん・・・だいじょうぶ・・・」

む？アスナの喋り方が・・・しかも目の感じも幼いころのアスナみ

アスナが帰った後、学園長から電話があった。今夜11時に世界樹広場に来てくれとのことだった。おそらく、顔合わせでもするんだろう……

——深夜11時——

「学園長？新しい警備員というのは？」

「ふむ、そろそろ来るころなんじゃが……」

「学園長、来たぞ」

俺は学園長に声をかける。

「おお、よく来てくれたのう。皆、静粛に。彼の事は皆もよく存じていると思う。紅き翼のメンバーにして、最強を誇った“無に帰す者”^{ゼロル}、トーマ・ミグラシオン殿と、“癒しの天使”リリィ・シウトロゼツク嬢じゃ」

学園長の言葉の後、広場が少し騒がしくなる。桜咲は、一番驚いた顔をしているな……大方俺がこのかちゃんを狙う刺客か何かだとも考えていたのだろう。それを見て隣のマナがにやにやしている。まったく……

「先ほど学園長殿から紹介にあずかった、トーマ・ミグラシオンだ。女子中等部2-Aの副担任と、広域指導員、それからこの夜の警備員として皆とともに仕事をすることになる。英雄だとかそんな下らんことに気を使わずに、普通に接してほしい」

俺のくだらないという言葉に反応した正義バカの教師が言葉を発する。

「くだらないとはなんですか！？貴方はだれしもが認める英雄なのです！！我々正義の魔法使いの、目標となるべき人なのですよ！？それを「少し黙れ」っ！？」

「はぁ・・・正義の魔法使い？正義とはなんだ？正義なんて言葉は所詮、自分の行いを正当化するための免罪符にすぎん。正義なんてものはだれでも持つものだし、誰も持つていはしない。お前らにとつて、正義の対義語とはなんだ？」

「それは、悪です！悪を滅ぼすものが正義です！」

ちっ・・・胸糞悪い・・・元老院の洗脳はここまで浸透していると
はな・・・

「違うな・・・正解は、正義に対義語はない、だ・・・正義の反対はまた違った正義・・・悪の反対は善だ。それに、お前らは俺を英雄と呼ぶが、結局は戦争の英雄だ・・・所詮は俺たちも、大量殺戮者であることに変わりはない・・・生きるために人を殺した。自分の力を示すために、力を得るために、仲間のために、大切な人を守るために、人を殺し続けた。そら、殺した人の数が一般の兵よりも多いだけで、大きな違いなんてどこにもありはしないだろう？・・・俺たちは戦争だったから、英雄と呼ばれただけ・・・生きるために、襲ってくる人間を殺した「闇の福音」ダークエヴァンジェルと何が違う？答えてみるよ・・・
・「正義の魔法使い」さん？」

俺の言葉に、周りの者は皆黙る。ちっ・・・こいつらの持つ意志なんて所詮こんなものか・・・俺の言葉を聞いて、俺を睨んでくる阿

呆の中に、何人か、真剣に悩んでいる奴もいる。まあそいつらは及第点か？マナや刹那はどうでもよさそう、というか何を当たり前のことをといった風情。刹那はどっちかというと俺に近い物があるからな・・・大切な人のため・・・という目的を持っているあたり・・・

「正義の意味、もう一度よく考えてみる。・・・それはともかく、学園長？」

「なんじゃね？」

「どうせ、俺の力試してもするつもりだったんだろう？相手はタカミチでいいか？」

「うむ。では、タカミチや・・・」

「はい」

タカミチが前に出る。タカミチの相手をするのも久しぶりだな・・・

「さて、やるからには本気で来い・・・或いはこの身に届くやもしれん・・・」

「はい！！僕も強くなりました。今の僕の力がどのくらいあなたに通用するのか、試させてもらいます！！」

・
そういうとタカミチは咸卦法を行う。ガトウ以上に精度が高いな・・・

「行きます！！」

巨大な大砲のような、拳圧が飛んでくる。

俺はディバイダーを展開し、混ざっている魔力を分断しながら切り裂く。

そして、瞬動を使つて後ろに回り込み、けり飛ばす。虚空瞬動を使いなから、タカミチに迫る。タカミチも、通常の居合い拳を織り交ぜながら、豪殺を放ってくる。

「へえ・・・強くなったな！！当時のガトウよりは強くなったよ！！」

「あなたにつ！そう・・・行ってもらえとつ！！うれしいですよ！！あなた達は、僕の憧れっ・・・ですから！」

まあ、タカミチの力も分かったし、そろそろ少し本気を出すかな・

「——ディバイド・・・ゼロ」

タカミチの豪殺・居合い拳をかき消していく。そして、タカミチに直撃した。

俺はすかさず近づき、タカミチにディバイダーを突き付ける。

「ハハ・・・やっぱり、強いですね・・・トーマさんは・・・」

「まだお前には負けんさ・・・でも、本当に強くなったよタカミチ」

修業は怠ってなかったようだな・・・

「あなた達に一步でも近づきたくて、ずっと努力してきましたから。僕にできる一つの事を極めるために」

フフ・・・俺の言葉もしっかり守ってきたみたいだな・・・

「そこまでじゃー！素晴らしい闘いじゃった。これからよろしく頼むぞい？トーマどの」

「ああ、平和に暮らしている生徒たちに危害が加わらないように、精一杯やるさ」

「では、今夜は侵入者もないみたいじゃし・・・解散！！」

ああ、そうだ・・・マナ・・・

「やあ、久しぶりだねトーマさん」

そこに声がかかる。でかい・・・

「ああ、8年ぶりくらいかな？なんていうか・・・大きくなったな・・・それに、美人になったな・・・あの目つきの悪い小さな子が、こうなるとはね・・・コウキはどうなった？」

「・・・死んだよ。2年前に・・・」

「そうか・・・そうだ、今度なにか御馳走するよ。再会の祝いだ」

「それは、ありがたいね」

「じゃあ、また明日学校でな」

「ああ、約束・・・わすれないでくれよ?」

「分かってるよ、お休み、マナ」

マナは先に帰って行った。俺はリリイと一緒に世界樹に上って麻帆良を見下ろしている。

リリイは穏やかな寝息を立てているが・・・夜も遅いし、仕方がないか。

すると、声がかかった。

「トーマ先生」

「ん? 君は・・・確か」

「はい、2 - A、出席番号10番、絡操茶々丸です」

エヴァンジェリンかな?

「何か用かな?」

「はい。我が主人より伝言を託ってきました。明日、放課後にまたここに来るようにと」

「ふむ、了解した、と君のご主人様には伝えておいてくれ」

「承知いたしました」

そういうと、茶々丸さんはスラスタを噴射して飛んで行った。ガイノイドってすごいな・・・さて、エヴァンジェリン・・・闇の福

音・・・何の用かね？

S
i
d
e

o
u
t

第十話 正義の魔法使いね・・・下らん（後書き）

ええまずは、zero様、メガネ様、カレーパン様、龍賀様！！
感想ありがとうございます。いやゝ遂に話数二桁到達・・・ここ
まで、長かったような、短かったような・・・アスナのアーティフ
アクトに関してですが、型番と名前を募集します！！というか、公
式の仮契約カードにのっとった形で、設定をしていただけるとうれ
しいです。

では、これからも頑張っていきたいと思いますので、応援よろしく
お願いします！！次回はあの金髪少女が！！

誤字脱字指摘、アドバイス、感想をお待ちしております！！

では、次回にてお会いしましょう！！

第十一話 成長（前書き）

タイトル・・・本文に関係あるのかないのか？私にもわかりません
w
w

では、第十一話、始まります。

第十一話 成長

トーマside

次の日、俺は学園長室へ行つて、リリイの授業への同行許可を取つて2-Aの授業へ向かった。ネギ君はそこそこ、まともな授業を展開していた。原作とは違い、アスナがバカではないし、ネギに突っかかる事もないからな。正直、ネギがこんなまともな授業をできると思つていなかったので、内心かなりホッとしている。

放課後になり、マナが俺のところへ来た。

「やあ、トーマさん」

「どうした？マナ」

「いや・・・今日は部活もないしね、やることはないからね」

「・・・じゃあ、何か食べにでも行こうか？」

「フフ・・・あんみつがいいな」

本当に好きなんだな・・・あんみつ。

「了解した・・・リリイ、行くぞ」

「うん」

2-Aの女生徒と話をしていたリリイを呼んで、出かけることにし

た。

その後は、マナのお勧めの店で食事をして、女子寮へ送りどけて別れた。

時間が過ぎて、現在深夜23:30

「ふむ・・・そろそろ行こうか・・・」

「うん」

俺は、昨夜絡繰さんに言われた言伝の通り、世界中へと向かう。到着すると、金色の髪を風になびかせ、人形のような美しい容姿をした幼い少女が仁王立ちしていた。

「よく来たな、ゼロ・ルーラー「無に帰す者」」

「はじめまして、ダーク・エヴァンジェル「闇の福音」 いったいどんな要件かな？」

「ふん、しらじらしい・・・約束をたがえておきながら・・・」

約束？ いやいや、こうして面と向かって会うのは今回が初めてだし・・・苛立っているが、なんだ？

「済まないが、約束・・・というのは？」

「貴様！！忘れたのか！？サウザンドマスターは私の呪いを3年たつたら貴様に行かせるといっておったのだぞ！！」

ナギ・・・お前・・・忘れてたな？

「済まないが、俺はナギからそんな話は一度も聞いたことはないんだが・・・」

「なんだと！？くっ・・・サウザンドマスターめ・・・次に会った時は・・・」

「はあ、呪いといてほしいのか？」

「解けるのか！？」

うおー！？すごい勢いで、エヴァンジェリンは飛びついてくる。珍しく隣でリリイも苦笑している。

「解けないこともない・・・はずだ」

「はず？」

「ああ、理論上は可能だ。まあ、理論というほどのものでもないが・・・お前にかかっている呪いを分断するんだ」
デИБайд

「デИБайд？そっいえば貴様の能力については謎なのだが・・・魔法が消えるとか、黒い本を使うとか、あり得ない数の弾幕を撃ってくるとか、通った後には何も残らないとか・・・」

俺の世間一般でのイメージっていったい・・・とくに最後の・・・

「そうだな・・・ここだとあの狸爺に盗聴されるかもしれん。どこかいいところはないか？」

「ふむ、それならちょうどいい場所がある。あそこなら他社の干渉を受ける心配もない」

なるほど、別荘か・・・

「それでは、行こうか」

別荘にやってきてさっそく、俺の力について説明することになった。デバイダー、EC、リアクター、ゼロ因子について細かく説明した。

説明の途中、エヴァンジェリンはどんどん不機嫌な顔になっていったが・・・なんなんだ？
そして、説明が終了する。

「これが、俺の能力だ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・な」

「ん？」

「ふざけるな！！貴様！なんだその無茶苦茶な能力は！！完全魔法

無効化能力者よりえげつないではないか!!」

「そんなことを俺に言われても困る。ECを作り出したやつに言え。そんなことより、呪いを解かなくていいのか?」

「ああ、そうだったな・・・あまりにとんでもない話で動揺してしまった」

エヴァンジェリンはカリスマ（笑）を手に入れた。

なんか変なテロップが出た気がするが、気のせいだな。

「んじゃ、とくぞ?ああ、学園結界による魔力の抑制術式があるんだがどうする?」

「なに!?ふむ・・・そっちのほうも解いてくれ」

まあ、こいつがなくなっただとところでエヴァンジェリンが一般人を襲うことは絶対にならないから問題はないだろう。

「じゃあ解くぞ・・・」

目に魔力を通してエヴァンジェリンを見る・・・すると、雁字搦めにされた鎖のようなものが見えた。

「あいつ・・・なんつー無茶苦茶な呪い掛けてるんだ・・・魔力に物を言わせて無理やりやったな?」

「む?いったいどうなっているんだ?」

ミングでリミッターは外せる」

「そうか、ならばいいだろう。私も奴らに突っかかってこられたいはないしな」

あいつらの、人のためにという志は確かに立派なものだが、あまりにも盲目的すぎる。自らの正義を他人に押し付けるなど・・・正気の沙汰とは思えん。

「あと、私の事はエヴァでいい。エヴァンジェリンと呼ぶのは面倒だろう?」

「そうかい?じゃあ、そう呼ばせてもらうよ。俺の事も、トーマでいい。ちなみに、俺の基準での魔力ランクは俺がSS+で、エヴァはS+といったところだ。ちなみに俺は自分にリミッターをかけてAAランクまで落としている。エヴァは・・・念のためにBまで落としておこうか?」

「まあ、魔力に関しては日常では使わないからな・・・べつにかまわん」

「了解。それじゃ、リミッターをかけるぞ」

エヴァの腕に文様がでて、すう・・・と消える。

「これで、リミッターはかかった。必要な時があれば『念話で、教えてくれ。俺が【リミッター解除許可】と魔力を込めて言葉にすれば、リミッターは外せる』」

突然の念話に驚いたのか、目を白黒させている。

「『ごうか？なかなか便利なのだな・・・おまえの使う魔法というのは』」

「そんな感じだ。俺は年を取らないし、リリイはリアクトプラグ、生態型リアクターだからな・・・俺と同様年をとらないし、長い付き合いになりそうだ。これからよろしくな、エヴァ」

「よろしくね、エヴァ」

「ああ、よろしく頼むぞ、トーマ、リリイ」

俺たちは友になった。心強い味方ができたものだ・

次の日、朝早く起きたので、ランニングをしようと外に出ると、アスナが部屋から出てきた。

「おはよう、アスナ」

「あ、おはよう、トーマ」

「バイトか？」

「うん、トーマにいつまでも世話になるわけにはいかないし、少しくらいは自分でやりたいから」

「別に俺は構わないんだがな・・・お前がやりたいというのなら、俺は応援するよ」

アスナは、本当に変わったな・・・もうあんなこととは無縁の生活を歩んでほしいものだ。・・・完全なる世界が存在する限り、それは難しい話ではあるが・・・それでもやはり願わずにはいられない。

「じゃあ、行つてきます!!」

「ああ、少し待て。俺もこれからランニングをするんだ。付き合うよ」

「そう?じゃあ、いこう!!」

その後、俺はアスナの新聞配達につきあいながら、走って回った。

その日の授業もつつがなく終わり、俺も数学で別のクラスを臨時で教えることになった。人に教えるのはなかなか難しい物で、うまくできたかは分からないが・・・

放課後、2・Aの教室では、バカレンジャーにネギ君が教えていた。その中にはなぜか、刹那の姿が・・・ああ、アスナが勉強できるから、そこに刹那が入ったのか・・・バカホワイトって・・・いいのか?ばれてるんじゃないか?

「よう、放課後の居残りか?頑張れよ。ネギ君もしっかりな」

少し他愛のない話をして俺は、その場を離れる。刹那がじっと見ていたがなんだったんだろうか？

休日。俺は、リリイを連れて広域指導員として麻帆良を歩いていた。平日の放課後なんかよりも休日のほうが、問題が起きるものだ・・・「やめてください！！」・・・いきなりか・・・

「おい」

「ああ！？んだ、てめえは？引っこんでろよ、俺たちはこの子に用があんだ！！」

不良Aやその他の取り巻きがわめきたてる。まったく・・・こついう輩は・・・

「お？そつちの子かわいいじゃん。どお？俺たちと遊ばない？」

「やだ」

リリイ即答。

「お前ら、リリイに手を出したら・・・殺すぞ？」

俺は、言葉に軽く殺気を込めて言う。

「う．．．ちつ、てめえら！！やっちまえ！」

はあ、これだから自分の力量も、相手の力量も測れないバ力は困るんだ．．．

俺は、隠し持っていた大型ナイフサイズの木刀を取り出して、不良どもの攻撃？をかわしながら、一撃ずつ入れる。

「ふん．．．他愛もないな．．．」

「あ．．．あの、トーマ先生」

ん？誰かと思えば、大河内か．．．あと、和泉に明石か．．．

「大丈夫だったか？どこか怪我は？」

「は、はい！ありがとうございます！」

「そうか、では、気をつけてな．．．君たちはかわいいからな、あ言った輩には特にな」

三人は顔を赤くする。あ．．．またやってしまったか．．．

そして、俺は3人と別れた。

くアキラsideく

今日、夕奈と亜子と買い物に来ていた。すると、いかにもな格好をした不良に囲まれてしまった。そして、亜子が腕を掴まれた。亜子は叫ぶけどやめてくれない。すると、トーマ先生がやってきて、一

瞬であんなに大勢の不良を全員倒してしまった。

「はあ、かつこよかったねえ、トーマ先生」

「うん、すごかった」

「・・・・・・・・」

「どうしたの？アキラ？」

「えっ！？い、いや、なんでもないんだ！」

「ほほう・・・」

「アキラ、もしかして」

「ちつちが!!」

そのあと、二人にいじられた。
だから違うんだ!!

S i d e o u t

トーマside

まあ、あんなことがあった次の日ってのは、やっぱり何か起こるものだ。

職員室で副担任として与えられた仕事を処理していた時・・・

和泉と佐々木がネギに泣きついてきた。

年齢の近いネギのほうが相談がしやすいんだろう。

内容は、ウルスラの生徒が邪魔してきたと・・・そんなかんじだ。

「タカミチがいるだろうが、まあ一応行こうか・・・イレギュラーが起こるとも限らんしな」

それで、外へ出てみたわけだが・・・

雪広とウルスラの生徒が取っ組み合いをしていた。ネギはおたおたしてる。

はあ・・・

「あつ、トーマいいところに」

「神楽坂、学校では一応先生をつける。周りへの示しがつかん」

「え、あ、うん。じゃなくて・・・はい」

「よし。で？　いったいどういう状況だ？　これは」

「ウルスラのセンパイたちがちよっかい出してきた、ネギをもらうとか言い出したの。で、いんちよが切れて、取っ組み合いに」

なるほどね・・・はあ仕方ないな・・・

「ほら・・・女の子が取っ組み合いなんてはしたないぞ？」

ウルスラの生徒と雪広の襟をつかんで引つ張る。

「誰です!!?」

「トーマ先生!!」

「まったく・・・そっちのウルスラの？中学生相手に、大人げないんじゃないか？」

「誰ですか？ここは女子校ですよ？部外者は黙っていてくださいませんか？」

「俺は2-Aの副担任トーマ・ミグラシオンだ。あと、広域学園指導員も兼任してる。これが証明だ」

と、俺はカードを見せる。

「で？反論はあるかい？なければ、この場を立ち去ってくれないか？あと、この件は君たちの担任に報告させていただく」

「う・・・すみませんでした」

「うん。でも、謝る相手が違うんじゃないかい？」

「ごめんなさいね、雪広さん」

「い、いえ、こちらと言いましたわ」

「うん、これで一件落着だね。では、この場は解散!!」

その言葉を聞いて、生徒たちはそれぞれの教室へ戻っていく。

さて・・・

「ネギ君？こういうことがあったら、まず、他の先生に頼るんだ。人に頼ることは悪いことじゃない。君はまだ子供なんだ・・・一人で何でもできるなんて言うのは思いつき上がりも甚だしいよ。迷惑をかけてもいいんだ。一人で勝手に行動して大きな失敗をするよりもよほどいい」

「はい。これからは気をつけます」

ふむ・・・この麻帆良で生活をして少し成長したかな？

「じゃあ、午後の授業もあるし、そろそろ戻ろうか」

「はい！-」

Side out

くアキラsideく

「トーマ先生やっぱっこよかったよね？」

「うん・・・」

「確かにねく頼りになるし、超イケメンだしねく」

本当にカッコよかったな・・・トーマ先生・・・

「アキラ、どうしたん？顔赤くして・・・ああなるほど、トーマせ

ん「亜子!!」むぐう!!」

な、ななななな何を言うのさ!

「どしたの?」

「な、なんでもない!!」

「そ、そう?」

ふう・・・危なかった・・・変なこと言わないでほしいなまったく・・・うう、まだ顔が熱い。

「何かあったん?」

「高等部との場所の取り合い」

「えーまたですかー?」

「みんなやられてるよ」

年上だからって、さすがにあれはひどい

「ネギ君はちょっと情けなかったかな」

「トーマ先生、大人って感じたよね」

・ 10歳の子供と、トーマ先生を比べるのはさすがに酷だと思っな・

その後、みんな着替え終わって、屋上へ出た。すると、また高等部

の人たちがいた。

S i d e o u t

トーマside

あの後、職員室で仕事を再開していたらまた和泉たちが呼びに来た。ネギがとりあえず応対していたが、先ほどのことを考えたのか、俺のほうへやってきた。

「あの、トーマさん・・・手伝ってくれませんか？さすがにボク一人じゃ高校生には・・・」

ふむ・・・ようやく人に頼るようになったな・・・このまま成長していつてくれればいいんだが・・・

「分かった。行こうか、ネギ君」

「はい!!」

俺たちは屋上へ向かった。

「で？今度はいったい何だ？ウルスラの・・・注意がし足りなかったか？」

「いえ、私たちはレクリエーションでバレーをしに、ここに来ただけです」

「では、何故中等部の校舎に？自分たちのほうでやればいいだろう？」

「すでにそちらは使われていたので」

「だがね、これは場所を先に使っていたとか、そんな話以前の問題だ」

「何がですか？」

「君たちは次週のレクリエーションで、2・Aはれっきとした授業だ。コートの使用権限はこちらにある。それに、これは立派な授業妨害だぞ？」

「う……」

「はぁ……高等部の連中は……だがまぁ……このまま帰してもおそらく双方納得しない上に、また繰り返すだけだろう……」

「だが、このままでは双方納得しないだろう？」

案の定、みんな頷く。

「そこで、ネギ先生から提案があるそうだ。ネギ先生、どうぞ」

「はっはい！えと、両クラス対抗でスポーツ対決をしたらどうでしょう？お互いに戦って汗を流せば、つまらないがみ合いも無くな

と思うんです」

「いいわよ、面白そうじゃない？じゃあ、ハンデとして、種目はドツチボール。こっちは11人、そっちは倍の22人で「ちよつと待ちなさい」何よ？神楽坂明日菜」

「はあ・・・人数が増えるのはハンデにならない・・・むしろ不利になるじゃない・・・トーマ先生の前でよくそんな卑怯なことができるわね？言つとくけど、トーマ先生を怒らせると怖いわよ？」

失礼な・・・いくら俺でも、女子相手にはそこまでひどいことはない・・・

「く・・・じゃあ、こっちは9人でいいわ。ただし！！こっちが勝つたらネギ先生と、トーマ先生をもらうわ」

ピクツ・・・ん？なんか、アスナとマナと、エヴァが反応したんだが・・・大河内も少し殺気立ってるな・・・何故だ？

「くくくふふふふふ・・・」

おおう・・・怖・・・

まあ、結果は案の定2 - Aの勝利で終わった。

「く・・・」

ウルスラのが悔しそうにしてるな．．．いやいや、元立派な魔法使いのパートナーと真祖の吸血鬼、それから、黄昏の姫御子が本気を出したんだぞ？勝てるわけがなかるう．．．あと、さすが水泳部のホープだな．．．大河内も活躍していた。

「まだ！！ロスタイムよ！」

っ！！あいつ．．．アスナに！！

「やらせるか！！」

俺は思わず瞬動を使ってボールをキャッチする。

「おい．．．負けた腹いせに不意打ちか？正々堂々の勝負で負けてこのようなことをするとは．．．程度が知れるな．．．来世からやり直せよ．．．お前」

「お．．．おい、トーマ．．．殺気を抑えろ！！」

む．．．意図せず殺気が漏れていたようだな．．．

「あ．．．あう．．．」

「つぎやったら．．．その時は．．．いいな？」

「はっはいっ！！」

ウルスラの生徒は、わたわたと走って屋上から出て行った。

「残った時間は自由に使ってくれ。俺は仕事に戻る」

そう言い残して、俺は屋上をでた。

Side out

く刹那side

あの殺気・・・そして、昨夜高畑先生を倒したあの實力・・・
あの人なら・・・私はもっと強くなれる・・・お嬢様を守る力を
てにいれられる・・・

Side out

くトーマside

はあ・・・どうも身内の事となると冷静でいられん・・・

俺は今日の仕事をすべて終え、リリイと一緒に帰宅途中だ。

「はあ・・・」

「トーマは悪くないよ・・・あんなことされたら誰でも怒るよ」

「・・・ありがとうな、リリイ」

「ううん、トーマがそんな顔してるのはいやだから」

リリイには、本当に頭が上がらないな・・・

しばらく歩くと、不意に声がかかった。

「トーマ先生!!」

「ん?・・・桜咲か・・・どうした?」

「今回は、あなたにお願いがあって参りました」

お願い?

「なんだ?言ってみろ」

「私を・・・私を弟子にしてください!!!」

「・・・何故、俺なんだ?」

「あなたは強い・・・おそらく、この麻帆良学園の誰よりも」

だてに英雄などと呼ばれたわけじゃない。ディバイダーの力も確かにあるが、ひとえに鍛錬を積み重ねてえた戦闘技術故の称号だ。あとは、師がよかったというもある。ゼクトには頭が上がないな。

「それで?」

「私は、お嬢様の護衛として、この麻帆良にいます。ですが・・・まだ、私は弱い・・・そのためには、どうしても強くなりたい。いえ、強くななければいけないんです!!」

「ただ、護衛だけをするならば、そこまで強さがなくてもできるだ

ろう・・・なぜそこまで強さを求める？」

「お嬢様は・・・私の一番大切な人です。私はその一番大切な人を守りたい!!」

ふむ・・・その思いは本物だな・・・だが・・・

「なら、なぜそのお嬢様・・・このかちゃんの傍にいない？護衛をするならば、その人の一番近くにいなければダメだろう？」

「私は・・・私には、お嬢様の傍にいる資格はないのです。私は・・・」

「違うな・・・資格がないからとかいうのは、本心じゃない・・・本当は怖いんだろう？自分が普通の人でないと、混血児であると思われるのが怖いんだろう？あとは、かつて助けられなかったことへの負い目か？」

「な・・・何故・・・そのことを？」

刹那の顔が青ざめる。

「俺も、ある意味で普通の人間じゃないからな・・・人外の気配にはある程度敏感なのさ。ちなみに、その事件については詠春から聞いたよ」

「普通の人間ではない？」

「それはいい。お前は、このかちゃんが寂しそうにしているのには、気づいているんだろう？」

「・・・はい」

「守りたい人が寂しそうにしているのに、なぜそばにいてやらない」

「そ、それは・・・クラスの他の皆と一緒にいればいいはずです」

あーこいつは馬鹿だ・・・筋金入りの馬鹿だな・・・

「あほか。仲のよかった幼馴染が、初めてできた友達が自分と話もしてくれない。目も合わせてくれない。それがどれほどつらいことか分からないのか？」

「それは・・・」

はあ・・・まったく。おかしな所で頑固だな・・・

「とにかく、弟子をとるのは、このかちゃんと普通に接することができてからだ。それに、ただ無暗に力を手に入れても、待っているのは破滅だけだ。その力はいっつか、君の一番大切な人まで傷つけるぞ？じゃあな」

「頑張つてね、刹那」

俺は、返事を聞かずに立ち去った。

S i d e o u t

〈刹那 s i d e〉

トーマ先生は、私を弟子にしてはくれなかった・・・

お嬢様のすぐ近く・・・一番近くにいられるようになれとおっしゃった。

でも！！私は、お嬢様の傍にいちやいけない！！化け物の私は・・・お嬢様の傍にはいられない・・・怖いよ・・・このちゃん。それに、守り切る力のない私には・・・そばにいる資格なんてない・・・

「うちは・・・どうしたらええの？このちゃん・・・」

私のその呟きに答えてくれる人は、誰もいなかった・・・

S i d e o u t

第十一話 成長（後書き）

まず、雨季様、高天原 A様、メガネ様、龍賀様 感想ありがとうございます！
ございます！！

PV44、621アクセス ユニーク6、222人・・・びっくり
しました・・・登校するたびに多くの方々がこの作品を見てくださ
っているようで・・・ネギまの力つてすごいんですね

さて、今回はメインはせつちゃんかもですねw
あと、ネギ君が一つ学びました。
これからどんどん成長させていきますww

では、今回も読んでくださった方々に最大限の感謝を！！

誤字脱字、感想、アドバイスお待ちしております！！

KOTOKOさんのTrust You're Truth明日
を守る約束っていう曲すごいいいですね・・・さすがとらハ
ww

第十二話 期末テスト そして、進む俺の胃痛（前書き）

PV52 / 329アクセス ユニーク7 / 056人 お気に入り登録件数99件！！

ありがとうございます。

では、第十二話、始まります！！

第十二話 期末テスト そして、進む俺の胃痛

トーマside

現在、麻帆良学園中等部内は、ピリピリした雰囲気が充満している。まあ、理由はいたって簡単なもので、期末テスト期間に入っているからだ。

それが当たり前なはずなのだが・・・

我が2-Aはお気楽な雰囲気漂っている。

「はぁ・・・いくらエスカレーター式だからとはいえ・・・勉強をおろそかにしていいわけではないというのに・・・」

まあ、かくいう俺も前世で学校言っていた時は、勉強なんてほとんどやっていなかったわけだが・・・それでも、一応学年で中の上は維持していた。まあ、担任にはかなり不思議がられてはいたが・・・

まあ、そんなことを考えていると、ネギが入ってきた。

何やらおたおたしているが、なんだ？

そして、入ってくるや否やこんなことをのたまった。

「今日のHRは大・勉強会にしたいと思います！次の期末テストは、もうすぐそこまで迫ってきています！！」

・・・いや、別に勉強会自体は悪くないと思うが・・・何故だろう？何か下心を感じるんだが・・・

「あのっ、そのっ・・・実はうちのクラスが最下位脱出できないと大変なことになるので」（ボクが）！！みなさん、頑張って猛勉強

していきましよう!!」

おい・・・大変なことになるのは君だろう・・・誤解を招く言い方をするんじゃない。

はあ・・・見ろ、アスナも呆れた顔してるぞ？

『アスナ』

『何？どうしたの、トーマ？』

『あとで皆に大変なことについて補足説明をしておいてくれ・・・多分ばかばかしいうわさが出回るはずだ。例えば、学年最下位だったら、クラス解散とか・・・』

『ああ、あり得るわね・・・分かった』

『ああ、よろしく頼む』

はあ・・・

「はい？提案提案!!」

「はい！桜子さん」

む・・・すごく嫌な予感がするんだが・・・

——遅くなりましたが、トーマは日常的な部分の原作をほとんどまったく覚えてません——

—by 作者

??なんか電波が・・・気のせいかな

「はい！お題は『英単語野球拳』がいーと思いまーす！！」

周りがおお！！とか歓声を上げる・・・はぁ・・・胃が痛い・・・雪広だけが反論をしているが・・・ネギ、お前野球拳がどんなものか知らないだろう・・・止めるか・・・

「静かに！！」

俺の声に騒いでいたクラスが静まり返る。

「阿呆どもが・・・野球拳など許可できるわけがないだろう。そんなことをしたら、指導室行きは確定だぞ？」

「」「」「うっ・・・」「」「」

「ネギ君、君は野球拳がどんなものか知っているのか？」

「え？野球を取り入れたものじゃないんですか？」

「はぁ・・・いいか？野球拳は、じゃんけんをして負けたほうが一枚ずつ服を脱いでいくゲームだ。その英単語版だぞ？どんなものか想像してみろ」

「間違えた人が脱いでいく？ってあうあうあうあうあうあうあう」

「勉強会がいいが、普通にやれ普通に・・・真面目にする分には何も言わん」

はい・・・と、つまらなそうに返事をする。はあ・・・

「とりあえず、試験対策プリントを作ってきたから、それをやってもらう。出題傾向は抑えておいたから、理解しながらやればテストでそれなりの点数はとれるはずだ。わからないところがあれば、聞いてくれれば教える。ちなみに答えだけは教えないからそのつもりでな?」

俺はプリントを配る。案の定バカレンジャーは速効質問してきたが・・・はあ、先が思いやられる・・・

次の日・・・

なんだ?教室が騒がしいが・・・

「おはよう」

「あつ、トーマ先生!」

雪広がつかみかからんばかりの勢いでやってくる。

「どうした?雪広、そんなにあわてて・・・ん?なんだか人数が足りないがどうした?」

「それが・・・バカレンジャーと、このかさんたち図書館探検部、

それにネギ先生が行方不明だそうですわ」

はぁ・・・アスナに頼んでおいたというのに・・・それでも無駄だったか・・・

にしても、魔法の本に頼るとは・・・はぁ・・・

ちなみに、アスナはそこに参加していない。現にいま教室で、俺が用意した対策プリントを消化中だ。

「少し、学園長室に行ってくる。各自自習をしていてくれ」

面倒なことになりそうだ・・・

現在、学園長に事の次第を聞いている。タカミチも傍にいる。何でこいつは気がつく学園長室にいるんだ？

「図書館島で、彼等は勉強中だと？」

「うむ、これもネギ君が合格するためじゃ、それに、あそこの司書がこっそり見てくれておるからの、心配はいらんで」

「その司書というのは、アルビレオ・イマの事か？」

「ふぉっ！？なんじゃ、知っておったのか？」

「いえ、知りませんでしたか・・・ナギの行方不明の時に、負傷し

て、療養に入るとガトウから知らせがあつたのでね・・・魔力が豊富な所で世界樹が浮かんただけだ」

まあ、若干嘘が入っているがな・・・

「なるほどの・・・とにかく、彼らの事は心配いらんからの。トーマ殿は2・Aのほうをよろしく頼むぞい」

今更文句を言っても仕方がない・・・昨夜彼女らが出ていったことに気がつかなかった俺も悪いしな。

「分かりました。ですが、ネギ君たちが帰ってきたら、説教はさせてもらいますよ?」

「まあ、仕方がないの・・・」

ああ、一つ忘れるところだった・・・

「学園長? 貴方ですよ?」

「ふおっ!?!?」

「ちなみに、あなたには特別メニューで、とあるゲームをやっているいただきますので・・・覚悟しておいてくださいね?」

フフフフフフフフ・・・ネギと一緒に、あなたもやってあげますよ・・・

「あ・・・あの? トーマさん? アレを学園長にやったら・・・死ぬんじゃないですか?」

「ふおっ！？タカミチよ、アレとはなんじゃ！？」

「タカミチ？言わんでいいぞ？後のお楽しみだ・・・もし教えたりしたら、お前もやるから覚悟しておけよ？最近ストレスで胃に穴があきそうなんだ・・・手加減できんかもしれん」

「わ・・・分かりました！！！」

そう、言い残して俺は学園長室を出る。だからアレってなんじゃー！！とか聞こえるが気のせいだろう。

それからも、俺はネギの代理で2・Aの英語を教えたり、対策プリントを作ったりと忙しく働いた。新田先生にたまっているネギの仕事までやらされた・・・ネギ・・・帰ってきたらまじで、∞耐久な・・・

そして、テスト前日・・・図書館島から帰ってくるだろうバカレンジャーを、待ち伏せている。

「外に出れたー！！」「イエー！！！」

ようやく帰ってきたみたいだな・・・

「よう・・・お前ら・・・なにをやっているんだ？」

「げっ……トーマ先生」

「お前らがやったことは、不法侵入と窃盗未遂だ。立派な犯罪行為だぞ？のちに処分が下るからそのつもりでいるように」

・ バカレンジャーはえええー！とか言っているが、当たり前だ・

「ネギ……お前は後でアレをやるからな……あと、服を着ろお前らは……大体なんで裸なんだ？」

ネギは絶望的な顔をしている。バカレンジャー達はきゃーきゃー言っている。

はぁ……教師の仕事なのか？これは……

それから時は流れ……結果発表の日

まあ、これは語る必要もないだろう。

学園長の採点が遅れていたため、最初は最下位だったのが、バカレンジャーの点数が加わったことで、一気に浮上……学年トップに躍り出た。

・ まあ、ずるしてまで点数が悪かったら、説教じゃ済まされんがな・

ちなみにトトカルチョをやっていたので、俺も参加させてもらった。

食券を大量ゲット・・・ちなみにかけた枚数は千枚だ。

「よし！！お前ら、学年トップ祝いだ！！俺が好きなもんおごつてやる！！トトカルチョで食券も大量ゲットしたからな・・・」

歓声が巻き上がる。

お？アスナ達がネギを連れて帰ってきたようだ。

「んじゃ、いくぞ!!」

「おー……！」

その後、高級焼き肉店J・O・J・O苑で、盛大にパーティーをやった。さすが高級焼き肉店・・・味はかなりのものだった。

ちなみに、処分は、反省文各自10枚の提出だった。

ふう……これでひとまずは、大きなイベントも終了か……

春休みに入り、俺もとくにやることはなくなった。まあ、非常勤の扱いだし、副担任だから俺に仕事が回ってくることはめったにない。そこで、リリイと一緒に最近のお気に入り場所である、世界樹の上に来た。

「やっぱり、ここは落ち着くな」

「そうだね」

「ごめんな・・・最近時間取れなくて」

「ううん・・・トーマが頑張ってるのは知ってるから、いいよ」

リリイとこうして二人だけの時間を取るのは本当に久しぶりだ・・・ちなみに、リリイとは仮契約はしていない。

俺とリリイにはエンゲージ・リングがあるから・・・

それからしばらく、世界樹の上でリリイと一緒に話をしたりして過ごした。

すると、久しくというか、こっちに来てから始めただろう、あの人の声が聞こえた。

『久しぶりだねートーマ』

『神様ですか・・・久しぶりですね。いったい何の用です?』

『それなんだけど・・・試験が終了して、上級神になれたから、その報告』

『それは、おめでとうございます。てことは・・・俺はもうこの世界にはいられないんですか?』

それはいやだな・・・こっちで出会えた仲間たちと別れたくはない・・・

『あ！それはないから大丈夫だよ？私はこの世界の管理と観測を最高神様から任されてるからね！これから君に頼むよ』

ふう・・・良かった

『それで・・・用はそれだけじゃないんでしょ？』

『・・・うん。実はね？下級神が、面白半分に現世の人を殺して、私の目を盗んでこの世界に送っちゃったんだ・・・ただの転生者なら別によかったんだけど、性格が問題でね・・・前世で女性にモテなかったのが原因か知らないけど、容姿を良くしてもらって、能力をもらって気が大きくなったのか、ハーレムを作るとかい言い始めたらしくて・・・』

おいおい・・・いつかそんなことは起こるかもしれないと思っていたが、こんな時じゃなくてもいいだろう・・・しかも、ハーレムだ？この人たちだって生きてるんだ・・・現実と変わらないんだぞ？ふざけたことを・・・

『わかりました。場所と時間、それから能力の詳細を』

『場所は、ここ麻帆良学園の世界樹広場、時間は今からおよそ5分後だよ。能力は、F a t eのアーチャー、英霊エミヤの固有結界とナギの10倍の魔力だよ』

『ありがちですね・・・まあ、能力をもらっただけのやつに負けはしませんよ・・・油断はしませんけどね？』

『じゃあ、私は下級神の処罰をしなきゃならないから、よろしくね

「？」

そういうと、神様は念話を切る。
じゃあ、準備しますかね・・・

「リリイ、よろしく頼む」

「うん」

「リアクト」

さて、排除を開始しますかね・・・

少し待つと、世界中を中心に半径500mほどが隔離された。まあ、封時結界もどきだ。

すると、声が聞こえてきた。

「よっしゃあ！！来たぜ、ネギまの世界・・・まずはあの野菜をどうにかして・・・フヒヒ・・・誰から落とそうかなあ」

なんというか・・・見るからに頭が悪そうだ・・・容姿は確かにいいみたいだが、それだけで女性がなびくと思っっているのだろうか？
じゃあ、行くかな・・・

S i d e o u t

↳転生者side↳

ある日、普通に生活してたら、車が突っ込んできて死んじゃった。そしたら、神とかいうやつが出てきて、暇つぶしに殺したとか言いやがった!!

だがまあ、イケメンにしてもらって能力までもらった上に、ネギまの世界にこれたしな!!

フヒヒ・・・これで俺はハーレムを作れるぜ!!まあ、落とせなくとも、やっちちまえばこっちのもんだがな・・・フヒヒ

すると、男が出てきた・・・ネギまにこんなやついたか?ていうか髪がたつてるし、歳はすこし上みたいだが、リリカルなのはFor
ceのトーマじゃねえか!!なんであいつがこんなところにいるんだ
よ!?

「てめえ・・・何もんだ?」

「それは、こちらのセリフだ・・・転生者」

!?!こいつ・・・なるほどなあ・・・

「てめえも転生者だな・・・?てめーも神に殺されてきたって口か?どうだ?俺はここでハーレムを作るんだ、少しくらい分けてやつてもいいぜ?」

「・・・下らん・・・とことん腐ってるみたいだな・・・第一俺は転生者であって転生者ではない・・・俺は女神様の手伝いをしてい

るだけだ。俺は彼女に貴様の排除を頼まれた。悪いが、ここで退場してもらおう・・・」

「へっ！！俺は神からチート能力をもらったんだぜ？てめーなんかに負けねえよ！！」

こいつを殺せば、あとは簡単だな・・・フヒヒ・・・

Side out

トーマside

二次創作なんかでありがちな、典型的な最低野郎だな・・・

奴は、いきなり詠唱を始める。

I am the born of my sword .

（体は剣でできている）

Steel is my body , and fire is my blood .

（血潮は鉄で、心は硝子）

I have created over a thousand blades .

（幾度の戦場を越えて不敗）

Unknown to death . Nor known to

life.

(ただの一度も敗走はなく、ただの一度も理解されない)

Have withstood pain to create
many weapons.

(彼の者は常に独り、剣の丘で勝利に酔う)

Yet, those hands will never ho
ld anything.

(故に、生涯に意味はなく)

So as I pray, "Unlimited Blade
Works"

(その体はきつと、剣でできていた)

詠唱が終わると、目の前に広がる世界が変わる。

「どうだ!!これでお前には勝ち目はないぜ!?!」

何か奴がわめいているが・・・張りばての力で勝てるほど俺は甘くはない

「ふん・・・これがどうした?ただ剣が大量に出てきただけだろう?」

「余裕かましてんじゃねえぞ!!」

そいうと奴は剣を大量に飛ばしてきた。一つ一つ、かなりの魔力がこもっているようだ・・・

「所詮は魔力でできたものだろう?」

【Divide】

俺は飛んでくる剣を、銀十字の書を使って防ぎながら結合を分断する。

「なっ!!?ちい、ならこれならどうだ!!」

すると、奴は干将・莫耶を投影して、次々と投げってくる。

「面倒だな・・・」

俺はデイバイダーを転生者に向けて・・・

「デイバイド——ゼロ」

一撃で、飛んできた干将・莫耶も、その射線上にあった剣も、大地も灰塵と消える・・・

「くそ!!なら、これならどうだ!?!」

奴はひと振りの剣を引き抜く・・・エクスカリバー約束された勝利の剣か・・・

「食らえ!!」

「約束された——勝利の剣!!」エクスカリバー

「デイバイド——ゼロ」

俺のデイバイドゼロとエクスカリバーの斬撃が衝突する。衝撃で、

ディバイダーから砲撃が放たれる。その後には何も残されてはいなかった。

俺は封時結界を解除する。すると、滅茶苦茶だった光景が元に戻る。

『女神様、排除完了しました』

『ありがとだね』こっちも処罰と刑の執行が完了したところだよ。じゃあ、また何かあったら言うね？』

『はい。ところで、いつまでも女神様と呼ぶのもあれですし、名前を覚えていただけないでしょうか？』

『うーん・・・あのね？神自体には名前がないんだ・・・』

『そうだったんですか・・・じゃあ、俺がつけてあげますよ。あなたの名前は、「フィリス」っていうのはどうですか？』

『フィリス・・・うん！！すっごく気に入ったよ！！ありがとぅ、トーマー！！』

『気に入っていただけたようで、うれしいですよ。それでは、また何かあったら呼んでください。いつでもあなたの力になりましょう』

『うん』じゃあ、またね！』

『はい、また』

ふう・・・一件落着か・・・

俺はリリイとのリアクトを解いて、再び世界樹の上に腰かける。

「そうだ、リリイ・・・歌を、歌ってくれないか？」

「うん、いいよトーマ」

リリイは澄んだ声で歌い始める。

俺は、リリイの歌声を聴きながら、春の少しずつ暖かくなってきた風を感じていた。

S i d e o u t

第十二話 期末テスト そして、進む俺の胃痛（後書き）

まず、雨季様、メガネ様、龍賀様、カレーパン様、omega z e
r o 様、感想ありがとうございました。感想をいただだけで、や
る気が出ますね！！

では、これからもがんばっていききたいと思います！！

誤字脱字指摘、アドバイス、感想をお待ちしています！！

番外編 龍賀様とのコラボです〜ネギ特訓〜（前書き）

龍賀様のところの龍斗君を呼んで、ネギをイジメ、基、訓練します。

では、番外編、始まります!!

番外編 龍賀様とのコラボです！ネギ特訓！

トーマSide

先日、学園長のオシオキで、∞耐久弾幕回避ゲームをやった。

終わった後、学園長の口からなにか白い物が出ていたが、気のせいだ。

そして、今日は、ネギのオシオキをしようと思い、世界樹の広場に呼んだ。

呼んだのはいいが・・・ネギがなかなか来ない。フッフ・・・これは密度を濃くするしかないか？そんなことを考えていると、いきなり空間がゆがみ始めた。

「な！？なんだ敵か！？」

すると、空間の歪みから、人が出てきた。

「む？・・・ここは？」

肩にかかるくらいの綺麗な金色の髪に、左右で色の違う瞳・・・所謂オッドアイというやつだな・・・って・・・

「龍斗？」

「トーマか？何で俺はこんなところに？というかここはどこだ？」

一瞬思考が停止してしまった・・・

「あ・・・ああ、ここは麻帆良学園の世界樹広場だ。それにしても、なぜここに？」

「ああ、空間に歪みが現れたと思ったら、急に呑み込まれて・・・」

——神（作者）に不可能はない！！——

なんか電波が届いたが無視だ無視。

「はじめまして・・・というのも変だが、こうして直接会うのは初めてだな」

「そうだな。戻るまでの間、よろしくなトーマ」

「おう。っとそうだ、ちょうどいい。これからネギにアレをやるんだが・・・一緒にどうだ？」

「ついにこの時が来たか・・・ネギをイジメ、基、調教、基、鍛えてやるか」

「本音が駄々漏れだぞ？」

そんな会話をしていると・・・

「トーマさん！！」

来たみたいだな・・・

「遅いぞ、ネギ君。何をしていたんだ？」

「すつすみません！！少し準備に時間がかかってしまって！！」

準備するほどの事でもないと思うが・・・

「あれ？トーマさん、こちらの方は？」

「ああ、彼は森 龍斗。俺の友人で、今回お前の訓練を手伝ってもらうことになった。ちなみに俺より強いぞ？」

「はじめまして。よろしくな、ネギ」

「はっはい！！ていうか・・・彼？女性じゃないんですか？」

「・・・うん・・・いいよ、もう・・・慣れたよ」

龍斗、頑張れ・・・

「龍斗、帰ってこい。じゃあ、別荘に行くぞ？」

「ああ、分かった」

「はっはい！！」

さーて・・・どうネギを料理してやるのかな・・・？

別荘に入ると、リリイが待っていた。

「おそいよートーマ」

「悪いな・・・ネギが遅刻したもんで」

「ごめんなさい」

「ん？あゝ龍斗だ、こんにちは」

「ああ、こんにちはリリイ」

まあ、入って早速だが・・・始めるとしようか。

「じゃあ、ネギ、龍斗、準備してくれ。順序としてはこうだ」

1、俺がシルバースターズを撃つので十分間回避

2、龍斗が弾幕を張るので、それを回避

3、俺と龍斗で一氣に

って感じだ。

「よし、じゃあ始めるぞ・・・リリイ」

「うん」

俺はリリイとリアクトする。

「龍斗、開始の合図を頼む」

「分かった。では、始め!!」

【Silver Stars “Hundred million”】

ネギに向かって大量の銀色の弾幕が向かう。

まあ、この程度なら慣れたもので、ネギはきつそうではあるが、体勢を崩すことなくしつかりと回避していく。

「ほう・・・以外によけるものだな・・・イジメ甲斐がありそうだ」

そして、俺はさらにシルバースターズを撃ちこみ続ける。

—— 10分経過 ——

「よし、5分休憩をとったら始めるぞ」

「次は俺か・・・徹底的に鍛えてやるから覚悟しておけよネギ」

「はっはいいいい!!」

そして、五분이経過する。

「じゃあ、次は俺の番だな・・・準備はいいか、ネギ？」

「はい!!」

ネギも随分と回復がが速くなってきたな・・・鍛えてきたかいがあるというものだ・・・

「じゃあ、まず手始めに、これだ」

魔符「スターダストレヴァリエ」——EASY——

龍斗を中心に放射状に曲線を描きながら、星型の弾幕が飛んでいく。隙間を埋めるように、少し大きな弾が飛んでいく。

慣れない弾幕にネギは四苦八苦しているようで、回避ができずに障壁で防いでいる。

そして、弾幕が切れる。

「クカカカ!!やるじゃねエか!!そオ来なくっちゃ面白くねエ」

あ・・・アクセラレータ一方通行でた・・・

神槍「スピア・ザ・グングニル」

龍斗が紅いといんでもないエネルギーがこもった槍をもってネギに投げる・・・

衝撃波が半端ないんだが・・・

「どオしたア!!?なんだ、なんだよ、何ですかア!!それで終わりじゃねエよなア!!」

[illegible]

頑張れ・ネギ・

10分經過

「お疲れ様、今度は15分休憩しろ」

龍斗が放ったスパ・ザ・グングニルの余波で、別荘の中が滅茶苦茶だ・・・

念のために封時結界を張っておいてよかったかも・・・

「あーすつきりしたー。次はもっと強いのがぞ？」

「まっまだ、さっきのよりひどいのがあったんですかあ!？」

「ん？この程度でひどいと言ってたら生き残っていけないぞ？」

いやいや・・・普通こんな弾幕撃ってくる敵いないから・・・

15分經過

「じゃあ、そろそろ再開するぞ？これがラストだ。俺も龍斗も全力全壊で行くからな」

「小便是済ませたか？神様にお祈りは？部屋の隅でガタガタ震えて命乞いする心の準備はOK？」

「じゃあ、始めるか・・・」

【Silver Stars “Hundred Billion”】

俺は最終決戦の時に使用した超大量の弾幕を張る。

龍斗は・・・

禁忌「カゴメカゴメ」

うわーこの組み合わせは鬼畜じゃないか？

俺のシルバースターズが集中砲火なのに対し、カゴメカゴメは、ネギを格子状に弾幕が囲んでいる。・・・しかもなんだかんだでよけるネギもすごいが・・・

「くくく・・・この程度で終わってくれるなよ？まだまだ、祭はこれからだ！！」

邪恋「実りやすいマスタースパーク」

っておい！？それはさすがにまずいんじゃないか！？弾幕というか・・・極太ビームだし・・・

「じゃあ、その極太砲撃に俺もあやからせていただきますかね？」

全力全壊【Silver Hummer】

短距離瞬間移動で移動しながら、いろんな方向から砲撃を放つ。
ショートジャンプ

ネギ君はよけきれず、マスパのほつを食らう。なんとか障壁を張ったみたいだが・・・無理だろう？

「くはははははは！！これで最期だ！！しかと見よう！！」

いやいや・・・最期って・・・ネギの命が最期だよ・・・

——誰がうまいこと言えって言った？——by作者

くっ・・・俺も末期か？こんなときに電波を受信するとは・・・

「じゃ、俺も」

【Divide Zero】

龍斗が放ったのは・・・

禁忌「フォーオブアカインド」+魔砲「ファイナルスパーク」

えええええええ！？ちよっ・・・おまつ

ふはははははは！！とか高笑いしてる場合じゃないって！！

——どんどんキャラ崩壊していくトーマなのでした——by作者

くっ、また出てきおつたな！？電波め！！
さくしゃ

ってまあ・・・俺もノリノリで砲撃してたしな、人の事は言えないか・・・

訓練イジメが終わると、ネギ君はなんとか生きていた・・・
ネギもバグキャラなんじゃないか？原作でもラカンの攻撃食らって
立ち上がったたし・・・
ナギの血を引いているだけの事はある。

「ふゝ楽しかった」

「そ・・・そうか・・・まあ、楽しんでくれたならよかった」

ネギは口から何か出ているが・・・うん、気のせいだ。

訓練ちゅうけんも終わったし・・・

「龍斗、ちょっと一緒に世界樹までいかないか？すごいいい眺めで
な・・・俺とリリイの最近のお気に入り場所なんだ」

「うん？じゃあ、行こうか」

「ほお・・・これはいいな。トーマが気に入るのもうなずける」

「だろ？」

「ふふふ」

風が気持ちいいな・・・

「そうだ、リリイ・・・また歌を歌ってくれよ」

「リリイの歌か・・・聞いてみたいな」

「うん、いいよ」

そして、リリイは歌い始める。

リリイの歌声を聴きながら、風を感じる。

龍斗は、目を閉じてなにか物思いにふけている。

しばらく余韻に浸っていると、空間に歪みが現れた・・・これでお別れか・・・

「どうやら、時間みたいだな」

「そのようだ」

「そうだな・・・お前にこのバングルをやるよ・・・こいつは俺とリリイのエンゲージリングを模して作ってある。そいつに念じれば、いつでも俺を呼びだせる・・・力になれるかは分からないが・・・まあ、いつか再会できるようにって思ってた・・・こんなものしか渡せなくて申し訳ないが」

「いや、ありがとう。じゃあ、またなトーマ、リリィ・・・いつかまた」

「ああ、いつかまた」

「またね」

そうして、龍斗は歪みの中に消えていった。

「ふあああああゝ・・・疲れたな・・・少し寝るか・・・」

「じゃあ、トーマ・・・」

リリィはポンポンと自分の太腿をたたく・・・

俺はリリィに膝枕をしてもらって、世界樹に吹く穏やかな、暖かな風を感じながら、目を閉じた・・・

S i d e o u t

番外編 龍賀様とのコラボです〜ネギ特訓〜（後書き）

まず、感謝の辞から・・・雨季様、龍賀様、和風好き様、メア様、カレーパン様、感想ありがとうございました！！

龍斗君の口調とか・・・どうでしたか？

こんなの龍斗じゃない！！と思いになられましたら、編集します。

では、次回は本編です！！これからも頑張っていきたいと思いますので、応援よろしくお願いします！！

第十三話 吸血鬼事件勃発（前書き）

ようやくエヴァが話に絡んできます。

いつも以上につたない文章になっていますが、ご容赦のほどよろしく願います。

では、第十三話始まります。

第十三話 吸血鬼事件勃発

トーマside

アレから何度か、フィリス様に頼まれて転生者の排除を行った。

中には望まぬ転生をした者もいて、殺した時にお礼を言われ、複雑な気分になったこともあった。

またある時は、転生者が一度に十数人送られてきたこともあった。

フィリスは上級神の中でも、相当若らしく、その才能をねたむ者が嫌がらせで送ってきたらしい・・・まあ、送られてきた転生者はどいつもこいつも勘違い野郎ばかりだったから、大した苦ではなかったがな。

後は、アスナとディバイダーの訓練をしたり、バカレンジャーの宿題を見たり、ネギを訓練^{イチメ}たりして春休みは過ぎて行った。

そして、今日は新年度の一学期初日だ。

「3年!」「A組!」

《ネギ先生——っ?》

小学生か・・・お前らは・・・

ネギがHRを始める。

「えと・・・改めまして、3年A組担任になりました、ネギ・スプリングフィールドです。これから来年の3月までの一年間、よろしくお願いします」

「はい」

「よろしくー！ー？」

元気が有り余ってるな・・・俺が学生の頃なんて、新学期は憂鬱だったぞ？

エヴァがネギを見てるな・・・呪いは解けてるから、ネギを襲うこととはないと思うんだが・・・サウザンドマスターの息子で、俺の弟子？ということで興味があるのかもしれない・・・面倒なことにならない方がいいが・・・

すると、しずな先生が入ってくる。

「ネギ先生、今日は身体測定ですよ。3-Aのみんなも、すぐ準備してくださいね」

そつえばそうだったな・・・じゃ、俺は退室するとするか・・・

「はっはい、そうでした、ここですか！？わかりました、しずな先生！」

これは早く出ないとロクなことになりそうもない・・・ということ、俺は教室から出ようと、ドアへ向かう。

「で、では皆さん！！身体測定ですので・・・えとっ、あのっ、今すぐ脱いで準備してください！！」

バカネギイイイイ！！！！！！！！！！俺は瞬動を使って廊下に出る・・・何故こんなところで使わねばなんだ！？はぁ・・・胃が痛い・・・

ネギがあわてて廊下に出てきた・・・教室から「トーマ先生のエツッていないし!？」とか聞こえた。ふん、そんなことを言われるはめになってたまるか・・・

むっ!？何か嫌な予感がある・・・こういうのは無視するとロクな目に合わないからな・・・この場を離れるとしよう。と、教室から背を向けた瞬間・・・

「先生!! 大変やー!! まき絵が・・・まき絵が!!」

「何!？まき絵がどうしたの!？」

あ・・・危なかった・・・お前らはもう少しつつしみを持とう・・・

In 保健室・・・

佐々木がベッドで寝ていた。

「ど、どうしたんですか、まき絵さん？」

「なにか桜通りで寝てる場所を見つかったらしいのよ・・・」

一緒についてきたこのかや双子、椎名は安堵や、気楽な意見を言ったりしている。

ネギは何やら考え込んでいるようだ。

ふむ・・・魔力の残滓があるな・・・原作ならば、エヴァンジェリンなのだが・・・呪いが解けている今、吸血をする意味は特にないはず・・・

『アスナ、おそらくエヴァンジェリンだとは思うが・・・彼女に後でそれとなく聞いてみる。お前は、みんなを連れて教室に戻って、異常なしと伝えてくれ』

『わかったわ』

これでよし・・・後はネギか・・・

『ネギ君、勝手に一人で行動するなよ？未熟者が先走れば、碌な事にはならん』

『わかっています。今夜少し調査をしたいので、トーマさんついてきてくれませんか？』

ふふ・・・未だ、至らないところは多いが、それでも原作の時の現在と比較しても、成長している。

『いいぞ。じゃあ、今夜桜通りで』

『はい』

さて、エヴァに聞かなければな・・・

その後、教室に戻った後、エヴァに念話で聞いたところ、学園長に頼まれたそうだ。なんでも、ネギの血を吸えば、呪いの解けるかもしれないとか何とか言ってきたらしい。

まあ、どうせ呪いで弱体化しているエヴァをネギに倒させることで、自信をつけさせる心積もりなのだろうが・・・阿呆が・・・そんなもので付いた自信なぞうぬぼれにしかならんというに・・・

夜、桜通りに向かうと、宮崎が一人で歩いていた。なんと奇怪な歌を歌って恐怖を紛らわそうとしているが・・・まったく意味がなさそうだな・・・木が揺れる音でこわつとか言ってるし・・・

こんなところで少しでも声掛けたら気絶するんじゃないか？

そんなことを考えていると・・・

「27番、宮崎のどかか・・・悪いけど、少しだけその血を分けてもらつよ?」

おー・・・エヴァ出た・・・血を吸うのはカムフラージュらしいが・・・する意味あるのか？

「キヤアアアアアアア!」

「待てーっ!」

ネギ・・・勝手に先走るなっていったのに・・・さすがナギの息子・・・微妙な所で似てるな・・・実力がある分、ナギのほうが万倍マシだったがな・・・

ネギが魔法を放ち、エヴァがそれを防ぐ・・・ネギが撃つたのは風系の魔法だったからか、余波で帽子が飛ぶ・・・

「くっ・・・驚いたぞ。凄まじい魔力だな・・・」

「えっ・・・きつ君は、うちのクラスの・・・エヴァンジェリンさん!？」

「フフ・・・新学期に入ったことだし、改めて歓迎のご挨拶と行こうか、ネギ先生・・・いや、ネギ・スプリングフィールド」

おお・・・役者だねえ、エヴァも・・・なんだかんだでノリノリじゃないか？

「10歳にしてこの力・・・さすがに奴の息子だけはある」

「な・・・何者なんですか、あなたは!？何故クラスメイトを襲うようなことを!？」

フフフ・・・世の中全ていい人で成り立っているわけではないと、思いも、信念も、大義も、人それぞれ違うと教え続けてきたかいがあつたかな？原作とは若干セリフが違う・・・

「さてね・・・知りたければ私を倒すがいい!!」

フリーゲランネクサルマティオー
―氷結・武装解除―

エヴァは魔力にリミッターがかかっているとはいえ、一般魔法使いくらいはある。触媒は使っていない。意図的に威力は抑えているみたいだがな……

「ふ……やはり抵抗^{レジスト}したか……」

魔力コントロールはとことん叩き込んだからな……宮崎の服は袖の部分が少し凍結した程度だ。つい最近、ようやくくしゃみで武装解除も2回に1回しか起こらなくなった……苦節6年……長かった……

すると、音に気付いてアスナとこのかがやってきた。

『トーマ、エヴァちゃんが?』

『ああ、ネギへの試練だそうだ……あのお気楽学園長が考えそうなことだ』

『ふーん』

どーでもよさそうだ。

「ね、ネギ君が吸血鬼やったんか……!?」

「ち、違います誤解です!!」

敵を目の前によくそんなやり取りができるな……

「フフ……」

あ……エヴァ逃げた。

「あつ待て!!」

「ネギ君、追うぞ!!アスナとこのかは宮崎を寮まで送り届けてくれ!!」

ネギく……のところで既にネギは走り出した……あの阿呆!!

まあ、魔力で強化してるとは言え、普通に走ってるだけのやつに追いつくのはたやすい。

俺が追い付くと、エヴァは飛んで逃げる。

あーめんどくせー……

それを追ってネギが杖で追いかける。

なんか口論してるみたいだが、風で何も聞こえん……すると、ネギが精霊召喚でとらえようとする。エヴァはそれを撃ち落とす。

そして、遂にネギはエヴァに追い付く。

フランス エクサルマティオー
「風花・武装解除!!」

エヴァが羽織っていたマントが蝙蝠になって消える。

「こ、これでボクの勝ちですね。約束通り、教えてもらいますよ？何でこんなことをしたのか、それに……父さんの事も」

おいおい・・・詰めが甘すぎだろう・・・せめて拘束してからやれ
そういう問答は・・・

まあ、この後は原作通りのやり取りで、絡操につかまった。

「フッフ、サウザンドマスターにやられた鬱憤・・・ここで晴らさ
せてもらう!!」

「うわあゝん!! 誰か助けて!!」

はあ仕方がないな・・・

『アスナ!! GO!!』

「私は犬かつ!!」

おお・・・ナイス突っ込み・・・

「はぶうつ!! あぶぶぶぶぶぶぶ!!」

うわあ・・・顔痛そう

「あ・・・アスナさん!？」

「あなたが吸血鬼事件の犯人?二人がかりで子供に寄ってたかって・
・返答次第じゃただじゃおかないわよ?」エヴァちゃん、ここは
演技に乗って『」

「ぐっ・・・よく私の顔を足蹴にしてくれたな・・・神楽坂明日
菜・・・この借りは必ず返す!!」わかつている。ここはひとまず退

く。だが・・・本気で痛いぞ?」

『う、ごめんなさい』

『エヴァ、後で治癒してやるから、リリイが』

『わかった』

エヴァは屋根から絡繰と一緒に飛び降りた。

ネギは、アスナに泣きついていて。アスナは少し鬱陶しそうだ・・・

『アスナ、ネギを頼む。俺はエヴァのところへ行く』

『はいはい、わかってるわよ』

『ではな』

はあ・・・学園長も面倒なことをしてくれるな・・・

俺は、エヴァを追ってログハウスに来た。ちなみに寮監室で待機していたリリイも呼んだ。

「おい、エヴァゝいるか?」

「コンばんは、トーマ先生。マスターなら自室で休んでおいでです」

「そうか？上がってもいいか？」

「こちらへどうぞ」

絡繰の案内でエヴァの寝室まで行く。エヴァは頬に氷をあてていた。見ると、腫れて真っ赤になっている。

「大丈夫か？」

「これで大丈夫に見えるのならお前は眼科へ行け」

「悪い・・・じゃあ、リリイ？治癒魔法頼む」

「うんトーマ」

リリイはエヴァに手をかざす。すると、リリイの手から白い魔力光があふれる。

「む？治癒とは違クイラうな・・・新術か？」

「はい、終わったよ」

「そうだな・・・まあ、俺たちの固有の魔法体系だと考えてくれればいい」

「そうか・・・感謝する、リリイ」

「いいよ」

治療も終わったし、本題に入るか・・・

「エヴァ、これからどう動くつもりでいる？」

「ふむ、すでに関係のないことだが、怪しまれるのはアレだしな・
・次の一斉停電の日に坊やを誘い出すつもりだ」

「なるほどね？ そうだな・・・その時に呪いのほうも解けたことに
してしまえばいいんじゃないか？ その日は魔力のリミッターも解除
するんだろう？」

「ああ、そのつもりだ」

「まあ、話はそれだけだ。今度、アスナを呼んで修行するか・・・
アスナはいつその身を狙われてもおかしくないからな・・・エヴァ
みたいな普通の魔法使いとの戦闘経験を積んでおくのも悪くはない」

「構わない。お前とも一度戦ってみたかったからな」

「そっぴやエヴァとは一回も手合わせしてなかったな・・・」

「じゃ、今夜はこれでお暇するよ。お休み、エヴァ」

「お休み」

「ああ、お休みトーマ」

「お休みなさいませ、トーマ先生」

俺とリリィは挨拶をしてログハウスを出る。

さて、そろそろあのはた迷惑な淫獣も来るころだし・・・面倒だ・・・
・
ネギのケアもしなきゃならんし・・・ハア・・・俺の胃に穴が開く
のも時間の問題か・・・

S
i
d
e

o
u
t

第十三話 吸血鬼事件勃発（後書き）

まずは、雨季様、omegazero様、龍賀様、感想ありがとうございます。ございました。

そして、この作品をお気に入りに入れてくださっている方、呼んでくださっている方にも感謝を。遂に100件を越えました。本当にありがとうございます。

では、次回も楽しんでいただけることを祈っております。

誤字脱字指摘、感想、アドバイスをよろしくお願いします。

ネギのパートナーアンケート

ネギのパートナーを募集します!!

アスナはトーマで固定なので、他のキャラでよろしくお願いします
!!

現在の候補としては、

1位、桜咲刹那 2票

1位、鳴滝姉妹 2票

3位まさかのさっちゃん、宮崎のどか、ザジ 超 1票

トーマのパートナー

月詠 一票

刹那 一票

です。

ネギを傍で支えるはずだったアスナがトーマにかっさらわれたので
www

トーマ「人聞きの悪いことを言うんじゃない!!第一、お前がそう
したんだろウ駄作者が!!」

リリィ「死んだらどうなの?」

ごめんなさい・・・では!!アンケートにご協力ください!!

ちなみに、これはアンケートが終了し次第削除します。

期限は、とくにありません。

この子をトーマのパートナーにしたい!!とかもいいです。でも、メインはネギのパートナーアンケートなので、そちらは必ずお願いします!!

第十四話 猫ってすごいな・・・（前書き）

PV70000、ユニーク90000突破!!

ありがとうございます。これからも楽しんでいただけるように、
精進していきたいと思えます!!

では、第十四話始まります。

第十四話 猫ってすごいな・・・

トーマside

次の日、ネギは軽くおびえながらもそれでも自分の足で登校してきた。

まあ、そこまでは良かったのだが・・・

授業が始まった途端にボーとし始めた。

なんだ？

今は和泉があてられて答えている。

和泉が訳し終わると、ネギはいきなりこんなことをたまった。

「つかぬことをお伺いしますが・・・和泉さんはパートナーを選ぶとして、10歳の年下の相手なんて嫌ですよね？」

おい・・・一般人から選んでどうするんだ・・・はあ・・・
ネギのその一言で、教室內がざわめき始める。

「はいはい、静かに！今は授業中です。ネギ先生もいまはそんな話をする時じゃありません。授業を進めてください」

「はっはい・・・」

はあ・・・大体パートナーを選ぶならアーニヤでもいいだろうに・・・
・そこそこ実力はあるし、頭も回り、行動力もある。さらに言えば、ネギに好意を抱いている。LIKEではなくLOVEのほうで。それから、最適だろう・・・

その後、またパートナーの事で騒ぎ始め、ネギは遊ばれ、收拾がつかなくなつた。

む？・・・何かが侵入したらしいな・・・
そろそろ授業も終わるし、行つてみるか？

俺は、授業の終了と同時に侵入者の搜索を始めた。
おそらく時期的にあの淫獣だとは思つが・・・

「ちつ・・・見る影もないな・・・」

「む？トーマか・・・学校のほうはいいのか？」

すると、声がかかる。

「エヴァか・・・いや、それはお前にも言えたことだろうに・・・
呪いは解けてるんだし、卒業できるだろう？一応出ておいたほうが
いいんじゃないのか？」

「一回や二回休んだ程度では変わらんよ。それに呪いが解けたと分かれば、あの学園長も狸ではあるが、鬼じゃないからな・・・卒業
くらいはさせてくれるだろう。15年もここにいたんだぞ？」

「そうだな・・・ところで、侵入者はみつかったか？」

「いや、さっぱりだ」

「じゃ、今日のところは搜索を終えてもいいだろう。侵入したうえ、こつまで長い時間事を起こさないということは、小動物か何かだろう」

かなり理由はこじつけたが、事実だし・・・

「ふむ・・・それでは、帰るとするか・・・ではな、トーマ」

「ああ」

エヴァと別れ、俺は寮へと足を向ける。

オコジョ・・・ネギに余計なことを吹き込むなよ？

アレはなんだかんだで、キーパーソン？だからな・・・排除するわけにもいかん・・・

はあ・・・

寮に戻ると、何やら騒がしいことになっていた。

風呂のほうか？

風呂で起きていることに俺が介入するわけにもいかんしな・・・
後でアスナのところに行くか・・・

騒ぎ声が収まった後、アスナの部屋に行く。

「アスナ、俺だ。入ってもいいか？」

「あ？トーマ？いいわよ」

アスナの返事を聞いて中に入る。

「何やら騒がしかったが、何があった？」

「ああ、それはこいつよ」

そう言つてアスナはネギの傍にいるオコジヨをさす。
やはりお前か・・・アルベール・カモミール・・・

「お、お久しぶりつす・・・トーマの旦那・・・」

「カモ・・・お前は投獄されていたはずでは？」

「なによ？知り合い？」

「ああ、こいつは俺がウェールズでネギの教育をしていた時に、ネギが拾ってきたんだ。そのあと、下着泥棒2000枚で投獄されたはずなんだが・・・」

「に、2000枚・・・エロオコジヨ・・・クロス」

まあ・・・女性の敵だこの淫獣は・・・

「で？なんでここにいるのか説明してもらおうか？カモミール」

「へっへい!! 実は、かくかくしかじかで・・・」

「かくかくしかじかじゃわからん」

——淫獣説明中——

「なるほど・・・ネカネにネギを頼まれて・・・と?」

「へっへい!」

フフフフフフ・・・

「阿呆が・・・ネカネからはお前の捕獲願いが来ているのだが? 本当の事を言え」

「すすすいやせんしたー!! ネギの兄貴のパートナー探しの手伝いをと思いやして!!」

まあ、仲介料金が目当てなのは丸わかりだが・・・半分くらいはそれも目的なのだろう・・・

「カモ君! ボクのパートナー探し手伝ってくれるの!?」

「兄貴の2-Aなんて、粒ぞろいじゃねえっすか! いいパートナーになりやすぜ!! アスナの姉さんなんてどうっすか?」

「あ、あの・・・アスナさん、ボクのパートナーに「いやよ」・・・え?」

「いやって言ったの。他をあたりなさい」

「は……はい……」

本当に何故アーニヤを選ばないのか……謎だ……

そんな話をしていると、このかが帰ってきた。

「何や何や？さわがしーなー誰か来とるんか？」

俺はとつさに後ろを向く。アスナの鋭い視線を感じる……ヤラレル……

「つてと、とーませんせーやん！！？すっすぐ着替える！！」

アスナは俺の目をふさいでいる。

「お、おわったえ？ん？あ……何やこれ！！可愛え……！真つ白なオコジヨや……！！ネギ君のペットなん……！！？うひや……きもちえ……」

このかよ……そいつの顔があり得ないくらいエロい顔になってるんだが……アスナは青筋浮かべてるし……

その後、このかの声で他の生徒たちも集まってきた。その瞬間俺はアスナと、後から来たリリイに眼つぶしされた……目があ……！目があ……！！……

リリイがいたので、押しに押されてリリイは力モをかう許可を出してしまった。

あゝ面倒なことになりそうだ・・・
何で次から次へと俺の胃を痛める要素が舞い込んでくるんだ？

次の日から、カモは俺の目を盗んで、ネギと誰かを仮契約させようとしていた。

初日は、宮崎・・・その翌日は、懲りずにアスナと・・・

「はあ・・・」

俺は胃痛を最近できた並行世界、異世界の友人からもらった胃薬でなんとか乗り切る。

リリーの心配そうな顔が少しつらい・・・

気分転換に歩いていると、絡操が気に引っかけた風船を取ってあげたり、おばあさんを背負って階段を上ったり、川に流されている子猫を助けようとてさすがにそれはまずいだろう・・・

「絡操、ここは俺に任せろ」

「え、でも、トーマ先生」

「いいから」

そういつて俺は川の真ん中まで跳躍する。そして、子猫をキャッチした後、ゲーム張りの二段ジャンプで戻ってくる。

「ほら」

「あ、ありがとうございます」

やりすぎたか？周りの喧騒がすごいことに・・・
この場は離れるか・・・

「これからどこへ行くんだ？」

「はい、野良猫たちに餌をあげようかと」

「俺も行っていいか？猫好きなんだよ」

これは本当。

「どうぞ」

俺と絡操は並んで歩き始める。後ろからなんか視線を感じるが・・・
ネギか・・・後はカモだな・・・ネギよ・・・早まるなよ？

そして、俺たちは教会の広場までやってきた。
すると、次から次へと猫たちが出てきた。
可愛い・・・

「よしよし、ほら、取り合いするなよ？みんな平等にな？ふふふ・・・
可愛いなあ」

「トーマあ（泣）」

俺という名の猫団子が完成した・・・

その後、リリイと絡操に救出された。

「だいじょうぶ？トーマ・・・」

「す、済まない・・・」

「いえ」

すると、後ろに気配がする。絡操も気がついたようだ。

「こんにちは、ネギ先生・・・油断しました。でも、お相手はします」

「茶々丸さん・・・あのボクを狙うのはやめていただけませんか？」

「・・・申し訳ありません、ネギ先生。マスターの命令は絶対ですので」

「そうですね・・・なら、今度エヴァンジェリンさんに一対一で勝負を申し込めます!!」

「あつ兄貴！？何言ってるんすか！？ここではこつちまいましようぜ！？」

「そんなことしたら、そこにいるトーマさんとも戦わなきゃいけないし、トーマさんには絶対に勝てないよ・・・」

む？・・・教師としては合格かな？自分の力量もわきまえている。

「・・・分かりました。マスターにはそうお伝えします」

「いえ、エヴァンジェリンさんには、明日の朝、ボクが行くとだけ伝えておいてください」

フフフ・・・ネギが一人前になれば、まず間違いなくナギを越えるだろう・・・暇がきたらゼクトを呼んで師事してもらうのもいいかもしれない・・・

「承知いたしました。それでは、ネギ先生、トーマ先生」

「ああ、また明日、学校でな絡操。今日は楽しかったよ」

「トーマ先生・・・私の事は茶々丸で構いません」

「そうか？じゃあ、またな茶々丸」

「はい・・・／／／」

そういつて茶々丸はブースターをふかして飛んで行った。

さて、フッフッフ・・・あのネギをそそのかしたあの淫獣にはO
SHIOKIをしないと・・・ふふふふ・・・ふはははは
は・・・はぁーっははははははははっ!!!!!!!!!!

その夜、麻帆良に謎の悲鳴が響き渡ったとか、そうでないとか・・・

S i d e
o u t

第十四話 猫ってすごいな・・・（後書き）

まずは、和風好き様、omega zero様、龍賀様、カレーパン様、感想ありがとうございます！！

ネギの従者アンケートに協力していただけるとうれしいです。

では、次回もお楽しみに！！

誤字脱字、感想、アドバイスをお待ちしております！！

第十五話 壊し過ぎだ・・・（前書き）

さてさて、エヴァVSネギ・・・さてその勝敗の行方は！？

第十五話、始まります。

第十五話 壊し過ぎだ・・・

（アスナside）

朝、私は何故かネギ、エロガモとテーブルをはさんで正座している。

「兄貴！ヤバイよ！何であの茶々丸って口ボをやっちまわなかったんすか！？兄貴は命を狙われてんでしよう！？昨日あそこで仕留めておけば万事解決！！兄貴の勝ちだったんすよ！？」

何で私がこんな話に参加しなきゃいけないのか・・・私は今は麻帆良学園の庇護下にあるから普通に暮らしてられる・・・でも、ネギーナギの息子ーが来たということは、一歩間違えばまた・・・うん、もうあんな思いはしたくない・・・でも・・・トーマはまた何かあればそこに行っちゃう・・・なんだかんだで、優しくて、お人よしだから・・・そしたら、私はどうするんだろう？

「カモ君、それは無理だよ・・・僕は先生だもん。先生が生徒に危害を加えるなんてダメだよ。それに、あそこにはトーマさんもいたんだよ？」

「トーマの旦那だって、兄貴に勝てるわけないっすよ！？兄貴の魔力量なら旦那だって一捻りっすよ！！」

「ねえ、ネギ坊主？こいつ、ウェールズにいたときにトーマにあったのよね？なのになんでトーマの事ほとんど知らないの？」

「それはですね・・・ボクが助けた後にすぐ、いなくなっちゃったんです。まさか、下着泥で捕まってるなんて思わなかったんですけ

ど」

「ふーん・・・エロガモ？」

「え・・・エロガモって姉さん・・・」

あんたなんてエロガモで十分よ！！第一事実でしょうに。

「あんた、魔法関係に詳しいのよね？」

「へ、へえ・・・人並みには精通しているつもりっすけど・・・？」

「じゃあ、あんた、トーマっていう名前で思いつくのは？」

「トーマ・・・トーマ・・・トーマ・・・」

何でそんなに考えるのよ？ある意味一番有名でしょう？

「あ・・・ま・・・まさか？トーマ・ミグラシオンっすか！？」

「そうよ？ていうか・・・今更？」

「え？ど、どういふことですか？アスナさん？なんでカモ君はこんなに・・・」

「呆れた・・・あんた、魔法学校に入る前からトーマに面倒見てもらってたんでしょ？なんでそれで知らないのよ？」

普通調べればすぐ出てくるでしょう？

「あ・・・兄貴？トーマ・ミグラシオンつつたら、アラ・ルブラ紅き翼のメンバーっすよ！？」

「紅き翼って・・・父さんの！？」

気づくの遅いわよ・・・こいつ、父さん父さん言う割に、自分で調べようとしないのよね・・・姉さまの事を知らないのはわかるけど・・・なんで、紅き翼のメンバーの事も知らないのよ？トーマが胃を痛めるのもわかるわね・・・トーマはそのことも考えて、ナギの友人としか言わなかったんでしょうけど・・・

「そうっす！！20年前の大戦の最強集団“紅き翼”、その中でもさらに最強と言われた男っすよ！！二つ名もいくつがあつて、一番有名なのに“無に帰す者”ゼロ・ルラー”ってのがあつス・・・マジックキャンセラーでもないのに、魔法を消滅させ、無数の魔力の弾丸で、敵の兵を一瞬で殺しつくしたことからついた名前っス」

「そ・・・そんな・・・そんな人に僕は今まで教えてもらってたの？」

なんか震えてるわね・・・なんなのかしら？
まあ、私には関係ないけど。

「そんな奴が、敵にいるんスか！？無理っすよお！！ところで、兄貴が決闘を申し込む相手って、誰なんスか？」

今更かい！！

「エヴァンジェリンさんだよ。エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルさん」

「エヴァン・・・てまさか！？兄貴！！なおさらマズイっすよ！！これを見てください、俺っちまほネットで調べたんスけど・・・あのエヴァンジェリンて女、15年前までは魔法界で600万ドルの賞金首ですぜ！？確かに女子供は殺した記録はありませんが、闇の世界でも恐れられる超極悪人っすよ！！？」

やっぱり、そういう偏見は根強いわね・・・

「知ってるけど？」

は？ああ・・・トーマが教えたのかもね・・・ていうか何でエヴァちゃんの事知ってて、一番近くにいたトーマの事知らないのよ？これも一種の灯台下暗しってやつかしら？もしかすると、トーマが意図的に隠したのかもね・・・あんなことがあったし、情報統制がかかってるかもしれないし・・・

「トーマさんには今までずっと耳にたこができるくらい言われてきたんだ・・・『君は英雄の息子だ。これはいい面もあれば、悪い面もある。むしろ、悪い面のほうが大きいかもしれない・・・周りからは余計な期待と願いを背負わされ、自分の進む道すら見失ってしまつかもしれない。だから、君は必ず、まず考えてほしい。周囲の言葉を聞いて、実際に自分の目で見てどう映るのか、周りの言っていることは本当に正しいのか？考えてわからなければ聞けばいい。そのときは俺も君の力になる。だからまずは、風評に惑わされず、考えるんだ。・・・それだけで、君の道は大きく開けるだろう』って・・・だから、僕はトーマさんに手伝ってもらって、魔法関係のいろんなことを調べたんだ。その中にエヴァンジェリンさんの事もあった。最初は怖かった。でも、麻帆良で会って、実際に見て、そんなに悪い人じゃないと思ったんだ・・・それに、あの人と闘うこ

とでもつと知ることができると思う。トーマさんは普通の魔法は使えないから・・・魔法の事もつと・・・」

ふん・・・なるほどねえ・・・トーマの教育も身になってきてるみたいね・・・ていうかわかってるなら一般人からパートナー選ぶんじゃないわよ！？よく判らないガキね」

「あ、そうだ！ボク、これから修行に行ってくるよ！！このままじゃ、エヴァンジェリンさんと闘っても惨敗するのは目に見えてるし、どうせ負けるなら、精一杯やってからじゃないと！！」

「判りましたぜ、兄貴・・・そこまで言うなら、俺っちはもう何も言いません。頑張つて下せえ、兄貴！！」

「うん、行つてきます！！アスナさん、カモ君！！」

「行つてらっしゃい」

そう言つてネギは出て行つた。ん・・・？修行つてあいつ・・・どこでやるつもりなのかしら？ま、いいか。私には関係ないしね」。

なぜか部屋に残っていたカモを窓から投げ飛ばして、私は宿題を始めた。

S i d e o u t

トーマside

今まで、デイバイダーを使ってきたのだが・・・何か違和感があった。
ぼんやりとした感じなのだが・・・リリイとうまく同調できていないというか・・・

これから、修学旅行、まほら祭、魔法界と、再び闘いが始まる。その時に、デイバイダーやリリイの能力を十全に発揮できなければ、俺は、アスナを、生徒たちを、俺の大切な人たちを守れないかもしれない。

そのために、今エヴァに手伝ってもらって、検証中だ。

彼女の魔法理論はかなり高度だからな・・・科学的な面は茶々丸に任せれば、いけるはずだ・・・超に任せるのは何か気が引けた・・・

「どうだ？」

現在、リリイとリアクトしている。

「ふむ・・・同調率が低いな・・・よく今まで暴走しなかったものだと逆に感心したくなる・・・」

やはりか・・・

「茶々丸、科学的な面で行くとどうだ？」

「はい、こちらも同様ですが・・・そうですね・・・うまくラインが通っていないようです。一応ラインは存在するようですが、うまく機能していません」

そうか・・・原因は何なんだ？今までのリアクトの方法が間違っていたのだろうか？

俺はひとまずリアクトをほどく。くそっ・・・

「リリイ、どうしてかわかるか？」

「ううん・・・一応フィリス様に作られた時に、やり方はインプットされたはずだけど、少し欠落があるみたいで・・・」

『その疑問にお答えしよう！！』

「フィリス？急に出てこないで下さいよ・・・」

「おい、トーマ！？誰だこいつは！？」

「ああ、エヴァは初めてだったか？彼女は俺に力をくれて、この世界に送ってくれた恩人？かな・・・まあ、神様だよ」

「神だと！？どういうことだ？」

『それはね』

――神様説明中――

『てことなんだよ』

「なるほどな・・・道理でトーマからおかしな雰囲気が出たわけだ・・・おい、このことを知っているのは？」

「紅き翼の連中と、アリカ姫、それからアスナだよ」

「そうか・・・なるべく他のやつには言わんほうがいい」

「言うわけないだろ？言ったところで奇人が狂人として扱われるだけだ」

2-Aのやつらなら順応してしまいそうな感じがするのは何故だろう・・・

「ところで、フィリス様？リアクト不全の原因はなんなの？」

リリイが本題に戻す。

『その事なただけどね？プログラムのインストール時に、余計な茶々入れをしたバカな下級神がいて・・・記憶の書き込みがうまくいかなかったみたいなんだよ』

はあ・・・またか？転生者といい、このことといい、余計なことしかないな・・・

「それで？どうするんですか？このままじゃマズイでしょう？」

『わかってるよ・・・じゃあ、いつくよ』

そういうと、フィリスは（ちなみに様つけて呼んだら泣かれた）リリイの周囲に、大量のモニターを出し、すごいスピードでタイピングをしている。（ISの束さんの紅椿の時を思い出してくれればいいと思う・・・）

数10秒後・・・

『できたー さっすが私だねー天才!』

皆その速さにぽかんとしてしまっている。茶々丸のそんな顔はなかなか新鮮で少し可愛い。

『じゃあ、さっそくやってみてよ』

「はい」

「うん」

よし・・・今度はうまくできるといいんだが・・・鼓動が鳴りやまない。うるさいくらいに高なっている。すると・・・

「大丈夫だよ、トーマ。私たちならきつとできる」

リリィ・・・

「ああ、そうだな・・・今までずっと一緒にやってきたんだ。絶対に成功するよな」

「うん」

よし・・・

そして、エンゲージリングから言葉が発せられる・・・

【ダイレクトコネクト作動 リンケージシステム動作開始】

「リアクト・ドライブ!!」

リリイの声とともに、リリイはエンゲージ・スーツに身を包む……

——リアクト・エンゲージ——

そして、リリイと俺は一つになる。

『銀十字、自動防衛機能遮断。シュトロゼックによる能動制御に切り替え。視覚・聴覚・通常状態に復帰』

俺の五感が元に戻る……これが……本当のシュトロゼックのリアクトか……

今までとは全然違う……不思議な感じが……暖かいな……

「どうだ？リリイ」

『好調だよ。それに、なんだか暖かい♪トーマを感じる……』

恥ずかしいな……／＼／

「そうか……これでやつと俺はちゃんと戦える……俺の闘いを……いや、俺たちの戦いを!!」

「うん!!——一緒に行こう♪」

『私はお邪魔かな?』

「では、私たちも行くか……お茶の用意だ、茶々丸」

「かしこまりました」

俺とリリイは、他の3人がいなくなったことにも気付かず、ずっとそうしていた。

その後、みんながいらないことにようやく気がついて、あわててエンゲージを解いた。

そして、エヴァがティータイムとしゃれこんでいたのを見つけ、一緒に時間を過ごし、その後、模擬戦をやった。今までとは違い、俺の意志と、リリイの意志で、動くようになったので、どんな状況でも対応ができるようになった。俺が反応しきれないときはリリイが、それ以外は俺が動く形で、リリイはエクリップスと、銀十字、ディバイダーの制御をしていた。一緒に戦うのがすごく楽しかった。

休みが明けて、学校へ行く。

「おはよう、みんな」

「おはよう」

「あっ、おはようございます！トーマ先生、リリイさん」

皆それぞれ挨拶を返してくれる。
すると、ネギがやってきた。

「みなさん！！おはようございます！！」

何があったのかは分からないが、何かすごく意気込んでいるようだ・
・

「エヴァンジェリンさんはいますか？」

「あ、おはよーネギ君」

「おはよー」

「おはようございます、ネギ先生」

「エヴァンジェリンさんはまだ来てないですが？」

と、早乙女や宮崎、鳴滝双子、綾瀬が返す。

「あ、そうですね？」

「あの、何やカゼでお休みするて連絡が・・・」

と和泉が紙を持つてくる。

すると、ネギ君は・・・

「トーマ先生、すみませんが、HRをお願いできませんか？少し、
エヴァンジェリンさんの所へ行ってきます」

果たし状か？本来なら許されないが・・・まあ、エヴァは風邪をひ
いてるしな・・・家庭訪問という形でいいだろう。

「分かりました。それでは、H Rと、最初の英語は俺がやっておきます」

「ありがとうございます!!では!」

そういつて、ネギは走って行つた。

少しは胃痛の原因も解消されたかな?

「みんな揃つてるみたいだな?じゃあ、H Rを始める」

うまくやれよ?ネギ・・・

次の日・・・

珍しくエヴァが椅子に座っていた。

『珍しいな?今日はどつという風の吹きまわしだ?』

『ん?まあ、昨日カゼで世話になったからな・・・授業くらい出てやろうと思っただけだ』

ふん・・・

『ネギはおかしなことをしなかったか?』

『む?特になかったぞ?まあ、果たし状なんて今日日見ない物を渡

されはしたが』

なん・・・だと・・・？あのネギが？あの少年も成長したんだな・・・
・ようやく俺の苦勞が報われたのか・・・

『お・・・おい、どうした？急に泣き出して・・・まわりも変なものを見るような眼で見てるぞ？』

む・・・それはマズイ・・・

『いや、ネギが、あのネギが・・・自分のすることすべてが正しいと、ナギの事になると、人の迷惑も考えず、俺の胃を壊そうとしているんじゃないかと思ってしまっほどのバカをやっていたあのネギが・・・エヴァという手がかりを前にして何もしなかったというのに・・・驚きと、喜びが・・・』

『そ・・・そうか・・・苦勞したんだな・・・お前も』

・ そんな俺に気がついたのか、アスナが憐れむような眼で見ている・・・

そして、その日も何事もなく過ぎて行った。

停電に備えて、セールが実施されている。生徒たちは群がるかのように集まって、買い込んでいるが・・・そこまで必要なのか？

さて、停電か・・・おそらくこの機会を、西や世界樹を狙う輩が見逃すとは思えないし・・・完全になつたリアクトも試してみたいが・・・ネギとエヴァの決闘も気になるところだ・・・

「さて、どうしたものか・・・」

「ん・・・エヴァの観戦でいいとおもうよ？ 私たちが必要になる事態なんてそうそうないし」

「それもそうか・・・まあ、タカミチがいれば対処できるだろう」

ということで、俺はエヴァとネギの決闘の観戦をすることにした。

「ネギ先生、では、寮のほうをお願いします」

「では、僕は見回りに行きますね」

「はい？」

「がんばんなさい」

ちょうどネギが出るところだった。

「やあ、ネギ君」

「あ、トーマさん、リリィさん」

「見回りなら、手分けしてやろう。そのほうが早いし、見落としもない」

「そうですね、ではよろしく願いします」

そして、再びネギと別れて、見回りに出た。

しばらく見回りをしていて、大きな物音・・・ガラスが割れる音がした。

「始まったか・・・いくか、リリイ」

「うん」

俺はリリイを抱えて走る。そして、大浴場に到着すると、大河内と和泉が倒れていた。

「どうだ？リリイ」

「とくに怪我とかはないみたい」

さすがに中学生とはいえ、裸の女の子を俺が介抱するわけにもいかない。

『アスナ、済まないが大浴場まで来てくれ』

『どうしたの？のぞき？』

『違うわ！！エヴァとネギが始めたからな・・・エヴァは4人ほど疑似眷属にしたらしい。大河内と和泉が眠っているから、部屋に送っておいでくれ』

『冗談よ。分かったわ』

よし、これで二人は大丈夫だな・・・

「リリイ、行くぞ！」

「うん」

俺はリリイを抱えて飛んだ。

遠くに魔力の燐光がきらめく。どうやら原作通り、橋のほうへと向かっているらしい。ちなみに、停電と同時にエヴァから念話でリミッター解除の許可申請が来たので、許可をしておいた。だから今エヴァは全壊で闘っているはずだ。誤字ではない・・・いや、冗談抜きで・・・だってあいつらが通った後滅茶苦茶になってるし・・・

「おいおい・・・これを後で修理するの面倒だぞ？もう少し加減してくれよ」

俺のぼやきにリリイも苦笑いしている。

俺たちが端に到着すると・・・
戦闘は激化していた。さて、ネギはエヴァ相手にどこまでやれるか

な？

「来たれ氷精、 大気に満ちよ！ 白夜の国の凍土と氷河を！！」

クリュスタリザティオー・テルストリス

―こおる大地―

エヴァの魔法でネギは足元をすくわれ吹き飛ばされる。

さて、ここからが本番だ・・・どうするネギ？

S i d e o u t

くエヴァンジェリン s i d e く

10歳にしてはなかなか楽しませてくれるな・・・

「ふ・・・どうした？もう終わりか先生？」

「うう・・・く・・・」

む？・・・フッフ・・・なるほど、捕縛結界か・・・ナギのバカとやることは似てるな・・・まあ、それが魔法か落とし穴かの違いはあるが・・・

「これで決着だ^{ケリ}」

いいだろう、貴様の誘いに乗ってやろうじゃないか・・・

私が一步を踏み出すと、足元に魔法陣が展開され、私を縛りあげる。

「やったー！！これでボクの勝ちですよ！！エヴァンジェリンさん！！」

・・・ちっ・・・トーマに鍛えられたというから少しは期待していたのだが、この辺はまだガキか・・・

「これで勝ったつもりでいるとは・・・甘い、詰めが甘すぎるよ先生。茶々丸」

「はい、マスター・・・結界解除プログラム始動・・・すみません、ネギ先生」

私をとらえている魔力の帯にひびが入る。そして、音を立てて砕け散った。

「15年の苦汁をなめた私が、このたぐいの罠に何の対処もしていなかったと思うか？」

「いえ、そうなる事は分かっていました。アレで勝てていたら、それもいいなと思っていただけです」

む・・・フフ・・・こいつもあのバカの息子というわけか・・・

「では、お返しさせていただこうか」

そう言って、私は先ほど解除した捕縛結界を先生にかける。

「うわ！？こ……これは……」

「まあ、これも科学の力というわけだ。私にもよく解っていないのだがな……では、血をいただくとするよ、先生」

そして、私は坊やの首筋に牙を立てる。

「ああ、もう！！なんで私がこんなことを！！いい！？今回ただか
らね！！」

む？うるさいな……誰だ？……アスナか……あいつも苦勞して
るな……

「茶々丸」

「ハイ」

すると、アスナの肩に乗っていたオコジョが何かを取り出す。

「オコジョフラーージュ！！！！」

くっ！？目くらましか……そんなもの、障壁を張っていれば、意
味はな……って、はっ！？

私はアスナのとび蹴りを食らう。

「あぶるぱあっ」

わ、忘れてた……こいつ完全魔法無効化能力者だった……
マジックキャンセラー

S i d e o u t

＼アスナs i d e＼

ゾクツ・・・！！？

な・・・なにかしら？今の寒気は・・・

エヴァ怒ってるわよね？また蹴っちゃったし・・・

・
トーマの頼みで、ネギの加勢にきたけど・・・はぁ・・・面倒ね・・・

「あ、アスナさん？何でここに？」

「トーマの頼みよ。多分面白半分なんでしょうけど・・・」

「でも、これは・・・」

「あっちにはパートナーがついてるんだから、あんた一人じゃ心もとないでしょ？」

まったく・・・2対1で勝てるほど、エヴァは甘くないわよ？

「じゃあ、姉さん！！こんどこそ仮契約バクティオーを・・・「しないわよ」何でっスか！？」

「私だって、トーマに小さいころから訓練してもらって、最近も時々一緒にやってるんだから・・・」

「そうですか・・・じゃあ、アスナさんは、茶々丸さんの相手をお願いします」

「元よりそのつもりよ」

・ 私が手助けしてあげるんだから、うまくやりなさいよ・・・ネギ・・・

あと、後で覚えておきなさいトーマ・・・

トーマ side

お？アスナとネギが出てきたな・・・

アスナは咸卦法を使って、茶々丸と相對する。

ネギは、魔法の射手で、エヴァの魔法の射手との応酬を繰り広げる。

「ふん・・・まだ少し遅いが・・・なかなか詠唱の速度も、制度も上がってるじゃないか」

「みただね・・・アスナはさすがに、トーマやガトウが教えてきたかいがあったかな？茶々丸を圧倒してるよ」

魔力コントロールは常々教えてきたからな・・・主に俺の胃のために・・・

「お？ 撃ち合うつもりか？」

ウェニアント スピリトゥネブダキアセバヌ、オブスクラテフサド、テンベスタース・ニウアーリス
「来たれ！ 氷精、闇の精！ 闇を従え吹雪け常世の冰雪！！」

ウェニアント スピリテヌアアレス・タルタリガテネオヨレット テンベスタース・アウストリーナ
「来たれ！ 雷精風の精！ 雷を纏いて吹き荒べ南洋の嵐！！」

魔力量はエヴァのほうが上・・・ネギはどう乗り越えるか・・・

ニウイス・テンベスタース・オブスクランス
「闇の吹雪！！」

ヨウイス・テンベスタース・フルグリエンス
「雷の暴風！！」

砲撃系の魔法が衝突し、暴風が吹き荒れる。

「スゴいな・・・俺の場合、拮抗せずに打ち消してしまうから・・・
こういった魔法のぶつかり合いはすごいな・・・」

ネギは魔力が切れてきたのか、エヴァがやや押し始める。

が、その瞬間・・・停電が終わる。おそらく、学園長の仕業だとは思うが・・・まったく・・・

しかし、既に呪いが解けているエヴァには関係がない。そのまま魔法の応酬は続く。

遂に集中を切らしたネギが押し負け、闇の吹雪をその身に受けてしまう。

「う・・・うわああああああ・・・っ！！！！」

橋が損壊し、土煙と、水けむりが上がる。

もう被害を出さないでくれませんか？どう報告すればいいんだ？

吹き飛ばされたネギは、杖で体を支えて、なんとか立ち上がろうとする。

そこに、エヴァが近づき、水月に一撃。ネギは気を失った。

終わったみたいだし、行くか・・・

「お疲れ、エヴァ」

「ああ、トーマか・・・いや、なかなかどうして楽しめたよ」

「それは重畳・・・アスナもお疲れ様」

「本当よ。まったく、もう絶対こんなことしないからね!!」

「悪かったよ。それにしても、派手に壊したな・・・それに、おそろく今回の事で、呪いが解けたことが露見したな」

「ふん、知ったことか。第一、最初からそのつもりだっただろう？」

「それもそうだな」

ふう・・・まだ、エヴァには勝てなかったか・・・

「今回の事を踏み台にして、より高みへ登っていければいいんだがな・・・」

「大丈夫よ。こいつはナギに似て負けず嫌いだから、きっと・・・」

「それもそうか・・・じゃ、帰るか？」

「うん」

「ああ」

「ハイ」

はあ、多分エヴァの事で呼びだされるんだろうな・・・

面倒なことにならないければいいが・・・学園長は大丈夫だとしても、自称正義の魔法使いどもがなんと言ってくるか・・・いざとなったら実力行使で何とかすればいいだろ？

案の定、呼びだされ、呪いと魔力抑制の術式が解けていることを問い詰められたが、堂々と俺が解いたと言ってやった。ナギとの約束と、卒業までは麻帆良にいることを条件に、不問となった。ちなみに、後で、一斉蜂起して武力行使に出てきた正義バカどもは完膚なきまでに絶望を味あわせてやったら、やや廃人になったらしいがそんなことは気にしない。

P・S・エヴァとネギが破壊したものの修理はやはり俺がやるはめになった。何故だ・・・？

S
i
d
e

o
u
t

第十五話 壊し過ぎだ・・・（後書き）

まずは、H a t e・r e v o l v e様、ヒダリキキ様、カレーパン様、メガネ様、杉ちゃん様、龍賀様、感想、アンケートありがとうございました！！

今回はちょっと長めで、今までのトーマ&リリーのリアクトの方法の修正を強引に行う形になりました。

では、今回も楽しんでいただけたならば幸いです。

誤字、脱字指摘、感想、アドバイスをよろしく願います。

主人公設定 + α

主人公

トーマ・ミグラシオン

大戦時は周りからの無茶ぶり、ネギと出会ってからはもちろんネギのせいで、そして現在は3-Aの張っちゃけぶりに胃を痛める苦勞人。

設定にとくに変更はありませんが、仕事服版、そしてこっちが本当のトーマの容姿です。ということで、挿絵を張ります。どうぞ！！

> i 2 3 5 3 0 — 2 2 9 6 <

ヒロイン兼相棒

リリイ・シュトロゼック

基本いつでもここにこしている。

好きなもの：トーマ、アスナ、マナ、甘い物、紅き翼
嫌いなもの：特にない・・・

最近ようやくトーマとちゃんとしたリアクトができるようになった。

リアクト時、視界に移るものの情報を表示するとき、目は紫色
通常視界の時は緑色になる。

アーティファクトアンケートは終了しました。

第十六話 平穏な日々（前書き）

やや更新が遅くなりまして、申し訳ありません。

なかなかモチベーションが維持できなくて、内容も浮かばなかったもので・・・

PV120,000アクセス ユニーク14,000人突破!!あ
りがとうございます。これからも精進していきたい所存です。

では、第十六話始まります。

第十六話 平穏な日々

トーマside

ネギの試練も終わって、再び平和な日々が戻ってきた。

学園長は、ネギを勝たせる事で自信をつけさせるつもりだったが、そんな自信は自惚れでしかない。後々、大きな絶望を味わうにきまっている。

まあ、結果として、ネギは自分の力について見つめなおして、より意欲的になっているようだし、結果オーライ、むしろいい方向に転んだといえるだろう。災い転じて福となすってところか？

「コーヒー飲みたいな・・・」

「急にどうしたの？」

「いやな・・・これまで疲れることばっかだったし、一服したいなつてさ」

「そうだねえ」

ネギの面倒見たり、ネギのしりぬぐいしたり、ネギの（以下略

俺たちは、STAR BOOKSに行くことにした。

注文を終えて席を探していると、エヴァと茶々丸、ネギそれからなぜかアスナが座っていた。おそらく、迷惑料なんだろう。

「どうしたエヴァ？そんなしかめっ面して」

「いやな・・・こいつがナギの事を教えてくれとしつこいんだよ」

「ネギ・・・」

「いや、でも・・・父さんのことを何か知ってるはずだったので」

「知っているといっても、エヴァが知ってることなんて一般的に知られていることと、俺が既に教えたことばかりだぞ？後はプライベートルなことだろうな。あまり踏み込んでやるな」

「・・・はい」

「そんなに知りたいのなら、教えてやらんこともないが・・・私とサウザンドマスターの出会いくらいだぞ？・・・今思い出すだけでも・・・」

「い、いえ・・・遠慮します」

エヴァが苛立ったのを感じたのか、ネギも引き気味だ・・・本当に何をしたんだ、ナギ・・・

その後、ナギが生きていることを聞いて、気分を良くしたエヴァは、京都に手がかりがあると伝えた。情報量とか言っちゃっかり血を飲んでいたが・・・

そんなにうれしかったか・・・そういや、ナギって本当にどうなったんだろうな・・・

次の日、修学旅行が来週ということもあって、ネギは浮かれきっていた。

まあ、まだ子供だしな・・・仕方がない。こういつときくらいは子供でいさせてやってもかまわんだろう。

まあ、周りの奴らは若干呆れていたが・・・

教師が、生徒よりも浮かれているという状況はさすがにどうかとは思うが・・・

その後、しずな先生がネギを呼びに来た。どうも、学園長が用があるらしい。

また新しい試練でも用意するつもりなのかね・・・？ネギはまあ、原作よりはましになっているとはいえ、まだ弱いしな・・・魔力コントロールは教えたが、こっちの魔法は俺には使えんし、基本回避だけを仕込んできたから、白兵戦自体はそこまで教えていない。面倒なことにならなきゃいいが・・・考えるだけで胃が痛くなってきた。カットカット・・・

放課後、今度は俺が呼び出された。いやな予感が・・・

コンコン

「失礼します」

「うむ、入ってくれ」

俺は、その返事をきいて、中へ入る。

「それで、用件は？」

「うむ、今回ネギ君には西への特使として、親書を託しておる。そのサポートを「学園長」なんじゃね？」

それは建前だろうに・・・第一、東と西の長が義理とはいえ親子関係な時点で、その親書自体も意味があるか妖しいものだ。

「建前は結構です。本題は？このかの護衛ですか？ああ、盗聴やらの心配はありません。この部屋に入った時にすでに認識障害はかけてあります」

「すまんの。で、その通りじゃ。君にはこのかの護衛をお願いしたい。知つての通り、あの子の魔力はサウザンドマスターをしのぐほど、君と同格のものじゃ。しかし、あの子は親たつての願いで、魔法の事は何も知らん。刹那君は、負い目、引け目を感じているようで、このかに近づこうとせんのぞな、念のためじゃよ」

「そうですか。まあ、刹那には一度言い聞かせておいたのですが・・・やはり、ふつきれていないようで・・・それに、体の事以外にもなにか思うところがあるようで・・・それが拍車をかけているようです。それはともかく、護衛の件はお引き受けしましょう。戦友、いや、親友の娘ですからね。頼まれなくても、守りますよ。3-Aの皆が巻き込まれないように気を配らなきゃいけないので、守りきれるか、刹那にかかっているのですが・・・」

「そうじゃの。うむ、では、任せたぞい、トーマ殿」

「はい」

俺は、図書館島にいるはずのアルのもとへと赴いた。

すると・・・

―グルルルルルルルルルルル・・・―

「ワイバーンか・・・悪いが通させてもらっ

そして、俺がディバイダーを展開しようとする・・・

「ストップです」

懐かしい声が響く。

「彼らは良いのです。お久しぶりですトーマ、リリィ。十年ぶりくらいでしょうか？」

「そうだな、アル。負傷して療養中と聞いたが、大丈夫か？」

「久しぶりだね、アル」

「ええ、ここは魔力も豊富ですし、少しずつですが、快方に向かっていますよ」

「そうか・・・で？お前がここにいる本当の理由は？」

そう、傷をいやすだけなら別にここにいる必要はない。魔力が豊富な所など、ここ以外にも多くある。わざわざここに常にとどまる必要はない。

「ええ、あなた方にはお話ししておきましょうか・・・十年前、ナギの真実を・・・知っておいて貰ったほうが、後々助かりますし。あなたは紅き翼最強でしたから・・・」

そして、俺は驚愕の真実、想像もしていなかったものを目の当たりにすることになった・・・

世界樹の直下最下層で、まさかあんなものを目にする事になるとは思っていなかった。

その後は、久しぶりにあった友と、お茶を飲みながら談笑し、別れた。

「そういえば、そろそろアスナの仮の誕生日だな・・・借りとはいえ、アスナ・・・いや、神楽坂明日菜が産れた日だからな、祝つてやらないと」

「そうだね。プレゼント何にしようか？」

「そうだな・・・うーん」

いい物が思い浮かばんな・・・服・・・いや、あいつは然程着る服には頓着しないしなあ・・・なんか違う・・・

「無難にアクセサリーでも買ってやろうかな・・・ネックレスか、ブレスレットか、付けてもあまり邪魔にならない物がいいな」

「うん。きつと喜ぶよ？そうだね・・・手作りなんかだといいいんじゃない？」

手作りか・・・これでも前世からそこそこに手先は器用だったんだ。形は・・・

「ネックレスにしようか。アミュレットのようなものにして、デザインは・・・剣十字にしておこうか」

「うんうん！！いいね、それ」

よし、早速帰って作るかね・・・

次の日には完成してしまった。

「暇だな・・・出かけるか？」

「そうだね～。行こうか」

俺とリリイ遠出して、東京までやってきた。

STAR BOOKSで俺はコーヒーを、リリイはあまいラテを購入し、歩きながら飲むことにした。

「味はいいんだが・・・量が多いな」

「そうだね」

どーでもいい話をしながら歩いていると、このかがネギと歩いていた。ああ、彼女たちもアスナにプレゼントを買いに来たんだろう。よく見ると、後ろを妖しげな三人組がこそこそしながらつけていた・・・椎名に柿崎、それと釘宮か・・・なにやってるんだ？

「デートだと思ってるんじゃない？3-Aって面白い物好きだし」

なるほどな・・・かわらないに越したことはない。別のほうへ行こうか・・・無駄に巻き込まれでもしたら目も当てられん。ただでさえ日頃ストレスで胃が大ダメージを被っているんだ、これ以上悪化されてたまるか！？

しかし、天は我を見放したらしい・・・俺たちが行くところ行くところ、なぜかこのか達がやってくる。そして、当然のごとくあの3人もやってくる。これは何かの陰謀か？（作者の陰謀です！～）
む？何か電波が・・・俺も遂に末期か？

俺はあいつらに見付からないようにやや隠れながら、移動を繰り返した。・・・あれ？これってあんまり意味ないような・・・

で、いろんな店を回りながら、新しい靴を買ったり、ウォー。マンを買ったり、CDをレンタルしたり、後のほうではさすがに來なくて助かった・・・

リリイも少し歩き疲れたようで、そろそろ帰ることにした。

で、麻帆良に帰ってくると、ネギとこのかが階段で休憩していた。なるほどな・・・これを見たらデートと勘違いしてもおかしくないな・・・膝枕してるし・・・

よくあるおまじないのように、このかが指を振った。すると、このかの人差し指にわずかに魔力の光がとる。

「む？このかはまだ、覚醒してはいないはず・・・なぜだ？」

「もしかして、中途半端な仮契約を結んじゃったんじゃない？」

「なるほどな・・・あのオコジョか。まったく、今度一回占めたほうがいいかもな」

そんな話をしていると、このかがネギにキスをしようとしている。キスするとカードがでるって・・・いや、魔法陣書かないとダメだし・・・って、やっぱやーめたって・・・まあ、さすがに恥ずかしかったんだろう。

すると、植え込みからあの3人と、雪広となぜかアスナが走ってきた。

また巻き込まれたのか・・・アスナ・・・俺と一緒にいたからか？俺の苦勞人体質がうつったのか？

このかとネギも、ばれたかーとか言ってるが、間違いなく勘違いだ。

そして、ネギはアスナにプレゼントを渡す。アスナは嬉しそうに、雪広、三人組はぼかーんとしている。

俺たちも出て行っっていいかな？ちょうどいいし、一緒に渡してしま
うか。

「お前ら、こんなところで何やってるんだ？」

「「「「「「と、トーマ（先生）！？」」「」「」「」

「いついえ！！決して、このかとネギくんが付き合っと思って
後をつけてたとかじゃないですよ！？」

「ええ！？そんなわけないですよ！？」

「そやえゝネギ君かわええけど、まだ子供やし」

「ばかッ！！桜子何墓穴ってんのよ！？」

「しまったあああ！！」

はあ、あほらし・・・

「そんなことはどうでもいい。で、アスナ」

「ん？なに、トーマ？」

俺はリリイに目くばせして、頷きあう。そして、懷から一つの小さな箱を取り出した。

「ほら、一日早いが俺達からも誕生日プレゼントだ」

「え、え・・・あ、ありがとう・・・／＼あ、開けてもいい？」

「いいぞ？」

「じゃ、じゃあ・・・」

アスナは恐る恐るといった感じでケースを開ける。

「くくくくくわあくく・・・」「くくくくく」

「女の子向けのプレゼントとしては少し無骨かとは思ってたんだが、これくらいしか思い浮かばなくてな」

「こっこれ、手作りですか？」

「ん？そうだが？」

「すっごくいい！！トーマ先生こんなこともできるんだ」

「ちょっとした趣味の延長だ。大したものじゃない」

「・・・」

む？さつきからアスナが黙っているが、どうしたんだ？

「アスナ、どうかしたか？」

「えっ！？う、ううん・・・なんでもないよ！！あ、あり・・・が
とう・・・ひくっ」

アスナがいきなり泣き始めた。

「どっどどどうした！？アスナ！？」

「あートーマ先生泣かした」

「よっ、この色男！！」

「古いよそれ」

「お前らな・・・」

「あはは」

そんな問答の間にもアスナはぼろぼろと涙をこぼす。

「ごほん！！で、どうしたんだ本当に・・・」

「ううん・・・グスっ・・・うれ・・・ヒクッ・・・嬉しくて・・・」

「そうか、そんなに喜んでくれてうれしいよ」

「うん・・・」

そして、今度はアスナは、とびっきりの笑顔を見せてくれた。一瞬見とれてしまったのは秘密だ。

「さて、日も傾いてきたし、そろそろ帰ろうか」

「・・・うん!!」

俺とリリイ、アスナは並んで歩いて寮へと帰った。

三人組が、雪広に追いかけられたりしていなければ、それはそれは微笑ましい光景だっただろう・・・

そう、追いかけてさえいなければ・・・

台無しだ・・・

ちなみに、このかとネギはそんな光景をみて、苦笑いしていた。

・・・こんな日々が、続いていけばいい・・・そんな思いを抱きながら、俺は夕陽を背に寮への道を歩いた。

S i d e o u t

第十六話 平穏な日々（後書き）

では、ユタ様、ケルベルス様、コルク様、龍賀様、メガネ様、om
e g a z e r o 様、レット様、竜王&竜姫 様、感想（まあ、設定
でしたけどね）及び、アンケートご協力ありがとうございました！！

まさか、こんなに感想をいただけるとは思っていなくて、すごくう
れしいです！！

お待たせして申し訳ありません！！今回、アスナへのフラグ強化回
wwでした！

十年前の話は、マガジン派でない人のために、省略しました。楽し
んでいただけたなら幸いです。

では！！

誤字脱字指摘、感想、アンケート諸々お願いします！！

番外編くぱっつあん様とのコラボく トーマ魔改造（前書き）

今回は、ぱっつあん様の作品、その竜族は狙撃手なりから、シキ・K・アスタロトを招きます。

では、魔法先生ネギまForceく護る者と支える者く始まります。

番外編くぱっつあん様とのコラボく トーマ魔改造

くトーマsideく

吸血鬼事件が終了し、俺はリリィと別荘でコーヒーを飲みながら、ゆったりとした日々を過ごしていた。こんなにゆっくり出来たのは、一体いつ以来の事だろうか・・・

あれ？コーヒーが少ししょっぱいな・・・

「なんか、いやな予感がするんだが・・・こういう予感は今よく当たるからな。何事も起こらないことを祈ろうか」

「そうだね。でも、それってフラグのような気もするんだけど」

とそんな話をしていると、別荘内に轟音が響き渡った。

「・・・・・・・・・・」

はぁ・・・なぜだ？

とりあえず、件の方へ向かうと、銀色の髪を三つ編みにして腰まで伸ばした男性にも女性にも見える中世的な顔立ちの人？と、小さな女の子が倒れていた。？とは、頭に角が片方だけ生えてたからなんだが・・・

「う・・・」

「うう・・・」

すると、その人が目を覚ました。

「む・・・ここは？私は紛争地域にいたはずだが」

「ここ、どこ？」

その人はよく見ると・・・

「あれ？シキさん？」

「む？トーマか。ということは、ここはトーマの別荘か何かということか」

「はい。いきなり別荘に轟音がしたので驚きましたよ」

「そのことは、説明する」

「ところで、そっちの女の子は？」

「義娘のミカだ」

「はじめまして、ミカ・クロカミです」

「ああ、始めまして、トーマ・ミグラシオンだ。こっちは」

「リリイ・シュトロゼックだよ」

「はい。よろしくお願いしますです」

その後、四人で茶を飲みながら、シキさんたちがいきなり別荘の中に現れたことについての説明を受けた。前回、龍斗が来た時みたいに空間の歪みに呑み込まれたらしい。

（そこ！二番煎じとかいうな！！by作者）

「はぁ・・・なるほど・・・多分うちの女神様が原因だと思います」

「ふむ・・・まあ、せつかく来たんだし楽しむとしよう」

「そうですね」

シキさんの世界がどうなっているとか、ちょっとした昔話とかをしながら過ごした。

「そうだ、シキさん、精密射撃の訓練をしてくれませんか？」

「む？なるほど、君も銃を武器に使うのだったな」

ハンドガンか、スナイパーかの違いはあるが、銃器関係なら、シキさんの右に出るものはいない。

「この先、また俺は闘うことになります。大戦が終わって随分たちました。今のままでは俺は護りたい者も護れないかもしれない。だから、いまここで昔の感覚を取り戻し、もっと強くなりたいんです」

「ふむ、了解した。そういうことなら協力しよう」

「ありがとうございます!!」

それから、俺の地獄の特訓が始まった。

あれから、射撃の訓練、近接格闘、中距離、遠距離戦闘訓練、模擬戦など、延々と繰り返した。大戦を生き残ってきたとはいえ、シキさんとは年季が違うから、最初はまったく手も足も出なかった。デイバイドしようにも、撃ってくる魔力弾の数が半端じゃないし、神格としての力も相まってその差は歴然だった。まず、俺には基礎体力が足りていないらしく、そこから鍛えていった。

そんな訓練を別荘の中で時間の感覚も忘れるくらい繰り返した。腕が吹き飛ばされた回数も数知れない。足がなくなったことだってあった。

まあ、そんな地獄の訓練の甲斐あって、互角とまではいかないが、そこそこに戦えるようになってきた。神格の力なんか使われたら一瞬だけど・・・

俺が地獄の特訓をしている間、リリイとミ力はずっと遊んでいたらしい・・・なんだろう、目からしょっぱい何か・・・

「シキさん、ありがとうございます」

「ああ、大戦時とは比べ物にならないくらいに強くなったのではないかな？魔力量も上がったようだな」

シキさんとの訓練のおかげで、魔力量が増大した。龍斗の世界でいうところのSSS+といったところだろう。まあ、それでもシキさんには全力でやってかすり傷程度しか与えられないわけだが・・・

「一番上がったのは砲撃の威力と近接格闘能力、あと速度ですかね？」

「そうだな、瞬動はもう縮地の域だろう。それを空中で出せるのだから、君の空中戦闘能力の高さをうかがい知れるよ」

「まあ、シキさんの攻撃を凌ぎながら、さらに攻撃しに行くには航空戦技を鍛えるしかなかったですからね。っと、そうだ！ちよつと出かけませんか？修行の空き時間にフィリスに聞いてみたんですが、シキさんが元の世界に戻っても時間は変わってないらしいです」

「ふむ・・・そうか。最近は殺伐としたところしか回っていなかったからな。ミカにも普通の暮らしを体験させてやりたい」

「なら、決まりですね」

「リリイ」

「ミカ、すこしこつちへ来い」

「なに（です）？」

浜辺で遊んでいた二人を呼ぶ。

「シキさんとの修業もひと段落したし、ちょっと出かけようと思つてさ」

「こここのところ、殺伐としたところしか行つてなかったし、それに旧世界の街を見て回るのもいいかと思つてな」

「行きたいです！」

「行こうよ。買い物とかミカと一緒にしたいし」

「すっかり仲良くなつたみたいだな、二人とも」

なかなか微笑ましい光景だな。

「では、行くでしょうか」

「どこに行きましょうか？」

「麻帆良内がかまわんだろう」

確かに、時間とかの関係上さすがに遠出するわけにもいかないし、麻帆良にもいいところはたくさんある。

「じゃあ、行きましようか」

俺たちは別荘から出て、麻帆良の町へ向かった。

麻帆良は、学園都市というだけあって、若者向けの店が多い。
リリィとミカは一緒になってぬいぐるみやアクセサリー、服などを
見て回っていた。

「可愛い女の子がああやってはしやぎまわってるのを見ると、なん
ていうか・・・こう、胸が暖かくなりますね」

「そうだな・・・それにしてもさつきからやけに視線を感じるんだ
が、一体なんだ？」

「シキさんは、十人が十人すれ違えば振り向くほどに美人ですから
ね。まあ、男性を表現する言葉としては不適當ですが、それ以外に
は表現できません」

「そうか？だが、君も顔立ちはかなり整っているとは思っぞ？」

（この二人、実際かなり整った容姿をしている。シキは美人、トーマは所謂イケメンである。チツ・・・自分たちに向けられる視線の意味をよく理解していないようだ・・・鈍感めby作者）

「何やら電波を受信したみたいだが・・・何だ？」

「あれ？シキさんもですか？」

「なんだ、トーマもか？何なんだいったい？」

そんなこんなで、麻帆良のいろんな店を回って歩いた。リリィは本来ミカよりは年下のはずだが、外見的に見て、お姉さんのようだ。実際その様子はどこから見ても中のいい姉妹にしか見えない。

「平和ですね」

「平和だな」

『『『なんでこいつらこんなに枯れた雰囲気醸し出してるんだ？』』』

『

（街ゆく人々はこの二人の会話を聞いてきつとこんな気持ちになっているに違いない。何せ、この二人、外見はかなり若い。シキは見た目20代だし、トーマに至ってはどう見ても十代後半だ）

「トーマ！！置いてくよ！！」

「おいてきますですよ！！シキお父様」

俺とシキさんは顔そんな二人に少し苦笑を浮かべて、二人についていった。

毎度お決まりのようだが、俺たちはSTAR BOOKS COF FEEで各々好きなものを注文して歩きながら飲んでいる。そして、

やはりお決まりのように世界樹までやってきた。本当は登るのはいけないんだろうが、眺めがいいし、世界樹に吹く風が気持ちいいからな。何度来ても飽きない。

「綺麗です」

ミカも気に入ってくれたかな？

「なかなか壮観だな・・・俯瞰風景というのはなかなかいい」

「俯瞰の視界は中毒的要素がありますけどね・・・いすぎるのは良くないけど、俺はここから見る世界が好きなんですよ。自分を再確認できますから」

「再確認？」

「はい。これだけ大きな力を持っていると、どうしても時々うぬぼれてしまうんです。自分にできないことはあまりないって。でも、こうしてここから世界を眺めると、自分はちっぽけなんだって、世界を回す小さな歯車の一つにすぎないって、再確認できるんです。自分をより高められるんですよ。ただ、この景色が好きって言うのもありますけどね」

「なるほどな」

春の風は少し強いが、涼しくて少し暖かくて気持ちがいい。俺は冬が一番好きだな。

「ん？」

隣を見るとリリイとミカが肩を寄せ合って眠っていた。なかなか微笑ましい光景だ。

「ふふ、眠っちゃいましたね」

「そうだな。仕方がないさ、こんな平和な空気のところはあまり行かないしな」

俺も大戦が終わったばかりのころは、罪滅ぼしみたいな感じで戦後復興の手伝いや、紛争地域での救済活動をして回っていたし・・・
そんないい雰囲気だったのに、こんな時に限って悪いことは起こるものだ。

いつものように、封時結界が展開された。はぁ・・・いい加減学習しろよ下級神・・・

「トーマ、これは？」

「ああ、俺の主？みたいな感じの女神で、上級神のフィリスは神様の中でもかなり若いらしいんですよ。まあ、俺たちと比較したらかなり長く生きてるわけなんですけど・・・それで、その若さに見合わぬ才能を持っているフィリスを、無駄に年だけ重ねた下級神がねたんで時々フィリスの目を盗んで転生者を送ってくるんです。この世界はフィリスが管理してるので」

「なるほどな・・・どこにでもいるものだなそついう輩は」

「まったくです。はた迷惑な話ですよ・・・って、今回は2人同時のようですね・・・」

それにしても何で送られてくる場所は必ず世界樹広場なんだろうか？世界樹は魔力だまりの一つだからマナが豊富だし…干渉しやすいのかもしれないな。

「あいつらの話を聞く限り、やはりこの世界を物語の中と勘違いしているバカのようなですね」

「そのようだ。ああいう輩は見敵必殺に限る」

あのバカどもが無駄にでかい声で笑うから、リリイとミカが起きてしまった。

「ふ……フフフフフフフ……」

「リリイと」

「ミカの」

「安眠を邪魔するとは」

「「万死に値する！！」」

「リリイ、済まないが早速仕事だ」

「えゝまた来たの？こりないねゝ」

まったくだ。

「ミカ、少しここで待っていてくれるか？」

「わかりました。いつてらしゃいです、お父様」

中睦まじい親子だな。

——リアクト・エンゲージ——

俺はディバイダーを第二形態にする。

「じゃあ、俺はあつちの青髪のを殺りますんで、シキさんはもう一方をお願いします」

「了解した。まあ、あの程度相手にもならんが」

そういうと、シキさんはバカの片割れのまわりに二重螺旋の魔法陣を大量に展開させる。そこから無数の魔力弾が発射され、片割れはチリとなって消えた。・・・さすがにアレには俺も同情を禁じ得ない・・・

「じゃあ、行つてきますね」

『いつてくるよ』

「ああ、行つてこい」

「いつてらっしゃいです・・・あふ」

ミカはねむたそうだ。

あくびをするや否やシキさんの膝枕で寝始める。

「では・・・」

俺は世界樹の枝の上から飛び降りる。

シキさんとの修業の成果を試すにはいい機会だな・・・簡単には死んでくれるなよ？かませいぬ転生者・・・

さて、ここはセオリー通りに行こうかな・・・

「貴様は何者だ？何の目的で麻帆良に侵入した？」

「な・・・っ！！こんなやつ、原作にはいなかったぞ？しかもどう見てもあれはデИБライダー996の第二形態じゃねえか。見た目もトーマだし（ぼそっ）」

「早く答えろ・・・貴様は何者で、何の目的で麻帆良に侵入した？」

まあ、バカ正直に答えるわけないが・・・

「ハーレム作るんだよ！！チート能力ももらったしな！！お前もそうなんだろ？」

バカだ・・・バカがここにいる・・・

「あほくさ・・・こんなやつを相手にしなきゃいけないと考えるだけで頭痛い・・・」

「何だとてめえ！」

「まあ、俺も教えてやるよ。俺はこの世界の管理者の眷属にして、

代行者といったところだ。貴様のようなバカを葬る事が俺の仕事の一つだ」

「バカはてめえだろ！？みたところお前の力はデИБライダーみたいだが、そんなんでチート能力を手に入れた俺に勝てると思っただのか？」

なぜだ・・・なぜここに送られてくる転生者はこんなものばかりなんだ・・・

「借り物の力でそこまで大きく出れるとは恐れ入るよ。俺の刃の錆になってくれ」

「やれるもんならやってみな！！」

そして俺たちはぶつかり合う。

しばらく準備運動を兼ねて、修行前くらいの力に抑えて攻撃を繰り返す。

「はっ！！その程度かよ！！」

なにやら勘違いしたバカがほざいているが、無視して瞬動、虚空瞬動を駆使しているんな方向から剣戟を繰り返す。相手に気付かれない程度に少しずつ速度を上げていく。

「つつ！！くう！！」

やっと気付いたみたいだな・・・俺の速度についてこれなくなったのか、転生者は防戦一方になる。そして遂に俺の一撃が入る・・・

かと思われたが・・・

「なるほどな・・・十二の試練ゴットハンドか・・・面倒なものを」

俺の刃はバカの体にあたったところで進まなくなった。

「そうだ！！Aランクに満たない攻撃の全てを無効化する、つまり、
てめえは俺には勝てねえんだよ！！」

はあ・・・阿呆が・・・

スパッ

そんな音とともにバカの腕が飛ぶ。

「は？」

転生者バカは呆けた顔をしている。自分の腕が切り飛ばされたことに驚いているようだ。

「な・・・なんでだ！！？なんで切れるんだよ！！？」

「Aランク未満の攻撃を無効化するなら、それ以上の攻撃を加えて
やればいいだけの話だろう？そんな単純なことも分からないのか？」

とはいったものの、本当は込めるエネルギーを増やしただけだ。十二の試練ゴットハンドはヘラクレス、つまりギリシャ神話の大英雄で神の子の伝承が宝具となったものだ。人如きがたやすく持てる代物じゃない。所詮は劣化品にすぎない。だからたやすく切り裂ける。十二の試練は組成魔術の重ねがけだから、纏っている魔力を分断ディバイドしただけだ。

「この野郎・・・クロス、殺す、ころす！！^があああ・・・」

狂化スキルか・・・まんまバーサーカーの能力をもらったみたいだな・・・確かに威力は上がるが・・・

「当たらなければどうということはない」

俺は高速移動でよけ続ける。そろそろ面倒になってきたな……

「ちょうどいい。ある人からもらった力を試すにはもってこいだ。行くぞ・・・」

ジャッジメントハルバード
英雄姫の輝きの祈り

本来は大量の魔素を武器にまとわせる技だが、ディバイダーはその結合を分断してしまう。だから魔素を取り込んで物理エネルギーに変換して纏わせ、敵を切り上げ吹き飛ばす。

「俺は貴様の存在を認めない」

高速で虚空瞬動を行いながら縦横無尽に飛び回り、無数の剣戟を繰り出す。

「俺は貴様の価値を認めない」

どんどんスピードを上げていき、切った回数すらも分からなくなる。とどめに大きく真上に蹴りあげる。

そして、リリーの命令で銀十字の書からページがページされ。二つの代償の円環を俺の頭上につくる。

俺は、ディバイダーを的に向ける。

「■うう・・・ぐあ■・・・」

「とどめだ。堕ちろ...『ディバイドゼロ・エクリプス』」

俺は収束砲撃バージョンのエクリプスゼロを打ち込んだ。

転生者は跡形もなく消滅した。

「消し飛ばしておいてなんだが・・・来世での貴様の生に幸多からんことを祈ろう」

やっと終わったか・・・バーサーカーとはまた面倒なものだな。殺しても生き返るなんて厄介きわまりない。

「ふう・・・さすがに疲れたな・・・」

そんなことを考えていると、

ザシュッ・・・

ぼろぼろの体で、ぼろぼろの武器を持って俺の体を突き刺していた。

「が・・・ち、くしょう・・・俺も慢心していた・・・ということ・・・か？」

「オレハ、シナナイ・・・シナナイ!!」

「くそ・・・面倒な・・・」

とりあえず俺は後ろから刺してきた転生者を蹴り飛ばす。剣が抜けたところで、体を再生する。

「こういうときばかりは、エクリプスに感謝だな」

『そうだね。エクリプスじゃなかったらちよつと大変だったかな？ ジャックだったら、関係ないかもしれないけど』

まあ剣刺さんない奴第一号だからなあ。筋肉ダルマは。

リリイとのんきに会話していると、いきなり転生者が消えた。

「なっ!!どこに?・・・後ろか!?!」

いきなりスピードが上がったことに驚きつつもなんとか対処する。ヘラクレスの力以外にも、何か受け取っていたようだな・・・

「ガアアアアアアアアッアアア!!」

少し理性が戻ってきているか?面倒な・・・

そんなとき、数発の魔力弾が、転生者の四肢を貫く。

「シキさんか?さすがの精密さだな。点を撃たなかったのは、俺への試練といったところかな?」

その後も、転生者の動きはどんどん良くなっていく。まるで、こちらの動きから全てを吸収するかのよう。

「ちつ・・・見稽古か、完成か・・・そんなところか？仕方ない、少しだけ本気を出すか、リリイ！！」

『うん！！リミッター1～5を解除！！』

俺は魔力以外にも身体能力をはじめとしたいくつかにリミッターをかけていた。まあ、シキさんの命令なんだけどな。

「今度こそ、終わらせてやるよ」

シキさんの援護射撃を受けながら、俺は一瞬で転生者に肉薄する。そして、ディバイダーを思い切り突き刺して、真上に持ち上げる。

「今度こそ、無に帰せ！！『ディバイドゼロ・エクリプス』！！！」

天に向かって銀色の光の柱が伸びる。

その光が消えると同時に、ガラスが割れるような音も立てて結界が消える。

「ようやく、終わったか・・・」

リリイとのリアクトをほどく。

「お疲れ様」

すやすやと眠るミカを抱いたシキさんがやってくる。

「援護射撃感謝します」

「あの転生者もなかなか面倒なものを持っていたようだな」

「はい。まさか、こちらの動きを見てさらにその上の力を出してくるとは思いませんでしたよ。まあ、シキさんの修行のおかげで、リミッターを一部外したら、難なく勝てましたけど」

「今度はリミッターを外さずにで勝てるようにならないとな」

「はい。でも、道が見えてきましたよ、^{マスター}師匠」

「それは鍛えた甲斐があつたというものだな」

本当なら、弟子の成長に喜ぶ師匠というなかなかいいシーンのはずだが……

眠っているミカを抱いてるし……しまらないな

「そうだ、これお土産です。大した効力はありませんが、御守りみたいなものですよ。ネックレスタイプですが、魔力を込めれば、任意対象にディバイドをかける効果が付与してあります。つまり、相当範囲を絞ったエクリップスみたいなですね。対象の周囲に展開した魔法陣が、たとえば対象が魔法使いなら、その魔法使いのありとあらゆるエネルギー、魔力、生命力その他諸々をディバイドします。一瞬で8割がたを消滅させる効果がありますよ。まあ、役に立つかは分かりませんがね？あと、リリーの歌が入ったウォー。マンです。リラックスしたいときとかに最適です。リリーの歌には癒し効果がありますから」

「いや、ありがたい。なかなか心配なのが周りに増えてきてるからな」

「そうですか。そっちも大変そうですね・・・」

そんな他愛もない話をしながら、世界樹の上で過ごした。しばらくそうしていると、前回と同じく、空間に歪みができる。

「時間のようですね」

「そうだな・・・ほら、ミカ、挨拶を」

「うゆ・・・さようならです・・・くう・・・」

「フフフ」

少し苦笑しながら、リリイはミカの頭をなでる。

「では、またいつか」

「ああ、またいつか」

そう言つて、シキさん達は歪みの中へと消えていった。

はあ・・・今回も疲れた。でも、得るものは大きかったな・・・

「そつえば、そろそろ修学旅行か・・・」

「そうだね、楽しみだよ」

さて、どうなるのかな？

俺はまた、リリイの膝枕のやわらかい感触を感じながら目を閉じた。

S
i
d
e

o
u
t

番外編くぱつつあん様とのコラボ くトーマ魔改造（後書き）

シキの口調が安定しない・・・こんなんでいいんでしょうか？
しかもミカがほとんど絡んでない・・・最期とか寝てたし・・・
分かん・・・

まずは、感謝を！！キャビア伯爵様、メア様、ヒダリキキ様、龍賀様、ユタ様、カレーパン様、メガネ様、雨季様、感想ありがとうございます！！
ざいました！！

今回はコラボだったわけですが、どうでしたでしょうか？あんまりシキが出てなかった気もしますが、私の技量では・・・すみません！！口調とかもつとここをこうしろよ！！とか、こんな風にしてもつとシキを出せよ！！とかあったら遠慮なく言ってくださいね？

次回も多分コラボです。

では、誤字脱字指摘、感想、アドバイスをお待ちしております！！

番外編コラボ〜キャビア伯爵さまとのコラボです〜前篇 邂逅（前書き）

キャビア伯爵さまとのコラボです！

アリアがネギま世界にやってきます。

ちなみにこの番外編はそのまま本編に直結します。

そのへんは本文にて・・・ちなみにキャビア伯爵さまから許可はもらっています。

では、番外編始まります。

番外編コラボ〜キャピア伯爵さまとのコラボです〜前篇 邂逅

トーマside

アスナの誕生日の後、学園内は修学旅行へ向けての準備で皆せわしく毎日を送っている。

かくいう我が3・Aも皆浮足立っているようだ。

まあ、俺としても数年ぶりの京都ということで楽しみにしている。

ちなみに、リリーの修学旅行への同伴は学園長に許可は取っている。寮に5日間もいなくなるのだ。さすがに一人残していくのはかわいそうである。

もとよりおいていく気はさらさらなかったわけではあるのだが・・・皆修学旅行でどこへ行くか、何を食べるかなど楽しそうに相談していた。

と、そんな感じでその日の授業も終わり、今はSHRだ。

「みなさん！来週は修学旅行ですが、しっかり準備をしておいてくださいね！..」

ネギが一番浮足立っている気がするが、こんなときくらいは別に年相応でもかまわないだろう。いずれそうも言っていられなくなる時が来る。

さらに言えば、それはもう間近に迫ってるわけだが・・・

そんな感じで、その日も終わり、俺はリリーと一緒にいつも通り世界樹の上で風にあたっている。昼間は暖かな陽気で過ごしやすいが、夕方にもなると少し肌寒い。

その風が気持ち良かったりするんだがな。

「やっぱりいいな・・・ここは」

「そうだね」

リリイも少し声がふやけている。

「~~~~~」

リリイは気分が良くなってきたのか鼻歌を歌っている。
まあその声だけで癒されるわけだが。主に俺の胃が・・・

そんな感じで世界樹で過ごしていると、次第に日も落ちて暗くなってきた。夜空には星がきらめいている。

「世界樹から眺める星空もなかなかいいものだ・・・」

すると、空のある一点にひときわ輝く星を見つけた。

「なあ、リリイあの星・・・だんだんでかくなってきてないか？」

「そつえばそんな気もするね。なんだろう？」

そんなことを言っている間にも星はどんどん大きくなってきている。

「もしかしなくてもこっちへ落ちてきてるのか？」

俺は急いでその落下点へと潜りこむ。光はどんどん大きくなってきていて、よく見るとその中に人影が見える。

「あれは・・・アリアか!？」

地表に近付くと、その光は急速に落下速度を緩める。
そして、落ちてきた小さな体を俺は優しく抱きとめる。

「よう、アリア。どうしてこんな所へ？」

「トーマ君？」

「アリアだ」

「ひうッ・・・!!リリイちゃん？」

リリイが俺からアリアを奪い取るような形で抱きしめる。

「へうううう・・・」

リリイは何やらアリアを抱きしめてトリップし始めた・・・リリイ・

アリアは俺に助けを求める視線を送ってくるが・・・

「リリイ、そろそろその辺で放してやれ。アリアが苦しそうだ」

「はい」

「助かったあ・・・ありがとうトーマ君」

アリアが上目づかい＋涙目で見上げてくる。

・・・うんこれは可愛いな・・・さすがアリア。どこからどう見て

も美少女だ。

俺は思わずアリアの頭をなでていた。

「はうう・・・」

「つと、すまん。いやだったか？」

「ううん、そんなことないよ」

「そうかい？で、話は戻るんだが、何故この世界に？」

「あ、それは『それは私が説明するよ』・・・俺の台詞・・・」

「フィリスか、一体何が？」

『んつとね？アリアの事なんだけど、アリアにはなんか天使と同じ力が宿ってるみたいで、聖枢っていうらしいんだけど、その制御のためにアリアのこの神様・・・名前なんて言ったっけ？まあいいや・・・とにかくこつちの世界で面倒をみるように頼まれたんだよ』

「なるほどね・・・確かに、アリアの世界ではそんな巨大な力を扱う練習をすることも厳しいだろうしな・・・了解した。アリアの面倒は俺たちが見よう」

『ありがとね〜じゃ、また何かあったら頼むね〜』

「はい」

そしてフィリスは消えた。

「とりあえず、ようこそアリア。俺たちは君を歓迎するよ」

「いらっしゃい」

「………うん!」

そんな感じで、アリアのネギま世界は始まった。

俺たちはとりあえず、学園長のところへやってきた。

そして、アリアの事と、麻帆良へやってきた理由を多少ぼかしながら報告した。

昔旅をしているときにあった子で、少しの間面倒を見ていたことがあった。最近になって事件にあって逃げるために麻帆良にやってきたという具合にな。ちなみにその事件の主犯は既に死んだことになっている。またアリアには事情があって戸籍がないことも言った。

「ふむ、あい分かった。そういうことならいいじゃろ。ふおっふおっふお、トーマ殿、アリアちゃんの面倒をよろしく頼むぞい」

「分かっています。あと、アリアは男ですよ?」

「ふおっ!?!?そ……そりゃあ、すまんかったのお、アリアくんや」

「い・・・いえ、慣れてますから」

そんなのに慣れたくはないな普通・・・

「じゃあ、今回はそれだけです、これで失礼します」

「あの、学園長先生、ありがとうございました」

「ふおっふおっふお、気にするでない。君のように困った若者を追出すほど落ちぶれてはおらん。また明日朝ここに来てくれい」

「分かりました」

見た目は人間やめてるけどな。

「失礼しました」

「とりあえず、寮監室に行って今日はもう寝ようか」

「うん」

とにかく明日だな・・・

そして、寮監室に戻ってきた。

「なにはともあれ、大変だなアリア」

「そうだね」

「あの世界と違うのは非殺傷っていうのがないことだね」

「だが、アリア自身にはあまり関係のないことだろう？人を殺すことに関しては分からないが、自身の力の持ちように関しては分かっているだろうし」

「うん」

「えへへ／＼／」

「さて、ここで一つ提案なんだが」

「何？」

「俺（私）たちの息子にならない（か）？」

「え・・・？」

「いや、アリアがいやならいいんだが」

「・・・ううん。嬉しいよ！！！」

「・・・そうか？なら改めてよろしくな、アリア」

「よろしく、アリア」

「うん、よろしく、父さん、母さん」

こうして俺たちに息子ができた。

結婚も考えてみようかな・・・

翌日、俺たちは再び学園長室を訪れた。

「ふむ、ではアリア君はトーマ殿とリリィ嬢の義息子ということでよいのじゃな？」

「はい。本人の同意も得ました。戸籍に関しては、名前はアルトリ
△インライト
ア・M・ミグラシオンでお願いします」

「あい、わかった。では本日より麻帆良学園中等部3・Aに飛び級で編入という形でよいかな？」

「はい」

「では、これが制服じゃ。男女共学化のテスト生という形での編入になる。女子の中に男一人というのも大変じゃろうが、頑張ってくれ」

「大丈夫です」

まあ、今までもある意味女性だらけのところにいたわけだしな。

「じゃあアリア、そろそろ行こうか」

「うん、父さん」

「学校ではトーマ先生にしておいてくれ」

「わかりました、トーマ先生」

「そうじゃ、しずな先生、アリア君を更衣室に案内してくれんか？」

「分かりました。それじゃ、アリア君？ついてきて」

「分かりました」

俺は更衣室の外でアリアが着替え終わるのを待っていた。中からは何故か知らんがリリイとしずな先生の黄色い声と、アリアの悲鳴が聞こえてきている。

「頑張れ、アリア・・・俺は・・・男は・・・無力だ・・・」

それから数分後、アリアは三人はようやく出てきた。

「うう・・・汚されちゃったよう・・・」

何があつたのかはあえて聞くまい・・・

「と・・・とにかく、教室へ行こうか」

「うん・・・」

「近くで見るともつとかわいいー!!」

「どこから来たの？」

「彼氏いる？」

Etc

落ちつけよお前ら・・・

「わあああああ!! 助けてえええええええええ!!」

さすがにこれは助けないとマズイか？

「静かに!!!!!!」

言霊に乗せて叫ぶ。

すると、教室は先までの騒がしさがうそのように静まり返る。
さすがエヴァ・・・こんなときにも役に立つとは・・・

「アリアが困っている。お前らはいったん席につけ。さて、質問は
3つまでなら受け付ける。後は休み時間にでもやれ」

「「「「「・・・はい」「」「」「」

こいつら・・・#

「えっと、出身はイギリスです。年は今9歳です。多分ネギ先生と
同じ年ですね。あと、こんな容姿ですが、男です」

「『『『へえ．．．つて男!?』』』」

ま、驚くよなそりゃ．．．

「じゃあ質問の時間にするぞ？面倒だから代表して朝倉がやれ」

「お任せあれ!!じゃあまず趣味は？」

「えっと、ピアノを弾くことと歌です」

「じゃあ、次は．．．性別男って言うてたけど本当？あと、なんで女子中に？」

「本当に男ですよ!!あと、ここに来たのは男女共学のためのテスト生としてだそうです。あくまでそうだったときのためのということなので、本当にそうなる可能性は低いですよ？」

「ふむふむ．．．じゃあ最期に、さっき自己紹介でミグレーションで言うてたけど」

「ああ、それは「それはアリアが俺の息子だからだ」．．．ひどいよ父さん．．．」

「ああ、騒ぐなよ？もう飽きた。まあ、アリアの事情というやつでな．．．養子に引き取ったんだ」

俺の言葉で教室の雰囲気少し暗くなる。

「あ、あの！俺自身が気にしてないので、みんなも気にしないでく

「ださい!!」

アリアのその言葉で、少し空気が元に戻った。

「アリアは席に就け・・・場所は・・・エヴァの横でいいだろう」

アリアは席に着く。

エヴァはアリアの強大な魔力に気がついていようだ。さらに、俺の義理の息子ということで興味を持ったみたいだ。

「じゃあ、ネギ君授業を始めてくれ」

「はい!!では、教科書の・・・」

こうして今日も波乱に満ちた日々が始まった。なんで普通の日常がこんなに波乱に満ちてるんだ・・・わけわからん・・・

S i d e o u t

番外編コラボ〜キャビア伯爵さまとのコラボです〜前篇 邂逅（後書き）

ではまず、ライコウ様、アンケートご協力ありがとうございました。

やがみ様、龍賀様、ぱっつあん様、雨季様、ヒダリキキ様、メガネ様、キャビア伯爵様、竜王&竜姫様、感想ありがとうございました！！

私を読み専だったところから愛読していた作品の作者さんからも感想をいただけて嬉しい限りですね。

トーマ「こんな作品に感想を描いていただいてありがとうございます」

リリイ「心から感謝を申し上げます」

リリイが敬語を使った・・・！？

トーマ「さて、アリアが麻帆良にやってきたわけだが・・・一回アリアと本気で闘ってみたいな」

リリイ「そうだね〜でもアリアはかなり強いからね」

ちなみにこちらに来たアリアは、キャビア伯爵さまの作品で、Asが終了した直後の彼です。実際に読んでくださいね。

トーマ「アリアは可愛いなやっぱり。年齢的にも息子でちょうどいいし」

リリィ「そうだねゝはぁ・・・かわいかったなゝ着替えさせてる時とかのアリア」

リリィとトーマは多分親バカ

では、後編で多分バトルすると思います。アスナも参加するかな？最近空気になってるし・・・アスナの修行にもちようどいいし。その後はいったん本編に戻って修学旅行に突入します。

アリアの口調とかこんなんでもいいのかな？

では、また次回お会いしましょう！！

感想、アドバイス、誤字脱字指摘をぜひぜひよろしくお願いします！

番外編コラボ 後編 模擬戦とアリアが・・・（前書き）

ようやく後編を書き上げました！

仕上がりは・・・微妙ww

楽しんで頂けるといいな

では、後編、始まります。

番外編コラボ 後編 模擬戦とアリアが・・・

トーマside

今日は休日。アリアが来てから最初の土曜日だ。ちなみに来週は修学旅行。

「むう・・・」

アリアはむくれている。簡単にいえば拗ねているということだ。

「悪かったって・・・いい加減に機嫌を治してくれないか？」

「ふん！」

始まって早々ではあるが、なんでアリアがこんなことになっているかという・・・

——回想——

アリアが麻帆良にやって来た。これ自体はかなり大きな出来事といってもいいだろう。

しかし、これといって何か生活に変化があったかといえばそういうわけでもない。確かに、俺たちの部屋にアリアが来たことで部屋が

いつそう明るくなったことは間違いない。

そして、今日もいつもの生活が始まるはず・・・だった・・・

「にゃあああああああああああ！！！！」

「はあゝ・・・アリアかぁいいよゝ」

リリイがアリアを捕食していた。基、抱きしめて撫でまわしている。これを止める術は俺にはない・・・誠に残念だが・・・

「助けてえ・・・とーさん・・・」

涙ながらに俺に助けてを求めてくるアリア・・・すまん。

俺はアリアから顔をそむける。

アリアは驚愕の表情を浮かべている。

「と・・・とーさんの裏切り者おおおおおおおおお！！」

アリアの悲鳴が寮に響き渡った。

と、俺が目覚まして早々、こんな事態があり、助けなかったことに不機嫌になっているというわけだ。

事の発端であるリリイは、アリアを膝に座らせて後ろから抱き締め
る形をとっている。

文句いいながらもされるがままになっているあたり、そんなに嫌が
ってはいないんじゃないかと思うんだが・・・気のせいだろうか？

「分かった、分かった。お前の言うことなんでも一つ聞いてやるか
ら。あと何か欲しいものあれば買ってやるから・・・機嫌を直して
くれ」

「本当に!？」

アリアは目を輝かせて俺に尋ねる。・・・以外と現金な奴だったこ
とに驚きを隠せない・・・

「男に二言はない・・・多分」

「多分て何さ？それじゃーね・・・うーん・・・何にしようかな」

かなり真剣に悩んでいる様子・・・いったい何を要求されることや
ら？

「そうだ！父さん、俺と模擬戦してよ！」

「・・・なんだ？そんなことでいいのか？」

悩んでいた割に意外と単純だったことに、拍子抜けしてしまう。

「うん！いつかい父さんと思いつきりやってみたかったんだ」

「そいうことなら早速別荘に行こうか？」

「うん！」

そして、俺たちは別荘に向かった。

別荘にやってくるや否や、アリアは徐にデバイスを取り出す。

「セイバーリリイ、Set up！」

バリアジャケットを身にまとう・・・

で、あれ？普通ならどこぞの拳銃型デバイスを使うツンデレのバリ
アジャケットを男ものにしたようなものはずなのだが・・・

「ってなんで女物！？」

そう・・・何故か下はズボンではなく、スカートだった・・・短い
し・・・

「面白そうだから夜のうちにちょちと・・・てへっ」

やっぱりリリイだったようだ・・・

「諦めろ。後でまた戻せ」

「うう……はずかしーよう……」

いや、騎士甲冑のほうも女物だし、着なれてるだろう？

「それはそれ、これはこれなの!!」

心を読まれた！？女性だけのスキルのはずだが……まあ、気にしても仕方がない。

「じゃあ、そろそろ始めるか？いくぞ、ECデИБライダー」

【Start up】

俺はデИБライダーを展開し、防護服の第一携帯を身にまとう。

「黒騎士じゃないの？」

「それを言うならお前だってそうだろう？まずは小手調べ……いや、ウォーミングアップだ。軽くいくぞ」

「そうだね」

お互いに戦闘態勢に入る。

「リリイ、合図を」

「うん。……では……始め!!」

その掛け声とともに、俺たちは飛び出す。アリアもなかなか速いが、それでも俺には及ばない。

俺は虚空瞬動を駆使しながら、アリアのまわりを縦横無尽に飛び回り、攻撃していく。

お互い似たような形状の武器ではあるが、アリアの持っているガンブレードのほうがリーチが長い。それにアリアは俺が攻撃を繰り返すと、普通ではありえない軌道で回避してくる。

「なるほど、それがスライドターンか」

「うん！でも、速すぎるよ父さん！……こっちはよけるので精いっぱいだ」

「いくらお前の能力が高くても、俺は大战を生き抜いたんだ。そう簡単に若いのにには負けないさ」

「じじくさいよ、それ」

「失礼な！それでも肉体的には19のままだ！」

「まったく……確かに既にもう40間近……十分おっさんなわけだが……」

「そんな軽口きいてる暇はあるのか？」

俺はそんな話をしている間にも、ところどころに入りが見えないように虚空瞬動をしながらフェイントをかける。が、そこはアリア・スライドターンを使いつつ、うまく防御していく。俺が突っ込むと同時にそのリーチを生かして俺に攻撃を仕掛けてくる。

「くう！らちが明かない！エアリアルサークル！！」

「うお!？」

俺が斬りかかる瞬間にガンブレードの引き金を引いて、周囲を爆破する。俺はすかさず虚空瞬動で離脱する。

「今のは危なかったぞ? なかなかやるな、アリア」

「はぁ・・・今のをよける・・・父さんも、十分おかしいけどね・・・はぁ・・・はぁ・・・」

やはり9歳児、体力があるとはいえさすがに目に見えるぎりぎりの速度で繰り出される連撃を長く受け続けるほどではないか・・・

「何度も言うようだが、この程度でやられるようなら大戦でとつくに死んでいる」

「ふう・・・一発撃ち合いしようか・・・その後、お互い全力で！」

「いいだろう。なら・・・」

俺はディバイダーに魔力を込める。俺を中心に前後に円環の魔法陣が展開され、はたから見れば一つの砲身のように見えることだろう。

「ブラステイング・・・」

「シルバー・・・」

「ゾオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

「ハンマー!!!」

巨大な斬撃と銀色の砲撃が衝突し、爆発する。

爆風が止むと、俺のバリアジャケットは所々擦り切れたようになっていた。アリアもバリアジャケットがぼろぼろになっている。

「ふう・・・やるな・・・アリア」

「父さんも、アレを受けてそれしか傷ついてないとか・・・傷つくなあ・・・」

「じゃあ、そろそろお互いに本気で行くか・・・」

「そうだね」

そして、お互いに距離をとる。

「リリイ!!!」

俺はリリイを呼ぶ。

「うん!」

じゃ、行くか・・・俺はリリイと手を取り合い、天に向かって掲げ、カギとなる言葉を放つ。

「リアクト・エンゲージ!!!」

リリイとリアクトし、第二形態【黒騎士】になる。

アリアは既にセイバーリリイの騎士甲冑を身にまとっている。姫騎士、騎士姫、どちらでもいいが、そんな言葉がぴったり、というかそんな言葉以外合うものがないといった風貌をしている。

「ほあ・・・綺麗じゃないか。いや、その見た目は可愛いといったほうがいいのか？」

「そ、そんな面と向かって言われるとてれるね・・・」

『かぁいいよゝアリア』

「えへへ」

少し顔を紅くしてはにかむアリア・・・うん、可愛い。

「じゃあ、完全に本気を出すよ？」

「ああ、俺の別荘は普通のよりかなり強度が高い。核ミサイルでも壊れん代物だ」

「そ・・・そうなんだ」

アリアが呆れたような眼で見ってくる。俺のせいじゃない。文句はジヤックに言え。

「じゃあ・・・いくよ?」

「おう」

そして、アリアはゆつくりと目を閉じる。

「聖柩解放」

【Sacred Coffin - CUBE - Full Drive Ignition】

その言葉とともに、アリアの体が輝きを纏い、大きくなる。大体俺と同じくらいの年の頃か？

「ふむ・・・綺麗だぞ、アリア」

「ありがとう」

えへへとはにかみながらアリアは言う。

「じゃあ、行くぞ？」

「うん」

そして、その場を静寂が支配する。

少しの間をおいて、俺たちは一斉に飛び出した。数えきれないくらいの剣戟の音がこだまする。

「くっ・・・せい！」

「うぐう・・・はあ！-！-！」

アリアの攻撃は先とは比べ物にならないほどに重さも速さも増している。俺には及ばないが、それでもとんでもない早さだ。俺のディバイダー第二形態自体がかなりの大きさと重さを誇る。そこに大戦や、数多の修行で培われた力、技術、速さが加わり聖枢を解放したアリアでも受けるのはきつそうにしている。

「そろそろお前も聖枢の解放がなじんできたころだろう・・・全力でいく!!」

『リリイ、制御を頼むぞ』

『まかせて』

俺は銀十字の書をつかみ、ページをパージする。自分の周囲に展開させたものは俺が、そのほかのほとんどはリリイが制御している。

リリイがページをアリアのほうへ飛ばし、周りを囲むように展開する。既にページには魔力をチャージしてある。

「クリムゾンスラッシュ!!」

俺は紅い斬撃を飛ばす。アリアはそれをカリバーンで切り落とす。すかさずリリイがページから無数の魔力弾を撃つ。これは魔力弾に見えるが、実際はそうではない。そのことに気付いたのか、アリアは魔法を放つ。

「ベル・セル・ル・セイル・レディアント——イオ!
!」

小爆発が起こり、包囲網の中に穴ができる。そこをくぐりぬけて出

てくる。アリアの後ろでは弾同士がぶつかり合って爆発している。

「さすがにこの程度じゃ当たらないか……」

「聖枢の解放はだてじゃないよ」

「そのようだな」

さて、困った事態になった……聖枢を解放したアリアの魔力はほぼ無限大……このまま続けば俺がやられるか……魔法球が……

「おそらく、このまま続けてもじり貧だろう……それに、あまり聖枢を解放し続けると、この別荘が持たない……別荘は一種の隔離空間だから、その内包する魔力にも限界がある」

「そう……みたいだね。じゃあ、お互いに最高の技で勝負だ!」

そして、お互いに獲物を構える。

「顕現せよ……エクスカリバー約束された勝利の剣」

アリアは星が鍛えた至高の聖剣、世界に唯一無二の神造兵器……
エクスカリバーを構える。

俺は自身の前方に大小の二重の円環を展開する。

「エクス約束された……」

「『デイドゼロ』」

【Divide Zero】

「――・・・勝利の剣アアアアアアアッ！！」

「『――エクリプス！！』」

【――“Eclipse”――】

ほぼ無限の魔力を全力で込めた光の斬撃と、エネルギーを分断する超極太な砲撃がぶつかり合い、拮抗する。ぶつかったそばから、エクスカリバーから放出されるエネルギーが分断されていく。

「くう……！！はあああああああああああああ
あ……！！」

「あああああああああああああああああ……！！」

お互いに全力全壊でぶつかり合う。やがて、周りから何かにひびが入る音が聞こえた。その瞬間、エクスカリバーは、エクリプスに飲まれ、そのままアリアも呑み込んだ。

「くっ……はあ、はあ……ふう……なんとかなったか……
って、やば……」

気がつくと、アリアが落下を始めていた。エクリプスゼロを食らってエネルギーが全てデバイドされたようだ。俺は縮地でアリアの落下点に入り、落ちてきたアリアを抱きとめる。抱きとめたアリアは、穏やかな寝息を立てていた。

「さて……どうしたものか……この惨状は」

辺りを見ると、地面と空にひびが入っていた。アリアの聖枢が組み

上げ続けていたせいで魔力が枯渇し始めたようだ。途中でアリアの魔力放出が弱まった原因はそれだろう。

「とりあえず、修理を始めるかな・・・」

俺はアリアを抱えて魔法球の出口へと向かった。

S i d e o u t

アリア s i d e

「う・・・んう・・・あれ？こ・・・こは？」

俺が目を覚ますと、ベッドの上に寝ていた。そっか・・・負けたのか。

「気分はどうだ？アリア・・・」

とーさん・・・

「うん・・・だいじょう・・・ぶ・・・だよ？」

な・・・なんだろう・・・父さんの顔見ると・・・ドキドキするよ
う・・・

「本当に大丈夫か？顔赤いが・・・」

すると、父さんがいきなり自分のおでこ俺のおでこを合わせた。

「ふえ！？」

「じつとしてろ・・・熱はないみたいだが・・・そうだ、お粥作ってきたから」

「え・・・えつと・・・あの・・・父さんが、食べさせて？」

な・・・なんでこんな恥ずかしいこと言ってるの？俺は！？

「ん？構わないぞ？ほら・・・あーん」

「あ、あーん」

は・・・恥ずかしい・・・でもなんか嬉しいな・・・

「うまいか？ほら、あーん」

「あーん」

その後もずっとこんな感じで食べさせてもらっちゃった。

S i d e o u t

トーマside

アリアが何故か異様に甘えてくるようになった。おそらくアリアのところの唯一神が細工したんだろう。

「えへへ、とーさん」

「どうした？アリア」

「なんでもな〜い」

さつきから俺に負ぶさってこんな問答を繰り返している。アリアは終始ニコニコしている。可愛いからいいんだがな。

「そうだ、これから出かけようか？」

「うん！〜」

目が輝いている。俺はアリアをおぶったまま出かけることになった。聖枢解放のデメリットはこんな感じなのか・・・まあ、甘えてもらえるのは父親冥利に尽きるというものか。

街に出てきたのはいいが、アリアは俺から降りようとしてくれない。

下ろそうとすると、アリアが涙目＋上目づかいで・・・

「やだよ・・・やなの、父さん・・・ぱぱ・・・ぐすっ」

とか言ってくるんだ。あんな顔までされて下ろせるだろうか、いやできない（反語）。そのままおぶっててやれば、満面の笑みで

「だあい好き」

といっってくれる！！可愛いぞ、アリアああああ！！幼児退行してる気がするが、可愛いから気にしない。

ちなみに、リリイは長時間リアクトと、エクスカリバーに耐えきつて疲れたのか、ぐっすり眠っていた。アスナとこのかに世話を頼んできたから大丈夫だろう。

「何か食べたいものあるか？」

「ん〜？じゃあ、甘いもの食べたいな〜」

「任せろ」

そんな感じで、平和な一日が過ぎて行つた。ちなみに、街ゆく人に暖かい目で見られていたのは言うまでもない。変なオーラが出ていたのか、女性や、その気のある男どもがハアハア言ってたが・・・無視した。こんな甘えん坊のアリアもいいな・・・

アリアの甘えん坊状態はこの後三日ほど続き、元に戻った時に悶絶していたことは言うまでもない。リリイも目を覚ました後に、アリアにいろんな服を着せていた。この状態で寮の女子連中が暴走しな

かったのは奇跡といえるだろう。

さて、アリアの実力も分かったし、西の過激派連中対策は楽にできそうだ。修学旅行か・・・アリアと一緒にどこ回ろうかな？

S
i
d
e

o
u
t

番外編コラボ 後編 模擬戦とアリアが・・・（後書き）

トーマの親バカが進行しました。

ちなみに、キャビア伯爵様と相談して、デメリットは他にも二つ用意していますwwいつか出すかも。お楽しみに。

では、夜神様、メガネ様、キャビア伯爵様、ユタ様、ヒダリキキ様、カレーパン様、ぱっつあん様、龍賀様、感想ありがとうございます！

トーマ「こんなにたくさんの作者様から感想をいただいて」

リリィ「ありがとうございます」

リリィの敬語はやっぱり違和感あるな

トーマ「どうでもいいが、何故アリアがない？」

いや、さすがにひとさまのキャラだし、ここに出すのはマズイかな
って。でも大丈夫・・・ほら・・・あそこに

じーーーーー（壁から微妙に顔を出してやや涙目で見つめてくるアリア）

トーマ「くっ・・・許してくれ、アリア・・・」

リリィ「ハアハア／＼／」

もう・・・こいつらは手遅れかもしれない・・・

では、また次回にてお会いしましょう!!

第十七話 修学旅行 一日目（前書き）

お久しぶりです。

お待たせしました最新話。

待っててくれましたよね？

なんと、15,000文字突破しちゃいました。

やりすぎた・・・おかげで校正とか全くできてないし・・・つらかった。

では、第十七話始まります！

第十七話 修学旅行 一日目

トーマside

今日は、ようやく修学旅行の日だ。京都は久しぶりだから、俺自身も楽しみにしている。

まあ、この先に待ち構えている事件を考えると、手放しには喜べないのが少し残念だ。

俺はこれでも教員なので、学生よりは早く集合がかけられている。アリアは学生だから、本当なら遅くてもかまわないのだが・・・リイが今回は教員と同じ扱いになるため、一人になってしまう。

親のはしくれとしては、幼い子供を一人にするというのは避けたところだ。というわけで、アリアは現在、リイの腕の中で熟睡中。・・・うん、可愛い。

「さて、準備はできたか？忘れ物はないかな？」

「うん、大丈夫だよ」

「了解。では、そろそろ行こうか」

「うん」

リイの声も心なしか少しはずんでいるように聞こえる。まあ、麻帆良に来てからしばらく旅行なんてしてないし、久しぶりの京都だ・・・仕方がないか。

「ん？・・・何やら騒がしいが・・・」

おそらくはネギだろう・・・形式的なものだとはいえ、関東魔法教会の特使として赴くという任務モドキを課せられているのだから、もう少し気を引き締めてほしいものだ。子供とはいえ、一応教師でもあるわけだし。後で一言言っておくとうかが。

そして、俺と、アリアを抱いたリリイは駅に到着した。他の先生方も何人が集まっている。魔法先生が京都へ入る事に、関西側は苦言を呈したらしい。瀬流彦先生がいるのは少しまずい気もするが・・・まあ、彼は攻撃よりも補助に向いている事を考慮して、大丈夫だと踏んだのだろう。学園長らしいといえればそれまでだ。その判断が間違いでなければいいのだが・・・

その後、教師陣で修学旅行の大まかな日程と、簡単な役割分担、留意事項などを話し合った。少しすると、3 - Aの生徒たちが集まり始めた。

「あー！トーマせんせーだー」

「アリアくん・・・かわいい」

「ああ、皆早いな。生徒はもう少し遅くてもかまわないはずなんだが・・・」

「いやあ・・・それがさ、楽しみで早く起きちゃって」

「お前らは小学生か・・・」

俺が少し呆れ気味に話すと、明石や鳴滝姉妹他数人の、俺と話していた奴らは苦笑を浮かべる。その後も、続々と生徒たちが集まり始めた。大河内は何故か俺と目が合うとあわてたように挨拶をしてすぐそっぽを向いてしまった。少し顔が赤かった気がするが・・・俺、嫌われてるのか？リリイに聞いてみると、ため息をつかれた。何故だ・・・そんなことをしていると、ネギが走ってきた。俺と同じくらいに出たはずなのに・・・なぜ俺より遅いんだ？謎だ・・・まあ、それはともかく

「おはよう、ネギ先生」

「あ、トーマさん！おはようございます！」

「修学旅行とはいえ、一応は学業の一環だ。その間は先生と呼ぶようにいったら？」

「す、すみませんでした。トーマ先生」

「よろしい。と、少しいいか？」

「え？なんですか？」

「いいからこつちへ」

俺は、ネギを連れて生徒に聞かれない場所に移動し、認識障害をかける。

「京都には関西呪術協会があるという話は学園長から聞いたな？」

「はい。日本にある魔法組織で、オンミョージ？っていう人たちが

所属しているところですよね」

「ああ、大まかにはその認識で間違いない。向こうは内部で色々あるらしくてな・・・道中、強硬派からの妨害があるかもしれない。彼等は西洋魔法使いを快く思っていない。まあ、かつて自分たちが管理していた土地に土足で踏み込んだ目の上のたんこぶといったところなのだろう。関東魔法協会が正しいとは決断していいはしないが、俺からすれば古い利権とカビの生えた伝統にすぎる愚者にしか見えん・・・話がそれだな。端的に言えば、君の持つ親書が狙われる。気を引き締めていくように。いまの君は浮ついているように見える。そんな調子では、普段できる事も出来なくなるぞ」

まあ、関西連中が魔法使いを毛嫌いするのはそれだけではないのだが・・・俺なんかは、その理由の当事者といってもいい。東は正義正義とやかましいからな・・・。人を救いたいと思うことは悪くはないが、そう思うなら我を通すのは良くない。元老院の弊害・・・というわけか。どうでもいいか。

「は、はい！分かりました」

「ああ、それと」

『オコジヨがいらん事を言うかもしれない。君は君の思いを第一に判断しろ。他人の言うことを全くきかないのはよくないが、鵜呑みにするだけというのもほめられたことではないからな』

『分かりました。肝に銘じておきます』

「話はこれだけだ。そろそろ出発するみたいだな。行こうか、ネギ先生」

「はい！」

「そうそう、アリアもイギリス出身なんだ。この修学旅行を機に仲良くなっておくといい」

「わかりました」

話が終わったところで、しずな先生の号令がかかったので、俺とネギも移動する。ネギがクラス生徒の点呼を取り、列車に乗り込んだ。アリアはまだリリィに抱かれて眠っていた。いいのか？よく見ると、何やらアリアは頬をプニプニとつつかれていた。・・・うらやましい。俺もつつきたい。

新幹線に乗ったあたりでようやくアリアが目を覚ました。いまは俺の膝の上に座っている。時折外を見ながら目をキラキラと輝かせている。ちなみに、呪いが解けたので、エヴァもすっかり付いてきている。騒ぐことは必至だったので、うるさくなる前に絡操に頼んで一服盛らせた。そんなに強い薬ではないので、すぐに目は覚ますだろう。刹那に関しては、説得はしてみたが、やはりまだためらいがあるのか、このかを避けているようだ。この修学旅行で改善できればよいのだが・・・

現在は、しずな先生とネギが注意事項を話しているところだ。俺

か？俺はアリアを愛でるのに忙しい。・・・誰に話しているのだろうか？まあいい。

すると、ネギが転売員のカートにひかれていた。おいおい・・・明らかにわざと臭いな・・・これも関西の妨害の一種なのだろうか・・・

話が終わると、生徒たちは各々好きなように遊び始めた。アリアも皆の中に混じって遊んでいる。というか、連れて行かれたといったほうが正しいかもしれん。一種のマスコットのような感じだな。アリアは可愛いから仕方がないが・・・

ふと、声が聞こえて見てみると、淫獣がネギに何やらいらぬことを色々と吹き込んできたようだ。既に妨害があるかもしれないと、俺が伝えた後なので、とくに気にしてはいないようだ。一応警戒は強めたようだ・・・

すると、生徒たちが悲鳴を上げ始めた。か・・・カエル？何故カエル？はあ・・・面倒な・・・

「リリイ・・・範囲指定を頼む」

「任せて」

「じゃあ、やるぞ？」

「うん」

【Divide】

俺は車両の中に魔力デバイスoidをかける。

生徒たちに襲いかかっていたカエルは式紙にもどった。

はあ・・・これが妨害？天ヶ崎千草・・・バカなのだろうか？

「な・・・なんだったの？」

「何で、新幹線の中でカエル！？」

「一体何がどうなってるんですかー！？」

「しずな先生が失神してるーっ！」

拙いな・・・收拾がつく内に・・・

「皆！落ち着け！気絶しているものはシートに寝かせて安静に！残りの者は落ちている紙の回収を！」

俺の声に反応した委員長他普段からまとめ役をしている生徒と、ネギが率先して回収を始める。よし・・・

『エヴァ、マナ、アスナ。これはやはり・・・』

『ああ、関西の妨害とみて間違いないだろう』

『これを妨害とっていいのかは疑問ですけど』

『確かにね・・・でも、これで終わると思えない。それに、あちらの狙いは親書よりむしろ・・・』

『十中八九、このかだろう』

『うむ。あいつの魔力はナギをも凌ぐほどらしいな。今はまだ完全

な覚醒を見せていないからか、分かりづらいが』

『マナ、報酬は帰ってから払おう。警戒はしておいてくれ。いざとなったら』

『分かってますよ』

『エヴァは・・・気が向いたらやってくれ』

『おい！ちよつと待て！なんで私の扱いはそんなにぞんざいなんだ！』

えーだつてさ・・・めんどくさがってやらなそうだし。

『アスナは・・・言うまでもないか』

『当然』

『無視するな！！』

エヴァが何やら言っているが気にしない。さて、ネギのほうは・・・

・・・なんでだ？注意しろつて言っただろ？そもそも親書は取り出して確認するなよ。

ネギは原作通りにツバメの式紙に親書を取られていた。それを追って走っていく。先走り過ぎな気もするが・・・あっちには刹那がいるだろうし、大丈夫だろう。

『アスナ・・・今回は、ネギから目を離さないようにしてくれ。あいつ・・・正義感の強さだけは人一倍だから、しなくてもいい無茶

をしそうだ』

『了解』

『父さん、俺はどうすればいいの？』

生徒たち、とくに雪広のあたりでマスコットと化していたアリアが念話で聞いてくる。

『アリアは基本的に俺たちと一緒にいればいい。お前の力を借りなければいけないような事態にならないに越したことはないのだが』

『うん、分かったよ』

さて、京都ではどうなるのやら・・・

車両内に、到着直前のアナウンスが流れる。

「皆さん！降りる準備をしてください！忘れ物がないように注意してください！」

ネギが皆に声をかける。

しっかりと先生をやれているようでありにより。

『ネギ、ここからは関西の妨害がより激しくなる。気を引き締めて行け・・・あと、サウザンドマスターの手がかりばかりに気を取られて、教師の仕事をおろそかにしないようにな。あと、どうしてもないことがあれば、俺をはじめとする他の先生を頼れ。困ったらすぐにな』

『わかりました』

よし、これで一先ず大丈夫だろう。

「アリア、荷物を持ってやろうか？」

「大丈夫だよ、父さん」

「そうか」

「リリイのは俺が持つよ」

「ありがとう、トーマ」

俺はリリイと自身の荷物を担ぐ。このくらいなら大したことはない。昔からやってたことだしな。

視線を感じてそちらに目を向けると、刹那が監視するようにネギを見ていた。・・・これじゃ勘違いされても仕方がない気もするが・・・ほら、ネギが不信な目で見ているじゃないか。もう少し愛想良くしろよ。まあ、ない物ねだりかな？

「では、皆さん！いざ京都へ！！」

ネギの声が聞こえる。

・・・だからお前はもう少し気を引き締めると・・・まあいい。
気を張りすぎてもいかなしな。時が来るまでは、純粹に楽しもうか。

最初は清水へ行った。久しぶりに来たが、やはりいいものだ。舞台から見下ろす俯瞰風景は、何度見ても飽きない。

鳴滝姉が飛び降りろ！とさけび、長瀬がそれにノリかけ、雪広がそれを止める。綾瀬がなにやら蘊蓄を披露し始める。・・・少し調べれば出てくる内容ではあるが、何故そんなに詳しい？もはや神社仏閣とは関係ない内容になってるぞ？

アリアがなにやら興味深そうにその話を聞いていた。そんな変な所に興味を持たんでも・・・

エヴァはなんか騒いで周りの観光客に温かい目で見られていた。
まあ、美目麗しい美少女が、あんなことやってたらそうなるわな・・・

まずは恋占いの石。恋占いと聞いて、アリアが寂しそうな顔をしたのは気のせいではないだろう。前の世界で、何かあったのか？

そして、雪広が意味のわからない技能を発揮する。・・・何で分かるんだ？いや、武術を相当極めないと無理だぞ？弾厭ったくらいでできる芸当じゃないし・・・何者だよお前・・・

ここでもやはり微妙な妨害が・・・落とし穴に、再びカエル。だから何故カエル？

アスナやマナも呆れかえっている。すると、二人がこっちへやってくる。

「ねえ、これ・・・どうなの？」

「気を張っているのがバカらしくなってくるのですが・・・」

その意見には心から同意したい！

「まあ、これで終わると思えん。一応、気をつけておいてくれ」

深いため息をつく二人。

ため息をつきたくなるその気持ちは痛いほどわかる。

「なんだろうね、これ・・・やっぱりバカなんじゃない？」

アリアも何やらどうでもよくなってきたようだ。

「親書に関しては、あってもなくても本当は変わらないんだよね。ネギが詠春に会うための口実みたいなものだし・・・」

「だよね。あ、皆移動するみたいだよ？行こう父さん」

「あいよ」

ん？いいことを思いついた・・・

「アリア、ちょっと」

「ん？どうしたの？」

出鼻を挫いたような感じになってしまったが、アリアは気にせず来てくれる。

「よっと！」

「ふえっ!？」

アリアが驚いた声を上げる。理由は簡単。俺が肩車したからだ。

「親子って感じるだろ？」

「・・・うん！」

俺は肩車をしながら、片方の手でリリイと手をつないで歩く。うん、親子っぽい。

皆は先に音羽の滝へ向かったようだ。

俺たちが到着すると、皆顔を赤くして倒れていた。・・・酒臭い。

「リリイ、アリアを少し頼む」

「アリア、おいで」

「うん」

リリイにアリアを渡して、音羽の滝・・・その縁結びの滝へ近づく。・・・日本酒独特のにおい・・・屋根を見ると、ネギが既に上がっていた。

エヴァがちゃっかり飲んでるし・・・

「ちっ・・・安酒か・・・」

「ほら、この酒樽やるからそっちで飲んでなさい。ネギ先生！」

「トーマが私に冷たい・・・茶々丸」

「涙目のマスター・・・録画」

「このポケロボめ！」

はいはい、そこ漫才はよそでやりなさい。

「トーマ先生！屋根の上にお酒が！いたずらにしては、ひどすぎます。おそらくこれも・・・」

「ああ・・・俺は皆の介抱をするから、ネギ先生は新田先生に状況の説明をしてきてくれ。一字一句誤魔化すなよ！あの人なら、適切な対応をしてくれるはずだ」

「分かりました！」

すると、新田先生と瀬流彦が丁度通りかかる。そこへネギが説明をする。

俺はとりあえず皆の体調の確認をする。・・・うん急性アルコール中毒の心配はなさそう

だ。水で薄められていた事も助けになったようだ。

ネギの説明を受けた新田先生がやってきて、酔いつぶれた生徒たちを迅速にバスの中へ移動させた。こういった不測の事態にも動じず冷静かつ即座に行動を起こす・・・この手腕は見習わなければならないな・・・

その日に予定していた見学はすべて中止。皆で旅館へ戻って待機と相成った。

俺は、アリアと一緒に風呂に入るため、ロビーへ下りた。

「・・・呪術・・・刺客・・・」

何やら声が聞こえる。ネギと何故かアスナが一緒にいた。なんだかんだで面倒見のいい子だから、相談に乗ってあげているといったところだろう。ま、一応一言訂正しておこうか。

「おい、カモミール。ネギにいらんことを吹き込むなよ。第一刹那が刺客なわけがない。これを起こしているのは呪術協会の中でも一部のものだ。それとネギ、教員は早めに風呂に入るぞ。早く来い」

丁度しずな先生も呼びに来たことだしな。

「あ、はい！分かりました。アリア君、行きましょう！」

「うん、ネギ！」

子供同士で仲良くなったみたいだ。同郷ということもあって、旅館に向かうバスの中で話をしていた。

「じゃあ、ネギ5班ももうすぐお風呂だから、話は夜にでも聞いてあげるわよ」

「ありがとうございます！」

ネギはアリアと一緒に風呂へ向かう。

「あ、そうだ。トーマ、後で部屋言っていない？」

『私のアーティファクトについて少し話があるの』

「構わん」

アスナはそう言つて部屋に戻つて行つた。

「さて、行くとしますかね」

俺は二人の後を追いかけた。

風呂に入ると、アリアがネギの相談に乗っている感じだった。年齢も近いと話しやすいのだろう。

「すまん、遅れた」

「あ、父さん」

「トーマさ・・・先生」

「風呂に入つてるときくらいは普通でいいぞ？」

「あ、そうですか」

真面目だねえ・・・それにしても

「やっぱり露天風呂はいいなあ」

「そうだね」

「そうですね」

二人とも声がとろけてる。動物を風呂に入れていいのか？何故い

るんだカモミール。

すると、戸が開く音が聞こえた。はて、誰だろう？って刹那！？それにリリイ！？

「へ、部屋にいるんじゃないかったのか？」

「な、何で入口は男女別なのに中は同じ！？」

「混浴っていうんだぜ兄貴」

「そ、そんなこと話してる場合じゃないよお！」

アリアが顔を真っ赤にして叫ぶ。声を押し殺して叫ぶとは・・・また器用な・・・

「よ、よし、見付からないように隠れる！」

「も、もう少しそっちに寄ってよネギ！みつかったやつて！」

「ご、ゴメン！でも、もう無理！」

ああ、状況はどんどん悪化していく・・・リリイにみつかったら・・・

ま・・・マズイ・・・ってネギイ！何ちらちらのぞいてんだ！肌白いとか言ってるじゃねえ！というか・・・エロオコジョ・・・リリイの裸を見たな？よし、殺そう。

「誰だ！？」

み・・・見つかった！？何故だ・・・まさか・・・エロオコジョへの殺気が漏れた？これは非常にまずい。由々しき事態だ。ええい、こうなったら

「ま、まで、刹那！俺だ！」

「は・・・え？と、トーマ先生！？」

「トーマ・・・何でそんなところにいるの？」

「い・・・いや、これは・・・そのだな」

ま、マズイ。リリイの豊満なその・・・む、胸が・・・ちらちらと視界に入って冷静な判断が・・・

「その、なんですか？」

「状況を説明しますと、教員は早めに入浴ということだったので、入っていたら、お二人が来てしまい、あわてて隠れたというわけで」

なんだこの意味のわからん説明は！しっかりしろ俺！

「状況は分かりました。まあ、決まりの時間を無視して入った私にも非がありますので、先生はそこまで気にやまないでください」

いや、そんなに顔を真っ赤にして言われると、どんどんいたたまれなくなってくるのだが・・・

「そつだよ、トーマ。こっちに来なよ。一緒に入ろう？」

「お・・・おう」

リリィ・・・もう少し恥じらいを持とうぜ？

「ほら、アリアもおいで」

「う、うん」

アリアが顔を真っ赤にしながら近づいてくる。今気がついたんだが、髪をおろしてるから、もう女の子にしか見えません。アリアはリリィに抱かれて湯に浸かる。

「はぁ、もう何がなにやら」

俺がゆっくりと腰を下ろすとリリィがぴったりとくっついてきた。む・・・胸が当たってるんですけどリリィサン？ほら見る、エロオコジョが鼻息荒くして・・・ってナニミテルンダコノヤロウ・・・あとでやっぱリクロス・・・ネギは顔を真っ赤にしていた。

「あ、あの！桜咲さんは敵なんですか！？」

「え？い、いきなり何を！？いや、それはともかく、私は敵じゃありません！15番桜咲刹那。一応先生の味方です」

エロオコジョはいまだに疑っているみたいだが、ネギは納得したようだ。言葉の虚偽を見つけるには、まず目を見ると教えた買いがあったかな？

「ひゃあああああああゝ！」

女性用の脱衣所のほうから悲鳴が上がる。この声は、このかか？

「このかさん？」

「このかお嬢様！？やつら、お嬢様に手を出す気か・・・！？お嬢様！」

刹那は、更衣室のほうへと走り出す。それをネギが追う。

緊急事態とはいえ、女性用の更衣室のほうへ俺が入るわけにもいかない。アスナもいることだしな。脱衣所のほうから、このかお嬢様に何するかー！とか、わー切っちゃだめです！お猿さんがどーたらとか、そんな声が聞こえてくる。「アデアット！」ってちよつとまて！そんなもん出すなよアスナ！ネギが今度はアスナを止める声が聞こえる。うん、それは正解だと思うぞ？

すると、猿の式紙たちが脱衣所からこのかを抱えて出てくる。それを追つてとびだ出す刹那。

「お嬢様！」

――神鳴流奥義・・・・・・・・百烈桜花斬！――

刹那がこのかを奪い抱えながら技を出す。奥義ってこんなにホイホイ出しているものなのかね？

敵は・・・逃げたか・・・

アスナとネギが走ってくる。

「せ、せつちゃん・・・なんやよーわからんけど、助けてくれたん？あ、ありがとう」

「あつ」

刹那が声を上げたかと思いきやこのかを湯に落とす。そして、あわてて外へ出ていく。

「せつちゃん・・・」

ふう・・・長年のわだかまりはそう簡単には解消できんか・・・

「あ、あの！このかさん！あの刹那さんて人はいったい何なんですか！？このかさんをお嬢様って読んでましたけど！」

「このか、桜咲さんとはやっぱり昔に何かあったの？」

「うん、アスナにもまだちゃんと話してへんかったよね・・・」

そして、このかは幼いころの刹那との思い出を話し始める。

「何かうち悪いことでもしたんかな・・・せつちゃん昔みたいに話してくれへんよーになってて・・・」

「このか・・・」

「このかさん・・・」

ふう・・・ここは俺の出番かな。まだ真実を話すわけにはいかないが・・・

「このか、刹那は君を嫌っているわけじゃない。彼女には、色々と負い目があるのさ。君に対するね・・・だから、もう少し待ってあ

げてほしい。刹那も今は、悩んでいるんだ」

主に体の事・・・あと、護れなかったこと・・・自分の大切な人を護れないのは、辛いことだ・・・

「わかったえ、トーマせんせー」

「それでいい」

さて、俺たちはそろそろ上がるか。

「っと、すまん。俺たちはそろそろ上がるよ。あとは若い者同士でゆっくりしてくれ」

はっはっは。そこ！爺臭いとかいうな！！

「ふーん。つまり、このアーティファクトの名前はハマエリシス・エクソルキザンスノツルギだけど、トーマが主だったために、本来のものとは少し変質して、デИБライダー見たいな能力がついたってことね」

風呂からあがってしばらくしたころ、アスナが確認に来た。

「まあ、そういうことになるな。俺の本家デИБライダーとは違うが、能力的には変わらない」

むしろ、元のハマノツルギに砲撃能力が付いているから、より凶悪になったといってもいいだろう。遠距離から魔法無効化攻撃が放てるわけだしな。

「父さん、のど渴いた」

丁度話も終わったことだし、行くか。

「じゃあ、ロビーへ行こうか。アスナも何か欲しいものがあれば言えよ？」

「うん」

「私も行くよ」

俺たちはロビーへやってきた。ネギが生徒たちに就寝時間を伝えていた。ちなみに、教師の同伴があれば、外に出たりしない限りは許可が出ている。

とりあえず、飲み物を買ってアリアに渡す。アスナとリリイにもそれぞれ買って手渡した。エントランスを見ると、刹那が札を張っていた。結界か？

ネギがやってきて、刹那に陰陽術の簡単な説明を受けている。ネギの甘さにやや嘆息しているようだ。

ネギと刹那はこちらに気が付いてやってくる。

「トーマ先生！皆で3 - A 防衛隊結成ですよ！」
ガーディアンエンジェルス

安直なうえになんだその恥ずかしいネーミングセンスは・・・

「はいはい、落ち着きなさいよネギ」

「そっだよ」

アスナとアリアがたしなめる。

「刹那・・・まえにも言ったが、お前は自分の身の上なんて気にする必要はないんだ。お前がこのかを護りたいと思うなら、一番近くで護ってやれ。このかは、必ずお前を受け入れてくれるはずだ」
「・・・はい」

これでもまだ踏ん切りはつかないか・・・

「ゆっくりでいい。少しづつ、近づけるようになれ」

「きっと大丈夫だよ、刹那さん！」

「ありがとうございます・・・」

まあ、刹那のほうからいかずとも、このかの方から押してくるだろうし、大丈夫かな？

「今夜ももしかしたら敵が来るかもしれないから、外の見回りに行ってきますね！」

そう言って走って行ってしまふ。お前はもう少し落ち着きを持とうな・・・

「じゃあ、俺たちはひとまず中で待機だな」

「そうですね、私たちは班部屋の守りをしましょう」

「父さん、俺はどうすればいいの？」

「アリアは俺と一緒にいればいい。まあ、お前の腕なら単独でもいけるかもしれないな・・・」

うん、アリアはどんどん腕を上げてる。これも才能だな・・・いつか追い越されるかもな・・・

息子に追い越されるのも、追い越されないように自分も強くなるのも、親子つてもものなのかな・・・

「じゃあ、ネギの手伝いするよ」

「そうだな、それがいいかもしれん」

「わかった。行ってきます！」

「おう、気をつけてな」

さて、これでとりあえずネギのほうは大丈夫そうだ。

この気配・・・ちつ、ネギが外に出たときか・・・

その時、アスナから念話が入る。

『トーマ！ゴメン！このかが連れ去られた！』

『あわてるな。アリアがネギと一緒にいるはずだ。何、心配するな。あいつは強い。足りないのは実戦経験くらいさ。っと、そんな話をしている場合じゃない。すぐにアリアとネギに合流しろ！アリアがこのかに追尾魔法をかけてある。一緒に行けば分かるはずだ』

『了解！』

あとは

『アリア！このかが連れ去られた。アスナ達と合流して、敵を追え！』

『任せて！父さん！』

『ああ、俺もすぐに行く』

俺はアリアとの念話をきると、とりあえず部屋へ行く。

「リリイ、少し出かけてくる。今回はお前の力を借りなきゃいけない事態にはならなそうだ」

「うん。行つてらっしゃい。無茶しちゃだめだよ？」

ちなみに、エヴァにも念話をしたが「面倒だからパス」だそうだ。あのロリババアめ……。いやまあ、エヴァにやらせたら駄目なくなるからそれで正解かもしれないが……。マナに関しては、まだ頼む時ではない。

それじゃ、追つか……

S i d e o u t

（アリア s i d e）

俺は、ネギと一緒にこのかさんを連れ去ったでかいサルの気ぐるみを追っている。

「なんであんな頭がでかい着ぐるみなのにこんなに早いのか!？」

そう・・・バランスが悪いはずなのに、異様に早いのだ・・・あの猿。

「アリア、どうしよう、このままじゃ」

ネギが不安そうに聞いてくる。

「大丈夫、父さんも向かってるはずだから!」

父さんのことから、そんなに急いではこなさそうだけど・・・急がなくても十分早いってこともそうだけど、これくらい俺たちだけでこなせなきゃ、この先はもっと大変なんだし。

「ネギ!アリア!」

「ネギ先生!アリアくん!」

後ろからアスナさんと刹那さんが走ってきた。

「二人とも早く!」

「分かってるわよ!」

そんなことをしている間にもどんどん加速する猿。

「お嬢様!!」

「このか!」

「瞬動使えばいいんじゃないの!?!」

「それだ!」

「それだ!」

「それだ!」

なんで3人とも口をそろえて言うのさ!?!普通に気付こうよ!そして、3人同時に瞬動で加速する。

「人払いの呪符が張られています!ひとがいないのは好都合だ!」

「そうね!つと、一応出しとくわ!アデアット!」

アスナさんがとんでもなく大きな剣を出す。

「あ、アーティファクト!?!」

「アスナ姐さん、誰と契約したんですかい!?!」

いやいや、消去法で分かると思っただけどね・・・

電車のドアが閉まる前になんとか乗り込む。

「な、なんとか間に合った!」

「ネギ先生!前の車両に追い詰めますよ!」

刹那さんがネギに声をかける。・・・まあ、俺皆の前で力を使ったことないから実力も知らないだろうし・・・いいんだよ・・・別に。ぐすん。

「アリア？なんで涙目なの？」

アスナさんが聞いてくる。気のせいです！

「待てーーーーー！」

まあ、待てと言って待つ敵はいないから言っても無駄だとは思っけどね。

「フフ・・・ほな、二枚目のお札ちゃんいきますえ」

猿の式がむかつく顔でお札をひらひらさせる。

「お札さんお札さん、ウチを逃がしておくれやす」

猿の式がお札を投げる。お札から大量の水があふれ出す。

「させないよ！ベル・セル　ル・セイル　レディアントー！」

ーブリザド！ー！

お札ごと大量の水を凍らせる。

「しまった！水の量が多すぎたか・・・」

入口が氷で埋まってしまった。

「任せてください！斬空閃！」

刹那さんが放った斬撃が、氷の山を切り崩す。

「じゃ、次はあたしね！消し飛ばえええええ！」

アスナさんが氷の山に向けて大きな剣を振り下ろす。

砕けるのではなく、バターのように溶けてなくなった。・・・す

「ごい。これが完全魔法無効化能力……」

水がなくなると同時に電車が駅に到着する。

「見たか、そのデカ猿女。嫌がらせは諦めておとなしくお嬢様を返すがいい！」

「ハアハア．．．なかなかやりますな。しかし、このかお嬢様は返しませんえ」

猿がまた逃げ出す。だからなんでそんなに早いのか！？

「あつ、待て！」

「いいから追っつよ！」

皆で走り出す。

「せ、刹那さん！一体どういことですか！？ただの嫌がらせじゃなかったんですか！？」

「じ、実は、以前より関西呪術協会の中に、このかお嬢様を東の麻

帆良学園に送ってしまったことを快く思わない者がいて・・・」

なるほど・・・西の長の娘が西洋魔法に浸かるのを嫌がったというところなのかな？

「おそらく、奴らはこのかお嬢様の力を利用して関西呪術協会を牛耳るうとしているのでは・・・」

「やっぱりね・・・」

「な、なんですかそれ・・・!?」

大きな力をもつものは狙われる。しかも、その力の使い方を知らないんじゃない、対処もできない・・・娘に危険な世界に踏み込んでほしくないって気持ちは酌むけどさ・・・それだけじゃダメなこともあるんだよ！分かってても、知っていてもできないことだってあるんだから・・・俺みたいにさ・・・

「多分父さんはこうなる事がわかってたよ。このかさんが狙われることも・・・」

「でしょうね。私にも気をつけるように言ってきたし。それでも護りきれなかったのは、私の落ち度よ・・・」

「いえ、護衛である私の責任です」

「今は責任の所在を言い争っている場合じゃないよ！いそぐよ！」

俺たちはスピードを上げる。ネギがついてこれる事は少し意外かな・・・曲がりなりにも父さんに鍛えてもらっていただけの事は

あるね。

「むっ！ここにも人払いの呪符・・・やはり計画的な犯行だったのか！くっ・・・私がついていながら！」

刹那さんが階段へ飛び上がる。そのうえでは猿の気ぐるみを脱いだ女の人がついていた。

「フフ・・・よーここまで追ってこれましたな・・・」

「あっ！さっきの！」

「てゆーか新幹線の！」

いまごろ・・・もつとはやくきづこーよー。顔見えてたたぢゃん？

「そやけど、それもここまでですえ・・・三枚目のお札ちゃんいかせてもらいますえ」

どんなののかなーわくわく。

「おのれっ！させるか！」

あ、ちよつと刹那さん！みてからでもいいじゃん！

「お札さんお札さん、ウチを逃がしておくれやす。喰らいなはれ！三枚符術！京都大文字焼き！」

すごーい。でもこれなら父さんのアレのほうがきれいだしな・・・

・火力はすごいけど。暑いなーもつ。

「うあっ！」

刹那さんが出鼻をくじかれてたたらを踏む。

倒れそうになる刹那さんをアスナさんが支えている。

「ホホホ、並の術者ではその炎は越えられまへんえ？ほなさいなら」

行かせると思うのか？

「ネギ！やるぞ！ベル・セル ル・セイル レディアント」

「うん！ラス・テル マ・スキル マギステル」

二人で同時に詠唱を始める。

「水よ、押し流せ」

フレット・ウナ・ウェンデ
「吹け一陣の風」

「ウオーター！！」

フランス サルタティオ・ブルウエレア
「風花・風塵乱舞！！」

俺の放った水流が、ネギの風と融合。暴風と化して炎ごと術者を吹き飛ばす。

「逃がしませんよ！このかさんは僕の生徒で・・・大事な友達です！」

ひゅー♪いうね。ちょっと見直したかな？

「行くわよ！リアクト！！」

アスナさんが自分の腕を斬りつける・・・それと同時に、アスナさんの周囲を魔力が吹き荒れる。俺の魔力とも、父さんのとも、ネギのとも違う・・・どこか異質な不思議な魔力・・・

魔力の奔流が収まると、赤い騎士ドレスを纏い、巨大な銃剣を構えたアスナさんがたっていた。

「な・・・なんやそれ！？」

猿だつた人が驚いてる・・・てか・・・剣デカ！。

「行く・・・」

アスナさんが瞬動で接近して斬りかかる。すごいな・・・バカ力だね。あんな大きな剣を持ちながら瞬動するなんて・・・

「猿鬼！熊鬼！」

「なんだあ！？気ぐるみじゃなかったのか！？」

エロオコジヨがなんか言ってる。そういえば父さんがアレには近づくなつて言つてたけど・・・なんだろ？

「さっき言つた呪符使いの善鬼護鬼です！！間抜けなのは見てくれだけです！気をつけて！神楽坂さん！」

アスナさんには関係ない気がするけどね・・・

「せいやあああああああ！！」

アスナさんが剣を振るうと二体の式紙は一瞬で消し飛んだ。剣戟の余波で猿の人が吹き飛ぶ。……うわ……すごい膂力。

「桜咲さん……いまのうち……」

「分かりました！」

すると、そこに人影が……。刹那さんに向かって飛んでくる。

二人は衝突して、片方は膝を立てて着地。もう片方はごろごろと……ってそうはならんだろ！？……あれ？さっきから役目ない？ネギもぼかーんとしてるし……。寂しいなー。

「どうも……神鳴流です……。お初に……」

今まで聞いたこともないくらい間延びした声が聞こえる。

「え……。お……。お前が神鳴流剣士？」

「はい……。月詠いますー」

聞いているだけでやる気がそがれるな……。この声……

「こんなのが神鳴流とは……。時代も変わったな……」

年寄りくさいよ？

「フ……。甘く見るとケガしますえ？ほなよろしゅう、月詠はん」

「で、ではいきます。ひとつお手柔らかに……」

月詠が駆け出す。お？意外に早い。

長い野太刀で少し短い長さの違う二刀を相手にするのはたいへんそうだね。重さも違うから剣速が左右で変わるから、一種の緩急になって余計にやりずらそうだ。

「ざーんがーんけーん」

間延びした声とは裏腹に、強力な一撃が放たれる。刹那さんはたまらずたたらを踏む。

「ホホホ・・・これであしどめOKや。しょせん素人剣士に見習い剣士や」

「――テル・マ・スキル・マギステル」

お？いつの間にやらネギが詠唱を・・・

「風の精霊11人！！縛鎖ウインデキム・スピリトゥス・アエリアー・リネンクルム・フアクティイニミクム・カプテントとなりて敵を捕まえる！！」

間抜け。

「ああっ！しまった！？ガキほんたいを忘れてたー！」

「もう遅いです！魔法の射手戒めの風矢！サギタマギカ
アエール・カプトウーラエ」

よし！！そのまま捕まえる！！

「あひいっ！お助け！！」

猿の人がこのかさんを壁にする。捕縛用の矢だし関係ないけどね。

「あっ……曲がれ!!」

と思いきやネギが矢をあらぬ方向へ曲げる。なんで!? 捕縛用だよね!? 投げ縄魔法版みたいなものでしょ!? 何で曲げちゃうかな・

「ん……? あら……?」

「こ……このかさんをはなしてくださいっ! 卑怯ですよっ!」

いやー。今のはネギがあほなだけな気がするな。優しすぎるのってときにはあだになるんだよね。

「は、はは〜ん。なるほど……読めましたえ?」

何が? ネギの性格が? うわー意味ねー。だって俺いるし。まだ手は出さないけど。

「甘ちゃんやな……人質が多少怪我するくらい気にせず打ち抜けばえーのに」

今のは食らっても怪我しなかったと思うけどね。

「ホーホホホホ! まったくこの娘は役に立ちますなあ! この調子でこの後も利用させてもらうわ!」

……圧倒的強者の前では人質はむしろ邪魔にしかないとい

うことを、そろそろ教えてあげた方がいいのかな？

「このかをどうするの・・・？」

アスナさん・・・意外と冷静？ていうか、リアクトしたあとから表情が消えずいぶん寡黙な感じに・・・どういうこと？ま、いつか。

「せやなーまずは呪薬と呪符でも使って口をきけんよにして、うまいことウチらの言うこと聞く操り人形にするのがえーな。くっくくくっ・・・」

ぷっちーん。もーやっちゃってもいいよね？

「な・・・」

「・・・なんですって？」

あ、刹那さんからすっごい音が聞こえた気がする。切れちゃいけない物が切れたときみたいな音が・・・

さらに、自分の墓穴を包言動を続ける猿の人。

「ウチの勝ちやな。フフフ・・・このかお嬢様が・・・なまっちょろいおケツしよってからに。かわえーもんやな。ほななーケツの青いガキども。おシーリペンペーン」

ブチッ！！あ・・・猿の人詰んだね・・・

「このかお嬢様に何をするかーッ！！」

「・・・殺す」

アスナさん・・・言ってることがすごい物騒です。
そんじゃ、とどめに俺もやるのかな・・・ね、父さん？

フランス エクスルマティオー
「風花・武装解除！！」

「・・・閃光墜刃牙」

「秘剣・百花繚乱！！」

オーバーキルもいいところだけど・・・
ていうかアスナさん？ネタなんですか？本気なんですか？その技・
・まあいいけどさ。
それじゃ！

「いくよ！！ブラステイイイイイイイイイイイグ・ゾオオオオ
オオオオオオオオオオオン！！！！」

【Silver Hummer】

「最後の攻撃・・・トーマ？」
「おそいよ、父さん」

父さんが階段の下から歩いてくる。右手にはディバイダーを下げて
いる。

「すまんすまん。遅れた」

最初から陰に隠れてたくせに、よくいうよ。
そういえば、さっき猿の人が変な声発してとんでったけど・・・

大丈夫かな？

ぺぽー！とか、あぶるぺらー！とかいつてたけど。

土煙が晴れると、白髪 of 俺やネギと同じくらいの年齢と思しき少年がたっていた。

手加減したとはいえ、アレを防がれるなんて・・・ちょっとショック。

「ふう・・・まさか、かの「無に帰す者」ゼロ・ルーラーがいるとはね・・・千草さん、ここは退いたほうがいい。貴女では彼には勝てない」

「くう・・・なんでガキがこんなに強いんや・・・お、おぼえてなはれー！」

本当にあんな台詞はいて逃げる人初めてみたよ。

「お前は・・・随分と懐かしい顔だな。今のお前は何番目だ？」

「そっちの呼ばれ方は嫌いなんだ。とりあえず、ここは退かせてもらうよ」

そついうと、転移魔法を発動させる。そして、水の中へ消えていった。

「終わった・・・リアクト・・・オフ・・・」

アスナさんがリアクトをほどく。

「このかお嬢様！！お嬢様！しっかりしてください！」

刹那さんがこのかさんを必死に起こす。

「ん・・・・・・・・あれ・・・・せつちゃん・・・・？」

このかさんが目を開ける。無事みたいだね。

「あーせつちゃん・・・・ウチ、夢見たえ・・・・変なおサルさんにさらわれて・・・・でも、せつちゃんやネギ君やアスナ、それにアリア君が助けてくれるんや・・・・」

父さんもそこにいるけど、手を出したの最後の一撃だけだからね・・・・名前が上がりなくても仕方ないか・・・・

「・・・・良かった。もう大丈夫です。このかお嬢様・・・・」

刹那さんが安堵の表情を浮かべる。

「よかったー・・・・せつちゃん・・・・ウチのこと嫌ってるわけやなかったんやなー・・・・」

このかさんが心からの笑みを浮かべて言う。

「えっ・・・・そ、そりゃ、私かてこのちゃんと話し・・・・」

そこまで言って刹那さんがハッと顔を変える。えー・・・・そこまですいたら仲直りしちゃうよ・・・・このヘタレ剣士め・・・・

「し、失礼しました！」

「え？せつちゃん？」

「刹那さん？」

そりゃーおどろくよね・・・あそこまで言っていきなりこの態度の変化・・・見てよ父さんなんて頭痛そうにしてるじゃん。アスナさんも苦笑してるしさー。

「わっ私はこのちゃ・・・お嬢様をお守り出来ればそれだけで幸せ・・・いや、それもひっそりと陰からお支えできればそれで・・・あの・・・」

いやー陰からじゃ護りきれないと思うよー。

「御免！ー！！」

「あっ！せつちゃん！」

ヘタレ剣士ここに極まったね。父さん、いい加減ため息つくのやめなよ。幸せ逃げるよ？

「桜咲さーん！明日の班行動、一緒に回ろうねー！約束だよー！」

アスナさん気がきくね！

「明日菜さん・・・」

「大丈夫だってこのか。安心しなよ」

「でも・・・」

これで一件落着かな・・・

「ってあれー？ウチ、何でこんな格好しとるんやろ？」

今頃気づいちゃったよ・・・

「いえっ、あの！それは！」

ネギ・・・どもり過ぎ・・・落ち着きなよ。

父さんもハッハッハとか言ってないで！

「色々あったわね・・・今日まだ初日の夜なんて・・・どうなっちゃうんだろこの修学旅行」

それには心から同意するよアスナさん。

「はううっ！そくだ・・・僕色々壊したものの後始末しないと！」

「それなら俺が既にやつといたから・・・」

あー桜通りの後始末で慣れちゃったんだね・・・父さん・・・

（このか姉さんがいると喋れねーんだよな！オレツチ・・・）

まあ、エロオコジヨは別にしゃべらなくていいけどね。

それにしても・・・疲れた。

―夜・・・アリア―

「護りたい人・・・護ってほしい人・・・」

一人暗い部屋で思い浮かべる。

かつて隣にいた人。ともに戦った人。愛し愛されると誓った人・・・

・

「シグナム・・・」

S
i
d
e

o
u
t

「
会
い
た
い
・
・
・
」

第十七話 修学旅行 一日目（後書き）

どうだったでしょう。

刹那とのかかわりの中で、アリアの心は徐々に揺らいでいく。まだそこまでひどいものではないけれど、9歳の男の娘が・・・大好きな人と離れて平気でいられるはずがないのです。

アリアはこれからどうなるのか！

そして、どうなる修学旅行！

というわけで、次回もがんばります。

では、お楽しみにネ？

感想とか色々お願いします。

第十八話 修学旅行二日目 前篇（前書き）

えー・・・仮契約イベントはそれだけで長いので、前後編に分けました。

前回の投稿から既に十日たってしまいました・・・

とりあえず・・・

第十九話、始まります。

第十八話 修学旅行二日目 前篇

くアスナsideく

このかの誘拐事件から一夜明けて、修学旅行二日目の朝を迎えた。睡眠時間は短くなったはずなのに、意外と目はさえている。

私は、トーマとリリイと並んで座っている。ちなみにアリアはトーマの膝の上。少し眠そうね・・・9歳って言ってたし仕方ないか。にしても相変わらず女の子にしか見えないわね・・・髪をおろしてるから余計にね・・・

「それでは、麻帆良中の皆さん！」

ネギが唱和を促す。

「いただきます！」

いただきます、と皆で声を上げる。・・・確か最後に京都に来たのは、戦争が終わった後だったから、かれこれ20年近く前になるわね・・・なんか悲しくなってきたわ。それよりも、朝食ね。・・・おいしい。薄めの味付けが朝にはちょうどいい。

「うー、昨日の清水寺の滝から記憶がありませんわ・・・」

「せっかくの旅行の初日だったのにくやしー！！」

いいinchよと裕奈がそんなことを言う。中学生でお酒なんて飲んだんだから仕方ないわね。・・・私？私は飲めないこともないけ

ど、あまり好きじゃないわ。トーマはそれなりに飲めるみたい。

「ネギ君、ちょっと眠そやなー」

「あ、このかさん。おはようございます」

このかがネギに話しかけている。ネギも、半人前にしてはなかなかやったほうじゃない？まあ、元来の性格ゆえか甘すぎるころはあるけど。ナギにも姉さまにも似てない・・・いったいどこからあの性格は来ているのか。

このかは、ネギにお礼が言いたかったみたいね。

「・・・あ、せつちゃん！」

近くに座って食べていた桜咲さんを見つけると、声をかける。よし、いいチャンスだ。

と、思ったのだけど、桜咲さんはお盆を手たちあがってあわてて逃げる。このかがそれを追いかける。・・・ダメね・・・いったいいつになったら、仲が修復されるのか・・・。

「ほら、アリア、あゝん」

「じ、自分で食べられるよ」

「いいから」

「え、あう・・・あ、あゝん。もきゅ、もきゅ・・・」

・・・トーマの親バカも相当ね・・・私のときはそんなことなかったくせに・・・

今更文句言っても仕方ないか。ていうか、アリア・・・ひな鳥みたいね・・・かわいい・・・

そんな感じで、朝食も食べ終えた。そういえば、今日はならで班別行動だったわね・・・ネギはどうするのかしら？

「あのー・・・」

声のした方を見ると、本屋ちゃんがネギに話しかけようとしていた。珍しいこともあるのね・・・。あのおとなしい本屋ちゃんが・・・

「ネギくん！今日はウチの班と見学しよー！」

「わー！ー！！」

っと思っただけど、言い掛けた瞬間にまき絵が割って入る。・・・もう少し空気読みなさいよ・・・。

「ちよつとまき絵さん！？ネギ先生はウチの3班と見学を！」

「あのー・・・」

「あ、何よー！私が先に誘ったのにーッ！」

いいんちよも自嘲しなさいよ！トーマを見ると、若いな〜とか言っていた。・・・なんか、元々その兆候あったのに、昨日から異様に爺臭さが進行してない？

その後もどんどんネギを誘う人数が増えていった。ネギ埋もれてるわよ？

「あ・・・あのー！！ネギ先生！！」

よし！そこだ、いけ！本屋ちゃん！
ようやく決心したのか、本屋ちゃんが声を張り上げる。

「よ、よろしければ！今日の自由行動・・・私たちと一緒に回りませんか！？」

よく言っただわ、本屋ちゃん！
いやあ、成長したわね・・・おねーさん嬉しいわ。

「え、えーとあの・・・」

ネギは何やら考え込んでる。多分本屋ちゃんが意図したのとは全く別の事なんだろうけど・・・

「わかりました、宮崎さん！今日は僕、宮崎さんのいる5班と回る事にします！」

ま、なんにせよ、結果オーライね。よかったわね、本屋ちゃん。

Side out

くりりい side

「わー！ホントに鹿が道にいる！」

いま、私たちは奈良の東大寺に來ています。朝食の後、トーマがアスナと一緒に來ないかと誘われたので、自然と私とアリアも一緒に行動する流れに。

アスナは不承不承という感じではあるけど、一応アリカの子供と
いうことで、ネギの面倒を見てる。

ネギがすごい興奮してます。あ、鹿に手ごと鹿せんべいを食べら
れましたね。

「ふふふ」

「どうしたリリィ？」

私がつい漏らした笑い声に、トーマが聞いてきました。

「ううん、楽しくて」

本当に楽しい。戦争が終わってからは、旅はしていたけど、魔法
世界・旧世界問わずの救援活動だったから休まる暇はなかったし・
・麻帆良に来てからはトーマは教師のお仕事で忙しくて、ゆっくり
する時間も多くは取れなかったから・・・

「そうだな・・・俺はリリィと一緒にいられるだけで、それだけ
でいいんだ。もちろんアリアもな」

「そうだね」

「・・・」

アリアは何か考え事をしているみたい。今朝から時々こんな感じ
です。・・・どうしたのかな？

ふと見ると、いつもいつしよにいる宮崎さん、早乙女さん、綾瀬
さんの3人が何やら話をしています。どうやら、今朝ネギを誘った

ことをほめてるみたい。ふふふ、頑張つてね？

その後は、大仏をみたり、鹿におせんべいあげたりしました。

刹那は、まだこのかに近づけないみたいだけど、それは劣等感とか負い目とかじゃなくて、恥ずかしいとか、てれとかそんな感じがします。

「はは、みんな若いなあ・・・」

「もう、トーマ昨日からそればかり」

「実際俺らとは三周りくらい年離れてるわけだし、仕方ないだろ」

「あ、父さん、お団子売ってるみたい」

「食べたいのか？よし任せろ」

アリアが来てからというものの、トーマはすっかり親バカです。まあ、私も人の事は言えないんですけどね。最初は暴走気味でしたし・・・はう・・・今思い返すと恥ずかしい・・・

「どうしたリリイ、顔赤くして・・・熱でもあるのか？」

「もきゅもきゅ」

いつのまにかお団子を買ってきたトーマが私の顔を覗き込んでいました。わわ！か、顔が近いよお・・・言われると余計に顔が熱くなります。多分いま、私の顔はトマトみたいになっていると思う。

「な、なんでもないよ！？」

「そうか、ならいいさ。ほら団子だ、リリイも食べる」

「う・・・うん。それじゃ、いただくかな」

トーマからお団子を一本受け取って一口に入れる。ちょうどいい甘さと、硬すぎず柔らかすぎず、絶妙な触感・・・粉っぽもないし・・・。

「美味しい」

「だろ？」

「もきゅもきゅ」

アリアは既に3本目のお団子に手をつけている。

「おいしかった」

「もっと食べたきゃ買ってやるが？」

「ううん、もう満足」

満面の笑みを浮かべるアリア。そんなにおいしかったんだね。ふふ。

「ん？あいつらあんなところで何をやっているんだ？」

ふと、トーマがそんな言葉をこぼす。その視線の先には、植え込みの陰に隠れる刹那とアスナ+オコジヨ。

何かを感じ取ったのか、アリアが小走りで近づいていく。

私たちもその後を追ってゆつくりと近づく・・・

「何を見てるの？」

「しー！」

どうやら、のどかがネギに告白をしようとしているみたいです。

「あ、あの・・・先生、私！」

先ほどまで大までいったあとに言いきれなくて、大仏とか大根おろしとか大福とか言っていたのどかも、遂に決心したみたいです。

「私、ネギ先生せんせいのこと、出会ったときからずっと好きでした！私・
・ネギ先生せんせいのこと、大好きです！！」

「・・・え？」

頑張りましたね、のどか。告白というのは、とても勇気がいることです。

そういえば、私がトーマにプロポーズ？だったのかな、あれは・
・まあ、とにかくそう仮定して、されたのは・・ケルベラス溪谷・
・処刑場！？・・つり橋効果みたいなものかもしれないけど、
もうちょつと場所を選んでほしかったです。

「・・・え・・・あ・・・」

ネギは思考が追い付いてないようです。・・・まあ、10歳だから仕方がないとは思いますが・・・

「あ、いえ——わ、分かっています。突然こんなこと言っても迷惑なのは・・・せせ先生と生徒ですし・・・ごめんなさい。でお、私の気持ちを知ってもらいたかったので・・・」

そうそう、まずは気持ちを伝えることが重要です。・・・これに触発されて刹那も素直になればいいんですけど・・・
その後、失礼しますといって、のどかは去っていきました。

「若いなあ」

「父さん・・・昨日からそればかりだよ？もう少し感想ないの？」

「いや、そんなこと言ってもなあ・・・刹那も見習えよ？」

「わ、私ですか！？私は別に・・・」

「いやいや、このかの近くにいたいんだって素直に言えばいいだろ？」

ホントにね・・・さっさとくつついちゃえばいいのに・・・見てるこっちは焦れたいんですよ？まったくもう。刹那はトーマにそう言われてあたふたしてました。

なにはともあれ、日中の班別行動はそんな波乱？もありながら、楽しい時間でした。ネギが熱を出して倒れたこと以外はね・・・
知恵熱って比喻表現なんですよね、実は・・・

S i d e o u t

トーマside

日中の班別行動を終えて、現在IN旅館ロビー。何やらネギの奇行が皆機になつてしている様子・・・教師と生徒、英国紳士とか色々葛藤しているのだろうか・・・

奈良で何があつたのかと、他の班の連中に聞いただけ、誤魔化そうとして逆に暴露し始めた。しかも最後には意味のわからんことを口走つてるし・・・妖しさ抜群だ。

まあ、何か一大事なわけでもないの、ほおっておく。風呂だ風呂。

「アリア、これから風呂入ろうかと思うんだが」

「あ、俺も行く」

アリアを連れていったん部屋に戻った後、タオルとかを持って風呂へ入る。

「は」

「はふう」

湯につかった途端義親子そろてとろける。風呂の魔力には誰も勝てんな・・・それが露天ともなればなおさらだ。

「アリア・・・何か、悩みでもあるのか？」

「ッ・・・！？気づいてたの？」

そりゃ朝からあんなあからさまに時々ため息はいたり考え事したりしてれば分かる。

「まあな……。で、それは俺やリリイじゃ解決できないことなのか？一応これでもお前の親なんだ、義理とはいえ、愛息子が悩んでいたら心配にもなるさ」

「……。うん。こればかりは、親じゃダメなんだよ」

ってことは、恋人とかそっちのほうか？

「それは……。女か？」

「ぶふっ！！ななななな、何言つのさ！？」

「いや、そんなにあわてるところか？」

「うう……。まあ、そうだよ……。元の世界のほうで……。ね」

「……。俺にはそれはどうしてやることもできないな。だが、そう悲観になる事もないさ。いつか、また元の世界に戻る。いつになるっていうのは俺には分からないけど……。まあ、こっちの世界にいる間は、とりあえず俺とリリイが親だ。一人で何でも抱え込むなよ。あと、自分を支えてくれる人を、親じゃできないことをやってくれる女性ひとを探したらどうだ？お前年上好きっぽいし、クラスの連中は適任だろう」

「うう……。なんでそういう恥ずかしいこと言っかな……」

顔が真っ赤になってるのは湯につかってるせいだけじゃなさそうだな。

「ま、大いに悩め、少年」

「・・・やっぱり父さんオヤジ臭い・・・」

「親父なんだし、かまわんだろ？」

「ふふふっ」

アリアの心も、少しは軽くなったか？まあ、那波とか、朝倉あたりが適任かな・・・支えてやってくれそうなのは・・・ま、どうにかなるだろ・・・

ちなみに、俺たちが風呂から出た後に、ネギはやはり朝倉に魔法がばれたらしい。猫を助けるのには瞬動を、その後立ち去るのには普通に歩いて行ったらしいが、瞬動は一般人が見ればもはや瞬間移動の域・・・怪しんだ朝倉が風呂に変装して入って問い詰める・・・あとは、まあ言うまでもなく、吹き飛んだ朝倉を助けるために杖で飛んでしまい、魔法がばれた・・・と。虚空瞬動出来るまで鍛え上げとくんだった・・・

はあ・・・面倒なことになったな・・・

その夜・・・旅館内に、騒ぎ声が響き渡る。そう、まさしく響き渡っている。

・・・ウチのクラスのおほどもめ・・・起きてるにしてももっと静

かにできるのか・・・あ、無理だったね。うん、あいつらに静かな
んて言葉は似合わない。数人は別として。

「新田先生、すみません」

「はあ、あいつらは全く」

「あはは・・・」

「行きますか・・・」

「ええ」

俺、新田先生、瀬流彦先生、しずな先生で注意に向かう。という
か、基本的に新田先生が言うだけではあるが。

「コラア！3-A、いーかげんにしなさい！！」

新田先生の怒号が飛ぶ。

「まったく、お前らは・・・昨日は珍しく静かだと思っていれば、
いくら担任のネギ先生が優しいからといって、学園広域生活指導員
のワシがいる限り、好き勝手はさせんぞ！」

学園広域生活指導員・・・つまり、麻帆良学園都市全域において、
生活指導を行う権限を持つ教師の事。ちなみに、俺やタカミチは粗
暴な生徒の相手、つまりは、荒事専門だ。いつからかは知らんが、
俺は「デスメガネ高畑」と双壁をなす存在として恐れられているら
しい。ちなみに朝倉情報・・・

そんなことはいいとして、昨日静かだったのはうるさいメンバー

の大半が酔いつぶれてしまっていたからではある。

「これより朝まで自分の半部屋からの退出禁止！！見つけたらロビーで正座だ、分かったな！」

まあ、それでも聞かないのがウチの生徒なわけではあるが・・・

「え~~~~っ!？」

「ロビーで正座あ!？」

注意を終えると、他の三人の先生方は去っていった。しずな先生は少し申し訳なさそうに頭を下げて行った。

「まあ、旅行だし、騒ぐなどは言わんが、もう少し静かにやれ。俺らが気付かない分には何も言わん」

「はい・・・」

これで静かになってくれればいいんだけど・・・

俺もそろそろ寝るか・・・

このとき、もっと念を押して注意しておけばと、俺は後悔することになる。

S i d e o u t

第十八話 修学旅行二日目 前篇（後書き）

はい、というわけで前編が終了！

やっぱりエヴァは出てこなかったという・・・

次回はようやく仮契約イベントです。

あ、遅くなりました。

キャビア伯爵様、メガネ様、龍賀様、そぼろ井様、ヒダリキキ様、joker様、ガスキン様、カレーパン様、感想ありがとうございます！

アリア、ネギ、トーマの仮契約相手など、要望ありましたらメッセージをお願いいたします。

感想、アドバイス、誤字脱字などありましたらお願いします！

では、また次回！

第十九話 修学旅行二日目 後編（前書き）

すみません。更新遅れました。

そして、長らくお待たせいたしました。

ラブラブキッス大作戦の回です。今回アリアは少ししか登場しません。

オリ展開が少ないです。ほとんど原作沿いです。それでも、読んでくださるとうれしいです。

では、第十九話始まります。

第十九話 修学旅行二日目 後編

くアスナsideく

「な・・・魔法がばれた！？あの、朝倉に！？」

「は、はい・・・」

今、目の前でネギが涙を流している。おわかりの通り、魔法がばれたからなのだが・・・

「トーマから教育受けてたんでしょ？なんでそれではれるのよ・・・」

「そ、それは・・・人助けというか、猫助けというか・・・仕方がなかったんです。その時は、魔法は使ってないんです・・・。瞬動で・・・」

ああ、なるほどね・・・瞬動は突き詰めれば武術の一種だけど、一般人の観点からすれば瞬間移動にしか見えないし・・・それを偶然目撃した朝倉が怪しんだってところかしら？

「ばれてしまったのなら、朝倉にそれを公表しないように頼むしかないわね・・・」

「あうう・・・そうですね・・・」

朝倉も、アレで意外と常識人なところがあるから、どうにかなると思うけど・・・。スクープと面白いものには目がないから。微

妙過ぎるわね。

「おーい、ネギ先生ー」

「ここにいたのか兄貴ー」

噂をすればなんとやら、朝倉がエロガモを肩に乗せてやってきた・
・。あれ？これって最悪コンビなんじゃない？

「朝倉、あんまり子供イジメんじゃないわよ」

「イジメ？何言ってるのよ。てゆうか、あんたのほうが子供嫌いじゃなかったっけ？」

「そうそう、このブンの姉さんは俺らの味方なんだぜ？」

味方・・。ねえ？なんかよからぬことを企んでいそうな匂いがブンブンするのよね・・。

「報道部突撃班、朝倉和美。カモっちの熱意にほだされて・・。ネギ先生の秘密を守るエージェントとして協力していくことにしたよ。よろしくね」

・・。胡散臭いわね。て言うか、さすがのエロガモもトーマの事は後が怖くてばらさなかったみたいね。

証拠写真をネギに渡してるけど・・。普通に考えれば、印刷したものを渡してもねえ・・。普通はメモリかなんかに入ってるデータの消去を確認しないと信用できないんだけど・・。まあ、ネギが喜んでるし、いいか。ま、ばらされてもUFOブームみたいにすぐ風化するでしょうし。現代人は疑り深いものなのよ。

その後、新田先生が就寝前の見回りに来た。そろそろ寝ないと・
・といって素直に寝ないのがウチのクラスなんだけど・・
案の定、騒いで新田先生に怒られた。最後にトーマが甘いこと言
ってたけど・・・そんなの、火に油を注ぐだけだと思っわ・・
はあ・・・私知らないつと。

S i d e o u t

{ o t h e r s i d e }

新田教諭とトーマから注意を受けたその後。

「くつくつく・・・怒られてやんの・・・」

今までどこにいたのか・・・いつの間にやら現れた朝倉が壁にもた
れかかって皆を挑発するようなことを言う。

「ぬっ・・・」

「あ、朝倉さん!？」

その言葉に反応したのは、明石裕奈と雪広あやかの二人。

「ムキ~~~~ッ!!今までどこへ行ってましたの!? ひきょう者
ー!」

「まあまあ、私から皆に提案があるのよ。このまま夜が終わる思
つたいないじゃない? 一丁、3 - Aで派手にゲームして遊ばない?」

鬼の新田と呼ばれる指導教員に、見つかったら正座とまで言われ
たばかりだというのに、そんなことはお構いなしとばかりに楽しそ
うに言葉を発する和美。

「何を言ってるんですか?!? 委員長として許しませんよ、そん
なこと!」

「賛成ー!」

「ゲームってどんなゲームなの?」

「反対ー! 正座イヤー!」

反応はそれぞれ。通常なら、部屋でおとなしくするのが当たり前
なのだが、そうならないのが3 - Aクオリティ。

「名付けて! くちびる争奪!! 修学旅行でネギ先生&トーマ先生
+ アリアちゃんとラブラブキス大作戦?」!!! ネギ君のマネージ
ヤーの許可も取ってあるよ」

最後の部分をぼそつと言う。ちなみに、アルベール・カモミールは
ネギのマネージャーでも何でも無い。

「ええー！？」

「あの3人とキスーッ！？」

「コラコラ大声出すなつて。新田がまた来るぞ？」

（ネギ先生とキキキキスー！？）

先ほどまで反対していた雪広もキスという言葉聞いて表情を変える。それでいいのか委員長。宮崎は・・・告白したばかりだし仕方がない。

さて、ここでゲームのルールを説明しよう。

ルールは簡単、各班から二人ずつを選手に選び、新田先生方の監視をくぐり、3人のうち誰かの唇をGET！！妨害可能！ただし、武器は両手のまくら投げのみ！！上位入賞者には豪華景品プレゼント！！？

なお、新田先生に見つかったものは問答無用で朝まで正座！！死して屍拾うものなし！

・・・なんぞこれ・・・？

「きびしっ！見つかった人は助けないアルか」

「豪華賞品で何だよー！」

「ひみつー？でも、期待してていいよ」

「うゝむ」

「いいね！面白そうじゃん！」

「ゴールがキスっていうのもいいかも？」

「でも見つかったら正座だよー！」

これだけの事を小声で騒ぐ・・・随分と器用な事をする・・・。

「朝倉さん・・・」

雪広が幽鬼のように朝倉に詰め寄る・・・

（ん？やっぱダメか・・・いいんちょ）

朝倉が諦めたその時・・・

「やりましょう！クラス委員長として公認しますわ！」

朝倉のの肩をガシツつとつかみ、荒い息使いではあはあ言いながら言う雪広・・・ダメだこいつ早くなんとかしないと・・・。

「そらども」

さすがの朝倉も若干引き気味だ。

「よし！１０時半までに私に選手２名を報告！１１時からゲーム開始だー！」

「おー！！」

再び小声で叫ぶという器用なまねをする一同。

各々の興奮は高まるばかり・・・トーマの胃は大丈夫なのか、心配になってくる状況といえる。

皆各々勝手に盛り上がり始める。中にはトトカルチョを始めるようなものも出始め、興奮は徐々に高まっていく・・・。

そんななか、カモと朝倉は何やら怪しい雰囲気・・・。

「フフ・・・どう？うまくいったでしょ？」

「さすが姉さん、作戦通りだぜ」

「てゆーかどこにかくれてんのアンタ・・・エロいね」

朝倉の胸元からひよっこり顔を出すカモミール。

というか、カモミールの変態性に今更気がつくとは・・・朝倉も意外と鈍いところがあるようだ。

「フフフ・・・ラブラブキス大作戦とは仮の姿・・・その実態は・・・」

何やらもつたいぶって話し始めるカモミール・・・明らかにやらぬたくらみをしている顔だ・・・動物の顔がわかるかは謎だが。

「バックティオー仮契約カード大量ゲット大作戦さ！！」

「ほほー、これが豪華賞品のカードか・・・これをたくさん集めればいいんだね？」

「おうよ。オリジナルのカードは兄貴が持つてるけどな。こいつは俺の力で作ったパートナー用の複製コピーさ。ちなみに、アスナの姉さんは既に誰かと交わしてたみたいだな。昨日使ってたし」

「アスナが？・・・うーん・・・いつたい誰と？」

「そんなことより今は説明を続けるぜ？既にこの旅館の司法には魔法陣が書いてあるべ。これで旅館内で兄貴とチューしたら即パクティオー成立！！カード一枚につき5万オコジヨ\$儲かるから・・・あわわ、俺ら100万長者だぜ姉さん！」

「ヒューヒュー！！」

朝倉が力毛をはやし立てる。

「さらに今回は班&個人の連勝複式トトカルチヨも実施するよ！！」

「もーおいしくて笑いが止まんねーってばよ！」

こいつらには間違いなくトーマから制裁が下されるであろう・・・さて、このあほくさく、実は危険な作戦・・・狙われた3人に未来はあるのか！？

所変わってネギの部屋・・・

「はー・・・もうすぐ11時か。今日も大変だったな・・・」

何が大変だったかは言うまでもないが、これからもっと大変なこ

とが起ころうとしているとは知る由もないネギ・スプリングフィールド。

そこへ、見回りに行っていた明日菜と刹那が戻ってきた。

「ネギ、周囲の見回り言ってきたわよ」

「特に異常はありません。結界も強化しました。カモ君が変な魔法陣を描いていましたが、アレは・・・？」

アスナも、仮契約をしたのは一回だけなので、魔法陣の形を覚えてはおらず、なにか引つかかるものを感じながらも、害はないものとして放置してきた。

ちなみに、トーマとリリイはテンプレのごとく、屋根の上で監視を行っている。襲撃に備えるには見晴らしがよい場所と相場は決まっているので仕方がない。アリアは部屋で就寝中。

「じゃあ、次は僕がパトロールに行ってきますよ。こんばんはなんだか変な殺気みたいなものを感じるんです。・・・あまりここにいない方がいいような・・・」

その勘は間違いなく正解である。

「言われてみれば、確かに異様な気のようなものを感じますが・・・。害意はないようですが・・・」

「でも、こんな深夜にネギがいなくなると他の先生がさわがない？」

「ふむ・・・それでは、『身代わりの紙型』をお貸ししましょう」

刹那は人の形に切り取られた紙を数枚取り出す。

「『身代わりの紙型』？」

「ネギ先生ー！そろそろ寝ましたかー！？」

普段の彼女からでは考えられないほどのハイテンションで飛び込んできたのはしずな先生・・・この時点で怪しさ抜群だ。
あわてて隠れるアスナと刹那。

「あつ、しずな先生。今寝るところです」

「生徒の見張りは私たちに任せてくださいな。ネギ先生は10歳ですから、皆と一緒に寝てくださいな？」

普段と違う様子に明らかに不審げに見ているネギ・・・。

「部屋でちゃだめですよー！？じゃあ？」

あーいそがしといって走り去るしずな先生・・・基、朝倉和美。

「姉さん急げ！ゲームが始まっちゃうぞ！」

「OK、OK。落ち着きなよカモっち。ビデオカメラも設置したし、準備万端よ」

そして、時刻は11時を回る。

『修学旅行、特別企画！【くちびる争奪！！修学旅行でネギ先生
&トーマ先生＋アリアくんとラブラブキッス大作戦！！】』

各部屋のテレビを使って中継が始まる。どうやって備え付けのテレビに映像を流しているのか・・・この無駄な技術力と行動力をもっと他に回せよ、といったようになってくる。

参加するメンバーはこのようになっている。

1班：鳴滝風香・鳴滝史伽

2班：古菲・長瀬楓

3班：雪広あやか・長谷川千雨

4班：明石裕奈・佐々木まき絵

5班：綾瀬夕映・宮崎のどか

6班：なし（エヴァの修学旅行参加が突然だったため、既に別の班にメンバーが割り振られ、そもそも存在しない）

特別枠（トーマとアリアをも標的にまきこんだため、人数合わせに増員。）

メンバー：龍宮真名・大河内アキラ

「フフ・・・覚悟してもらうよ、トーマさん」

（うう・・・これは、早まったかもしれない）

虎視眈々とトーマ略奪を狙うマナに対し、やや気後れしてる大河内。さてさて、この作戦の行方やいかに・・・
そして、ついに開始の幕が開かれる。

『では、ゲームスタート!!』

朝倉のアナウンスとともに、皆一斉に飛び出した。

一方その頃・・・ネギは、悪寒を感じていた。自身の危機がせまっているのを暗に悟ったのだろう。

「ううっ・・・？なんだろこの寒気は・・・やっぱりパトロール行つてこようつと」

さすがに、その寒気の意味は分からないようだ。

ネギは、刹那から受け取った型紙に、名前を書いていく。書き間違えてはそれをくしゃくしゃに丸め、ゴミ箱へ捨てていく。

本来は、破らなければ、いけないのだが、陰陽術に明るくないネギに対して、その処分の方法を教えなかったのは、どう考えても刹那のミスだ。そして、5枚目でようやくちゃんと書くことに成功し、自分の代わりに寝ているよう指示を出すと窓から飛び出していった。そして、案の定・・・効果を失っていなかった型紙がしっかり発動してしまう。

窓から既に飛び出していったネギには、そのことは分からない。この式たちが、後に騒ぎを大きくするなんてことも、ネギには知る由もないことだった。

その頃、作戦に参加している者たちも、それぞれ行動を開始していた。

アリアも標的には入っているが、彼を狙うものは一人もおらず、

皆ネギの部屋へと向かう。

何故アリアを狙わないか・・・それは簡単だ。そんなことをすれば、後々親バカのトーマに何をされるか分かったものではないからだ。

開始直後、まずはち合わせたのは、明石・佐々木ペアと、雪広・長谷川ペアの二組。

（っ！いいんちょ！？）

（まき絵さん・・・勝負ですわ！）

出合いがしらに、佐々木と雪広が互いに攻撃を仕掛け相討ちに。お互いに顔面を枕で強打。双方ダメージでよろける。

（でかした、まき絵！とどめだいいんちょ！！）

すかさず明石がよろけた雪広に攻撃を仕掛ける。

（ガキの遊びにムキになんなよ・・・）

しかし、長谷川が明石の足を引っ掛けて転倒させる。さらにそこへ2班の古菲・長瀬が参戦する。

（チャイナピロートリプルアタック！！）

両手と右足を使い、雪広、明石、長谷川に枕を当てる古菲。

「によほま」

「ぐぐ……やりましたわね……」

そこから、古菲、雪広、明石、佐々木の4人による大乱戦が始まる。
長瀬は傍で観戦するだけ。

その隙を見て、長谷川はこっそりと離脱を開始していた。

（あー……マジかよ、まったく……付き合ってらんねー。私は
さっさとずらからせてもらおうよHPホームページの更新もあるしな……）

そして、部屋へと戻ろうと歩き出したその瞬間……長谷川の背後
の扉がユックリと開く。

「ん？……うわあああ！！？」

そこには新田教諭が仁王立ちしていた。

そして、長谷川はあえなく捕まり、ロビーにて正座させられること
になった。とんだとばっちりである。

長谷川が捕まった時に挙げた悲鳴を聞いた5人は一目散に逃げよう
とする。

しかし、その隙について逃げる際に古菲と長瀬は、明石を足蹴にし
ていく。そのダメージでよろついた明石は、ズカズカとやってきた
新田教諭に捕獲されてしまった。

その頃、綾瀬・宮崎の二人は、屋根の下の縁をほく前進していた。
綾瀬が事前に安全かつ速くネギの部屋へと到達できるルートを割り
出していたようだ。無駄に用意周到だ。しかも、施錠されていた非
常口までもご丁寧に事前に開錠しておいたという。

しかし、ネギの部屋まであと少しというところで天井裏から縄梯子
を下ろした鳴滝姉妹とはち合わせてしまう。……どうやってそん
なところに入りこんだのやら。

（鳴滝忍法、分身の術！！）

そう小声で叫びながら二人同時に飛びかかる姉妹。

（別に分身してないですっ！？）

そして、枕を投擲しようとした鳴滝姉に綾瀬の枕が直撃・・・もげっ！？という人から出ていいのかわからない悲鳴を上げる鳴滝姉。

（風香さん、史伽さん！私があいてです）

（おのれゆえ吉、ちょございな！我ら甲賀忍群に勝てると思うてかでござる！！）

（お・・・思うてか！・・・でござる）

口上を述べている隙に、綾瀬は枕で直接二人の頭をたたく。

そして、2冊のハードカバー本を取り出す綾瀬・・・その2冊で二人を撲殺しようかという気迫で殴り始める綾瀬。それを見て、宮崎はあわあわしている。

「ここは私が食い止めるです・・・のどかは早くその扉から中へ・・・！！」

「ゆ・・・ゆえっ・・・で、でもっ。あうう・・・」

そうして問答をしていると、後方から古菲・長瀬ペアがやってきた。
た。

それに気がついた綾瀬は宮崎を部屋へ押し込み扉を閉める。

綾瀬に部屋へ押し込まれた宮崎は布団に入って寝ているネギ（の姿の式）をみて意を決する。

「ね、ネギ先生・・・すみません、こんな形で・・・」

布団の傍にすわり、寝ているネギ（の式）にぼつぼつと話しかける宮崎。誤っているが、顔を上気させて少し嬉しそうだ。声が上がっているあたり、恥ずかしいようではある。

「ね・・・ネギ先生・・・いただきます」

宮崎の唇がネギの式につきそうになったその時・・・ネギが書き損じた型で、命令を受けていなかった式たちが宮崎のキスさせてくださいという命令を受けてしまい、集まって来た。宮崎はネギがたくさんいることに混乱し、悲鳴を上げて気絶してしまった。

宮崎の悲鳴に廊下で争っていた面子がネギの部屋へ入る。

そのときには既に、偽ネギたちの姿はなかった。窓が開いていたことから、鳴滝姉は窓から外へと飛び降りた。他のメンバーも各々逃げた偽ネギを追う。

綾瀬だけは倒れた宮崎をネギの布団へ寝かす。

そのころ、実況をしていた力モと朝倉はモニターで5体の偽ネギを確認していた。

そして、五体の偽ネギはそれぞれ綾瀬、雪広、佐々木、古菲、鳴滝史伽にせまっていた。

ちなみに、刹那とアスナは入浴中であつたためこの騒動を感知していなかった・・・。

一方その頃、トーマ狙いの龍宮、大河内ペア。

トーマがリイと共に屋根の上で見張りをしているのは既に周知の事実であつたため、二人揃ってトーマと対峙していた。

「ど・・・どうした、マナ？そんな鬼気迫る顔で・・・怖いぞ？それに大河内まで。他の宿泊者の迷惑にならなければいいとは言ったが、こんなところで何してるんだ？」

マナの目は元々の鋭いが、トーマを狙う今、猛禽または猛獣のような凶暴さが表れていた。大河内は、トーマの唇を奪うチャンスが目の前に到来しているという事実と、思い切ったことをしてしまつたという恥じらいがせめぎ合つて、顔をトマトのように真っ赤にしてあたふたしている。

「愚問だねトーマさん。いま旅館内で何が起こっているかくらいは分かつてるんだろう？」

「いや、確かに微弱な気の動きがあつたから、また騒いでるんだろうとは思っていたが・・・何の騒ぎかまでは把握してないぞ？」

「ふうん・・・」

（それは好都合だね・・・リイさんは基本戦闘能力はないから生涯にならない。トーマさんの唇を奪うまたとない好機だ）

（あわわ・・・好機到来！？でも、こんなことしちゃったらこれか
チャンス

ら気まずいような・・・というか明日からどんな顔していればいいんだ!?)

トーマは二人の様子を見て頭の上にはてなを浮かべている。騒動の理由を知らないのだから仕方がない。

そしてマナは徐に懷から二丁のハンドガンを取り出す。浴衣のどこに隠していたのやら・・・というかよく落ちなかったものだと感じたくなる。

「な・・・ちょ、おま・・・こんなところでそんなもん取り出すな!」

「大丈夫だ、問題ない。エアガンだから。死にはしないよ?痛いけど」

「そついう問題じゃない・・・」

「最初にあつた時からそうだったけど、マナって物静かに見えて実はすごくアグレッシブだね」

「ふふ、今さらだよ。大河内、そろそろ正氣に戻れ。やるぞ」

「はっ!わ、・・・わかった」

「やるって、一体何を?」

トーマが二人の剣幕にやや気後れしながら聞き返す。それにマナは極々冷静に返答する。

「その唇をもらつよ、トーマさん!」

「し、失礼します!!」

マナは右手に持ったグロック18をフルオートで連射しながら走り込んでくる。その隙に大河内はトーマの死角側に入りこむ。マナは銃器のスペシャリストだ。大河内に当たらないようにトーマに攻撃を仕掛けるなど造作もない。大河内は、とくに攻撃を仕掛けるわけではなく、ひたすらにトーマの死角に入り続ける。

飛んでくるBB弾をひたすら避け続けるトーマ。大河内がいる今、デバイダーを使うわけにもいかず、いつも持ち歩いている木刀は部屋においてきてしまった。

「マナ、お前はコウキが好きだったんじゃないのか？」

「・・・気づいてもらえてなかったとは、ちょっとさみしいね！
カンバヌラエ・テトラコルドネス
コウキと一緒に四階音の組み鈴で活動してたのは、貴方を探すためだったんだから」

トーマとリリイがマナとあったのは、昔紛争地域でフリーで救援活動をしていた時だ。飢餓と負傷で死にかけていたところを治療し、そのあとそこで四階音で活動していたコウキにマナを預けたといきさつがあったりなかったり。

「その気持ちは嬉しいが、俺はリリイ以外を女性として愛することとできない。それでもいいのか？」

「ふふ、必ず振り向かせて見せるから問題ないよ」

「その顔は意地でも聞かんって顔だな・・・」

マナの目に絶対の意志を、決して引かないという意志を感じ取ったのか、動きを止める。

「それで、大河内も同じなのか？」

「へ？・・・あ、はい！」

はぁ・・・とトーマはため息をつく。この結末を最初からわかっていたかのようにリリイは微笑を浮かべている。

「で、なにをすればいい、ムグウ！！？」

マナはトーマに一瞬で近づくと強引にその唇を奪った。

「ふふ。じゃあ、今夜はここまでにしておくよ。私はあきらめが悪いから、覚悟しておいてよトーマさん」

マナはそういうと自分の部屋に帰って行った。
ふと、トーマはリリイが見当たらないことに気付いた。すると、大河内が時々後ろにちらちらと目線をやり、あせった様子をみせていた。どうやらリリイが何かを言っているらしい。

「もう、じれったいなあ。いつちやえ、どーん！」

「うわわー！！」

リリイが大河内を後ろから思いつきりトーマのほうへ押す。屋根の傾斜で大河内は徐々に加速する。トーマはあわてて大河内を抑えたが、慣性の法則で大河内の体は前方に倒れ込んだ。
するとどうだろう。大河内の身長はトーマより少し低いくらいだ

が、今二人は屋根の上にいる。つまり、大河内と、トーマの顔は同じ高さになる。そうならば自然と、二人の顔の距離はあつという間にゼロになった。

リリイは頬に手を当ててあらあらまあなといった感じになっている。自分でやつという何ののんきな・・・。

「す、すまん・・・」

「いえ、あの・・・」

大河内は最初から赤かった顔をますます赤くしている。キスは初めてじゃないはずのトーマの顔も心なしが赤い。

「女の子のファーストキスを奪ったんだから、甲斐性見せなきゃねトーマ」

「ぐ・・・わ、分かった。それくらいしなきゃ男の恥だ」

「さっすが」

「で、では！お休みなさい！トーマ先生！」

「おう、おやすみ」

「お休み」

大河内はトーマの責任取るよ的な発言で気を良くしたのか、少し上機嫌で、それでもキスが恥ずかしかったのか、顔を赤くして挨拶もそこそこに部屋へ戻っていった。

「今夜は切り上げるぞ、リリィ。敵さんもさすがに二日連続では仕掛けてこないようだしな」

「そうだね」

二人は旅館の中へと戻っていった。

トーマが旅館の中へ戻ると、騒ぎが拡大していた。何事かと騒ぎの中心となつていられる旅館ロビーへと、あまりのうるささに目を覚まし、眠れなくなってしまったアリアをつれて急いだ。

ロビーに到着すると、偽ネギが爆発して騒ぎに参加していたと思われるものたちが気絶していた。

そして、足を引つ掛けられた宮崎がネギとキスをしているところだった。昼間の告白に関する葛藤は解けていたようで、とりあえずは一安心。

なにはともあれ、ラブラブキス大作戦は、大河内、マナ、宮崎の勝利で幕を閉じる……。はずだった。

「龍宮真名、大河内アキラ、宮崎のどかの仮契約カードゲットだぜ
ー！！ー」

「よっしゃずらかるよ力もち！」

新田教諭に見付かる前に逃げ出した朝倉とカモミール。

捕まる前にと急いでいて前方不注意になっていたからか、進行方向からやって来た人影に気づかなかず、衝突。ぶつかった相手の体格が小さかったこともあり、そのまま朝倉が相手を押し倒すような形に・・・。

そして・・・

ちゅっ

辺りにはそんな効果音が聞こえたはずだ。

なんと、朝倉が押し倒した相手はアリア・・・しかも、その勢いのまま唇を奪ってしまった。

魔法陣の効果でカモミールの手には朝倉の絵が描かれた仮契約カードが現れる。

「あ・・・」

「ふえ
・
・
・
？」

キスしてしまったことに呆然とするアリア。しかもマウストウマウス。だが、次第にアリアの目から涙があふれ始める。

「ふええ
・
・
・
」

「うええ！？ 拙いよ…… トーマ先生に殺される……」

「どうするんですかい姉さん!!?」

「そんなこと言われても!!!?」

アリアの涙の意味がわからず焦る朝倉。朝倉とカモミールがあわ
てているうちにもアリアの目からあふれ出す涙は増え続ける。

「ぐすつ……つええ……ふええええ……」

そしてついに、アリアは限界を迎える。

[illegible]

アリアの鳴き声を聞いて駆けつけてきたトーマ&リリィ。その間な

んと0・00001秒・・・どんだけ親バカなのか・・・。

リリイは駆けつけ一番アリアを抱き上げてあやす。トーマの目からはハイライトが消え、どこぞの白い魔王のような感じで・・・。

「朝倉、カモミール・・・話を、聞かせてもらおうか？」

笑みを浮かべているはずだが、目が全く笑っていないかった。

そして、事情を聞いたトーマに説教を受け、気絶から回復した新田教諭に捕獲された朝倉＋1は、ラブラブキス大作戦でネギを狙ったメンバーとともにロビーで朝まで正座させられる羽目になったのであった。

こうして、修学旅行二日目の夜は更けていった。

S i d e o u t

第十九話 修学旅行二日目 後編（後書き）

マナ、アキラ、朝倉の仮契約カードの内容について、希望を募り、その中から多数決アンケートで決定したいと思います。

アーティファクトについてメッセージで送信してください。感想ではなく、メッセージでお願いいたします。

さて、これだけお待たせした割に駄文ですみません。

では、感想、誤字脱字、等ありましたらお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5762s/>

魔法先生ネギまForce～護る者と支える者～

2011年11月12日09時09分発行